

首

道
程
II

全国印刷緑友会40年誌



程

道程

II

全国印刷緑友会四〇年誌



発刊のことば

全国印刷緑友会 会長代行
福田信彦

一九九七年の第四十回東京大会を記念し本書「道程Ⅱ」の発行が決定されました。二十年史である「道程」の出来映えからして、担当された小倉克夫・松浦正欣両氏の意気込みとプレッシャーは大変なものであったと思います。事務局を持たない緑友会の常として、二十年という歳月と資料の散逸のため、企画からの見直しや原稿集め等、全国を駆けめぐったの姿には改めてお礼申し上げます。

序章には中村守利第十四代会長の「緑友三十年の歴史を語る」が掲載され、緑友会は触れ合い、刺激、自己啓発で高邁な感性を磨き合う道場であること、全国青年印刷人各グループの上に立つものではなく、相互信頼に基づく連携期間であることが歴史を追いながら書かれています。また、本書の制作過程の経験から、緑友会の本来の存在意義を考慮し緑友サーバ―が立ち上げられ、「道程」もデジタル化され「道程Ⅱ」も含め誰でもご覧になれるようになり、進化する記念誌としての意味も持たされました。

本書完成にご尽力賜りました諸先輩に心よりお礼申し上げますと共に、今後の皆様の活動の一助になれば幸いです。

最後に、本書を任期半ばで急逝された矢谷猛第二十四代会長に捧げ、ご冥福を祈るものがあります。

はじめに

四十周年記念誌編纂委員長

松浦正欣

昭和五四年九月、全国印刷緑友会創立二十周年を記念して「道程Ⅰ全国印刷緑友会二十周年記念誌Ⅰ」が発行された。それから二十年の歳月が流れ、平成九年四十周年を迎えた緑友。次なる二十年の集大成としてここに「道程Ⅱ全国印刷緑友会四十周年記念誌Ⅱ」を発行する。

この二十年の歴史を振り返ると、世は上げてバブル経済に踊り、そしてその崩壊の混乱と共に「失われた十年」とも形容された時を経て、未だ経験したことのないデフレ経済へ突入。今もその苦境の中から明るさは見えてこない。しかし、そのような激動の経済環境の中においても、この二十年の印刷技術は想像を絶するスピードで革新を続けてきた。今、プリプレスのDTP化に始まった印刷業界の革命は、紙とデジタルとの融合による、これまでの常識を打ち破る新しい分野へ広がり、期待を高めている。やはり、この革命の担い手は若者であろう。全国に四一グループ、二〇〇人の会員で構成される全国印刷緑友会は、このような経済情勢の中でも緑友の理念である「友情」「修練」「触発」を体現した結果、革命の担い手として、その役割を果たしたに違いない。

この「道程Ⅱ」は歴代会長の思いと回顧を中心に編纂したが、その裏には緑友をこよなく愛し創立以来脈々と引き継がれてきた崇高な緑友精神を守り抜くため、ある時は激論を戦わし、ある時は酒を酌み交わし友情を深めながら支えてくれた多くの隠れた仲間達の歴史でもある。

これから業界と緑友を担う若者達に、この二十年間のさまざまな緑友での出来事を伝えることで、なお一層の業界発展への一助となり、また、緑友のバイブルとしてデジタル復刻された「道程Ⅰ全国印刷緑友会二十周年記念誌Ⅰ」と共に活用いただければ編纂の労も報われる。

平成九年五月二四日長野において行われた第四十回長野総会において「四十周年記念誌」の発行を承認いただいてから五年の歳月を浪費してしまった。編纂委員長として詫びの言葉もない。また、本記念誌の内容においても「道程Ⅰ全国印刷緑友会二十周年記念誌Ⅰ」とは比ぶべくもなく、その非力を痛感している。

最後に、この編纂に携わっていただいた茨城印刷緑友会の小倉克夫氏をはじめとして多くの先輩、会員のご協力に心より敬意を払い、重ねて御礼を申し上げます。

もくじ

発刊のことば・・・ 1

はじめに・・ 2

序 章

緑友の歴史を語る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 中村 守利 10

歴代会長の語る緑友

昭・五二・四〇五四・四〇四 「第二回神奈川総会によせて」・・・・・・・・・・ 作道 亮雄 38

昭・五四・四〇五六・四〇四 「第二回久留米総会あいさつ」・・・・・・・・・・ 飯田 範夫 40

昭・五六・四〇五八・四〇四 春の嵐がふき抜けた日・・・・・・・・・・・・・・ 中村 守利 42

昭・五八・四〇六〇・四〇四 「第二回金沢総会あいさつ」・・・・・・・・・・ 竹田 光宏 58

昭・六〇・四〇六二・四〇四 「第三〇回福井総会あいさつ」・・・・・・・・・・ 古賀 健一 60

昭・六二・四〇六四・四〇四 「第三二回青森総会あいさつ」・・・・・・・・・・ 竹内 一博 62

平・一・四〇三・四 緑友の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 城戸 憲次 65

平・三・四〇五・四 「第三五回全国印刷緑友会総会あいさつ」・・・・・・・・ 白井 秀幸 74

平・五・四〇七・四 全国印刷緑友会四〇周年誌に寄せて・・・・・・・・・・ 利根川 政明 85

平・七・四〇九・四 「第三九回山形総会あいさつ」・・・・・・・・・・・・・・ 長尾 良宣 95

平・九・四〇一一・四 緑友の夢はゴーヤの味・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 松浦 正欣 97

全国印刷緑友会四〇周年記念座談会

第一回 長崎 ハウステンボス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122

第二回 札幌 百留屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154

第三回 東京 印刷会館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170

行事で綴る緑友四〇年

総 会 昭和五二・第二〇回 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成八・第四十回・・・・・・・・・・ 195

大 会 昭和五二・第二〇回 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成八・第四十回・・・・・・・・・・ 295

セミナー 昭和五四・第十一回 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成八・第三二回・・・・・・・・・・ 391

序 章

緑友三十年の歴史を語る (講演)

全国印刷緑友会第十四代会長 中村 守利氏
昭和六十二年二月八日 常任幹事会 京都国際ホテル

かつて箱根の常任幹事会で、ちょっと緑友の歴史を話せということがありまして、全く私はお客のつもりで行ったところが、いきなり呼び出されまして、話をしろということなので、あの時は記憶だけを話しましたが、今回はお陰様で、前もってお言葉がございましたので、多少忠実に、年表を見て調べてまいりました。前もっていいいまして、実は京都に入る前の日でございまして、一日で三〇年の歴史をひもとくのは大変でございます。大変慌てましたが、慌てさせていただいた古賀会長にお礼を申し上げます。

さて、緑友三〇年の歴史を改めて見直してみますと、やはり、その時その時の行事は、何か社会の情勢、業界の行き方に裏打ちされたものがあるのだなということを、改めて感じております。そういったことも含めてお話をさせていただいて、現状はどうなのか、これから緑友はどうあるべきかということ、皆さんでお考え願えれば、その資料にして頂ければ幸せだと思っております。

緑友の胎動

まず、緑友のスタート、萌え出する頃であります。昭和三十年に、印刷業界では印刷調整組合というものが戦後初めてできました。これは、中小企業においては初の団体であります。他の業界にも全くない時に、印刷は早く、この調整組合という団体を組織していったということでありまして、さ

すがに文化の担い手であるというふうに思います。

その三十年に、調整組合が誕生いたしました時に、ちょうどそれと前後して、各地で若いグループが個々にポツポツ産声を上げておりました。その若い人達が、第一線の営業マンです。その方達が調整組合で取り上げている価格の問題と、それから設備制限の問題と、この二本柱だったのですけれども、その二本柱についてどう思っているのだろう、その地域の若い人はどういうふうに考えているのだろう、それを聞きたいなということは、実は自然にあちらこちら出てまいりました。

それを日本印刷新聞社が聞きつけまして、じゃあ自分達が仲人役を務めさせて頂きましょうということから、各地の若い営業マン達に声をかけて、一遍集まって会議をしてみませんかということになり、東京に営業マンのグループの方達が集まりました。そして、いまスタートを切ったばかりの全国印刷調整組合というものに対して、大変批判の声も出しました。我々若い者はこうあるべきだ、こうしていくべきだという声が交わされたわけでございますが、そういう中から若い人の組織を全国レベルで作ったかどうかという声になってきたわけなのです。

そこで、それはいいことだということで、内容は後にして、とにかく作ろうということでは合意いたしました。スタートを切るころまで来たのですが、じゃあ趣意書を書いてみようということで、会の趣意書が出てまいりました。その趣意書を見ますと、いまの印刷調整組合に対して、何といえますか、やり方を我々がどんどん変えていこうと、先鋭的な声も入り込まれたわけです。若い組織のエネルギーでもって、業界の刷新を図っていこうということが、中でも一番大きな中心テーマになっていたために、集まったグループの中では、自分の会の生い立ち、会の構成メンバー、必ずしも印刷人ばかり

ではありません。関連業界の方も入っていたということがありまして、そういうことであれば、印刷業界の情勢を変えていくということは、あまりにも尖鋭的であるから、それは賛同しかねるということからその会が分裂いたしましたして、空白の時間を持ちました。

全国青年印刷人連絡協議会 全国青年印刷人緑友会の誕生

しかし、全国の若い層の集まりのニーズというものがありませんでしたから、この火を消すわけにはいかない、何とかこれが続けていきたいという声が出まして、三二年の二月に、全国青年印刷人連絡協議会というのが生まれました。この連絡協議会で、とにかく話し合ってみようではないか、そしてできる方向に前向きに検討していこうということでスタートを切りまして、その後約一年半後の三三年九月に、本番の全国青年印刷人緑友会というのが誕生したわけです。

その時に、初代市村会長を中心にして、東京に一〇〇名ぐらいの人が集まり、創立総会をやっていたわけなのですが、緑友会の創設の精神というものを市村さんが話しております。それをちよつと読ませて頂きますと、『緑友会は、全国青年印刷人各グループの上に立つものではなく、相互信頼に基づく連携機関であります。当然、構成単位はみな平等の立場に立ち、真摯でなお大きな勇氣を持って、ヒューマニティーをもとに、印刷人の理想を求めて止まない心と心の触れ合う同志的結合体です。たとえ未熟でも、若人らしく、構えずうそのない、差別は認めない共通した生活態度、飾らず真実を語り合い、相互に刺激し、協力し合いながら、しかもそれらを越えていこうとする若き印刷人の仲間が集まりであります』ということ、市村初代会長は、『道程』という二十年誌の中に書いていらっし

やいます。みなさん、『道程』をもう一度機会があったら読んで頂ければありがたいと思います。

そのように、緑友の精神というものを謳っておりますが、要約しますと緑友会というのは、上部構造ではないのだということです。各グループの上に立つものではない、ピラミッド組織ではないのだということです。したがって、平等、自主尊重していく。各グループとも対等の立場で進んでいこうということが、根本の精神になっているわけです。そういったことから、講習会、見学会、懇談会という行事を進めていこうではないかということになったのです。

創立当時、三三年の時代背景を見ますと、印刷業界は三十年から印刷調整組合になりましたけれども、三三年に、もう一つ脱皮しようということ、本格的な印刷工業組合に変質した時であります。これは印刷業界のランクアップした、いよいよ本番のスタートにあたる時でありました。それから、世界的には、アメリカが宇宙衛星を飛ばして、宇宙競争のスタートを切った時であります。そういった時でしたが、一面、巷では男性的悲劇的な売春防止法が施行された年でありまして、大変ショックな、かつてないような法制が決められた時であります。いいにつけ、わるいにつけ、新しい芽生えが戦後十数年にして出てきた時に、緑友会も新しい芽生えをしたという、時の流れに歩調を合わせているというふうに感じております。

そういうことで緑友会が呱呱の産声を上げたのですが、この三十年代を見ますと、三十年代は市村、大川、久保田、小栗、土井という方達の幹事長時代でございます。この時代の背景は、第一次産業、つまり素材である鉄とか、石油、石炭とかいった旺盛なる経済が下火になりまして、第二次産業に移

ろうとしている時です。したがって、二六、七年の朝鮮動乱で、えらく好景氣を上げた石炭業界も、慘澹たる状況を呈して、非常に倒産が増えてきているという状況の反面、耐久消費材というものが大量に売れ普及した時でありまして、大量消費時代を迎える様相を呈してきた時代であります。時も池田内閣、所得倍增計画ということを打ち出しまして、三九年には東京オリンピックを迎え、非常にはやかに高度成長期の兆しを迎えていくわけでありまして。

そういった時節なものですから、大変希望があるのです。戦後はもう終わった、復興もひととおり安定してきた、これから本当に萌え出さざる日本経済が出てくるのだ、われわれの若い世代がこれからスタートを切って出ていくのだというような希望があるものですから、緑友会のメンバーはそういった希望に燃えて、非常に真摯で真面目に、本当に真剣に打ち込んだ時代であります。

印刷業界の背景を見ますと、印刷の需要の拡大がこの時から図られています。したがって、一面には、大と中小企業との格差が開いていくという危機感があつた時であります。そういった背景から、緑友会はまっしぐらに研鑽していこうということと、しかも、華美に流れず、質実謙讓の奉仕の精神でやっぺいこうというようなことが出てきたわけです。

この時の行事を振り返ってみますと、三七年、第五回熊本大会では「印刷産業の再検討」をテーマに勉強をしっかりとした後に、阿蘇高原で懇談会を開いた時には、家族の方、会員の奥さん方の動員を得まして、にぎり飯の炊き出しとか、ご接待などの奉仕など自前の精神で行われました。

それから、第六回の東京大会。この大会は「印刷産業の理想像への接近」という理想を求めて、非常に希望に燃えて勉強した時期です。この題で分かりますように、印刷産業の理想は何なのだろうと

いうことを追求した時であります。エピソードもございしますが、たったこの「印刷産業の理想像への接近」という、短い数語にしかならない文章、タイトルですが、このテーマを決めるのに、なんと二日間ぐらい徹夜したと聞いています。この時の主催者は、泊まり込んで、これからの印刷産業はどうあるべきかということをディスカッション致しまして、こういうところを緑友会は勉強しなければいけないのではないだろうかなど、本当に心ゆくまでディスカッションして、ではタイトルをどうするか、こういうタイトル、ああいうタイトルということと、そのテーマを決めていったということですが、二日間泊まり込んで討論したというような真剣な姿が、この時の緑友会です。研修内容も技術、営業、教育と幅広く理想像を追及し、講師、パネラーは友人や仲間が担当するという、ここでも自前の精神で燃えに燃えた大会を行っています。

その後、第一回のセミナーが三九年、神奈川の大磯で開かれました。これは初めてのセミナー。その時も、コクのある勉強会をしようということと、三日間缶詰めでじっくり勉強会をしています。テーマは長期経営計画と経営ポイント。講師の内容を見てみましても、慶応、一橋大教授など、その時の非常に優れた人を人選しているということがわかります。

三十年の歴史をいま語っておりますけど、私が参加しているところ、本当に見て感じていることと、先輩から受け継いで聞かされたことなど、いろいろございまして。講釈師、見てきたような嘘をいうところもあります。そういうところは、先輩の受け継ぎをお話したいと思っております。

そういった真摯な態度というものがあつまして、当時、三九年神戸総会を開いた時は、これが総会なんだ「ザ・総会」というものを、神戸は見本を示してくれたということがいわれております。集ま

れば当時でも和氣藹藹、やはり、きれいどころ、アトラクション、アルコールに花が咲くという情況になりがちでした。でも、総会においては、これも徹底的に話し合ってみようということで講演会省略、一切派手な行事抜きで、登録料無料、千円会費の茶菓子程度でもって総会を開いたという、神戸の行き方を示してきた時代であります。そういうことをずっと見ますと、創立の基本精神というものも非常に大事にしてきた時代だと思います。これからも我々の若い力で、印刷業界をグレードアップしていくんだという、大変な誇りを持って、そのために我々はしっかりしなければいけないのだと、自覚、自意識を持ってやってきたということががわかれるわけです。若いエネルギーの爆発時代だったのですが、実は、ここで一つ落とし穴がありました。

丸緑用紙断裁問題と反省

いってみれば、いさみ足なのですけれども、若いエネルギーが本当に前向きに突っ込んでいった時に、「丸緑用紙断裁問題」というのがありました。神戸の武さんという、かつて本当に有名な方がいらつしました。この武さんがヨーロッパに見学に行きまして、むこうでは用紙を全判で売っていない、ちゃんと半裁、四裁に断裁して、持ってきたらすぐ印刷会社が印刷できるような状態で納品しているということを提言して、日本でもできないはずがない、どうだろう、そういうことを緑友会で検討しないかということが常任理事会に図られました、それは素晴らしいということから、用紙断裁について研究したわけです。

その用紙断裁のことを工業組合に提起致しまして、仙台の第八回文化典で本当に承諾を受けた、そういう承認を受けて、緑友会自身が先頭を切って、これは日本加工紙だったと思いますけれども、この経営者と会って、業界のために断裁紙の供給を考えてくれと交渉致しました結果、それではお引き受けしようということで、半裁、四裁のカットしたものがきちっとワンプに入って供給されるようになってきた。そこで、緑友会がやったのだから、緑をとって丸緑用紙というネーミングがつけられたわけです。残念ながら、それほど市場性が無かったということで、自然に立ち消えになったということなんですけれども、実は、いさみ足ということはどういうことだったのかといえますと、本当にこの時には若いエネルギーが爆発的に燃えていたのですけれども、それを完成した後に、緑友とはこういうもので良かったのかなという反省が、いろんなところで生まれてきたのです。緑友は、外に向けて行動する会ではなかったのではないかと。最初に我々が創立の時に話し合ったように、本当に今の業界のあり方を変えていこうという尖鋭的な意見が出たために、緑友会は空白状態で組織が作れなかったはずだ。しかし、いまこうして、若いエネルギーでもって一つのことを成し得ることは、決して悪いことではない。けれども、これをきっかけに今度はこの問題、次はこの問題と、矢継ぎ早に次から次に業界が抱えているいろんな問題が出てくるであろう。それに対して緑友会はどうするのだ。みんなそれに対して猛然とタックルしていくだろう。そうだとすると、必ずや印刷業界と緑友会とは正面衝突する時が来るであろう。緑友会が尖鋭的舞台として印刷業界のいろんな諸問題を解決していくグループになるのではないかと。そうすると、確かに目の前にある諸問題の解決はメリットがある。けれども、業界挙げて考えた時には、組織の混乱を招くという大きなデメリットを裏側に持つのではないかと。

そういった反省が緑友会に生まれまして、緑友会はやはり原点に帰るべきだということで、この丸緑の反省を機に、外に向けて行動はしない、われわれは発想をしていく、いろんな発想をして研究し、研鑽して、自分の肥やしにしていくことに立ち返ったのです。そして、緑友会をここでもう一度見直すということは、ただ勉強をしてそれだけというのではなくて、勉強して自己形成をし、それが自分の会社にゆくゆくは役に立ち、自分の村に帰り貢献すれば、結果的には緑友会が縁の下の力を持ったようなことで、今の業界のグレードアップができるのではないかとということなのです。そういった役目を緑友会が持つべきであって、今の諸問題を解決するために緑友会があったのでは、これはおやじ連中の印刷業界と、いろんなところで抵触していくのではないかといった意味で、親子の喧嘩になってしまおうということです。こうしたことの反省をここで十分したわけなのです。

そういったこともありましたが、三〇年代の萌え出する創設期とは、どういう緑友会の時代であったか、一口にいいますと、まっしぐらに突き進んだという時代なのです。真摯に若人のエネルギーをおぶつけて、本当に大まじめに突き進んだという時がこの三十年代だったと思います。

四十年代の緑友

さて、四十年代にまいりますと、幹事長としまして、小堀、白石、大川、丸谷、若山という方達が担当いたしました。この四十年代に入った早々にも、実は大きな事件がありました。ですから、三十年の終わりから、四十年の始めにかけては、緑友会の一つの動揺期であります。緑友精神を本当に見直す時期でありました。

これはどういうことかといいますと、九州の電気通信局が、自前の会社、九州電話帳印刷株式会社というのを作って、従来民間に出している電話帳の印刷を全部吸収してしまう、という問題であります。そういうことで、反対運動が九州に燃え上がりまして、当時、熊本にいらっしゃる白石さんが急拠、顔色を変えて上京され、何とか緑友会が支援して欲しいという訴えをなさいました。

これは、もう一つ含みのある問題が隠されていたのです。九州電話局が、実際に自分のところの株式会社を作るということで、制定が公認された後だったので、もう手遅れということだったので、名前も、実は、その株式会社は内密に凸版印刷が作るようになっており、凸版の工場だったわけです。このように排除してしまう、飲み込んでしまうという大きな問題になるわけです。

そういうことで、九州の緑友グループは、こぞってこれに動員をかけて、反対運動をしました。そして、市村さんのところに相談がありまして、その時に私もちょっと一緒にその雰囲気を感じたのですが、白石さんの真剣さを見ていて、これはただごとではないなと本当に思いました。

それで緑友会としては、資金カンパをやるうということにして、全印工連にその問題を提訴しました。全印工連の会長と九州電話局長との話し合いを進めてもらいまして、そこでもって一つの協定をいたしました。ピリオドを打ったわけです。円満解決いたしました。緑友会の果たした役割というのは、大きかったと思いますが、その時に実は、前年起こった丸緑の問題が非常に反省材料になって、それがなかったならば、いきなりあの時には緑友会挙げて、支援団体として直接行動に出たのではないかなと思うのです。そこで踏み止まって、直接行動には出ずに、業界、全印工連に訴えた、全印工連を

動かしたということでもあります。ですから、緑友会の今日があるのだと思いますし、あの時に直接行動に出ていったのならば、やはり、緑友会は分裂したであろうというふうに思っております。

そういったことが四十年代初めにありまして、丸緑の問題、電話帳問題というのは、緑友会の精神、創立の精神というものを直す格好の教材だったわけです。

さて、四十年代の前半は、吉田茂元総理が死去して文字どおり戦後が終り、佐藤内閣、東京都で美濃部さんが都知事、初の革新新政が生まれた時でありまして、空前の「いざなぎ景気」高度成長期に入ってまいりました。公害とかスモッグ、エコノミック・アニマルというような言葉が出てまいりました。そういった時に業界はどういう方向で動いていたかといいますと、第二次の技術革新が始まり、特に製版を中心にしたPDIスキヤナ横行時代です。これがかなり評判になりました、脅威を感じた時であります。四十年代の最初は技術の変化の時代です。

印刷技術においても、リモコンでもって自動制御するものが出てきた時で、その走りであります。そういった時ですから、緑友活動も勢い、技術に目が向きました。特に小堀幹事長は製版出身なものですから、製版の技術革新ということに目を向けて、技術、技術ということで、緑友会はその当時には、技術優先で勉強、技術の研究や見学会にまっすぐ進んだ時であります。

他面、世の中がだいぶ高度化し落ち着いてきたので、印刷業界挙げて何かをやらうということから、政府でもって近代化促進法というのが制定されておりますので、その近代化促進法を業界のメリットにしているという、第一次構造改善がここでスタートを切っております。

その後の緑友の活動は、構改事業に焦点をしばった時代があり、四五年の大阪大会には、毒舌でな

る名古屋大学の末松玄六教授と業界きつての理論家である塚田益男さん、技術協会の会長です。この方々で近代化促進法に基づく協業化ということについてのパネルディスカッションをしまして、大変おもしろかったことをまだ記憶に新しくしております。ちよつとかいつまんで話しますと、塚田さんは、これからは、業界の体質が強くなるためには一社ではだめだ、協業して体質改善をして、他産業に負けないグレードの高い業界になっていかなければいけない。そのためには、本当に手をつないだ協業体制、近代化を呼びかけたのです。

末松さんは、一国一城だからこそやりがいを感じ自分のパワーが出るのに、それを協業して、何のエネルギーが出てくるかというようなことを毒舌でやったわけです。そんなものやめちまえというようなことになって、丁丁発止として大阪大会は燃えに燃えたわけでありまして。最後の結論としては、末松さんもそうはいうものの、やはり時代の流れというものは無視できない、一人の力というものはやはり一人の力しかない、そういった点では協業ということが、コンセンサスさえしつかり図れていくならばいいであろう、ということでもまとまったようでありますけれども、そういった経過を経て、構造改善事業が進められてきたわけでございます。

四十年の後半になりますと、この高度成長期が一八〇度逆転してくるわけでありまして。本当にまだ記憶に新しい、四七、八年のオイルショック・パニックがありまして、ニクソン・ショックのドル・ショックもあって、しかも紙のパニックまで生まれてきまして、三巴の印刷産業は惨澹たる姿を呈するわけです。そういった中で、戦後初のマイナス成長というゼロサム成長をここで経験していくわけで、激動、混迷の時代ということがここで出てきたわけなのです。

こうした大きな経済の転機の中で、長野大会が開催されました。「企業に繁栄・人に豊かさを求めて」と題し、激動に流されないテーマが掲げられ、四時間という長時間の分科会をもち、熱心に討議が繰り広げられました。私は参加できなかったのですが、その後の懇親会は、先輩の好印象として受け継がれているのを耳にしますと、四、五キロ歩いて高原に登り、星空の下で山菜料理をつつき、キャンプファイヤーを囲み、お手でつないで和気あいあい、真の友情をしっかりと確かめ合ったということです。

この素朴な“交換”が、混迷の沈んだ気分を一掃し、歓喜に満ちた緑友の原点を味わったと、ごく印象に残っていることを伝え聞いております。

綱領の制定

時の幹事長は岐阜の若山さんで、この激動の時代、緑友会としては方向を見失わないようにしていきたいということから、緑友綱領を制定しております。我々が、大会、セミナー、総会で綱領唱和というものをやっていますが、あれはここで生まれてまいりました。そして、綱領の前身には、青年と、同志的結合と、行動という三つが盛り込まれているわけなのです、精神として。僕は大変すばらしい緑友の綱領だと思います。

その時に、青年という言葉が出てまいりまして、実は最初生まれた緑友会の名前は青年が入っているのです。「全国青年印刷人緑友会」ですから、その青年が取れたのは、実は土井幹事長の時代です。年齢層もだんだん高くなって、名刺に青年というのが入っていると、何か格好悪いというようなこと

で、取ったのではないかと思えますけれども。その青年が取れましたが、しかし、綱領にはまた復活して青年を入れたということなのです。それを若山さんがどういうふうにいっているかといいますと、青年は姿、形ではないんだ、年齢ではないんだ、いつまでも若々しい精神を持ち続けたいということなのです。

我々は第十六回大阪セミナーで、青春ということについて勉強を致しました。あの時に青年ということが出てまいります。青春とは肉体のことをいうのではない。心の様相をいうのだという内容の詩を、古賀会長が銅板で彫ってくれました。私の社長室に掛けておりますけど、非常に貴重なプレゼントを頂きました。青春というもの。サミュエル・ウルマンという方の詩でありますけれども、あれを絶えず緑友は繰り返し、繰り返し、あの青春を持ち続けていくべきだと思っておりますが、そういう気持ちで青年という文字を、綱領の中にもう一回復活させたということでありまして、心の様相をいつまでも若く青春で、我々は緑友会をやっていききたい、という願いが込められております。

それから、同志的結合。これは考えてみますと、本当に他の会にはないのです。何といいますが、心の触れ合う会というものは。印刷組合というものは、これはもう利益追求集団ですから、本当にそういうのは悪いけれども一面エゴ集団です、実際言うところ、利害のぶつかり合いです。けれども緑友はやっぱ心の触れ合う、本当に何といいますが、人間性豊かな情感の広場です。そういった点に根本的に大きな違いがあります。そういった意味からでしょう、この同志的結合ということを入れましたのは。

三番目の行動ということがニュアンスとして入っておりますけれども、実はここでまた、緑友の性

格論争が沸騰してくるわけなのです。若山幹事長が就任の時に、これからの緑友は行動すべきだ、行動する緑友会に変質すべきだというふうに提言した。その行動とは何だ、何をもって行動というのかという行動の定義付け、これが、難しいもので、議論沸騰いたしました。非常に大きな緑友会の問題として提起されたわけなのです。今思いますと、若山さん、作道さん、それから北九州の渡辺さん、飯田さん、その方達がごぞつて度々上京いたしました。在京の先輩達と、このことで何日にもわたって議論して新聞にも掲載されて物別れになっているのです。話がつかなかったのです。

先輩は創立の精神を大事にする気持ちから、しかも今までのように、丸緑の問題や電話帳事件だとかいう時に行動を差し控えたといういきさつがありますので、それを言葉の上とはいいいながらも、行動する緑友会に変質すべきだというと、これはまた、そういう復活になるのではないかということ。喧喧諤諤問題になりました。結果はその時には平行線で話し合いがつかず、現役の方に任せようということになって、現役のいき方になってきたわけです。若山さんに言わせると、行動とは、とってつけたような特別なことをやるのではないんだ、緑友会は参加すべきところに意義があつて、参加に対して積極的に行動し話し合える仲間をつくって欲しいということ。自分を捉えていた、また行動力は若さの象徴だということを、緑友の『道程』の中に書かれております。ですから、誤解もあつたのでしょう。受け止め方がエキセントリックになったのだと思いますけれども、そういうことを議論した時代がここにあつたのです。

そういうことで、緑友の四十年代がどうあつたかといいますと、重厚長大、高度成長ということから、逆転致しまして、第2次の技術革新時代の最中、オイル・ショック、マイナス成長という大きな

激動期を迎え、その大波を受けて大変揺れ動いた時代です。政界も四九年、田中内閣の崩壊で列島改造も終止符をうちました。そういった日本国挙げての動揺時代、緑友会はそれを内部において経験したということでございます。

五十年代の緑友

さて、五十年代に入りまして、筒井、作道、飯田、中村、竹田という会長が担当してきたわけですが、けれども、実は、何だか年代の当初はいつも問題を起すのは緑友会でございます。この五十年代の発端にもまた大問題が起きました。これは、会長制を採用したこと。従来は、幹事長制で、若山さんまでは幹事長できました。ところが、筒井さんから会長制度を採りました。これはもう、さつきいった行動する緑友会という問題で、緑友が性格論争で沸騰している時に、またこれが出ました。のですから、輪をかけたわけです。火に油を注いだという条件でありまして、福島総会で、筒井さんが会長に指名された時には、議事進行が荒れに荒れたという様相がありました。

率直にいきますと、反対したのは同友会なのですが、同友会一グループだけが反対して、他のグループ全部が賛成した。同友会だけが賛成しないなら、多数決で押し切るかというような問題になったのですけれども、本当は緑友会の精神は、多数決で決めるというようなものではないのですから、紛糾したわけなのです。しかし、同友会は最後まで反対いたしました。そういう次第ありましたが、一応またこれも現役執行部に任せようということ、会長制度が敷かれてまいりました。

会長制がニュアンスとしてどういうことから生まれたかということ、その発端は単純なことなのです。

緑友会だから会長じゃないかと、発端は、幹事長の若山さんが名刺を出した時に、じゃあお宅の会長はどなたですかという質問を受けるというのです。いや、会長制ではないのですとということ。何か緑友会という名前を使っているのだから、会長がいるはずだというふうに、外部の人は見る。したがって、会長というものに名前を変えたほうがいいのではないかと、素直な気持ちから出てきたのが、発端だったのです。

ところが、同友会が危惧したのは、会長というものの中味がそういう単純な意味だけならいい。けれども会長というものを置きますと、やはりピラミッド型になるのではないかと、というような危惧の念を持ったわけです。緑友会というのは、横の連携機関で上部構造ではないのですから、したがって、上部構造ではないところの連携機関はお世話役です。お世話役というのは幹事です。幹事役のリーダーは幹事長なのです。したがって、会長というのはおかしいということなのです。そういう論理が同友会の持論なのです。

そういうことからして、会長、幹事長で揉めまして、そこにまた油を注いだのは、会長の下に副会長を作ったということなのです。これはまずかつたと思います。筒井会長の下に、作道、飯田、渡辺という三人の副会長ができて、その下に私も参加していましたが、常任幹事という制度になりました。したがって、先ず正副会長でいろんなことが相談されてしまうのです。それは簡単で早いですから、三、四人でパッと話し合って決めれば、どんどん進みます。そこで決めたものが常任幹事会に下ろされてくるのです。

それで、実は二十周年を迎える時の会長問題も、正副会長で決められて下ろされてきた。で、留任という形が出てきたのです。会長留任という形が。三、四人で決めますから、そういう形も出てくるでしょうね。その時には、常任幹事会で猛反対して、緑友会は会長が留任したことはない。外部からは人材がいらないのかと見られる。そんなみつももないことは止めようというので、結局、正副会長が決めたことを、常任幹事会がひっくり返したといういきさつがあります。

そこでもって、行動する緑友会、それから、こういうふうな会長制ということになってくると、いよいよ上部構造ということになってくるのではないかと、危惧の念が出てきて、同友会は、いまの緑友会のあり方に賛同しかねる、同友会は脱会しようというふうなところまでいきました。

そして、そのことを執行部が耳にしまして、同友会の市村さんが初代会長ですから、創設の一番中心的な役割を果たした人が、ここにきて脱会するのだったら、自分達も全部総辞職しようということ、辞表をポケットに持って、常任幹事会が同時に開かれていたということを知っています。そういう緑友会の崩壊の危惧に瀕した時が、その五十年代の初頭に来たわけなのです。

二十周年大会

さて、その時に私は幸か不幸か同友会を代表していまして、同友会の幹事長でしたので、緑友会に参加したわけなのです。かつての緑友会を知っていましたが、休憩期間がありましたので、改めてまた緑友に復帰しました時に、えらい揉めているので疎外感があるんです。同友会がそういうことに反対しているので、非常に何か気まずい思いをしながら常任幹事会に参加しておりましたけれども、そこでもって、二十周年大会をやらなければいけないことになったのです。

二十周年大会をやるには、東京か、または大阪、名古屋でやるべきかどうかということを検討した時に、創立は東京の神田でやったのだから、東京で二十周年大会やって欲しいという意向が強くて、東京に支持された。ところが、東京自身もめているわけですから。東京でやれる状況ではないということ、二十周年大会は返上したのですけれども、常任幹事会の総意により東京でやれということ、筒井さんも東京の会長だし、私は常任幹事で出ていましたものですから、「中村さん、これは東京で手を握ってやるしかないよ。いま上がっている問題を、結局は何とか火を消していかなければならない。それに努力して欲しい」ということを言われまして「緑友会のために努力しよう」ということで、筒井さんと約束をしました。その時実は、二十周年大会を担当する会長を決めようということから、作道会長になってきたわけなのですが、その作道さんが、またそこで問題を起こしたのです。

会長指名を受ける時に、実は私、作道さんのところへお邪魔しまして、会長を受けて欲しい旨をお願いしたわけです。最初から受けるような方ではありませんので、絶対受けないと逃げ回った、その前にさっきお話ししましたように、筒井さんが留任するというような正副会長で決められた問題があるだけに、作道さんも受けにくいという事情も手伝って、「絶対におれは受けない」ということだったのですけれども、「作道さん以外ないんだ。留任なんて絶対だめだ」ということで、本当に作道さんと膝を突き合わせて、何回か話し合いをしました。その折に、「作道さんね、会長制度を採ったのは、やはりぼくは間違いだと思う」と率直に本音を話しましたところ、その時に、作道さんも「おれもその後に気がついた。会長制を採ることは間違いだと本当に気がついたんだけど、あの時の雰囲気として、何か常任幹事会としてそちらの方向にいつてしまった。それを自分も反省としている」とい

うことを言われまして、真剣に緑友会を見つめていることに感動を覚えました。その意識が強かったせいか、「中村さん、会長を引き受けるには、会長の名前をもう一回幹事長に戻してくれ」と言ったのです。みんながそうしてくれるならば引き受けてもいいと、これまた無理難題をまた作道さんは持ち出したわけです。会長になって何年も経ちませんのに、たった一期ですから、もう一回幹事長に戻すというわけです。その頃には緑友会が、業界にある程度認知されておりましたので、新聞には堂々と会長制ということが報道されており、二年でまた幹事長に戻ると誠にみつともない。「作道さん、そればかりはできない。一旦産んだ子は育てなきゃだめだ」ということで、育てるためには中身の精神をしっかりして育てていけばいいのではないかとこの話をしたわけです。

そして、作道さんがあの人はわりに頑固なところがありまして、どうしても幹事長にしないと受けられないというので、それで私は「じゃあ、幹事長制に戻して欲しいという願いがあるならば、もう一度常任会に図って、それを戻すような手続きをしましょう。しかし、市村さんが会長でいいよと言った時には、作道さんどうするか」といったら、「それはその時に考えてみる。市村さんに任せてみよう」ということだったものですから、私は市村さんと話し合いを続けました。

あの方も忙しくて、夜中まで話して、家に帰ったのはちょうど夜中の二時頃だった。作道さんから、何時でもいいから電話くれというメモが、私のほうに入っておりまして、すぐさま電話を入れたら、一発で出るんです。電話がビーンと鳴ったら受話器を持つています。それぐらい真剣なのです、あの人は。感心しました。本人がパツと出て、「おれや、どうなった」というのです。市村さんの言葉を伝えました。「幹事長という心で会長をやってくれ」という願いですと。それで、作道さんが

「まいった」と一言いって会長を引き受けたといういきさつがここにあるわけなのです。それぐらい当時の緑友メンバーは、緑友精神を大切にしてきました。それ故、作道会長の就任ポリシーは「効率運営で価値ある裏方」ということで、「裏方」という謙虚な奉仕の精神を掲げ、同時に副会長制を廃し、緑友精神の本質を追求されました。そこでもって、この性格論争は正道にもどりここで決着がついたわけです。

緑友会活動としては、二十周年大会というものが作道会長の下に行われました。「高度化社会における印刷産業の未来像を探る」というテーマでした。この時代背景を見ますと、二十周年当時は需要構造の変化、この兆しが出てきた時です。ユーザーニーズの変化です。顧客ニーズがどんどん変わってきた時代です。私は実行委員長を務めさせていただきまして、どのように変わってきているのかなと見ました時に、三六〇〇万部といわれる運転免許証、これはほとんどの方が持つておられるでしょう。これが、印刷からコンピューター写真に変わった時なのです。一夜にして変わったのです。このようにニーズの変化が著しく出てきた時で、印刷業界は脅威を感じはじめました。

そういうわけで、ニーズの変化に対応していこう、高度化社会を探ってみようということで、『逆転の発想』で有名な糸川さんをメイン講師に持ってきまして、あと有名な講師を、さっきいった末松玄六さんなんかも引っぱり込んで、勉強会をして、この二十周年大会を開催したわけでございます。

その時に、今まで高度化社会で、大きいことはいいいことだということが、スモール・イズ・ビューティフルということになってきて、巷にはプリントショップがたくさん出現しまして、需要の構造がどんどん変化してきたということが出てきております。

そういう経過を過ぎまして、作道さんから飯田会長に受け継がれ、そして私の担当時代になりました。これは見てきたような嘘ではありません。その時、私自身実際に感じたことは、何と云いますか、ちぐはぐしている緑友会だなということなのです。いい時には何か燃えるのですけれども、何かある時には沈滞してしまうというふうな、何と云いますか、萌え出ずる頃の草創期は、前向きに向かつてまっしぐらに来た。高度成長の時には、いろんな伸び盛りのものを作って、その後のオイル・ショック、ドル・ショックで、非常に惨澹たるものを経験し、緑友の性格論争ということに口角泡を飛ばしながら、身体を投げ出して結論を出したという血気盛んなものを感じますが、私達の担当時代を考えてみますと、未知のつかみどころのない新しい分野のメカトロ、それからニューメディア、情報化時代の夜明けがきたわけなのです。焦点を絞りきれないその大きな第三の波という流れに、不安感を非常に感じた時であり、危機感を持った時代でした。

全国青年印刷人協議会の出現

果たして、印刷業界は未曾有の革新的流れに押しつぶされるのではないかと漠然とした思いがした時であります。かたや、印刷業界においては、全青協という、全国青年印刷人協議会というものが誕生して、組織化しようというような提案があった時でありまして、そういう狭間にあって、緑友会というものが何か燃えきれない、燃えようとしても燃えきれない、悩み多い時代を迎えたわけなのです。そして、私の耳にするところ、そういう新しい時代の夜明けなのだから、業界としては青年層を作っていく必要性を正当化し、何も緑友会の存在は無くてもいいのではないかとというようなこととび出

し、緑友会はわれわれに何のメリットを与えてくれるのか、という声まで頻発したわけであります。

それを見て、私もこれはいかんなど感じまして、緑友会というものの本質をもう一度知ってもらう機会を作ってみようという意図で、長野総会で緑友を見つめるというバズセッションを行いました。三つのイベントであるセミナー、総会、大会の内容を見てもらい、どうあるべきか、皆さんの意見を全部吐き出してもらって、じゃあ今後こうしていいか、ということを決めていった時代です。それによりますと、総会はずべてを通して話し合いを。セミナーは勉強一途に。大会はイベント性をもり込んで活気あるものに、それぞれの催しの性格をはっきり分けて打ち出している、ということに意見をみたわけです。また一方では今までの革新時代の延長線上ではなくて、革新的な第三の波のものが押し寄せてきたのですから、本当に潜在的な不安感というものがずっと広まってくる。そういった時の緑友の勉強は何だろうといった時に、じゃあニューメディアの勉強をしよう、メカトロの勉強をしようといってもまだまだ材料が不足して無いのです。だから、私はこう考えました。こういうような、「迷った時には原点に返れ」という言葉があるとおり、原点をしっかりとっておかなければと。いまこそ、原点をしつかりやっておかなければ、今後そういうものがどんどん出てきた時に対応できなくなる、ということから、私の担当時代には、「経営の心」と「経営の技術」ということの、原点主義をとりまして、その経営の両輪の錬磨をしつかり勉強しながら、友愛をもっともつと強めていこうということを提唱させて頂きました。

さらに業界の新しい青年層組織、これも大変意識しておりました、新加入ということを活発にやりました。お陰様で、当時、八グループほど新しく緑友に参加していただきまして、新しい息吹が緑友

会に吹き込まれたという時でもあります。

そういう経過があつて、後、竹田会長、古賀会長という時代になってまいります。竹田会長の時代に、一番大きな問題点がクローズアップしてきたのが、やはり全青協がいよいよ本格的に組織化に乗り出したということでありまして、事実、文化典の時には、この全青協の協議会を開いたという現実がございます。

そういう中で、各緑友グループと、全青協のグループとの問題が各地に出てまいりました。その調整ということに、竹田会長は奔走しており東京に度々来られまして、全印工連の松島会長、野村副会長との折衝を一緒にずっとやらせていただきました。そういった点で、新しい業界の流れに対して、緑友会の考え方はどうあるべきかということを、大変腐心しておられました。それがますます、古賀会長になってきて顕著にこれから本番に入ってくるであろうということでございます。

今後の緑友会のあり方を探る

そういう、全青協という業界の組織的な問題が一つ大きくありますが、私はそれ以上に考えていかなければならないことは、やはり、いまの大きなハイテクノロジーの時代には、緑友会がどう対応していくかということではないかと思うのです。今までの緑友会の延長線上では、会そのものの存在価値がちょっと稀薄になってくるのではないかと思うのです。創立の精神は、やはり大事にしていかなければなりません。創立の精神を尊重しながら、現代の一つのソフトを緑友会が作っていないか、緑友会の今後の永遠不滅にはつながっていないかであろう、というふうに感ずる次第です。そのこと

が今回、話をしろという宿題が与えられました時から非常に気になっておりました。そこで、私もかねがね、業界の仕事をしておりながら、日本経済というか、日本の国はどのような方向になるかということを考えさせられますが、いまはホロニック・バスという言葉があるようにそういう方向になりつつあります。東大の石井教授が提唱しております。

昭和五五年大平内閣の政策審議会ができた時に、このホロニック思想というのが生まれました。要するに個と全体、分散と統合です。そういったことの調和を図っていくということです。ホロニック思想でもって、激動のオイルショックを日本経済は切り抜けたわけでございまして、あれがなかったら日本経済は切り抜けられなかったといわれます。どういふことかというところ、あの時には政府も相当大慌てしました。第一、オイルが止まってしまうと日本経済全部倒産です。本当に石油で成り立っている国です、日本は。その石油が本当に供給が止まってくると、日本経済というのは破壊です。それだけ日本経済にとっては大事な事件だったのですけれども、オイルの制限を受けながら、日本経済がなお発展してきたということは、政府が指導的な立場でリーダーシップをとって、トップ・ダウンをしながらやってきたならば、日本経済は立ち直れなかったであろうといわれているのです。そうではなくて、個という、各企業が自分のところではこういうふうな省エネをやっていこう、こういうようなことを考えていこう、というように真剣に対処しました。他のところではできないだろう。でもおれのところはこうやるんだというぐらいの自意識を持ってやってきた。その集積を見ますと、あの時のオイル・ショックを切り抜けたパワーであったわけでありまして、ですから個の活性化がなくては、これは本当に切り抜けられなかっただろう、そのように思うわけです。

経済がこれからますます分化していく、分派していくであろうというふうに思うのです。軽薄短小の時代ですから。非常にスモール・イズ・ビューティフル、そういったふうに分化していく。分化していくと、一つ一つの核が活性化します。しかし、それは勝手に分化し、勝手に活性化していくのだから、分散だけに終わってしまうけれども、全体の流れを見ながら、一つ一つの個が活性化していき、そして全体的に調和していくというふうな、個と全体の統一というホロニック思想というものが、そういったものが、二一世紀にどんどん開かれてくるだろうということがいわれているわけです。緑友会をそういうことにあてはめていいのかどうか分りませんが。

けれども、概念的にちょっと見ますと、緑友会はその形態を持っているわけです。各グループの集合体が緑友会なのですから。個と全体の調和ということが緑友会ですから、緑友会の形はホロニック・パスの性質を持っていると言えるのですが、実は私、じっと考えていまして、いままでも緑友会というのは、全国グループの連携機関であると明快に唱えられておりますけれども、これからは、単なる連携機関ではだめだろうなというふうな思いが致します。

これは個人的な考えですからお許しください。やはり、何といいますが、トップ・ダウンということとは、これは緑友会の思想に反しますので、常任幹事会の決めたことを即トップ・ダウンしていくことは、これはしないほうがいいと思いますけれども、グループの活性化を促進していくお手伝いをするというふうなことをやりながら、全体的な活性化の調和を図っていくって、緑友会のパーソナリティやものの考え方なり緑友会として、何か一つの提言というふうなものを、印刷業界に産み出していこうというように成長していつて欲しいなという願いが、ちょっとあるわけです。

まあ分りません。それは、現代の現幹事の方がよほどいま肌身で感じていることで、私、ちよつと離れて勝手なことを言っていますけれども、皆さんの方がいろいろ深く感じられていることと思います。ただ、かつては、電話帳事件でもって業界の全印工連会長に訴えて動かしたというようなこともありますように、個の発言から総意としての意見調整、その統合、調和というように、それを緑友会の意見まで高めることもできるわけで、その意見が業界を動かすパワーになることも夢ではありません。何かそういうニュアンスのことをちよつと感じるわけでございます。

そういった諸々の事を思いながら、実はこのお話しのお話を直直ささせていただいたわけでございます。

歴代会長の語る緑友

1977・4～1979・4

第二一回神奈川総会によせて より

作道 亮雄 第十二代会長

全国の緑友の皆さん、厳しい業界環境の昨今ではありますがお元気でご活躍のことかと存じます。

昨年は緑友会二十周年の年に当り、各行事、ホストグループの方々は勿論全国の皆さんにも大変ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

今振り返って見ますと、昨年に二十周年の行事がやれて良かったと思います。もし今年に当たれば物心両面から見て大いに負担であり、難かしいものがありました。今年は企業の存亡を試される年とも言われております。緑友30年への初年度としては大変な年で、厳寒の北壁登山を強いられるような苦難のスタートであります。

その試練の年に当って緑友会は如何に歩むべきかでありますか、その問いかけについて真剣に考え、よりベターな指針を見出すのが第二一回総会の持つ意義であると考えるものです。

私自身は、より効率的運営を図り、且つ全国各グループに寄与出来る姿を、今こそ緑友会将来のため

に願って止みません。

緑友会は友愛奉仕の精神を基本とし、意欲ある青年印刷人がチャレンジを試み、その相互研鑽の中から自己の向上を図るもので、時にはチャレンジの場、時には交流の場、時には安らぎの場であろうかと思えます。我々は現在が如何に厳しい時代とは言え、緑友会の基本的在り方を歪めることなく、その時代に即応したものとして緑友運営を成して行くべきだと思えます。私は全国各グループの指導的立場の皆さんが相寄られ、皆さんが持つておられる考えやご意見を総会の場で提言下さることを願っております。

現在、神奈川正和会の皆さんに総会の設営及び運営準備のため大変ご苦勞していただいております。私は今総会が、神奈川の皆さんにとりましても、緑友会にとりましても、実りの多いものとして開催出来得ますことを心から願っております、全国二九グループ各位のご参集を懇請する次第です。

1979・4～1981・4

第二四回久留米総会あいさつ

より

飯田 範夫 第十三代会長

本日は全国各グループの、指導的立場にある皆様方のご参集を賜り有り難うございます。

新年度に入り景気の行方が注目されるところですが、これまで輸出を含む外需はともかく、内需関係はゼロ成長ということもあり、経済環境は年初来かげりつづきで、陽の目を見ないまま今日まで至っているのが実情であり、その回復は早急には望めそうになく、我々の業界の前途も一層の厳しさが増し、先行きの見通しに難しさが生じるものと思いますが、緑友の多くの皆様には順調な歩みをされておられ、ご同慶に思う次第です。

緑友会もこの一年、東京での総会に始まり、冷夏の仙台大会も多数の緑友のご参集を得る盛会となり、今年に入つての東京セミナーにも、これまでにない多くの熱心なご参加を頂きました。その外、諸会議にも役員各位のご協力や運営上のご提言を賜つて参つたもので、全国緑友の各位の温かいました熱意ある成果として、この一年を充実した姿で送ることが出来ましたことを心から皆様に感謝をしてお

礼を申し上げます。

しかし、今日より新たに迎えます第二四期の時代の背景を考えてみますと、景気の低迷による企業倒産は前年度末までに史上最高を記録し、今年度もその数の増加が予想されており、加えて法人税の二％引き上げ、印紙・物品・酒税などの大幅増税、公共料金の値上げと我々は今後その重たさをたつぷりと思ひ知らされることになりそうであり、企業経営に厳しきの増すことは覚悟しなければならぬところでもあります。

私達はこのような時、より確かなものへの思考確立を人間関係の絆、連帯の中から見出す必要があります、それが緑友交流の中から得られることを願っております。そしてそれが緑友の心の繋がりと、主体的参加により創り出される限り、緑友会の前進発展があらうと思ひますし、新しい役員の下でスタートします第二四期をより緑友会発展の期とすべきでありましょう。

久留米の皆様方の熱意ある主管に応え、今総会が緑友会のより発展と、全国各地域のグループの発展とに大きな動悸づけを為す、価値多きものとなることを願っております。

1981・4～1983・4

「春の嵐がふき抜けた日」

中村 守利 第十四代会長

私は印刷同友会に所属しており、会を通して全国印刷緑友会という存在は知ってはいたが強いて、正直いってそんなに興味も持ちあわせていなかった。忘れもしない、それは神田明神下で行なわれた印刷同友会の総会の席上で、あの春の嵐がふき抜けたのである。

ここ数ヶ月、会の研修会に出ていなかったもので、総会には出なくては申し訳ないという気持ちで、出席した。まだ総会は開かれていなかったが、なにやら幹事長を囲み、広間のすみの方でひそひそ話しをしているように見えたのだが、少々遅参していたので腰をかがめて「遅くなりました中村です」というと、全員が何か、すくいを求めるような眼差しでこちらを見ているような気がした。中津川幹事長が手を広げ、これは大変いいところに来た、今最後の一人が決まらずよわっているんだ、君ひとつやってくれないか、といとも簡単に云うものだから、あと一人幹事役がきつたりないのだから、まあ、まあいずれはお手伝いをしなければならぬと思っていたので、「わかりました、私でよかったです」

「お手伝いさせてもらいます」とついその雰囲気にもまれて返事をしてしまった。総会がはじまり、なんと次期の幹事長に推挙されたのが、この私だった。

春の嵐は突然やってきて、何の心の準備もないままに、その渦巻きの中に引きずり込まれてしまったのが、それが緑友との熱い友情へとつながっていくとは、夢にも思っていなかった。

「五十年初冬の激突」

私が突然印刷同友会幹事長になったとき、すでにこの激突は、ほとんどおさまったように見えたのだが、すでに天国に旅立たれた若山さん時代に起こった話である。

発想は簡単明瞭、これだけ大きくなった全国組織の会員のトップの肩書きが「幹事長」では他の会が会長制を敷いているところも多いので、「会長はどなたですか」と尋ねられる。そこで、幹事長を会長制にしようではないかと提案、多くの賛同を得たかのように見えたが、実は私の直前の印刷同友会幹事長中津川氏が反対意見を出し激突した。我々青年印刷人緑友会はタテの下部組織ではない。あくまでも会員同志の結合であり、幹事はそのお手伝いをする役であり、直接行動を起こす会ではないという緑友の性格論争にまでおよび、真剣に話し合いを持ち、五十年四月ここにはじめて筒井新会長が誕生したわけで、その直前の同友会幹事長に私になったものだからなんとなく出にくく、福島総会を欠席したことをおぼえている。さらに、会長の下に副会長制を作ってしまったことはまずかったと思う。筒井会長の下に作道、飯田、渡辺という三人の副会長ができて、その下に私も参加していたが、常任幹事という制度になった。したがって、先ず正副会長でいろんなことが相談されてしまう。そこ

で決めたものが常任幹事会に下ろされてくるわけで、屋上屋の組織になった。実は二十周年を迎えるときの会長問題も正副会長で決められ、筒井会長留任という形で下ろされてきた。その時には常任幹事会で猛反対した。緑友会は会長が留任したことはない。青年層の会には「留任」は不釣り合い。外部からは人材がいけないと見られる。そんなみつももないことは止めようということ。結局、正副会長が決めたことを、常任幹事会が訂正させたというようないきさつがあり、このような会長制ということになってくると、いよいよ上部構造ということになる危惧の念が出てきて、印刷同友会は、いまの緑友会のあり方に賛同しかねる、印刷同友会は脱会しようというところまで率直にいった。そしてそのことを執行部が耳にして、印刷同友会の市村さんが初代幹事長だから、創設の一番中心的な役割を果たした人が、ここに来て脱会するのだったら、自分たちも全部総辞職しようということ。辞表をポケットにしのばせて常任幹事会の中で真剣に討議され、次期作道会長のとき、この副会長制を廃止し、緑友会崩壊の危機が救われた五十年代初頭のできごとだった。

初の記念事業「緑友二十周年記念大会」

二十周年大会は、緑友会創立以来、始めての周年記念大会となり、昭和五二年十月八日東京・帝国ホテルにおいて、在京六グループ主管で開催された。

当時の緑友会は創立の基本理念から逸脱の風潮が見られたので、私は歓迎挨拶の中で「古くして古きもの滅ぶ、新しくして新しきもの滅ぶ、古くして新しきもののみ永遠不滅」の繁栄の原理に沿って緑友会創立の精神を大切にし、その基盤の上に現代の新しい創造を探り入れてゆくことこそ、緑友の永

遠不滅”につながるのではないだろうか」と提言した。

この二十周年記念大会は「高度化社会における印刷産業の未来像を探る」という大会テーマのもと、全員で組織工学研究所所長、糸川英夫氏の記念講演を聞き、このあと五分科会に分かれ技術・経営・教育・そして印刷業の社会のニーズについて講演を聞き意見を交えた。挨拶に立った作道会長も「緑友会には二八のグループがあります。その生い立ち歴史も違い考え方も違います。だから議論がぶつかるときもあります。しかし意見が食い違うからといって、緑友がタモトを分かったことはありません」。続いて青年印刷人のことに一番理解と助言をおしまない佐久間長吉郎先生は「印刷人として大切なことは自ら仕事の尊さを自覚することです。このことを心に納め、これからも立派な印刷人として活動してほしい」と呼びかけている。最後に市村初代幹事長が歴代幹事長を代表して「感激で胸が一杯で：（後に続いた言葉はいかにも市村氏らしく謙虚で参加者の胸を打った）：緑友会はみんなが幹事であり、みんなの努力で今日までできたのです。私たちだけが、たまたまその「場所」にいただけで、こうした彰をいただくことはおもはゆい」いかにも緑友の生みの親らしく、これから先も緑友の灯を消さぬよう希求していたのでしよう。東京大会を6グループで引き受けてよかったと思う。在京六グループが一丸となり、予算ゼロから発足し、名刺交換から始まり互いに苦労したからこそ、友愛がめばえ、今でも実行委員は「雁の会」として年一回あつまり、旧交をあたためている。おかげさまで、そこではいつも私は実行委員長にまいもどされる。

「不安と動揺の五十年代」

私が緑友に出るようになってから筒井、作道、飯田会長とトップの変動があり、その間に色々のことを学んだ。緑友会は組合とは根本的に違うんだということ、幹事長制が会長制となり、下に副会長をおいた問題、行動する緑友会へと迷走しかかり、定義づけをしている中で性格論争がおこり、会長・副会長・常任幹事制度の採用は、緑友としての性格上問題があり、作道会長の時に副会長制を廃止し、会崩壊の危機を一応すくったが、全国の仲間はその緑友はなんなんだ、なんのメリットがあるのか、緑友の精神とはなんなのか疑問点がますますばかりとなる。

そんな中でいよいよ私が順番として久留米総会で会長を引き受けざるをえなくなる。どうしたらこのばらばらになりつつある緑友を一つにまとめたらいのか大変悩んだ。いいときには燃えるものがあるが、何か問題があるときには沈滞してしまう。萌え出ずる頃の草創期は前向きに向かつてまっしぐらにきた。高度成長のときには、いろんな伸び盛りのものをやって、その後のオイルショック、ドルショックで、非常に惨澹たるものを経験し、緑友の性格論争ということに口角泡を飛ばしながら、身体を投げだして結論を出したという血気盛んなものを感じたが、何か焦点のしぼりきれない第三の波がひたひたとしのび寄ってきているのが感じられた。“迷ったら原点にもどれ”そう言っているような気がした。

「第二四期久留米総会」（緑友会は単なる親睦団体にあらず）

全国印刷緑友会の第二四回総会が昭和五六年五月十六日全国から二五グループ約百名出席して福岡

県久留米市の久留米グランドホテルにおいて中原利行実行委員長長の歓迎挨拶で開催。新会長に私が推薦承認されたのを受けて新役員が承認され、その後、併せて承認された規約改正により新たに書記幹事をもうけ、会長を補佐することにした。就任の挨拶を要約すると、「会長をお引受けするに当たって全国印刷緑友会発足の理念を再確認したいと思う。まず最初に全国印刷緑友会は全国各グループの上にたち各グループを統括するものではなく、相互信頼に基づく平等の立場での連携機関である。全国印刷緑友会会長は幹事会の一員であり、決して中央集権的執行部のそれではなく、お世話役であるという認識で新たな出発をしたい。さらにもう一つの原点は、印刷人としての理想求めてやまない、心と心の触れ合う同志的結合体を志向した点にある。全国印刷緑友会の歴史とともに、自己研鑽と友愛の精神が深められてきたが、これをさらに進めていくお手伝いをしたいと念じている。全国印刷緑友会は単なる親睦団体であってはならない。社交に流れず、研鑽と友愛の精神をしっかり培っていくべきだと思っている。その具体的行動として、印刷経営を使命とする者にとっては、印刷経営を通してその経営力を高めて行くことが、自己研鑽に通じる道ではないか、経営の両輪である『経営の技術』と『経営の心』の練磨が自己研鑽の大きな目標になる」と強調した。私の会長担当期はこの「両輪の練磨」が会運営のポリシーとなった。

「今を最大に生かす」新潟大会

会長就任の最初の大会が新潟大会で、すでに準備が進んでいたのに、無理をいって「経営の技術」、「経営の心」についての講義とバズセッション方式の分科会に変更してもらった。渡辺慶一郎実行委員

長はじめ実行委員の皆さんには、大変ご迷惑をかけてしまった。

会長挨拶で次のような要旨のお話しをした。

経営力を高めることは、「経営の技術」と「経営の心」を高めることであり、この経営両輪の練磨があつてこそはじめて繁栄への道に通ずると思う。このことは今年度緑友会運営の大きな柱として考えているもので、幸い今大会においてはその道を極めておられるお二方の講師に恵まれ、さらに、いま一つ大切にしたいと願うことは、本大会はメイン日程を一日スケジュールにしているだけに、大会の今日一日すべてを通じて、その一コマ一コマを大切に、今というひと時を生かし得る人が、人生の勝利者になり得ると信じている。

今を生かすものは一日を生かす

一日を生かすものは一年を生かす

一年を生かすものは一生を生かす

と申します、世界の名車ベンツでさえ、低速運転をしていると、ついには高速で走ることができなくなってしまう。どんな小さな木でも、今なすべきわずかな水の吸い上げを怠つていては、大木となることはできない。「今を最大に生かす」このことが成長、発展の原理であり、生きとし生ける者の生命顕現の法則である。この大会はこの式典にはじまり、懇親会にいたるまで良く学び、よく語り、よく遊び、すべてを通して「今を最高に表現し、最大に生かす」ことを、みんなで心掛けようと呼びかけた。

「セミナーに関する基本的な考え・役割」

常任幹事会がセミナーを受け持つということは、すでに作道会長時代よりずっと考えられてきたもので、今までどおり大会、総会、セミナーと三つの行事を各グループもちまわりで行なうと、かなり早いスピードで次の担当がまわってくることに、各グループへの負担が多すぎるように思われる。その点セミナーを常任幹事会で持てば、比較的各グループの負担が軽減される。またセミナーは勉強会オンリーで、手離れがよいと云う二点の考えにより試験的にやってみるところうまくいったので、以後セミナーは常任幹事会主催で行なうことにした。

前回東京で行い、名古屋セミナーが二回目となり、トライアルな段階であるが、曖昧な面があるので問題点を整理した。

今回は開催地がたまたま名古屋に決定され、名古屋グループにお手伝いをしていたくという形になつてくるはじめてのケースなので、もう少しつっこんで明確に役割分担を決めていった。あくまでも主体はこの常任幹事会が出てきてやらなければいけないことで、常任幹事会で行なうことは何かを考え、どうしても常任幹事会でできないものを、名古屋グループにお願いするという方向で検討した結果、当日の受付、会場運営など準備活動は名古屋の地元をお願いする。会員の動員、講師の接待、会計の最終的処理、セミナー並びに懇親会の司会、講師紹介などではできるだけ常任幹事会で受ける。お手伝いという範囲はあくまでも縁の下の力持ちと言う形で考えてもらい、実行委員長という名は使用せず、緑友会会長がその全てを代行し、その下にセミナー総括責任者を置く。今回は名古屋の竹田

光宏君がその任にあたった。最初が肝心なので色気なし勉強中心の方針を貫いた。

「無関心が欠席グループを生む」（長野総会）

貴重な時間と費用をかけて全国から集まってきた仲間なのに議事進行、講師の話聞き、懇親会をしてそのまま解散してしまう。懇親会の会場での立ち話的な話で終わってしまう。これでは仲間との連帯感が生まれてこない。無関心なグループが出はじめてきた。そこで今回の長野総会では、講演会の時間を仲間との話し合う場に変更し、徹底して語り合った。まず私が「緑友会二五年の歩みと創立当時の精神」についての話をし、その後参加者全員で、本当に三大会が必要か、「総会・大会・セミナーのあり方と内容、開催方法」等々について語りあった。小林昌助会長、高木 勇実行委員長は話が弾むように、畳の部屋で一杯飲みながらの気のきいた場づくりをしてくれた。

常任幹事会が勝手に考え遂行していくことは緑友会の本来の精神に反する。緑友会というものは全国各グループの集まりで、全国各グループを編成している皆の総意が反映されてこなければ、緑友会の意義はない。皆さんの総意を反映していくことが、緑友の本質だと思い、この案件を取りあげた。もう一面は二五年の歴史を経過した。これも歴史のひとつふし。

このフシに我々の先輩がずっと築き上げ、残してきたその精神や理念や歴史というものもだんだん受けつがれていく間に稀薄になったり、方向が違ったり行ったりする傾向がある。そこで一度この辺で見直してみようということで、緑友の基本理念、精神というものを見失わないように一度見つめ直す機会にしようとした。やはり思っていたとおり多彩な意見が出され、意義のある長野総会とな

った。結論的には、年三度ぐらいふれ合いをもたないと、緑友の友愛が育くまれないという思いが多く、三大会イベントは必要ということになった。

それと同時にこの緑友三大会行事が、いつの間にかすべてにイベント性がエスカレートしてきており、受けるグループも大変な負担になっているので、次のように意義づけ（色わけ）した。大会は式典、分科会のほかにイベント性を強く出し、家族ぐるみでも楽しめるリクレーションの場に。セミナーは勉強、研修を中心に学ぶ場。総会は緑友仲間との存分な語り合いの場、とすることを再確認し決定した。

このバズセッション方式の話し合いを持ったことで、いかに我々が市村初代幹事長発足当時の創立の理念、精神、その後の歴史、について理解してなかったか反省をし、ぜひ自分たちのグループに来て、この素晴らしい話をしてもらいたいという要望が出た。

「祈りが通じた札幌大会」

昭和五七年第二五回札幌大会は「エレクトロニクス」を統一テーマで記念講演、分科会とも真正面から採りあげ、研修した貴重な大会だった。そしてアンケート調査を行い、「デジタル化」における印刷業界のデータが、初めて集められたユニークな大会になった。大会は三日間にわたり、第一日はゴルフと市内見学、OBの前夜祭、二日目が本番の大会、三日目はエキスカーション、これを竹内一博会長、藤田俊雄実行委員長はじめわずか二十数名のメンバーで成し遂げた。

舞台裏を見せてもらおうとホテルの一室を訪ねたら、なんと、大会当日の朝なのに万年床のわきで、

まだ、ねじり鉢巻で準備に手落ちはないか、万全の体制かと一生懸命だった。その真摯な姿を目の当たりにして、私は思わずジーンときた。

三日目のエキスカーションに参加し、登別温泉郷へ行く途中、高原に立って素晴らしい景観を目にした。それが、昭和新山“の景観で、年に一度か二度しか見られないという幸運に浴した。その日は雲ひとつない日本晴れで、札幌の仲間が「この日だけ天気になるよう祈りましたよ」といって、全国の仲間に“希少“な景観を見せてあげることができた満足感にひたり、全力投球の思いが通じた大イベントだった。

「青春“を発露させた大阪セミナー」

第十六回大阪セミナーは山口博司君担当で密度の濃い三コース研修に設定されたが、中でも“経営の心“を基本テーマに、サミエル・ウールマンの「青春」の詞を学んだことが、深く印象に残っている。

「青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、こういふ様相を青春と言うのだ。

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる

人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる

人は希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる」

詞の核になる一部を書きとったが、この精神が“緑友の心“に通じるものがある。この研修会のあと福岡若葉会の古賀健一君が、銅版に彫って制作された青春の額を緑友の仲間に配られ、私は今でも

大切に掲額している。今から二十年近く前のことで、その後数年経って「青春」の詞が、いたる所で語られブームになった。

大阪セミナー発進で、世間に広く「青春」を喚起した思いがしている。

「新進気鋭のハグループの仲間が誕生」

緑友会は札幌から沖縄まで全国組織が唄い文句になっている。札幌青年印刷人の会は作道会長時代に“復帰“してくれた。私もお供して再加入をお願いしに行き、歓待を受けたことを覚えてはいるが、日本の起点は出来ても、全国にはまだたくさん青年グループがある。全国工組にリサーチしたところ、数多くの紹介があった。紹介されたグループに緑友会の理念や歴史、行事内容などを解説した文書を送付し続けた結果、少しずつ手応えを感じ、根気よくアプローチした。最初に反応したグループは山梨印刷若人会で、前ぶれもなく突然、名古屋セミナーに内田、笠井両君が“偵察“に来た。これは逃がす手はないと思い、愉快で面白い雰囲気をつォーマンスして“とり込み“、加入第一号となった。青森グループの立花、福井グループの出口両君も、それぞれ新潟や札幌大会に“視察“に来られ、同じ手口で“囲い込み“をした。一方、佐賀若楠会は緑友創立当初からのメンバーだったので、宮地会長はじめ諸先輩には襟を正して、“復会“をお願いに行った。福岡若葉会の古賀健一、前田福一、原 維宏の三君が同行支援してくれたお陰で、快よく受け入れられた。

最も難産だったのが京都グループ。二十周年大会にオブザーバー参加の予定が欠席。その後東京、大阪から度々の勧誘も功を奏さず、思いあぐねて一計を考じ、トライした。当時の京都月曜会の植田

代表に新幹線ヒカリから電話を入れた。「今、そちらへ向かっています。横浜を通過したところ、二時間後に京都に着きますので会ってください」樋田代表はいささかあわてた様子。指定されたホテルに着くと、すでに三人の先輩も同席、作道亮雄氏の下地折衝が効いて、話ほとんどん拍子で進み、仲間入りが決まった。その後、長野緑友会倉田会長の肝入りで、長野グループと京都月曜会との姉妹グループの縁結びの仲人役を勤めるとは夢にも思っていなかった。こうした加入グループの成功を機縁に幹事会が燃えてくれて、八グループの加盟を果たすことができたことは、嬉しいかぎりであった。以下新しい仲間の八グループを紹介。

- | | | | |
|----------------|--------|------|-----|
| 一、青森県印刷青年経営者会議 | (立花建男) | 各代表者 | 敬称略 |
| 二、東印工組港支部若竹会 | (佐々木毅) | | |
| 三、山梨印刷若人会 | (笠井健夫) | | |
| 四、福井県印刷青年部 | (出口隆弘) | | |
| 五、京都青年印刷人月曜会 | (樋田満男) | | |
| 六、佐賀県印刷人若楠会 | (宮地敏明) | | |
| 七、宮崎印刷はまゆう会 | (田中正紘) | | |
| 八、鹿児島県緑友会 | (中村博大) | | |

「緑友会の業界認知」

昭和五八年下関総会開催日程が全印工連の行事とバッティングし、先方より、日程の変更をなんとかお願いできないか等々、連絡が入るようになり、いよいよ緑友会も全国業界に認知された感もあり、日取りの調整も重要な要素となってきた。そうした折り、一方で、業界に新しい青年層組織ができつつあり、全印工連の松島会長、野村副会長との折衝が始まった。

最初の会談では、松島会長は緑友会を全印工連の傘下組織に組入れ、「全国青年印刷人」の構想を考えておられたようだが、「緑友会は上部構造を持たない各グループ対等で、立場、自由を尊重する研さんの会」の理念を説明し、理解していただいた。

全国青年印刷人協議会というものが本格的に組織化され、新しい業界の流れに対して緑友会の考え方はどうあるべきかということをしつかり受けとめ、対応していくことになった。全国の数工組で緑友会と全青協との関係の諸問題が出はじめ、対応を余儀なくされた。次期の竹田会長時代に本格化し、収拾しながら協調路線を進めた。それについても、新加入の勧誘を積極的に行っていて良かったと思った。

「緑友の心」

四十年以上の歴史を築き、行事運営しながら、しかもメンバーが増えて続いてきた会は他に類を見ない。それは継続に値する意義、価値があったからである。緑友会の性格は「人の上に人を作らず、対等自由を尊重する」ことであり、緑友会の精神は「謙虚にして高邁な精神のもとに人格陶冶を計つ

ていこう」という崇高なものである。平たくいうと緑友の原点は「ふれあって人間形成」をしていこうということである。これを具現化するのに緑友の広場では三つの要素が生れる。その一つは「友愛・奉仕」。朋あり遠方より来る、また楽しからずや」という心境。大会、総会、セミナーなどのお世話は、この友情や奉仕の精神がないとできない。この二つ目は「チャレンジ・トレーニング」色んな場面で色んな役回りを担当し経験を積むことで研さん。三つ目は「情感・触発」。友情の高まりから情感が生れ、触れ合いの中から感動が沸き、触発される。本音のつき合いをやつてこそ、芽生える絆である。

この三要素を凝縮して本質を見ると一つになる。それは「感性」「緑友は感性を磨く場」となる。

「同期の桜」に感謝

二年間の緑友会長就任中に支援・協力していただいた仲間は数多くにのぼり、就任前後を入れると計り知れないくらい先輩や、仲間の援護で支えられてきたことに、改めて気づく。

ここでご尽力をいただいた方々の名前をすべて記してお礼を申し上げたく思うが、紙面に限りがあり、代表して執行部のパートナー名を列記させていただき、深謝合掌の気持ちとしたい。

「個人指名常任幹事では前会長の飯田範夫（長野）、札幌大会主管の竹内一博、緑友だよりの担当の中村勝亮（千代田）、次期会長の竹田光宏（名古屋）、九州グループ新加入尽力の古賀健一（福岡）、書記幹事で、綿密な議事録を残した小林直（印刷同友会）、会計幹事で総務一切を果した逸見節夫（青樹会）、グループ指名常任幹事では庄子義（仙台）、新潟大会主管の渋谷義徳、村上 智（新潟）、名声高い茨

城大会の城戸憲次（茨城）、名簿制作の大役を果した利根川政明（文京）、久永信春（文京）、飯尾 寛（岐阜）、伊藤 孟（岐阜）、大阪セミナー担当の山口博司、中川 仁（広島）、今は亡き花田佳雄（広島）、下関総会主管の長阿弥晁彦、銘々各氏。会計監査では松本孝昭（神戸）、大城新正（沖繩）両氏。この他、当時グループ長の皆さんを含め、そうそうたるメンバーのご支援を得て、恙なく、大任を果し終えたことに念いをいたし、無上の感謝を込め、会長担当時代の拙稿を閉じたい。合掌再拝。

1983・4～1985・4

第二七回 金沢総会あいさつ より

竹田 光宏 第十五代会長

新緑が美しく、若芽の力強い息吹を感じる春のさなか、本日、ここ金沢の地において、全国各グループの役員、ならびに指導的立場にある皆様方のご参集を賜わり、第二七回総会を開催出来ますことに心からお礼を申し上げます。

日本の経済は、いよいよ回復期を迎え、各種の予測におきましても、上場企業は増収増益の期待感が大きい状況にあります。

国際経済の中にあっても、欧米各国との貿易摩擦等のマイナス要因はあるものの、貿易収支は着実に黒字を増し、経済大国の名を一層大きくしています。

しかし、私どもの印刷業界は第二次産業革命と言われる時代にあつて、エレクトロニクスの高度な発達のもと、成熟社会への移行とともに、高度情報社会への移行と大きな地殻変動の時期を迎えています。

私どもは、この大きな波のウネリに身を委ねるのではなく、新時代の新しい印刷業の姿と、いっそうの

発展を積極的に求めなくてはならないかと存じます。

変革期であればこそ、新たな飛躍のチャンスと考えられなくもありません。

この様な時期、全国印刷緑友会のリーダーの方々にお集り戴き、各々のグループの発展と活性化のための情報を交換して戴くのみでなく、印刷ならびに印刷関連業界がこの変革期を乗り切り、新たな発展への討議を積み重ねて戴くことは、誠に大切であり、意義深いものと存じます。

昨年、私は「グループと個の活性化」そして新しい時代への対応として、「ニューリーダーシップの模索」を申し上げます。困難な時代であればこそ、自らのグループの活性化を図り、困難に挑戦し、自らの「道」を切り開かなくてはならないと思うからです。本年は更に、「英智の結集」を申し上げます。全国の緑友の友がこの緑友の輪の中で、変化の時代への対応として、模索から行動へと英智の結集を図り得るならば、私ども各々の地域で、如何なる変化に出会おうとも、充分にその困難を克服し生き残れるものと信じます。

そのためにも、本日ここにお集り戴いた皆様は、各々の地域のグループのリーダーとしての自覚を一層強めて戴き、この緑友のよりいっそうの発展、充実が、ひいては各々のグループの、企業の活性化に寄与し、次なる発展への糧となることをご理解戴き、この二日間が意義のある「討議」と「語り合い」の場になりますよう、心から願い又ご協力をお願いする次第です。

最後に金沢青年印刷人クラブの皆様のご尽力と創意に満ちた総会を主管戴きましたことに敬意を表し、衷心より感謝申し上げます。

1985・4～1987・4

第三十回福井総会あいさつ より

古賀 健一 第十六代会長

新緑が目には痛いような清々しい季節の中、本日ここ日本海を望む福井にて、全国各グループの役員、及びグループの指導的立場におられる会員諸兄、又、地元印刷業界の重鎮であられる先輩各位、そして日頃から御指導いただいている業界報道各社など、多数の人々に御参集賜り、第三十回の全国印刷緑友会総会をかくも盛大に行えますことに対し、心より感謝申し上げます。本当に有難うございます。

今総会は三十回という緑友総会の歴史上も記念すべき節目の会であり、多くの業界、関連各位の注目しておられる総会ではないかと私自身もいささか緊張している次第であります。

と申し上げますのも、日本全体を取り巻いています経済や政治・文化・社会情勢に至る未曾有の変革が大きく言えば世界中を巻き込んで進行していると言っても過言では無いと思えるからです。

我々印刷業界においても情報化社会、各種OA化、又、為替相場一ドル一三〇円時代を迎え、来年度には百円まで有り得るとも懸念される極度の円高など、我々業界を挟撃する悪い条件も山のように

在ります。

その中で、我々若い緑友会員は将来の事を考察し、多様な準備を進め、着実に行動に移して行かなければなりません。

三十年の緑友の歴史は、その時代時代を生き抜き、今現在我々が享受している企業や業界発展を成し遂げるために苦勞を重ねられた先輩各位の歴史でもあったと考えられます。

更なる発展の為に今我々は、何をしなければならないかを、今期八月一日の三十周年記念東京大会にむけて発動する総会でなければならぬと確信しております。

我々にはその使命が課せられている、その運命にある、と思わずにはいられません。

そのためにも、今日ここに列席されておられるグループリーダーの責任は重大であるという目覚めをさらに高めていただき、そしてその自覚を各グループの多くの会員に広めて戴きたいと懇願するものであります。

今総会を通じて各位が持つておられる自信や不安を情報交換し、緑友の基本理念の一つでもある親睦を深めて戴ければ幸いです。

参加各位の決意と情熱を期待し、今総会が実のある総会であることを希望し、最後になりましたが綿密な準備と、心暖まる総会主管に奔走されました福井県印刷青年部会員諸兄に深甚なる尊敬の念と感謝を申し上げます。

1987・4～1989・4

第三二回青森総会にあたって より

竹内 一博 第十七代会長

長い冬の眠りから、草や木は鮮やかにその色を変え、陸奥に春を告げております。全国印刷緑友会第三二回定期総会の開催に当り、遠隔地にも拘らず、多数のご参加を戴き、開催できます事を心から御礼感謝を申し上げます。

さて、私は本総会をもって任期を終了し、会長の重責を去ることとなりました。任期二年間の同志の暖かいご支援、ご協力そして、心暖かい友情の数々に感激いたしております。もとより、この能力、指導力もない私ではありましたが、常任幹事、グループ長、先輩会長のご指導とお力添えにより、不十分ではありましたが力一杯動き廻る事ができました。ご承知の通り、この任期中は創立三十周年東京大会という輝かしき式典がスタートであり、身の引きしまる思いであり、緊張の出発でありました。内外共に多難なこの時期を全会員の協力なくしては運営できないはずでです。しかし東京大会は三九グループ八五〇名を越えるメンバーが集い、盛大に式典・懇親会を催し、印刷界に緑友の存在と若きパ

ワーを示すことができ、又緑友のPRができた事は大きな収穫であり、三十年の歴史と重み、そして伝統の良さをしみじみと感じたものです。

私は会長スローガンに三W、即ちヘッドワーク、ネットワーク、チームワークを掲げました。会員同志が単に参加するというだけでなく、目的、目標をもつての参加であり、自己の意識改革を緑友会に行つてするのだという貪欲なまでの参加意識がなければ時と金を掛けても意味のない事を訴え続け参りました。本音で語り、少しでも経営の糧となる新鮮なる情報提供こそが肝要であるとの考えから、佐賀の全国大会では宮地若楠会会長の強力なご支援を得て、会員講師を導入し、生々しい経営と営業の体験発表会を画期的な成果と好評を博して、大会プログラムの中で開催できました事は一つの方向転換であったと確信するものです。

又、名古屋セミナーは、今までメンバーだけが拝聴した形式を改め広く門戸を開放し、業界人にも均等に機会を与えるべきとの見解のもと、百二十名の一般参加者があつた事は感激の極みでありました。

大会、総会、セミナー、それぞれに充実した内容であり、お世話を戴いた開催地の会長及び実行委員のメンバーに厚く御礼申し上げます。そしてこの貴重な経験と体験こそがグループの活性化に結びつき発展、成長していくことが何よりも重要な事であります。緑友会はこの学ぶ姿勢と会を前進させようという意欲があれば永遠に発展すると信じるものです。

三十周年という節目は各グループにとつても記念式典が目白押しであり、長野緑友会三十周年、神奈川正和会三十周年、文京緑友会三十周年、別府青年部十五周年、千代田印刷人新世会二十周年、岐

阜翠陽クラブ三十周年の各周年事業に参加でき、各会の実状、歴史、運営等を知り、大変参考になりました。目の廻るような忙しい日程の連続でありましたが病気にもならず参加できた事に感謝いたしております。

最後になりましたが、次年度会長は茨城緑友会の城戸憲次君が選出される予定です。人格円満、筋金入りの緑友の闘士です。私同様のご協力とご支援を城戸君にもお寄せ戴きたくお願い申し上げます。本総会開催にご準備いただきました青森県印刷青年経営者会議のメンバーに会を代表して御礼申し上げます。ご挨拶いたします。

1989・4～1991・4

緑友の思い出

城戸 憲次 第十八代会長

四十周年誌の中に歴代会長の思い出話をとのお話を頂きましたが、十年をも前のことで失念している事も多く、頂いた資料を元に思いつくまま自分の頭の中も整理しながら、時間の経過にあわせて書かせて頂きたいと思えます。

さて、私が会長をお引き受けしたのは、第三二回青森総会からでしたが、その頃の時代背景と印刷業界の様子をこの総会に祝辞をくださった青森県知事がその中に書いておりますので、抜粋させていただきます。

「わが国の産業構造は、円高の定着、貿易摩擦など国際的な経済環境の変化の中で、これまでの輸出依存型の産業から内需主導型の産業構造に大きく転換を求められております。このような国内市場の拡大、消費者ニーズの多様化・高度化は、新たな市場分野を生み出しており、企業におきましては機動性・柔軟性に富んだ対応が求められております。

印刷業界におきましても、印刷技術の急速な進歩、印刷ニーズの多様化・高度化が急速に進んでおりますが、このような状況の中で印刷業界が更なる発展を遂げていくためには、環境の変化に的確に対応し、経営の近代化、効率化に積極的に取り組むことが重要となっております。一方、近年の高度情報社会の進展に伴い、情報産業の一翼を担う印刷業界の役割は、今後一層高まるものと期待されているところでもあります。」この様な中での船出でした。会長就任と同時にスローガンを心と心のつながりを意味する「ハーティークミユニケーション」とし、五つの具体案をもってスタートしました。このことについて「緑友NO.七十」のごあいさつに書いています。

「さて私は、この二年の在任中に次のことをやりたいと思っています。

一、平成元年に当り、緑友会の原点を再確認する。

昭和という、長く厳しく、しかも激しい変化の時代が終りを告げ、平成とい

う新たな時代の始まりに当り、新たな針路を見出していくためにも、緑友

会創設時の心（原点）を会員の皆さんに知って頂きたいと思うのです。

二、緑友だよりの充実を図る。

緑友会だよりが会員の皆さんの情報誌になり得ないか、と考えました。その

ためには、皆さんに投稿していただかなければなりません。この二年間は、

千代田印刷人新世会の皆さんが担当です。担当会、或いは、常任幹事から投

稿の依頼がありましたら全面的なご協力を各地にお願い致します。

三、対外的に緑友会のPRを行う。

このために緑友会の総合パンフを作成する。

四、会員の増強に努めると共に、未加入グループへの積極的なアプローチを行う。

現在、全国印刷緑友会には、三九グループが加入していますが、未加入県も

多く、各地区で活躍している青年グループも多々有ります。それらのグループ

に対し、加入の呼び掛けの出来るようなパンフレットを作りたいと思います。

一グループでも一人でも多くの仲間と知り合い、話し合うことができるように、

皆さんからの情報をお待ちしています。

五、OB会発足の再検討をする。

緑友OB会という堅苦しい形ではなく、要するに先輩にもお集り頂き、話を聞

かせて頂きたいということです。そして、現役のその一時期、緑友に情熱を傾

けた方々に旧交を温めて頂けるような、そんな場作りをしたいと考えています。

いずれ、皆さんもそれぞれの地区のOBという形で現役を去る時がくると思

います。

そのとき、大会に行けばあの人に会える、あの方の話が聞ける、その様な場作

りができれば本当に嬉しく思うのです。

以上のような事業計画は、緑友会が心と心で繋がっているからこそ、三一年もの長い間続いて来たのだという、私の確信の上成り立っています。緑友会に参加し、多くの仲間と知り合い、語り合い、

そこに友情が生まれる。この二年間で、皆さんの仲間作りのお手伝いが少しでもできたら、私は幸せだと思っています。会員の皆様と共に、前進していける緑友会を目指して努力致しますので、皆様のご協力とご鞭撻をお願い致します。

というものでした。この総会の思い出は「爽やかにリフレッシュ in とわだ」と銘打って行われましたが、雨の中の記念撮影、懇親会の席をホテルのロビーで行い、ねぶたのはねと姿で踊ったことです。手前みその話を、いきなり書くことになってしまいますが、この総会の後、我が茨城印刷緑友会の創立三十周年記念大会を、大洗に於いて開催しました。この時の中村守利元会長の記念講演が、後々まで緑友会の心として語りつがれているのを後輩から聞かされ、中村氏に畏敬の念を禁じえませ

ん。

第三二回大会は、金沢でした。「いらっし みまっし よるまっし 百万石の城下町 金沢へ」と題して開かれたこの大会では常任幹事で書記担当をしていた佐賀の宮地敏昭氏に「情報産業をめざして百億円への挑戦」と題した講演をいただき仲間として大いに刺激されたことです。そしてもう一つ「大牟田印刷共同組合青年部」が緑友の仲間に加わり、「能登半島印刷人クラブ」がオブザーバー参加したことです。この頃は新規加入がさかんな頃で、この後十月に北海道旭川に緑友会の説明をしてお邪魔しました。

第三三回東京セミナーは、初めての試みとして東京都印刷工業組合、東京青年印刷人協議会との協賛という形でおこなわれました。手作りで語り合おう、ハンドメイドであなたが主役、全員参加で自

己トレーニングと題して、第一講 カネボウ化粧品品の古島町子氏、第二講 松村礼二氏の講演がありその後、各テーブルに分かれてディスカッションをするという形で行われました。

会長二年目の第三三回総会は愛媛松山で開催されました。この第三三期の事業計画は

- 一、各グループ間の交流を高め、ネットワーク作りを促進する。
- 二、緑友だよりの充実をはかる。
- 三、対外的に緑友会のPRを行なう。
- 四、緑友会の増強と未加入グループに対するアプローチを強く行なう。

以上四件でした。この総会でも会費値上げという大きな議題を上程したのですが、愛媛印刷人青年会のかもしだすアットホームな心配りに無事承認されることが出来ました。個人的な思い出話になってしまいますが、実は私の父は愛媛出身という縁もあり、緑友会で全国を渡り歩いた中で、この時たった一度だけ父母を連れて行ったのがこの愛媛総会でした。事業計画にもあった緑友だよりの充実ということで、この愛媛総会の後からは名称を「緑友」から「FRIEND of GREEN」となり「横組」から「タテ組」となりました。この時の方向性がフレンズオブグリーン NO.七三の最後に載っていますので、そのまま記載します。

「現状の緑友会だよりは、セミナー・大会・総会の報告などがメインとなっておりますが、今後の方向性としては左記の記事を入れて、リニューアルなものにしたいと考えています。是非、皆様方の寄稿をお願い致します。

- 一、現状のものはすべて入れる。

二、参加グループ関連記事

グループ紹介↓働く人々紹介

近況報告

最新ニュース

活性化のための具体例

情報交換

三、参加グループ内の企業記事

企業紹介

革新的、拡印刷を実行している企業の情報

情報交換

四、紙上勉強会記事

税務、労務問題

人材確保、あの手この手

印刷業の問題と解決事例

最新印刷機械ニュース

常任幹事会レポート（千代田印刷人新世会）

というものでした。この事については、色々な問題も起こったのですが、それよりよりよくしたいという思いがさせたとお考え下さい。

第三三回大会は「日本のへそ、名古屋へようこそ」をキャッチフレーズに開催されました。寸劇「ある印刷会社の風景」は今まで講演慣れしていた我々に、違う角度からの問題提起をしてくれたと思います。世界のエレキギターメーカーカーフジゲン（株）横内祐一郎社長の世界一のギター作りの話、「ハガキ道に生きる」坂田成美氏の話と実に盛りだくさんの大会でした。

この頃の資料やパンフレットを見ていると、その時代背景がよく分かります。フレンズオブグリーンNO.七四の私の挨拶文の中に書いています。

「さて、平成三年を迎え、激動の年が始まったとしか言いようがありません。全世界の平和の祈りもむなしく、湾岸戦争が始まってしまいました。長期化するのか短くて終わるのか？不透明の中で私達の業界はどう生きていけばよいのでしょうか？人手不足の深刻化、物価の上昇、原油価格の高騰、労働時間の短縮、パルプによる環境問題と紙の価格問題など、数多くの難題が山積みしているのが現状であります。」会長になった時の状況とまた違ってきていますし、今から比べると随分楽な時代であった気がしますが、この頃はこの頃で色々な問題があったようです。この年七月に、九州山口青年印刷人大会（「下関青年印刷人緑友会の主管」、八月京阪神合同例会（京都青年印刷人月曜会、大阪印刷人クラブ、神戸印刷若人会）の大阪湾ナイトクルージングと参加してきました。賑やかな時代でした。第二四回神戸セミナーは、神戸印刷若人会の熱意を感じさせるセミナーでした。モラールサーベイと呼ばれる一年がかりでのアンケートを元にディスカッションをするというものでした。

第二講の宇野正美氏は、この時湾岸戦争をふまえての話でしたが、今日の同時多発テロにまで関わってくる話を、この時されていたと思うとまさに最先端の話であったと思います。

第三四回札幌総会は、金沢の白井秀幸会長の稿にゆだねるところですが、白井会長に変わる直前第三号議案で会則変更を上程しました。フレンズオブグリーンNO.七六には、下の様に解説されています。

「この会則変更は『ガラス張りの運営』を意図しており、一年前の松山での常任幹事会より検討されていたものです。何のためにブロック担当を設けるのか、上から押し付けるのは緑友会の精神に反するのではないか、イベント担当も同様であり、常任幹事も少ない方が良いのではないかと意見がありました。担当幹事についても、すぐに大会などを受けるのは困難であり、前年より常任幹事に出席してもらった方が運営上都合が良いと考えていると説明、承認されました。」

前年の愛媛での会費値上げに続き、二年連続で会則の変更をしました。細かい部分では、まだまだ変化していた頃の緑友会でした。私の年度で行ったもう一つの大きな動きがありました。緑友会の総合パンフレットの作成です。A判タテ長サイズのこのパンフレットは、「謙虚にして高邁な精神のもとに研鑽していく」という原点、そして三つの綱領に始まり、歴史及び概要、会則などを紹介しています。全国の未加入グループへ行く時は必ず持つていけるようになりました。

最後になりましたが、当時の役員を記載しておきます。

前会長 竹内一博氏（札幌青年印刷人の会）、総務 利根川政明氏（文京緑友会）、会計 白井秀幸氏（金沢青年印刷人クラブ）、書記 宮地敏昭氏（佐賀県印刷人若楠会）、会計監査 藤井健氏（広島青年印刷研究会）、会計監査 糸洲昇氏（沖縄県印刷若潮会）、個人指名常任幹事 榎本則義氏（印刷同友会）、個人指名常任幹事 長田照久氏（やまなし印刷若人会）、個人指名常任幹事 岡田吉生氏

（名古屋而立会）、グループ指名常任幹事 長尾良宣氏（青森県青年経営者会議）、グループ指名常任幹事 菱沼正幸氏（仙台刷親会）、斉田精一氏（千代田印刷人新世会）、川上彰久氏（神奈川正和会）、増田富治雄氏（長野青年印刷人緑友会）、井奈波博之氏（ぎふ印刷翠陽クラブ）、矢谷猛氏（大阪青年印刷人クラブ）、岡田浩治氏（愛媛印刷人青年会）、大隈信一郎氏（福岡印刷若葉会）、笠木信夫氏（大分印刷若梅会）、米倉伸三氏（千代田印刷人新世会）

資料を見ていると、当時のことを少しずつ思い出してきますが、一つ一つの事柄より、その時出会った全国の仲間の笑顔が思いおこされます。まさに、「ハーティコミュニケーション」の時でした。

1991・4～1993・4

第三五回全国印刷緑友会総会 より

白井 秀幸 第十九代会長

新緑映えるさわやかな五月、七つの流れに水が美しい街「広島」の地で、第三五回全国印刷緑友会総会が開催できますことをうれしく思います。これも全国各グループの役員及びグループの指導的立場におられる会員諸兄、また地元印刷業界の先輩各位、そして毎回ご協力をいただいている業界報道各社を含めた多数の方々にご参集いただいた賜もの心より感謝と御礼を申し上げます。

さて、私は昨年五月の札幌総会において会長職をお引き受けして以来、多くの方々の暖かい友情とご協力により、無事一年間を務めさせていただきました。常任幹事の方々、グループ長の皆さんには特にお力添えを賜わりありがとうございます。今、不透明な景況をむかえ、厳しい環境となりましたが、今こそ緑友の仲間は、英知を集め、同志的結合をはかるときではないでしょうか。

本年は会員名簿が六月に完成し、ネットワークのベースとしての活用が期待されます。素晴らしい名簿の誕生を心待ちにしております。

本総会及びトーキングタイムの中で、印刷の今日を、そして未来を悩みや夢とともに大いに語り合います。そして緑友のすばらしさを、さらに見つけて下さい。お願いします。

最後に、今総会を主管して下さった広島青年印刷研究会のメンバーの皆様にご心より感謝し、御礼を申しあげ挨拶いたします。

総務幹事 長田照久

私が所属するやまなし印刷若人会は第十四代中村守利会長の時に、お誘いを受け入会いたしました。設立から数年たっており、県内では結構活発な活動をしていました。当時、全国に緑友会のような組織があるという話は聞いていたのですが、詳しい情報が入って来なかつたため、接する機会がありませんでした。そんな折、ちょうど名古屋でセミナーが開催されるというので、一度見に行ってみようということになりました。セミナーの内容は覚えていないのですが、その時の緑友の雰囲気から受けた感動は二十年近くたった今でも忘れられません。翌年の長野総会に正式に入会して以来、可能な限りすべてのイベントに参加するように努め、全国の仲間と友情、親睦を深めました。

山梨が入会して五年目に総会をお引き受けすることになり、グループ指名の形で常任幹事を山梨でも初めて受けることになりました。若人会の中では私が一番参加回数が多いということで、常任幹事を押し付けられてしまいましたが、幹事会にもあまり出席せず、他グループもほとんど訪問しない、なんとも役に立たない常任でした。

常任幹事としては竹内会長の時から始まり、城戸会長、白井会長、利根川会長と通算八年間も在籍していたこととなりますが、もっと早い時期に後任に席を譲るべきだったと反省しています。

第三四回札幌総会（平成三年五月二十五日、札幌青年印刷人の会）

この総会において、金沢青年印刷人クラブの白井秀幸氏が第十九代会長に選ばれました。そして白井会長の抱持ちとして、私が総務幹事を仰せつかることになりました。なにもしない常任幹事で打ち過ぎしてきた私としては総務幹事など元より務まるわけがないのですが、先輩常任の皆さんのご指導におすがりする思いでお引き受けすることにしました。

白井会長は就任にあたり次のような所信を述べられています。

「印刷産業の将来見通しには明るいものがあります。我々の目の前には多くのビジネスチャンスが現れてくると思います。そのチャンスをしつかりと掴み、実のあるものにするためにも、緑友の間は、より賢明な事業経営者を目指さなければなりません。この基本方針を具現化して、緑友会をさらに活性化させるために、次の三つの目標を掲げたいと思います。」

①イノベーション作り

知性、創造性を高め、自己革新力を身につけて、変化に適應できる能力作りを目指そう。

②ネットワーク作り

各グループ間の交流のほかに、経営を語り合える企業間ネットワーク、例えば、短納期、コストダウンに対応できるような企業間ネットワーク作りを目指そう。

③マーケット作り

社会変革や技術革新から、新しい多くのビジネスチャンスが出現する。その新しいマーケットに適應できる情報力、順応力を身につけて、印刷産業のさらなる拡大に努力しよう。

このようなテーマを掲げて、白井内閣がスタート致しました。白井年度の二年間の活動内容について、総務幹事として会長の側でお手伝いさせていただいた常任幹事会とグループ長会議の模様に重点を置いて、当時の記録をひも解きながらお話ししたいと思います。

第一回グループ長・常任合同会議（平成三年五月二十五日、札幌総会のあと）

白井会長の施政方針が発表され、イノベーション作り、ネットワーク作り、マーケット作りの目標に向かって、二年間の運営に対する常任幹事及びグループ長の協力をお願いしました。

第一回常任幹事会（平成三年七月十二日、東京の千代田マシナリー会議室にて）

白井会長の掲げる三つのテーマについて、具体的にどのように進めていったらいいのか話し合い、新しく作成する会員名簿にも是非それを反映していこうということになりました。名簿作成は常任幹事の名古屋而立会の西川誠也さんと岡田吉生さんが担当することになりました。全会員に一冊づつ割り当て、各県の印刷工業組合には進呈する。二千冊作成し、関連業者には積極的に購入してもらう。またこの時、緑友会の事務局設置の提案が出されましたが、もう少し会員の意見を聞いて検討した方が

いいということでも継続審議となりました。未加入グループの勧誘については、緑友会は、全青協やJ C印刷部会とは、組織も異なり、三者三様の活動内容であることを踏まえた上で、もっと積極的に緑友の広報活動を行い、アプローチしていく必要性がある。十月の沖縄大会は、是非、白井会長の唱えるテーマを盛り込んだ形で実施してもらいたい旨の希望が出されました。

第三四回沖縄大会（平成三年十月十八日、沖縄印刷若潮会）

記念講演では水中写真家の中村征夫氏を迎え、カメラを通して見る海中のすばらしさと環境の変化について、中村氏独自の海の世界観を語っていただきました。講演後に設けられた「ゆんたくタイム」は、グループディスカッションの形をとり、白井会長の掲げる目標のひとつである「イノベーション作り」をテーマにして、変化に適応する能力を身に付けるにはどうすべきかについて大いに議論を交わしました。経営力をアップするには？ 社員の教育体制は？ 技術革新への対応は？ などなどディスカッションの中から何かヒントをつかみとった会員も多かったことでしょう。

第二回グループ長・常任合同会議（平成三年十月十九日、沖縄大会の翌日）

未加入グループの状況について、東京では二三支部のうち三支部しか入会していないので、もっと広く声をかけてはどうか。但し、東京の緑友会にならないように配慮する必要がある。山青会が入会する意向を示しているので、是非アプローチしていただきたい。また、東北地区の会員が少ないので、もっと勧誘に力を入れていきたい。

第二回常任幹事会（平成三年十一月十日、大分の「ホテルくれべ」にて）

テーマの一つであるネットワーク作りについては、白井会長の任期中にある程度の構築をしたい、具体的にビジネスに結びつけた形にしたい。事務局の件は、従来通り会長の会社を事務局とすることで落ち着いた。ただし対外的にも、また会員からの問い合わせなどの事務的な面からも必要性が認められるので、今後も検討していく。

第二五回岐阜セミナー（平成四年二月八日、岐阜印刷翠陽クラブ）

講演会は当時、NHKの大河ドラマで全国的にブームとなった織田信長に造詣の深い、津本 陽氏に依頼し、「今、信長に学ぶもの」というテーマで、信長の生きざまを通して我々の進むべき道について話を聞きました。そのあとのグループディスカッションでは、緑友会のネットワーク作り、仲間作りについて、また今、我々を取り巻いている諸問題について熱心な議論を繰り広げました。

第三回常任幹事会（平成四年三月十四日、総会の主管を控えている広島において）

ネットワーク作りについての活発な意見交換が行われました。グループディスカッションは良い試みではあるが、テーブルリーダーによって話の内容が変わってしまう。ディスカッションのテーマに無理やりネットワークを持つてくるのはどうか。ネットワーク作りは結果が問題ではなく、個々がオープンになって話をするのが大切。緑友は道場であり、常任幹事はそのための場作りをする。会

員名簿の活用方法を考える必要がある。白井会長からは、緑友会だからできることは何か、ヒューマンリレーションを基本に、広島総会ではネットワーク作りについてみんなで話し合ってもらいたい、また東京セミナーにおいてさらなる次のステップを考えて行きたい、という希望が出されました。

第三五回広島総会（平成四年五月九日、広島青年印刷研究会）

三月の常任幹事会で話し合われたように、緑友の仲間としてのネットワーク作りについて、二時間を越える「トーキングタイム」の中で、本音を語り、悩みを打ち明けて、一人ひとりが熱心に思いを語り合いました。総会はとことん話し合いをする場であるという緑友の基本に返り、ディスカッションにじっくりと時間をかけた大変有意義な総会になりました。

第一回グループ長・常任合同会議（平成四年五月九日、広島にて）

二年目を迎えた白井年度の最初のグループ長会議。グループディスカッションのテーマについて、大会はお祭りだから、むずかしい討論は必要ではないかという意見がありました。参加者はただ遊びに来ているのではない、何か得るものを見つけないか、みんなが意見を言い合える場作りをしてほしい、と言う意見が多かった。

第一回常任幹事会（平成四年七月十日、東京の明治記念館にて）

次期会長及び役員推薦について、それぞれの常任から、自グループ内での任期との兼ね合いを踏まえ

て話し合われました。次期会長の選出についての取り決めは、前年度七月の常任幹事会で現会長が次期会長を推薦し、幹事会の承認を得る。次回のグループ長会議に諮問して承認を得て、改選時の総会において承認を得て決定する、という流れになっています。今常任会議において、文京緑友会の利根川政明氏を次期会長に推薦し、満場一致で承認されました。

第三五回茨城大会（平成四年九月二六日、茨城印刷緑友会）

城戸前会長の任期中に、全国の会員から寄せられた熱い友情に報いたいという気持ちを込めて、「語り合い Meと！水戸」というテーマを掲げ、ハートフルなすばらしい語り合いの場を提供してくれた大会でした。

第二回グループ長・常任合同会議（平成四年九月二七日、茨城にて）

広島総会は登録人員は多かったが、参加グループ数が少なかったという反省。会員名簿は原稿がなかなかそろわず苦戦しているようです。次期会長推薦については、もっと早い段階で発表すべきだと言う意見が出されたが、現状の常任幹事会、グループ長会議の回数、時間ではこれが精一杯である。そのため、もう少しグループ長会議の機会を増やしたかどうかという提案がされました。また、緑友会の三つのイベントの位置づけについて、改めて再認識してほしい、総会もセミナーも大会と同じように派手になってはいないか。これについて会長から、「主管するグループの好意によってどうしても設営が大きくなってしまいが、それぞれの位置づけをきちんと考えていたが、あくまでも主管グ

ループの主体性にお任せしたい。」また、利根川次期会長からはグループ長会議を一度じっくり時間をかけて設営してみたいという提案がされました。

第二回常任幹事会（平成四年十一月二二日、仙台の奥座敷、作並温泉にて）

東北方面をもっと強化する。四国、山陰、山陽地方でも新規グループの増強をはかりたい。次の十年につながるように若い人にうまくバトンタッチしていきたい。年三回しか出られないので、緑友についての話ばかりでなく、もっとお互いに触れ合う場になってほしい。参加することがグループの活性化につながるようにしたい。それが全国緑友の活性化の基本となる。会費の高い、安いではなく参加して良かったなあというイベントにしたい。OBにももっと積極的に声を掛けて参加を促したい。

第二六回東京セミナー（平成五年二月十三日、在京九グループ）

横浜の中華街において開催。手作りセミナーを目指し、分科会形式をとって、質を落とさないで、登録費を安くする方向で行われました。セミナーは常任幹事の主催なので、常任幹事会でセミナーのテーマの方向付けをきちんと行ない、常任がもっと意識をもってセミナーのPRをしてもらいたいという要望が出されました。

最後の常任幹事会（平成五年三月十三日、白井会長のお膝元である金沢において）

大分総会の準備も滞りなく進められ、トーキングタイムでは、常任幹事がテーブルリーダーを務め、各グループの活性化について話し合う。ねぶた祭り開催中の青森大会も宿泊、交通等支障なく進められている。会員名簿も遅れてはいるが、なんとか大分総会までには発行できそうな状況になりました。会議後の懇親会では白井会長の二年間にわたるご苦勞をねぎらい、皆で酒を酌み交わしました。

こうして白井年度の二年間の事業も終わりに近づき、平成五年五月十五日の第三六回大分総会において、利根川次期会長にバトンタッチされることになりました。私はこのあとも利根川会長のもとで会計幹事としてさらに二年間常任幹事を仰せつかることになり、常任の皆さんにまたまたご迷惑をお掛けすることになる訳ですが、最後に白井会長のご挨拶を載せておきます。

「札幌総会で緑友会会長の重任を仰せつかり、己れの浅学非才も省みず、ともかくがんばってみようという気持ちだけを頼りにお引き受けし、二年間なんとか終えることができました。これも偏に、城戸前会長をはじめ、常任幹事のあたたかいご支援があればこそと心から感謝申し上げます。

この二年間は不況がどんどん進み、グループの中には、リーダー役がいなくなったり、総会にも出席していただけないところ等が増加し、休眠状態のグループもいくつか発生して、グループの活性化が急務となってきました。今までもグループの活性化の方法として常任幹事会をその地で開催、会員の方々と交流を図り、できればイベントを引き受けていただき、活性化の一助とさせていただいて来ました。しかし、これからはもっと強力なバックアップ、強いネットワークが必要になってくると思います。

会員名簿の作成においても同じ現象が発生しました。活性化されていないグループからの原稿が集まらず、予定より約一年遅れの完成となりました。何としても全グループが揃った名簿を作ろうと、西川、岡田両常任幹事に根気よくプッシュしていただきましたが、良い結果が得られず、心残りとなっております。

しかし、今までと一味違った会員名簿をお届けでき、ネットワークの一助になれば幸いです。最後にになりましたが、この二年間、へたな挨拶や、非常識な運営にもかかわらず、変わらぬ友情、ご支援をくださいました常任幹事、グループ長をはじめ、会員各位の皆様には厚く御礼を申し上げ退任のご挨拶とさせていただきます。」

記録と記憶をたどりながら、だらだらと書いてまいりましたが、白井会長のもとで総務幹事として、二年間なんとか務めることができましたのも、ひとえに同じ常任幹事の皆様の暖かい友情と力強い支えがあったからこそと、心から感謝しております。正に緑友の仲間としてのお付き合いをさせていただきました。本当にありがとうございました。

この四十周年記念誌を発行するにあたり、最後まで粘り強くご尽力いただいた松浦委員長、そして茨城の小倉克夫さんには心から敬意を表します。お疲れ様でした。

1993・4～1995・4

全国印刷緑友会四十年誌に寄せて

利根川 政明 第二代会長

まずもって四十年記念誌編纂委員会、松浦委員長を始め、委員会の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。二十年誌「道程」の発行以来二十年振りに記念誌が発行されますことに正直言って安堵をしております。それは、二十年誌が先輩諸氏によって素晴らしい記念誌が発行されたからです。緑友会創設のご苦労を始め、まさしく緑友会の歩みが詳細に渡り記してあります。私も会長任期中、各グループ訪問時にはこの二十年誌を必ず持たせて頂きました。お蔭様でチャーターメンバーでした郡山凸凹クラブが復帰してくれたことは本当に嬉しく、新たに入会して頂いた秋田県印刷経営青年部会、徳島一二会の入会への説得にはこの二十年誌があったからこそと痛感しております。この二十年誌は緑友会のバイブルです。そのあとを継ぐ四十年誌が、これからの緑友の皆様にも少しでもお役に立てば幸いと念じております。

第二十代の会長就任時に提唱したテーマは、「グループの活性化」です。

それは第十四代中村会長期に初めて常任幹事の末席を汚して以来、竹田会長、古賀会長、竹内会長、城戸会長、そして白井会長と六期十二年常任幹事を務め多くの会長の緑友会運営を手伝わせて頂き研鑽させてもらいました。その結果緑友会は中村会長がいつも語っておられた「縦の組織ではない、あくまでも連係組織である。どのグループも平等の立場です」という言葉はいつも私の心に残っておりました。緑友会が活性化するには、当然そこに参加する各グループの活性化がなければ緑友会全体の活性化はないと考え、そこで「グループの活性化」を提唱したわけです。

平成五年五月十五日に開催されました大分総会でのことです。私は、「緑友会は、ふれあい・感性・情感満ちた場から、自ら求め、会得し、企業、社会のエネルギーを培うことの共感仲間集団であり、自己実現の喜びに向かって自己革新、研鑽を積む場です」と訴えました。これは、各グループにも言えるものであり、その大きな輪が全国印刷緑友会です。各グループの活性化が全国緑友の源になるわけです。

そこで私の各グループ訪問の旅が始まりました。自分が言った以上各グループの現況を実際にこの目で確認する必要があったからです。勿論当時の常任の皆様にも手伝って頂き一年間で十五グループを訪問させて頂きました。会長の任期を終えるまで二六グループを訪問出来ましたことは当時支えて頂きました常任幹事の皆様のお陰と感謝しております。

このグループ訪問で良かったことは、大会・総会・セミナーに一度も参加したことのない若いメンバーに多く会い、語り合えたことです。「会長、緑友会のこと少し判ってきましたよ、次のセミナー

には必ず出席しますよ！」そんな声を聞いた時、遠くまで来て良かったと思いい疲れが飛んだような気が致しました。

会長に就任して一年間の感想を書いた記録がありましたので紹介致します。

青森大会

ラッセラー、ラッセラー、の掛け声に「ねぶた祭り」での青森大会は緑友に永遠の思い出を作ってくれました。何しろ東北三大祭りの中の大会開催は、初めての体験です。大会実行委員長立花建男氏、常任幹事の長尾良宣氏を始め青森印刷青年経営者会議の皆様がこの大会開催までの準備に大変なご尽力を頂いたことを、私の緑友時代の思い出として、一生忘れられないページになりました。講演を頂いた「伊奈かつぺいさん」のユーモアあるトークは大好評で終始会場は笑いの連続でした。

福岡セミナー

講師に元新日鉄釜石ラグビー部の森重隆さん、ハイテクノロジーコミュニケーションズの稲垣長利さんを招いてのセミナーでした。森さんは、ラグビーを通してのチームワーク作りに熱弁を頂き大変感動を覚えました。

後で判ったことですが、福岡に戻って三年目に最愛のお嬢様を亡くされたことがお手紙で記してありました…。稲垣さんは、私の記憶ではデジタル技術、電子化への対応に緑友会で始めて講演をして頂いたと思います。中身の濃いお話でした。

愛媛印刷人青年会創立二十周年

愛媛印刷人青年会の創立二十周年は、地域密着、地元商店街とのタイアップ、印刷のPRと素晴らしいイベントを見せて頂き、北九州YPクラブ主管の第十一回九州山口青年印刷人大会では、九州・山口の団結力を感じ、仙台刷親会主管の第三五回東北青年印刷人連絡協議会では、東北地区の青年印刷人と語り合いが出来、大分印刷若梅会恒例の大分青年印刷人大会も回を重ねることに充実し、札幌青年印刷人の例会訪問で貴重な大雪を体験、新潟印刷新世会総会では事業推進、第二九回を迎える大阪青年印刷人クラブのトップ印刷人セミナーでは、継続の力を感じ、長崎青年印刷人会では、佐世保印刷若汐会のメンバーも駆けつけて頂き、名古屋而立会及び神奈川正和会は熱心な研修と全国のグループが本場に頑張っていると痛感しました。

(一九九四年五月) フレンズオブグリーン No. 八四より

という訳で各グループの活性化をこの目で見て来て緑友の原点は、各グループの活性化が一番大切であることを再確認できました。私の任期中、今思うと各グループの皆様には何かお役に立てた訪問が出来たかどうか一度聞いてみたいと思います…。

常任幹事会の運営について

竹内会長期には私の提案で総務担当幹事が初めて誕生しました。従来、書記幹事は、会長を選出したクラブから選出され、いわゆる会長のカバン持ち的存在感がありましたが、私の考えは、会長の事務的な補佐をしなければならぬ総務が必要と前々から感じておりました。たまたま竹内会長が札幌

という地理的な問題もあり、長野青年印刷人緑友会の塚田貞俊氏が初代の総務幹事に就任し、見事な総務担当幹事を發揮してくれました。同様に会計幹事も会長側近になり茨城印刷緑友会の城戸憲次氏が担当、私は書記幹事を担当し、新たな緑友会運営のスタートが切られたのです。以来、城戸会長期、白井会長期、私期とこの新しい運営方法を継続してきました。特に白井会長期にはやはり私の提案でブロック制の常任幹事の担当を決め、イベント担当別の常任幹事と大きな運営方針の変化がありました。そして新たに千代田印刷人新世会の米倉伸三氏が広報担当として誕生致しました。

私の会長期には、新たに渉外担当幹事が出来、初代担当に札幌青年印刷人の会の伊藤文二氏が就任、また名簿担当、OB担当として、名古屋而立会の西川誠也氏が就任しました。

常任幹事会で、最初に私が作成したことは、常任幹事のマニュアル作りです。それぞれの常任幹事の役割・職掌を明確にすることが必要でした。当時、総務幹事の神戸印刷若人会の梶原伸郎氏、会計幹事のやまなし印刷若人会の長田照久氏、書記の千代田印刷人新世会の米倉伸三氏と検討しこのマニュアルを作成し、常任幹事会で発表し、結束を訴えました。

次に、総会、大会、セミナーのマニュアル作りに着手し、どのグループが担当になってもこのマニュアルがあれば、それぞれの運営が出来るように解りやすく図解入りのものを作成致しました。その後このマニュアルが活用されているのかは余り聞かれませんが…。

一番有りがたかったことは、常任幹事会開催前に総務担当の梶原氏の細かい気配りにより「次の幹事会では、この議題が必要です」と提案され、事前に各常任幹事と問題や提案事項を協議することが出来たことです。円滑な幹事会が出来たのも梶原氏のお陰と感謝しています。

常任幹事会の中に、新たな委員会も作り総務委員会、広報委員会、名簿・OB委員会、組織活性化委員会、この委員会の運営は正直言ってアイデア倒れになった感があります。この常任幹事会、グループ長会議で一番印象に残ったことは、今までのグループ長会議は各イベントの時に開催されていたため、余りにも時間が限られ、グループ長会議で、思うような会議が出来ないのが現況でした。何とかグループ長の皆さんとゆつくり語り合える時間がないかと考え、初めて単独のグループ長会議を平成五年十一月三日に「南熱海マリンホール」で開催し、長時間グループ長と語り合い、夜は杯を交わし緑友を語ったことは忘れられない貴重な思い出の一ページです。このグループ長会議開催に当たり、青山会逸見節夫氏には会場の運営からホテルの世話まで大変お世話になりました。ありがとうございました。(このグループ長会議で初めて緑友運営のアンケート調査を試みました)

任期中の総会・大会・セミナー

大分大会・青森大会・福岡セミナー・仙台（作並温泉）総会・大阪大会・名古屋セミナーと主管各グループの皆様のお力添えで無事に開催出来、長崎総会へとバトンタッチ出来た訳ですが、私の任期中各主管グループが積極的にイベント開催に向け手を挙げて頂いたことに心より感謝申し上げます。なぜか私が九州で会長に就任し、九州で任期を終えたことに不思議な感じを抱いています。

一番心配していたイベントは、青森大会です。何しろ「ねぶた祭り」の大会ですからホテルの確保、交通手段の確保、本当に大丈夫なのか心配でした。同友会の榎本則義先輩に「一度現地に視察に行ってみたいので一緒に一緒してください」と懇願して榎本先輩と青森を訪れました。立花大会実行委員長始

め長尾常任、青森印刷青年経営者会議の皆さんの大歓迎を受け、「会長、心配いらんよ。準備は進んでいるから。後は当日の天気だけを祈ってください」との言葉に榎本先輩と顔を見合わせホットした思ひ出があります。幸いに大会当日は天気にも恵まれ、東北三大祭りの青森ねぶた大会は大成功に終わり、今でもこの大会は緑友の歴史に残る大会ではないでしょうか。

この大会の実質の指揮者、長尾良宣氏が後々の緑友での活躍の源になったことはお解かりのことと思います。

阪神大震災の発生

朝、テレビでこの地震の発生を知り、新しい情報が入る度に被害の大きさに驚きました。神戸印刷若人会のメンバーに連絡を入れましたがまったく連絡がとれず、安否を気遣っておりませんでした。そのうち全国のメンバーから、「会長!!神戸のメンバーは大丈夫ですか、連絡が取れない、早く神戸に手伝いに行きましょう!!」と次々に連絡が入りました。そのうちに大阪青年印刷人クラブの矢谷猛氏より被害の状況が入り、その被害の詳細に驚き緑友会として早く義援をしなければならぬ。常任幹事会を開いている時間もない。緑友会歴史上初めての持ち回り幹事会で神戸のメンバーに義援のお願いの承認を頂き、早速、全国のグループ長に書状を送送させて頂きました。これこそ「緑友の友情」だと実感致しました。各グループ長より次々に義援の申し出が殺到し、二月十八日に開催された名古屋セミナー会場で元気に出席して頂いた神戸印刷若人会、柴田幹事長に全国メンバーからの義援金七、〇一五、七一二円を送ることができました。この時は本当に涙がでるぐらいに嬉しく思いました。そして「緑

友の友情」の再確認をさせて頂きました。全国の緑友メンバーの皆さん本当にご協力有り難うございました。

今だから話す次期会長選出

さて私の任期も終わりに近づき次期会長を選任しなければならぬ時期がきました。現会長が推挙し、常任幹事会、総会で承認を得るプロセスが実情です。神戸の震災が発生する前には、神戸印刷若人会現総務担当幹事の梶原伸郎氏に次期会長候補として、常任幹事会の皆さんが同意をしてくれました。私も「次は梶原さん頼みますよ」と安心していた矢先に神戸での震災が発生し、梶原氏の会社もビルが倒れ、それどころではなくなっていました。従来次期会長は、総務、会計、書記を経験し、緑友のことを理解している幹事の中から選出されています。やまなし印刷若人会の会計幹事、長田照久氏も体調を崩されており、又書記の米倉氏とは、私の任期が終わったら退任する旨の約束をしておりましたし、どんな時間がなくなってくるばかりです。困り果てた時は、先輩グループの同友会の力を借りるとよく先輩から聞かされていたことを思い出し、榎本則義（当時会計監査）先輩に相談を致しました。榎本先輩は、よく事情を知っておられ、「貴方は誰を考えているか」と逆に質問され、「私は青森の長尾氏を考えています」と答えたら、「私も同感だよ」と答えて頂き、きつと榎本先輩は、梶原氏の次の候補として長尾氏を前々から考えていたようです。

早速、中村先輩を訪ね、「これから長尾氏の説得に行くのでは是非力を貸してください」とお願いをし、榎本先輩も同行して頂き長尾氏のいる青森へ説得に行くことになりました。ところが長尾氏も「何と

してもこれは受けられない」との一点張りで、長尾氏の自宅で奥様の手料理と美味しい日本酒の接待を受けたのはいいのですが、箸が進みません。榎本先輩から、利根川さん今日のところはいいじゃない、利根川さんの気持ちを伝えるだけで」と。残念ながらその日は、退散することになってしまいました。後で考えれば、会長職は、自分一人の問題ではなく、青森のグループの皆さんの協力がなければ会長職は出来る訳がないのだから、余りにも強引過ぎたと自己反省。

それからは、毎晩電話で長尾氏攻略の連続、勿論榎本先輩、中村先輩にも連日電話して頂き、長尾氏説得のドラマが始まりました。それでもなかなか良い返事を頂けず、今度は手紙戦略に変え、ラブレターを送りました。

やっとな「利根川さん解かった」との返事を頂いたときは本当に力がぬけ、ホッとしたことを忘れることができませぬ。その場で嬉しくて家内に「長尾さんが受けてくれたよ!!」と伝え、家内も内々心配していたらしくよかったと言ってくれたのを覚えています。この次期会長選出のキーワードは、榎本先輩でした。長尾氏より前々から「初めて緑友に出た時に榎本先輩と同室になり、それ以来榎本先輩に導いてもらっている」という話を私も聞いていたからです。人の出合いの大切なことを教えて頂きました。榎本先輩!!その節は本当にご尽力有り難うございました。そしてご苦労頂いた長尾さん二年間の会長期のご活躍心より感謝しています。ご無理を言ってゴメンナサイ。

私は中村会長長期より長尾会長長期の直前会長を含めると十六年間執行部を努めさせて頂きましたが、余りにも長く居座ったことを反省しています。中村会長長期の常任は、なかなか気骨ある先輩が多く、私の様な若輩者は幹事会で発言することは大変な勇気が必要でした。

長野青年印刷人緑友会の直前会長の飯田範夫氏、千代田印刷人新世会の中村勝亮氏、仙台刷親会の庄司義氏、新潟県印刷新世会の渋谷義徳氏、大阪青年印刷人クラブの山口博司氏、広島青年印刷研究会の故花田佳雄氏、下関青年印刷人緑友会の長阿弥晁彦氏、同友会の小林直氏、青樹会の逸見節夫氏、神戸印刷若人会の松本孝昭氏、沖縄県青年印刷若汐会の大城新正氏、中村会長期に大変ご指導を頂いた先輩の方々です。

以来、十六年間に渡り一緒に活動した常任幹事、グループ長の皆さん本当に有り難うございました。特に神戸震災後、長田会計、梶原総務の代行として、東京プロセス製版青樹会の東京担当幹事の大内靖氏には大変ご尽力を頂き改め感謝申し上げます。

これからの緑友に

インターネットが進み緑友会もこの機能を多く活用して様々な情報交換がメンバー同士で活発化されています。これは素晴らしいことです。同業・関連業界で任意団体としての緑友会のような連係機関は他にない訳です。印刷、情報加工業として、今いくつものハードルを越えて行かねばなりません。それぞれの地域で緑友出身の業界のリーダーが活躍しています。

新しい緑友の価値が見直されていい！

勇気あるチャレンジ精神を忘れないでほしい！

でも、緑友のスピリットは忘れないでほしい！

1995・4～1997・4

第三九回山形総会挨拶

より

長尾 良宣 第二十一代会長

新緑香るすばらしい季節の五月、出羽三山にいだかれた山形県天童市において「漲る情熱、未来への発信」のスローガンのもと、第三九回全国印刷緑友会山形総会が来賓の皆様、業界報道関係の皆様、そして全国各地から会員の皆様のご出席を賜り盛大に開催させていただきましたことを心より感謝申し上げます。

昨年五月長崎総会で利根川会長よりバトンタッチさせていただきました以来、熊本大会、金沢セミナーと多くの会員の皆様にご参加をいただき両行事を盛大に開催させていただきましたことに対し改めてお礼申し上げます。

さて、私たち印刷業界を取り巻く環境は、申し上げるまでもなく長引く景気低迷、価格破壊など依然として厳しい状況が続いております。同時にハードソフトを含めて技術革新の波は大変なスピードで進んでおり、プリプレスの電子化は、他産業を巻き込んで「印刷」の概念を大きく変えつつあるのは皆様ご存知の通りであります。このような変化の激しい混迷の時代の中での経営基盤の確立、フル

デジタル化、グローバルなネットワーク化等への対応には、明瞭な経営理念の再構築はもろろんのこと、今より以上に経営の抜本的な体質の強化と改善をエネルギーな行動で進めていかなければなりません。

今こそ、二一世紀の業界を担う青年印刷人として、取り組まねばならない多くの問題点を全国印刷緑友会の大きな友情と信頼の和の中で情報交換し、そして研鑽していく時だと思えます。

本日の総会では、「情報ネットワーク推進委員」の皆さんによりますパネルディスカッションを通じて緑友ネットワークをより強固なものとし、抱えております多くの問題点を解く手がかりとさせていただき、今後各々の事業所の経営計画の立案、電子化への設備対応等、大いに参考にしていただければ幸いです。

最後に、本総会をお世話頂きました山形印刷研究会の会員の皆様に心より感謝申し上げます、本日出席の皆様のご健勝と全国印刷緑友会の各グループのますますのご発展をご祈念申し上げますご挨拶にさせていただきます。

1997・4～1999・4

緑友の夢はゴーヤの味

松浦 正欣 第二十二代会長

緑友会会長就任の話は、まさしく降って沸いたような突然の話でした。

もうすでに五十歳を超えていた私は、所属する佐賀県印刷人若楠会も長男穂積と交代する旨を表明したばかりだったからです。当時会長であった青森県印刷青年経営者会議の長尾良宣氏が次期会長の選任に苦勞をされているという話は聞いていたのですが、まさか年上の私の所へ来るとは思いもしなかったのです。

しかも、最初に声をかけたのは会長就任以来直前会長までの四年間壮絶な戦いをするようになる刷友青山会の逸見節夫氏と熊本県印刷緑友会の大鶴紀元氏でした。会長の長尾良宣氏からの推薦があればという条件で承諾したのが長い戦いの始まりです。

次期会長を承諾して数日後、逸見節夫氏より一通のファクシミリが届きます。そのファクシミリの内容は、すべての次年度常任幹事の人事案が出来上がったものでした。

私は、会長を引き受けるにあたり、この二年間に与えられた会長としての私の使命は何かを考えました。そして、最大の使命を、業界の変遷・緑友創立の精神と時代の移り変わり・前年より持ち越された課題などを総合的に考えると「緑友の船頭役である常任幹事の世代交代を完了すること」が最大の使命だと結論付けたのです。他に具体的な事項として、利根川政明元会長・長尾良宣前会長が実施されたアンケート結果を受けた引継ぎ事項である会則変更がありました。逸見節夫氏からのファクシミリは、ちょうどその使命を果たすための常任幹事人事の最中の出来事でした。後に逸見節夫氏からの電話で激論を交わすことになりました。

会長就任最初の大仕事は、平成九年五月二四日、長野における第四十回長野総会です。

私は就任に当たり、次のような基本方針を長野総会に提出しました。

平成9年度基本方針

変わろうよ・・・緑友

全国印刷緑友会四十周年東京大会のスローガンです。

変化は時代の常と言われるとおり、全てのものは常に変化を続けることが人間社会の普遍的な原則だといえます。

現在、私たちの属する印刷業界は、インターネット等による通信の多様化やPDFやSGML

等のさまざまな新技術の活用など、アナログからデジタルへという社会の大きな変化の中で新しい時代の中心的な役割を果たす場が到来しようとしています。

本年は、緑友会が発足して四十年目の節目を迎える事となります。四十年の歴史の重みは何者にも変える事のできない貴重なものです。これまでこの緑友会を築き支えていただいた多くの先輩方には、心からお礼を申し上げずにはいられません。その数多くの先輩方に感謝の念を持ちながら、今まさに時代の変化を先取りするオピニオンリーダーとしての会員グループを支える緑友会へと変化する時でもあります。

「灯灯無尽」先輩方から引き継がれた緑友の炎は、永遠に変化をし続けながら新しい時代へと引き継がれていかなければなりません。

汲めども尽きぬ知恵の泉・・・緑友

人との出会いが人生を明るくし迷いを払拭させてくれます。

時には人に感銘を与え、時には人生やビジネスの道を示してくれます。

新世紀をまじかに迎えようとする今、緑友の仲間との出会いから必ずや私たちの心は勇気づけられ進むべき道に明かりを点してくれるはずです。

現在緑友の会員は全国に二三〇〇名を数えるまでになりました。そしてその会員は同業とはいえども全てがそれぞれの特徴を生かした経営をされており、一社として全く同じ経営をしている企業はないのです。緑友には二三〇〇ページの辞書があります。そして、そのページをめく

るのは私たち自身なのです。

緑友の会員が一堂に会するチャンスは残念ながら数多くありません。総会と大会、それにセミナーの数少ないチャンスが会員同士のコミュニケーションの場としてもっともっと活用出来るようにする事が、まず第一に今年度課せられた課題ではないかと思えます。

今年度も六人の方に情報ネットワーク推進委員を委嘱しました。大変多忙な方ばかりではありませんが、それぞれの分野のオーソリティーとして、全国のグループ活性化と会員企業発展のためにご尽力いただきます。

ただただ楽しい・・・緑友

私たちは毎日激甚な競争の中で生きています。又、企業のリーダーは孤独です。

ともすれば、その現実には押し流され利他的になる事もあるでしょう。しかし、私たちは企業のリーダーとして常に前向きに仕事に打ち込んで、世の中に役立ち、自分自身も幸せだったと感じられる生き方を追求する事が必要です。

緑友の仲間が、企業の規模や年齢の差、地域の差を越えて大いに酒を酌み交わし、同じ生業を営むもの同士として人生を語り、友情を深めることで互いに触発され、又新たな気持ちで仕事に向かう。

そんな楽しい緑友会でありたいものです。

学びあう場としての常任幹事会

常任幹事会と言うまでもなく、緑友会総会で付託された事項を執行してゆく場として存在します。

本年度は、グループ長会議合同開催を含め六回開催の予定となっておりますが、常任幹事になられた方々は大変お忙しい中全国からご参加いただくわけです。そこで今年度は、常任幹事会の機会に、会社見学や体験報告、ディスカッション等の学ぶ場をつくります。また、この常任幹事会には緑友の会員であれば誰でも自由に参加できる事にします。特に開催地周辺のグループの参加を期待します。

総会前日の五月二三日は、長野印刷緑友会の創立四十周年記念式典が行われ、善光寺に物故者の供養の為のお参りを済ませ、無事創立記念行事は終了したわけです。しかし、これから起こる大変な混乱は予想だにできなかったことでした。

この年の総会は大変変則的な総会でした。

前回の神戸での常任幹事会で決まっていたそうですが、総会の前にグループ長会議を開き、総会の提出議案を審議するというものです。ちなみに、そのグループ長会議の出席者も総会の出席者・採決権者も同じ人（グループ長）ですから、なぜその必要があったのか今でも疑問に思いますが、ともかく、大混乱の中でプレ総会が行われたのです。

その混乱状態は筆舌に尽くせるものではありませんが、最も時間をとったのは、逸見節夫氏からの

「正式に会長就任する前に人事（特に情報ネットワーク委員の委嘱）を行った」と言うこと「委員の依頼のやり方が悪い」と言うことに対しての抗議でした。

それらの抗議に対する私の答えは。緑友会は年一回の総会を原則としています。前期中にグループ長会議で推薦された次期会長予定者は当然正式な肩書きなしに次年度の事業計画・予算案・人事を進めていなければなりません。そうでなければ、次期会長を決める総会と事業計画・予算・人事を決める総会と最低でも年二回の総会を開く、青年会議所方式を取る必要があります（青年会議所は年三回）緑友会としては現実的ではありませんし、会則でも年一回の総会と明記してあり、この抗議は通らないはずですが。しかし、この会議に出席した人からのそれに対しての発言はなく、ただ逸見節夫氏のみがまくし立てている、そして私独りがそれに答えている・・・というものでした。「いったい緑友というのはなんなんだ」その時私が感じた率直な感想でした。

次に、情報ネットワーク委員の委嘱のやり方については、委員をお願いする方の中にはすでにOBになられた方もあり、下手な文字ながら直筆の依頼の手紙と委嘱状を郵送するほうが礼儀に反しないと言う判断が気に食わない、電話で直接お願いすべきだというもので、そのことだけで延々と時間を費やしたのです。他には、会費値上げを回避する為の方法として、これまでは総会・大会・セミナーについて、それぞれに本会計からの予算が、大会・総会四十万円、セミナー三十万円ついていて、イベント終了後そのほとんどが本会計に剰余金として戻され（暗黙の決まりとなっていた）、自動的に緑友基金へと組み入れられているというのが現状でした。そこで、常にその予算が本会計に戻されるのであれば、「その予算をイベントの準備資金として主管グループに仮払いし、イベント終了後返済して

いただく。そして、その資金は当時八百万円程度プールされていた、緑友基金から捻出する。」という提案でした。しかし、その予算組みも逸見節夫氏の反対意見で正式に裁決されないまま否決状態となり、結果的に緑友の会費は値上げせざるをえない状態となったわけです。その結果、緑友基金はセミナーなどイベントがなんらかの事故による中止などで主管グループに大きな損害をもたらした時に使うという名目があったものの、一度も使われることなく際限なく増えていく事になったわけです。

一見、収入不足に見える緑友の会計でしたが、中身を精査すると不足分は緑友基金へと流れているという事になります。

さらに、この四十周年記念誌編纂の為の予算が、逸見節夫氏の「そんなのいらねーよ」の一言で予算ゼロ。その後、担当常任幹事に就任された茨城印刷緑友会の小倉克夫氏は、東京の日本印刷新聞社などへ通われるなど、資料収集等の編纂準備のための出費も、全て身銭を切って進めることになり、誠に申し訳ない結果に終わってしまいました。

結局、私が提出した議案は総会前にズタズタになり、午後からの正式な？総会へと移ったのでした。

私の二年間の最大の思い出は、なんとと言っても出来たばかりの東京御台場 ホテル日航東京で行われた「全国印刷緑友会四十周年記念東京大会」にほかなりません。

千代田印刷人新世会の芝崎孝氏を実行委員長として横浜を含む在京九グループで実行委員会を構成し華やかに開催されました。詳細は『行事で綴る緑友』に譲るとして、三十周年大会の時とは日本の経済状況が違い、十年前の盛大さはなかったものの、やはり東京ならではのすばらしい大会であったと

感激したものです。

しかし、準備段階における混乱や、芝崎孝実行委員長の常任幹事会での報告に対し、同じ実行委員会のメンバーであるはずの逸見節夫氏の異論を唱える姿は、私たち地方の田舎人と東京の都会人との人種の違いをまざまざと知らされた思いがしたものです。

大会当日も、式典・講演会・懇親会が無事に終了し、二次会が実行委員会のセッティングしたホテル日航の別室で行われたわけですが、逸見節夫氏が個人的にセッティングした、新宿のホテルでの二次会に人が流れ、寂しい二次会だったのがいささか心残りの部分でもありました。

後日談ですが、逸見節夫氏が編纂し、結果的には廃棄処分となった、幻の『全国印刷緑友会四十年東京大会記念誌』には、個人的にセッティングされた新宿での二次会が、あたかも実行委員会が準備したオフィシャルな二次会であるかのように多くのページを割いて掲載されていて、オフィシャルな二次会の掲載がまったくなされていなかったのには、大きな驚きを感じたものでした。

まざままな混乱の中にもかかわらず、まさしく忍耐と努力ですばらしい大会を運営していただいた芝崎孝実行委員長をはじめ在京九グループのご苦勞を心からねぎらいたいと思います。

さて、緑友会四十周年の締めくくり行事となる「第三二回仙台セミナー」は、仙台刷親会の主管により秋保温泉「ホテル佐勘」において、全国から一三二名、仙台刷親会六九名、合計二〇一名の会員の出席を得て行われました。

セミナーの形式は、各テーブルそれぞれに別のテーマをもうけバズセッションを行うというもので、

参加した会員も久々のバズセッションに、活発な意見が出て、大変盛り上がったものとなりました。

このセミナーを全体的に見てみると、会場のせいもあつたのか大会と見間違ふような盛大なセミナーとなつたわけですが、緑友の三つの事業の位置付けをあらためて考え直すきっかけとなり、次期名古屋セミナーの「セミナーらしいセミナー」の布石となつたセミナーでした。

ここで、何事もなく無事に終わらないのがこの二年間の特徴で、翌朝またまた大事件が発生するわけです。

翌朝は朝食のあと八時から常任幹事会を開くことになりました。ここでは本来であれば、予定された議題に沿い審議をし、最後に今回主管していただいた仙台刷親会の皆様に労いの言葉とお礼を言い終了するわけですが、常任幹事会を開会した直後、仙台刷親会の中村等会長から特に発言をもとめられたのです。

その発言とは、『今回のセミナーに思ったより参加者が集まらなかった。これは、常任幹事の責任である。したがって仙台刷親会は本日ただいまをもつて全国緑友会を脱会する』と言うもので、その場にいた五、六人の仙台刷親会のメンバーと共に席を蹴つて会場を退出してしまつたのです。その時の総務担当常任幹事が仙台刷親会の江馬康男氏なのですが、その江馬康男氏もまったく知らぬことで常任幹事全員が、何があつたのかにわかには理解できずに、ただ啞然としていた様子は今でも鮮明に覚えていきます。その上、常任幹事会の会場を引き上げた仙台刷親会のメンバーは、会場のホテルからも全員引き上げていて、会議終了後常任幹事の仙台市内までの足を仙台刷親会のメンバーの車で確保すると言う最初の約束が守られなくなり、その場に一人残つておられた仙台刷親会OBである川村信太

郎氏と江馬康男氏が慌てて、困っていた常任の車の手配をされ、なんとか全員無事に予定の飛行機に間に合うという事件が勃発したのです。

事件発生後、私が中村等会長に対して慰留の連絡をしなかったとしてお叱りを受ける事になるわけです。私としては、あそこまで公式の場で啖呵を切ったのだから、その言を翻し、残留という事はありえないだろうし、こちらの心情としても慰留をするという事はしない覚悟でいたわけです。

数日後、同じ仙台刷親会のメンバー複数から電話があり「早急に常任幹事会を開き、正式に仙台刷親会の脱会を承認してくれ、そのあとすぐに新しいグループを結成して、その新しいグループで緑友会に再入会したい」との申し出があったわけですが、「緑友会会長の立場としては、中村等会長の脱会発言は、つい口を滑らしたとも受け取れ、常識的にみて、このあとなんらかの正式な意思表示があるはずなのでそれを待ちたい」加えて「出来るだけ会内で解決していただきたい」というお話をしました。

後日、仙台刷親会の脱会宣言はなかったものとして常任幹事会で確認され、表向きは事なきを得たのですが・・・、緑友の友情と寛容さにあらためて敬服の念を抱かせる事件でした。

さて、これで全国印刷緑友会四十周年の年は無事（・・・ではないな）に閉じるわけですが、まだ、私の会長としての任期は後一年を残しています。ここで、蛇足ながら残りの一年を総括して締めくくりにさせていただきます。

平成十年五月二三日の古牧温泉渋沢公園での第四一回青森総会は、坂本勝克実行委員長による「語り合おう・・・緑の友は青い森から」のテーマのもとで、総会のあと各部屋に戻り「ルームディスプレイション」と銘打ち、討論と友情の和を広げる総会となりました。さすがに今総会は中間の総会ということもあって、長尾良宣前会長からの引継ぎ事項である会則変更を次回総会で正式提出するということが一部暫定的に採択し、私の会長就任以来初めて無事に終了することが出来ました。

つぎに、平成十年十月三日「変革と調和」シンフォニーINかごしまのテーマのもと、鹿児島県霧島みやまコンセールでおこなわれた第四一回全国印刷緑友会鹿児島大会は笹山雄司実行委員長、岩重昌勝グループ長の強力なリーダーシップと豪快な鹿児島人気質とがあいまって、室内音楽の格調高い演奏の中で厳粛におこなわれ、鹿児島人のもうひとつの静かで落ち着いた側面を見せていただくことになった大会でした。

この大会では、私の二年間の中で最もうれしい事がありました。長い間スリーピングをしていた京都青年印刷人月曜会から森田隆司氏と滝本正明氏が久々に参加され、おまけに、決まっていなかった第三三回全国印刷緑友会セミナーを引き受ける・・・というものでした。

私は、にわかには信じられず、後日近畿地区担当常任幹事であった大阪青年印刷人クラブの松口正氏に再確認の依頼をしたのです。それからの京都青年印刷人月曜クラブの緑友会での活躍ぶりは、これまでのスリーピングをいっきに取り戻す勢いで、緑友の中心的存在となり、ついには初めての京都からの緑友会会長を誕生させることになったのです。

平成十一年二月二十日は第三二回名古屋セミナーです。水谷元実行委員長の下「会社のソフトランディング」というテーマで、第一部内藤明亜氏の「倒産なんてこわくない」第二部横田濱夫氏の「銀行マンから見た融資のポイント」第三部「ソフトランディングのためのハードな心構え」というテーマによる内藤・横田両氏バトルトークディスカッションと続き、時代にふさわしい、名古屋而立会の神髄を見せてもらったセミナーでした。

今回は、前回の仙台セミナーとは打って変わって、『セミナーらしいセミナー』をしようと言う掛け声の下に、緑友会のセミナーはこうあるべきだという方向性を示したものとなったに違いありません。名古屋而立会の持っている、遊ぶときはとことん遊び、学ぶときはとことん学びに徹するという姿勢は緑友として大いに学ぶべきことだと再認識させていただいたセミナーでした。

私の最後の極め付けは平成十一年五月二九日実行委員長吉田卓史氏、テーマ「OUR green friends 起(き)せ green wave)」のもとで行われた第四一回徳島総会でした。

主管の徳島一二会は、会員数十三名のまだ緑友会に入会して間がないグループでしたが、四国地区の拡大と活性化のために、総会の主管をぜひとも引き受けてほしいと数回の訪問の後に無理やり承諾いただいたこともあり、皆でバックアップしながらスムーズに開催できることを願っていたのですが、乾孝康グループ長、吉田卓史実行委員長の涙ぐましい努力にもかかわらず、刷友青山会の逸見氏の発言で一時は直前で総会主管返上寸前までこじれる事となったのです。

事の発端は名古屋セミナーの翌日の二月二日に行われた、グループ長・常任幹事会の出来事でした。

吉田卓史実行委員長の提出された計画に対して発言された逸見節夫氏の意見があまりにも一方的で、徳島一二会の吉田卓史実行委員長、乾孝康会長をはじめとするメンバーは驚愕し、結論が出ないまま徳島へ帰る事となります。その後、徳島一二会は二月二六日実行委員会を開き、次の内容の文章を常任幹事会に送付されました。

(前文略)

さて、翌朝行われました常任幹事会・全国グループ長会議には、私も徳島全国総会の実行委員として末席にて参加させていただきました。そして全国総会の事業計画並びに予算案のご承認をいただきました。未熟ながらも一二会全員で協議した資料をもとにご説明させていただきました。心の中では、少々の修正でご承認いただくものと期待しておりました。ところが皆様ご承知のように、刷友青山会の逸見様より、パネルディスカッションは必要ない、登録料がとても高い、懇親会の食事代を千円でも安くしろ、一二会から補助は出すべきでない等などの意見を頂きました。また全国総会には懇親会など必要ないというご発言もありました。

確かに逸見様がおっしゃられるように、この度の全国総会登録料は二八、〇〇〇円と少々高いも知れません。

しかし、徳島の地、そして明石海峡大橋開通による観光客の増大の期待と重なり、皆様の期待される金額では会場を利用できませんでした。又、当初予算案から最低必要なものだけを選び、参加していただいた方が喜んでいただけるものは何か考えた末の予算でございます。

又、パネルディスカッションは、主管させていただくにあたり主管の意義と一二会の独自性を出すには何が良いか、予算的には最小で可能なものは何か、等々知恵を絞った末に出てきた事でございます。目的としては、次期会長が選出されたあとに、会長としての所信と緑友会の主旨及び事業計画を充分にお話しいただき、又、一般のメンバーは会長のお人柄を知り、そしてこの緑友会を理解するに最適と思ひ企画したものです。

(中略)

そして、徳島へ帰りまして逸見様に直接お電話をしましてご発言の真意を確認しましたが、とても納得できる返事はいただけませんでした。また全国総会の事業計画と予算案について再度説明しご理解をお願いしましたが、総会で納得の行くまで何時間でも質問する、パネルディスカッションや懇親会などなくてよい、とおっしゃっていました。これではとても逸見様の納得いただける総会にする自信がありませんので、ぜひ逸見様と刷友青山会が主管に立候補して、全国総会を開催していただけるようお願いをして電話を切らしていただきました。後日実行委員会を開催し、メンバーの同意を得て、松浦会長が徳島へ来られた折、松浦会長に決意のほどをお話して、逸見様に主管の辞退決議をお渡しただくようお願いしました。

(後略)

そして、徳島一二会から次のような「決議文」を私の手から逸見氏へ渡す事となります。

決議書

刷友青山会会長 逸見 節夫殿

徳島一二会は、平成十一年二月二六日午後七時三十分より、徳島市川内町平石流通団地内流通館二階会議室にて二月臨時例会を開催し、下記の決議をした事を、ご報告いたします。

①第四二回全国印刷緑友会総会主管の辞退と、刷友青山会の第四二回全国印刷緑友会総会の主管を提案します。

(理由)

平成十一年二月二日午前九時開会の全国印刷緑友会常任幹事会・グループ長会議の席上、逸見節夫氏より、徳島一二会に、徳島総会に対して含畜あるご意見をいただきましたが、我々は、全国印刷緑友会に加入して、未だ年月が経たず経験と実績がありません。

又、常任幹事会で決議されました、次期緑友会会長推薦者の福田様に対しても、総会において反対の動議をされるとの発言もあり、我々徳島一二会は、刷友青山会会長逸見節夫殿が満足される総会運営の自信を持つ事が出来ません。

つきましては、経験も実績もある、刷友青山会で、我々の見本となる第四二回全国総会を主管していただき、以後の二本として再度、徳島一二会も総会主管に立候補するつもりです。

何とぞ、我々徳島一二会の総意と熱意をご理解の上、総会主管される事を、お願い申し上げます。

注) 登録料・タイムスケジュール等は、常任幹事会に提案しましたが未決定です。

平成十一年三月一日

第四二回全国印刷緑友会とくしま総会

元実行委員長 吉田卓史

(平成十一年二月二十六日辞任)

徳島一二会会長 乾孝康

もちろん、私からの手紙に「あなたの本意を徳島のメンバーが誤解しているとすれば、その誤解を解くように」とお願いしたのは言うまでもありません。

一時は第四二回総会を私の地元佐賀で開催する事も覚悟しなければならぬところまでできたのですが、徳島一二会のメンバーの熱意と寛容さで、第四二回徳島総会の事業計画について、全国のグループ長さんへアンケート形式による意見の集約をして難産の末、かろうじて第四二回徳島総会は開催される事となったのです。

この総会の議事内容については、最後に語ることにして、総会終了の翌朝の福田新会長のもとでの第一回グループ長・常任会議では、もうまじかに迫っている広島大会の登録料や内容について「前年度の常任幹事会で決定した事項は無効だ」との逸見節夫氏の論法により、一から議論し直すという雰囲気の中で、「すべての事業はグループ長会議で議論し決定する」という言わば常任幹事会不要論まで飛躍しました。また「常任幹事会の依頼があれば、(今度の徳島総会を) 刷友青山会は東京プリンスホテルでも何処でも、二万円でも可能な手配が出来た」との発言に、徳島一二会のメンバー特に乾孝康会長の怒り心頭に達し、徳島一二会の乾孝康会長より再び「第四四回総会」の主管を刷友青山会がするようにとの決議書が作られるという事になります。ただ、今回はその決議書は未提出のまま乾孝康会長の胸の内にしまわれる事になるのですが……。

無理にお願いをし、少ない人数でやり遂げていただいた徳島一二会の吉田卓史実行委員長・乾孝康会長・森敏明氏・大谷章介氏・山中克彦氏・江川雅文氏・広野省吾氏・岸孝人氏・小浜信夫氏・玉村博文氏・井上勝弘氏・遠藤義人氏・そして多田恭行氏、十三人の勇士、そして、徳島一二会を総会前日より泊り込みで全面的にバックアップしていただいた、神戸印刷若人会の乙野典博氏を始めとする若人会メンバーに心からお礼と、このような総会にしてしまった私の非力をお詫びを申し上げます。

こうして、最悪の雰囲気の中に徳島総会終了とともに、私の会長としての任期全てを閉じたのです。

冒頭でも述べたように、私の会長としての使命は、常任幹事の世代交代と利根川政明元会長のアンケート結果と長尾良宣前会長の二度目のアンケート結果を踏まえ、長尾良宣直前会長より引き継いだ

会則の変更でした。

第四一回の青森総会で暫定的な会則変更をしたものを次の徳島総会に仕上げることです。

会長就任以来準備にかかり、青森総会終了後の任期二年目から本格的に常任幹事会に提案、議論を進めてきました。

変更の要点は次のとおりです。

- 一、緑友基金の性質と使用基準を明確にする。
- 二、常任幹事会の性格と位置づけを明確にする。
- 三、会計監査を監事に変更し、その役割を明確にする。
- 四、会員名簿の緑友サーバリ用の基準。

でしたが、徳島総会までの数ヶ月間、熱心にグループ内で議論していただいた神戸印刷若人会の乙野典博幹事長を始めとするメンバーと前向きで熱い議論を交わす事となります。要約すると、この改正で会長と常任幹事会の権限が大きくなり、緑友会の性格「すべてのグループの連繋機関で上部構造ではない」という事に反しはしないかという事でした。しかし、提案した会則は会計監査を監事とした事と、次期会長の推薦をグループ長会議から常任幹事会へと変更した部分のみで、会長や常任幹事会の権限が以前より大きくなるものではないのです。むしろ、監事という役職ができたことで、監事が常に緑友会がその精神に反する行動をおこなっていないかを中立の立場で見、疑問のある時は、会長や常任幹事会に対し指摘し、常任幹事会の決定すら白紙に戻せる権限を有していますから、むしろ独走を抑制する方向に作用するのです。監事は常任幹事会に出席し発言を許されるのですが、採決権

は有していません。なぜなら、採決権を持った場合、多数の常任幹事の一人と同じ一票の権限しかなくなるからです。したがって、監事の人選はとても重要です。「偏った考えを持たない人」「緑友をこよなく愛し、緑友創立の高邁な精神を熟知し、体現している人」「人格の高い人」という事になるでしょうか。もちろん、従来の会計監査の役割も果たしてもらいう事になります。

また、次期会長の推薦をグループ長会議から常任幹事会にしたのは、従来の形式では、グループ長会議で推薦され総会で承認されるわけですが、グループ長会議の出席者と総会の採決権者は同一の人となりますので、いわば自分自身が推薦し自分自身が承認するというおかしな形になるわけです。現実には、会長が先輩や常任幹事の協力を得て次期会長を選び、常任幹事会に報告し、グループ長会議に提案するという事はこれまでも行われてきたわけですから、その手順は変える事はないのです。

又、神戸印刷若人会の提案の中に、常任幹事会の役割の規定で「その他総会の議決を要しない会務の執行・・・。」という件に関して、「地区担当の常任幹事が受け持ち地区の全グループ長の意見を集約した後常任幹事会で決定する」との意見がありました。なかなかもつともな意見のようですが、組織論からいえば、緑友は「代議員制」の組織を創立以来取っているわけですから、必ずそうしなければならぬと規定してしまうと、徳島総会翌朝のあの常任幹事会の時のように、直接民主主義か代議員制かという議論になってくるのです。

もちろん、常任幹事会や会長がすべてのグループ長の意見を聞く必要があると判断した重要な事項はやはりそうすべきでしょう。

このような議論の中で、中村守利氏の言葉を引用して、緑友の本質である感性と理性の議論へと発

展していったわけですが、私は感性と理性は相対する関係にあるのではなく「良質な感性を醸成するために良質の理性は欠かせない」という関係にあると思っています。したがって、緑友の高邁な精神の具現化は良質な理性、すなわち善意の行動によってのみ成し遂げる事が出来るのではないかと思うのです。互いが信じ合う事、これが緑友の友情の始まりです。

徳島総会以前のこのような議論は、四十年の節目を越えたばかりの緑友会にとって貴重なものとなつたに違いありません。又、このような議論に、私が就任当初提案した「緑友サーバー」を通じて、多くの会員の参加を得た事、そして多くの会員の目に触れた事は大きな収穫であったように思います。熱心な議論をしてくださった神戸印刷若人会の乙野幹事長ほか会員の皆さんに感謝申し上げます。

さて、この徳島総会の議事に関しては、今総会の主要な議案である『会則変更』の件で、前述のとおり、神戸印刷若人会の乙野典博氏から「会計監査を監事」へと変更する案に対しての質問と、熊本印刷緑友会の池田和隆氏から「次期会長推薦に関して、なぜグループ長会議の推薦となっているものを常任幹事会の推薦にしなければならないか」という質問の二点があり、他に、「時間がなかったせいで（私は十分な時間を取って変更内容を各グループに通知していたし、実際、神戸さんでは何度もグループ内で議論をされているという事実がある）各グループの中で十分に議論がなされていない」とことを理由に、今総会での議事の棚上げをと、青森印刷青年経営者会議の沢田氏、仙台刷親会の中村氏、刷友青山会の逸見氏の三氏が要求、また鹿児島県印刷工業組合青年部黎明さまの岩重氏は執行部原案を支持し、採決の要求をされることになりましたが、結果は議長である青森県印刷青年経営者会議の緑友会直前会長尾良宣氏の議長権限で、この議案は棚上げすることで先送りの結果となつてしま

つたのでした。

次の年、札幌総会では、昨年徳島総会提出議案と同一内容の会則変更議案が出されましたが、何の異義もなく、シャンシャンと通過することになるわけです。ただし、それまでの一年の間に、時間がなかったことを理由に棚上げ動議を出された、青森印刷青年経営者会議、仙台刷親会、それに刷友青山会の会内で、今議題である緑友の会則変更について議論がなされたという報告は残念ながら受けていません。

福田新会長の選任

会長の仕事の中で最も気を使い憂うつなのが次期会長の選任でしょう。

過去の歴代会長のお話を聞いてもやはり相当に苦勞をされたという事が良く分かります。

歴代会長の出身地区を見ていくと、中部、関西地区がしばらくの間会長が出ていません。出来ればその地区から出ていただければと、先輩等に相談を持ち掛けたのですが、その情報があつという間に全国に知れ渡り、その後かなりの苦戦を強いられる事になります。どうしても中部、関西地域では人材が見付からず、あとは多少地域は偏つたとしても後顧の憂いなく緑友を託せる人という観点から広島印刷研究会の福田信彦氏に白羽の矢を立て、お願いする事になりました。

実は、私の申し出に断るつもりでわざわざ博多まで来ていただいた福田信彦氏を何とか説得して承諾をいただいたわけですが、その後思わぬ事件がおこります。

東京の方からの噂で、刷友青山会の逸見節夫氏が立候補されるといふことです。しかも、全国印刷

緑友会第二十回東京大会の実行委員の主立った人で結成された「雁の会」や「印刷同友会」から推薦を受けたとのことでした。

他のグループから推薦を受けているという事が事実であれば、私が会長個人として推薦した福田信彦氏より優先させなければなりません。しかし、私の所へ立候補の連絡はなかったものですから、多少いぶかしく思っていたのですが。そうこうしている内に印刷同友会の福田晋太郎氏（当時グループ長）からの電話で「印刷同友会が逸見節夫氏を次期会長に推薦したという話があるが、そういう事実はない」他のメンバーからは「雁の会も推薦していない」との連絡。やはりこれは、きちんとけじめを付けなければ、せっかく承諾いただいた福田信彦氏に迷惑がかかってしまうと思い、急遽在京のグループ長会議を招集したのです。その会議の要旨は、もし正式に逸見節夫氏が立候補をされ在京のグループが一グループでも推薦するという事であれば、私も緑友会会長として福田信彦氏にお詫びした上で、福田氏の推薦を撤回、逸見節夫氏を推薦せざるをえないというものです。

結果的に在京全グループは、福田信彦氏の推薦、もしくは私に一任するという意思を示され、この件は決着したのです。

このようにして、私の緑友会会長としての二年間は終わりました。

スタートの総会で執行部原案の全面的な修正、最後の総会での原案棚上げ（いづれも事実上の否決）という最悪のこの二年間は、緑友の歴史から抹殺されるべきであったのかもしれない。しかし、卓越した指導力と知性を備えられた歴代緑友会会長と四十年の輝かしい緑友の歴史の中で唯一汚点を残

した会長として、ここにありのままの姿を書き残し、先輩諸氏そしてこのすばらしい緑友に今後参加される後輩たちの批判を甘んじて受けるものです。

最後に、このような落第会長にもかかわらず、誠心誠意支えていただいた常任幹事の名前を残し、せめてもの償いとします。

直前会長 長尾 良宣氏（青森県青年印刷経営者会議） 総務担当幹事 江馬 康男氏（仙台刷親会） 会計担当幹事 山口 善生氏（長崎青年印刷人会） 書記担当常任幹事 木下 隆和氏（佐賀県印刷人若楠会） 広報担当常任幹事 依田 訓彦氏（やまなし印刷若人会） 渉外担当常任幹事・四十周年記念誌編集担当 小倉 克夫氏（茨城印刷緑友会） 情報ネットワーク委員担当幹事 白井 慶吾氏（文京緑友会） 名簿担当常任幹事 棚橋 康仁氏（名古屋而立会） 会計監査 伊藤 文二氏（札幌青年印刷人会） 会計監査 島 義雄氏（神戸印刷若人会） 北海道・東北担当幹事 大門 一平氏（秋田印刷緑友会） 関東・甲信越担当幹事 竹内 隆文氏（長野青年印刷人緑友会） 東京地区担当幹事 小森 善信氏（印刷同友会） 東京地区担当幹事 安藤 英夫氏（千代田印刷新社会） 東京地区担当幹事 山田 弘文氏（東京プロセス製版青樹会） 中部・北陸地区担当幹事 高橋 一郎氏（ぎふ印刷翠陽クラブ） 中部・北陸担当幹事 中村 寿男氏（金沢青年印刷人クラブ） 近畿地区担当幹事 松口 正氏（大阪青年印刷人クラブ） 中国地区担当幹事 福田 信彦氏（広島青年印刷研究会） 四国地区担当幹事 乾 孝康氏（徳島一二会） 九州北担当幹事 松尾 善和氏（福岡印刷若葉会） 九州南担当幹事 大鶴 紀元氏（熊本印刷緑友会） 九州南担当幹事 外間 政朝氏（沖縄印刷若汐会）

座談会 「緑友を語る」

第一回

長崎ハウステンボス

第二回

札幌百留屋

第三回

東京印刷会館

第一回 座談会「緑友を語る」

日 時・・平成十二年九月十日（日）（長崎大会翌日）

場 所・・ハウステンボスユトレヒトプラザ第四会議室
（長崎県佐世保市）

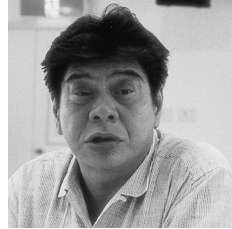
出席者



吉川 正敏 氏
名古屋而立会



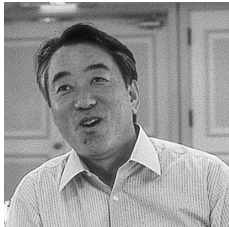
城戸 憲次 氏
茨城印刷緑友会
第十八代 会長



（司会者）
利根川 政明 氏
文京緑友会
第二十代 会長



佐々木 孝朗 氏
広島青年印刷研究会



松浦 正欣 氏
佐賀県印刷人若楠会
第二十二代会長



小倉 克夫 氏
茨城印刷緑友会



福田 信彦 氏
広島青年印刷研究会
第二十三代会長

利根川

皆さん、おはようございます。今日は早朝から緑友会の四十周年記念誌のための座談会に参加いただきまして、ありがとうございます。

今日は、ざつくばらんに当時の話を聞かせていただきたいと思います。

まず、竹田さんがご病気ということでご欠席されましたので、当時書記をされていました吉川さんにその想い出話や感想を、お聞かせ頂きたいと思います。

吉川

おはようございます。

ご案内を頂きまして、皆さんにお会いしたくて出席したわけですが、今お話がありましたように、竹田光弘さんが、名古屋の而立会から緑友の会長として出向させて頂いた時に、而立会の方から指名を受けまして、書記監事として二年間出向させて頂きました。すべての会議・大会・総会・セミナーに出席しましたが、本当に皆さんと交流ができて、思い出いっぱい二年間だったなと思います。

あの当時の思い出ということですが、過去の資料を紐解きながら、非常に懐かしく思いました。二年間いろいろと、竹田さんのお供でいろんなところをまわらせて頂きましたが、何にしても一番の思い出というのが、緑友会に台湾の印刷組合の方から招聘状が届いたということです。

当時役員会ではどうするかというのが問題になりましたが、緑友会の中でいろいろと皆さんのご意見を聞いて、招聘を受けようということになりました。それが六十年の三月のことです。

その当時の台湾視察レポートのファイルがちょうど手元にあったものですから、ここに持つてきました。後でお返ししますが、ちょうど若い利根川さんも写っておられて、なぜかこの写真には利根川さんが欄外に書いてあるものですから、たぶんカメラマンじゃないかと思えます（笑）。

中にいろいろ写真があつて、その中には、ちゃんと利根川さん写っておられるので間違いないと思えますが。（笑）

このレポートは会社の資料として書いたもので、今回のために書いたものではありません。ちよつと読ませて頂きます。

台湾視察レポート

昭和五十八年四月に、全国印刷緑友会の書記幹事に指名を受け、二年間職務を全うして参りました。任期満了が、昭和六十年四月であります。

昭和六十年四月に、台湾区印刷工業同業公会理事長林清河氏より、両国の印刷業界の発展と相互親睦を目的とした公対談の招聘状が、全国印刷緑友会の竹田会長の下へ届きました。緑友会役員会で、訪問団として行くことが決定しました。全国印刷緑友会竹田会長（名古屋而立会）より、ぜひ参加して欲しいと依頼があり私も役員として、参加することになりました。昭和六十年三月七日（木）～十日（日）三泊四日の視察団です。三月七日（木）八時三十分より、新東京国際空港

で結団式を行い、午前十時十分に日本アジア航空にて北京へとフライトしました。緑友会台湾区印刷工業同業公会訪問団は、全国より十三名であります。

三月八日（金）台湾区印刷業会館にて、活発な意見交換が行われました。特に雇用問題、労務問題について活発に意見交換が持たれ、各国の現状が発表されました。意見交換が終了後、台湾区の印刷工場栄民印刷会社を視察しました。感想としまして、印刷方式が日本の二十年前の印刷方式あり、また、日本の現在の印刷方式ありと、一つの工場で過去現在と様々な方式がとられています。また、一台の印刷機械を四〜五人が動かしているという過剰人員が見受けられました。用紙については非常に質が悪く、紙屋から入荷する用紙が波をうっている状態で、シーズニングをしてやらないと入荷してすぐに使用することができないという有様です。三月九日（土）も市内の印刷会社を視察してまわりました。設備を見ますと、近代的なカラースキヤナをはじめ、日本製品が数多く設置されています。三月十日（日）視察スケジュールを終え、午後一時二十分帰国しました。

という、まあ会社向けのレポートですが、これを読んでおりましたら、その当時の台湾に行く前に苦労した思い出、そして楽しい思い出が鮮やかに思い出されました。

もちろんゴルフもありましたし、夜の方も十分に紹興酒を頂きましたが、なかでも一番の思い出は、竹田さんと私と先程の理事長さん三人の座談会です。夜、三人だけで中国料理の料理屋さんに行きました。その時は、女の子が後ろに三人くらいつきまして……。

利根川

それは、知らなかったな……。ツイてましたねえ。（笑）

吉川

その時ビックリしたのは、理事長が札束を十センチくらいでしょうか、チップで積み上げて配っておられたのです。

私も紹興酒をいただいて、料理をいただいて、飲みつぶれてしまって、気がついたらホテルの部屋で、次の朝だったと……。でも、朝起きたら頭がすっきりしております、それ以来、紹興酒というのは、二日酔いしないものなんだなあと確信しております。次の日のゴルフは雨でしたけども、楽しくやらせて頂きました。

そんなのが二年間のいい思い出かなあと思います。

それと、もう一つ、竹田さんが非常に苦労されていたのが、次期の会長を決める際のことです。これは今も同じかもしれませんが、やはり次期会長を決めるというのは、制度を作って早め早めに決めておくというのが大事だろうなど、その時に思いました。

竹田さんが何回も何回も、九州に足を運ばれていましたけど、大変ご苦労をされたみたいです。会長を受けた時に、次の会長が決まっているというのが理想ですね。私も書記幹事という立場として、そんなことが竹田さんの苦労した思い出として、残っています。

利根川

ありがとうございます。

今、お話を聞いておりました、その台湾のお話というのは、全然我々に報告がなかった（笑）事実ということで、貴重なお話をありがとうございました。

まあ、緑友会が初めて国際交流をしたわけですが、工場見学に行ったところの工場長が女性の方でしたよね。マサチューセッツ工科大か、どこか出られた方で…。だんだん記憶が蘇ってきました、ありがとうございます。

さて、城戸さんの時の緑友会は、どんな緑友でしたか？

城戸

そうですねえ。吉川さんもおっしゃってましたけど、私の時も次期会長というのが大きな問題でした。

陰で次の会長が選ばれているとか、いろいろ問題がありました。あの時は、ちょうど長野の塚田さんという方が、「私がやります」といつて出られたんですね。でも緑友会というのは、手を挙げた人は絶対に会長になれないというジンクスがある、というわけかね（笑）。これ、不思議な伝統ですね。結局、私がやることになりました。

会長というのは、みなさんのお世話役ということです。だから、会長はお手伝いのトップをきる、ということですから、かなりキツイ面もあるんです。伝統という意味では緑友会は伝統を重んじるというか、大事に思っている会だと思いますね。でも、何が一番大事かっていったら、やっぱり、心しかないとはいえないかと思うんです。まさに、今インターネットとかEメールとか機械が増えているのに、実際に会う機会がだんだん少なくなってきていますから、これからは特に大事なものは心じゃないかなと思うんですね。私の時も、ずっと同じ方向に流れてきたものが、ちょっとここで方向性が変わってきたな、原点に戻そうじゃないかということ、私が会長をすることになったと思うんです。そうでなければ、別に私でなくてもよかったですね。

それで、神戸のセミナーなんか、弁当・・・「箱弁」でしたよね、それでみんなで討論をするという形をとっていましたよ。まあその後の二次会なんかでお金を使ったかもしませんが、逆にね、欲求不満がたまっちゃったりしてね（笑）。そういうことをやりながら、原点を大事にしています。緑友も時代と共に変わるのとは当たり前だとは思いますが。でも、変わってはならないものに「緑友の心」というのがあると思いますね。企業だって、全部考え方の違う人の集まりだからね、ハートが一つになってないと、バラバラになってしまうというおそれがある。今、十何年かぶりに緑友の会議に出て、「あれっ？」って思ったんです。今果たして心が一つになっているのかなというね。まあ、こんなこと言っちゃいけないのかもしれないけど、本当に心というものが、一つの基本になつてくるといふ心配がちょっとありますよね。

しかし、若返っていることは確かですよ。知ってる人が、ほとんどいなくなったよね。まあ、

それは素晴らしいことだと思うし、やり方・方向が変わっていくのは、それはそれでいいと思うんです。でも一つの柱は心であって欲しいという願いはずっと持っていたいし、そうでなくてはいけないと思っています。

それから、私の時には総会が北海道で、大会が沖縄でした。広い日本を最高に振っちゃったわけですね。そして、先輩連中から怒られましてねえ。行きたいところが一年のうちは何ヶ所もあって、これじゃ全部は行けないじゃないかというふうだね。二年に分けてくれれば、行けるのにと言われてね。でも、そういうふうに先輩連中も楽しみにしていたということは、非常に嬉しかったですよ。

緑友のOB会という話もあるみたいですね。実際は年代年代で、いくつか会ができています。ですから、そういうものをつくる必要がないと思うんです。まあ大会などの時に、集まって下さいと声をかけるのは必要かもしれませんけど、OB会を作っても、なかなか人は集まらないんじゃないかというのが、私の意見なんです。古い方達は十年単位くらいで会ができていますよ。

それがだんだんできなくなってきた。やっぱり心がバラバラになったのが原因じゃないかと思うんです。これからもずっと続く緑友は、仲間を大事にして、心でつき合っていくということが大事なんじゃないかと思うんです。

そういえば、宮地さんは、お元気ですか。

松浦

ああ、お元気ですよ。

城戸

この頃からメンバーが、セミナーなどの講師になるという世界をつくったんです。原点にもどるということで、宮地さんにも講師になって頂きました。

松浦

ああ、金沢大会の時には、宮地さんが講師になったんですよ。それは、城戸さんの時でしたか。

城戸

そうなんです。

メンバーが講師になるということは、自分の企業の内部をさらけ出すことになるんです。みんな、この世界のプロだから、本音を話さないと分かっちゃうでしょう。だから、自分の会社の内容を全部話してくれたんで、それはもう有り難かったですね、お互いに心を割って本音で話し合えたというのは、最高だと思います。普通なら隠すところも隠さないでね。そういう想い出がありますね。

コミュニケーションを良くするという思いだけで、二年間過ぎたというような感じかな。

利根川

ありがとうございます。城戸さんが、十八代ですよね。で、十九代が今日ご欠席の白井さんです。

第三十四回の総会の札幌総会で、城戸さんから白井さんにバトンタッチされたんですよ。この時からブロック担当を決めておこうということで、ブロックごとにブロック担当の常任幹事が出来て、それからイベントの常任幹事というふうに分けたんですよ。

城戸

そうそう、会長がひとりでは全国を回りきれないというのがあって、みんなの力を借りたいということ、そういう形をとったんだと思うよ。

利根川

そうですね。例えば、北海道・東北が札幌青年印刷人の伊藤さん、それから関東・甲信越が長野の高木さん、神奈川の川上さん、東京が新生会の柴崎さん、中部が名古屋の岡田さん、それから近畿・中国・四国ということで神戸の梶原さん、大阪の矢谷さん。それから九州北で福岡の玉川さん、九州南・沖縄で笠木さんということで、さっき言ったように、初めてイベント担当常任と

いうのが入ってきたんですね。

で、十九代の白井さんのあとに私が二十代ということ、大分で白井さんからバトンタッチをされまして、私の会長時には九州の大分で始まって、九州の長崎で会長交代ということになったんです。

大分の総会のあと、青森でねぶた祭りの時に大会をやらせて欲しいということで、初めて青森のねぶた祭りに合わせて大会をやりました。大変大勢の方が集まって、まあ、夏休みというのもありますからね、でもすごく寒かったですよね。ねぶた祭りを、皆さんで楽しく見たという想い出があります。で、その後は福岡でセミナー、次に仙台の作並温泉で総会をしまして、大阪で大会。三井アーバンだったかな、次に名古屋でセミナーと続きました。

ところで、私の時の大きい事件といえば、平成七年の一月十七日の阪神大震災なんですね。

神戸の梶原さんに電話するんですけど、電話が全然通じない。そのうちニュースで大変な被害が出ているということで、グループ長で集まる時間もないもんですから、早速各グループに義援金をお願いをしました。

各グループから本当に多くの義援金をいただきました。最終的には約七百万円になったんです。確か名古屋セミナーで神戸さんが来た時にお渡ししたかと思えます。本当にこれは、緑友の友情の証だったなあと思った記憶が蘇ってきます。

ちよっとデータを見えますと、昔新潟で地震があった時にも、緑友会が支援をしたということ聞いています。

その時、神戸では何人か仲間が家を失ったり、会社が倒産したりしまして、残念な出来事だったなと思います。

それとチャーターメンバーを調べたんです。そしたら十三クラブあったんです。

その中には長崎の長生会さんや郡山凸凹クラブさん、それから秋田さんがあって、もう一回緑友に戻って下さいということでも郡山に行ったり、秋田に行ったりしました。その結果、秋田と郡山凸凹クラブが緑友にカムバックしてくれたんです。それと徳島に会があるというので、当時西岡さんと一緒に緑友会への入会のお願いに参りまして、結局、私の中で三グループが新規加入、再加入してくれました。

それから緑友会の歴史なんかを常任幹事に分かってもらいたいというので、当時二十年記念誌「道程」から抜粋して、生い立ちとか、緑友会のマークが何で出来たのかなど、ずいぶん皆さんに送った記憶があります。

それと周年行事のことや、定年制の事や、各回の会費のことなど、アンケートを取って調べたことを記憶しています。次の世代に渡すような架け橋役だったかなと感じています。

それと当時緑友会を説明するのにも、何にもないというので、当時米倉さんがいろいろアイデアを出して、緑友インフォメーションを初めて作ったんですね。

城戸

そう、心でまとまっている会だとはいつても、言葉では説明のしようがないのね、そこでこんなふうな会だよということでも、やったということだった。まあ、会費値上げでだいぶ揉めてね、会員数が少ないもんだから会費の値上げをしなくちゃならないということがあって、会員増強ということをかなり意識してインフォメーション作ったんですね・・・。

利根川

うん。あれはちょっと格調が高すぎてね、余計わかんなくなっちゃったんで、もっと簡単にしようってんで、三つ折りにもう一回作り直させて頂いたんです。当時の印刷新聞で、緑友精神の再認識のためのパンフレット作成という記事になってるんです。

さて、佐々木さんは、長尾さんの時には書記をされていたんですね。

佐々木

ええ、長尾さんの時には書記をさせて頂いてまして。

総務が北海道の伊藤さん、会計が神奈川の西岡さん、書記が私、で、小倉さんがブロック担当とこののは覚えております。

ちょうどその時には、世代的にも、原点に帰りたいというイメージがあって、こういうメンバ

構成になりました。

その記録ということでは、その二年間の会議のテープというのは、全部長尾会長のところにとつてあります。

議事録を作成するというのは、初めての経験でしたが、作成するにあたっては、いかに要約して載せるかということにきましたね（笑）。

情報ネットワークの推進委員は、利根川会長から引き継いだ事なのですが、これも委員によつて内容的に理解の難しい方そうでない方と、いろいろあったかと思いますが、でも、新しい動きとして非常に良かったと思います。

あとはその時にもやはり、会費問題でずいぶん苦労されて、いろいろアンケートとつたりね、まあいろいろありまして、長尾さんも大変苦労をされました。

利根川

小倉さんはもうその時は・・・？

小倉

はい、長尾さんの時は広報です。情報ネットワーク推進のまとめ役とマネージャー役として、連絡役をやりました。フレンズオブグリーンに情報ネットワーク推進委員がやった講演はすべて載せて、記録としてとっておきました。

利根川

それと、ちょっと話は戻りますが、神戸の震災ですべての人事が狂いましてね。本来、神戸の梶原さんに次年度会長を、内諾を得て進んでいたんですけど、突然の震災で梶原さんのところも被害にあつて・・・。次年度の会長を決めるのに、本当に頭をいためたんですけど、これに関しては同友会の榎本さんに大変お力添えをいただきまして、長尾さんを口説くのに何回青森行つたか・・・。

この時緑友の友情のありがたさというのを痛感しました。

長尾さんが、はじめて緑友の行事で山梨に来たときに、同友会の榎本さんと一緒に部屋になられたんです。

それ以来長尾さんは榎本さんを、緑友の先輩としても、経営者の先輩としても尊敬されるようになり二人のお付き合いが始まったんですね。

それで、これは榎本先輩に動いてもらわないと、事が治まらないと言うことで榎本さんと一緒に、ずいぶん青森に行きましたね。

長尾さんに一升瓶二本ぐらい置かれて、歓待されました。

飲むのに大変苦労たのですが、やっと長尾さんを攻め落としたというエピソードがあるのですけれど、会長選任というのも、今は割とスムーズにいくんですけど、当時は大変だったんです。

城戸

他の人からは陰でコンコンやってるだなんて、いろいろ言われたりもしたよね。

利根川

長尾さんが会長になって、いろいろといじめられたり、なだめられたり、誉め殺しにあってたり、かなり苦労した会長の一人だったと思います。

私も、いつも直前の立場で会議に参加しながら、はらはらしたり、気の毒になったりしていましたね。

長尾さんのあとに松浦会長になりましたて、ご存じの通り、物事を大変はつきりさせる会長の登場ですね。

松浦さんにお話をお伺いしようと思います。

松浦

そうですね。一言で言えば、大波乱の二年間だったですね。

あの神戸の震災の影響なんですよね、私の場合も。大体五十歳を過ぎて、会長をやるなんていうことはないと思っけていますし、地元の若楠会では、引退宣言をやって、息子と代わることにしてたんです。人間引き際が大切だったね。

それなのに、なんで引き受けたかといいますと、やっぱりここでひとつのケジメをつけたいというのがあったんですね。長尾さんの時からずっとひっぱってきたというか、長尾さんがずいぶん苦労しておられたのを見てたんです。

ちょうど世代交代の過渡期に長尾さんがいたと思うんです。だから、あの時の常任の皆さんを見てみると、その前の世代とかなり変わっているけれども、まだ完全には変わっていない。で、そこに昔はこうだったなどといった、議論以前の問題が発生して、長尾さんが大変苦労されていたんです。その姿をずっと見ていたもんですからね、やるとすれば、長尾さんが考えていらっしやったことをきちんと白黒つけて、次に渡すのが私の仕事だろうと思っただんです。

会長就任の山形総会に意気込んで行っただんですが、こっぴどい洗礼を受けることになるんです。問題は大会の前日に行われた山形プレ総会ですね（笑）。まあ、多少は予想していた部分はあるんですが、あれほどひどい事になるとは思っけていませんでした。たぶん執行部原案のほとんどがボツになったというのは、緑友史上、私が初めてのことだと思っけんですが。たとえば四十周年記念誌をつくるのに事業は認めるが予算はつけるな、という一人の人の意見が通っけてしまっけて、予算ゼロになってみたりというような、ここで話していたら一日ではすまないぐらい、いろいろありましたね。しかもその殆んどが議論などと言えるものではない次元の低い内容だったですね。

まあ、よく言えば、常任とかグループ長のみなさんに、もつと緑友について考えて頂く材料を提案できたのかなと。まあ、そのくらい思っけないとやりきれないという部分もあるんですけど（笑）。で、最初が四十周年の東京大会ですね。

この実行委員会の中でも世代の違いなのか、物の考え方が違ってきて、そこで摩擦が生じてきましてね。

なかでも、宿泊や二次会の場所を実行委員会が計画をしているにも関わらず、力を持った人が個人的に別のところに場所をおさえて勧誘するとかいうことが平気で行われたんですね。昔はそれでもよかったのかもしれないんですけど、今の人にはそれは許されないという感覚があつて、それでギクシャクしてきた。

大会そのものに関しては、場所が高かったという問題はあつたかもしれませんが、私は大会そのものは非常に努力されて良かったと思つています。

それと東京の人は違うかもしれませんが、我々が九州あたりから出ていくと、お台場のホテル日航に一回ぐらい泊まってみたいという観光気分があるんです。ですから、私なんかは喜んで女房と二泊してきたわけです。

東京大会そのものは、三十周年の大会の時から私は参加してはいますが、それと比べると弱冠地味になつたということがありますが、時代が違いますからそれでよかつたんじゃないかと思つています。

次にあつたのが仙台セミナー。

これもかなり特色があるというか、今までのセミナーの中でも、非常に特色があるセミナーで、会場でセットされた二次会費なども含めると、たぶんあの時の登録料は三万五千〜六千円くらいになつたんじゃないかと思つています、それでも仙台の中村会長がいつも常任幹事会やグループ長会議で「登録料が高い」と叫んでいる人たちと親しかつたもので、すんなり通つてしまつたんで

す。非常にありがたかつたというか複雑な心境だつたですね。

その時は十人くらいのグループに別れて、それぞれ別々のテーマでバズセッションをするというようなことでやつたんです。セミナーの内容は良かったんですが、この長崎大会よりもっと大会らしいセミナーだつたというような気がします。

ところが、翌朝とんだハプニング。翌朝の常任幹事会で突然仙台の緑友会脱会宣言がありまして、理由は人が集まらなかつたということだつたんです。でも、これまでのセミナーと比べても少なくなかつたんですがね、むしろ多いくらいだつたんですが・・・。

人は常任が集めるべきだ、我々はお膳立てするだけだ。そういう訳で脱会宣言をされたんですが、まあ、これは宣言をされただけで、実行はされなかつたんですけれど。

そういうことがあつて、仙台の内情もよくわかつてきたんですが、僕の話はいい話ができなくて困るんです・・・（笑）。

でも、あそこの温泉はよかつたですよ。温泉に入りに行くつもりなら、非常にいいセミナーになつたと思つています（笑）。

次の青森総会では中間の総会ですので初めて無難に終わりました。

実を言うところの時点で、長尾さんから引き継いだ会則変更を最終的に決めてしまおうと思つていたんです。

でも、いろいろ考えるとなかなかそうもいかなかつたので、来年の総会できちんとしたものを出しますので、ここで暫定的に出させて下さいということ、付則のところにかんりのたくさん

の情報をいれて、一応それで通して頂きました。

一年目はそういうことで、すごい大波乱の一年だったわけですよ。

青森総会でちょっと中だるみをして、次が鹿児島大会ですね。非常に格調高い大会でした。

ここでの収穫は、久しぶりに京都さんが参加をされたんです。それまでは、ほとんど死んでいらつしやったんですが・・・。

実は、僕が会長を引き受けた時に、すべてのスリーピングの会に電話をしたんです。「もし、もう出てこないのであれば、正式にやめてくれ」と。京都さんにもそういう話をしたんですよ。そしたら、「ちょっと待ってくれ。次に例会があるから、その時にみんなに諮りたい」と。で、たぶんもう辞めようという結論になるだろうと思っていたんですが、いや辞めないということになって。で、次の鹿児島大会には来ますということなんですよ。

森田さんに滝本さん、それから、よく分からない人も（笑）ついてきまして。その上、懇親会の二次会の時に、酒を飲んでいたら、「おい次のセミナー決まっていだろうか？京都やるよ」と二人が言うんです。「ホントですか？」とびつくりして。本当にやるかどうか心配だったもんで、大会から帰って、大阪の松口君に電話しました。「ちょっと確認とってくださいん？あの人たち酒も入っていたし（笑）」ということ、確認をとってもらったら、本当にやりますということ、これはやっぱり嬉しかったですね。

僕が入会したころに京都でセミナーがあつて、それ以来まったく彼等を見ていなかったものですから。復帰されて、本当に嬉しかったですよ。まさに彗星のごとく復帰されて、今ではもう

日本で一番輝いているグループになっています。

次は名古屋セミナーですね。ここでは、ひとつきちつとセミナーらしいものをやりたいと思いい、それはやっぱり名古屋さんにやって頂いた方が一番いいと、そう思ったんですね。それで名古屋さんにお願いをして、その後の京都セミナーと比べても対照的だったんですけれども、セミナーらしいセミナーやっていただいで、非常に良かったと思います。

ここまでが少し平穏になってきたところですけども、ご存じの通り、最後の徳島総会、これは総会に入る前が熾烈な闘いがありました（笑）。一番苦労されたのは、徳島の皆さんかと。十三人だったですかね。本当に苦労されて、たった十三人のメンバーで徳島総会を主管されました。いつものことですが、色んな横槍を入れる人がいて大変苦労をされて、主管の辞退寸前までになったんですが、神戸印刷若人会の応援もあつて総会の運営は完璧だったですね。

ただ議事に関して言えば、またまた会則の変更を先送りされてしまい、個人的には最悪の結果に終わった総会だったですね。

しかしここでは、徳島の人たちの持つている人間性というか、気概というか、そういったものをつくづく感じさせてもらって、私の好きな場所や人たちが増えたことには感謝しなければならなと思います。

これは良かったね。というようなことをたくさん話したいのですけれど、悔しかったことしか残ってなくて、話をしている、オレは二年間何をやってきたのかなと思います（笑）。

今でも思い出すと夜寝付けないときがありますが、まあ、それはそれなりの人生というふうにあ

きらめてですね。何とか、昨日の長崎大会で宿題が終わって晴れて卒業できるような気がしています。

利根川

はい、ありがとうございます。

会長職の時というのは、なるべくグループを減らしたくないのが本音なんです。

何とか引き延ばして、お金が入らなくても名前を残して、帳尻を合わせようというのがあるんですけど、松浦さんは逆に、音信なくてというところは切り捨てていこうと、いう大胆な行動に出られた方だと思うんです。

それは大変な勇気があって簡単なことではないんですが、そういうなかで、京都が元気に息を吹き返したことは嬉しいですね。まさに、都はまだ京都だというような感じで頑張ってくれました。

次は現役の福田会長なんですけども、現役ということで逆に会長の方から皆さんに聞いてみたいことや、それからエピソードやなんかをお話いただければと思います。

福田

私の場合は、徳島から会長になったわけですが、その時会則変更案が全部否決されて、情報の流れが悪すぎるんだらうなと思いました。で、とにかく一つのことを決めるのに半年ぐらいかけて、毎月グループ長にここまで話がきてる、文句ないかと意見を聞く形で、根回しをやって

きました。

それから、もう一つ、常に登録費の問題が出てました。

もっと安くしろといつももめるんです。それで、グループ長・常任幹事会で上限を決めてもらいました。それで、もうもめることがなくなりました。

イベントの企画も、去年通り、去年通りと以前のビデオを見て、その通りにやるといのは参加しても面白くないと思ってました。ですから、僕が会長になった年にちょうど広島大会がありましたんで、お祭りだし余計な部分を全部省いてしまおうという話を当時の広島の会長に話しましたら、じゃあそうしようかとなったんです。

ところが、驚いたことに反対が出たんですよ、そんなに変えていいのかと。じゃあどうしようかと困りました。それで、もう一回みんなで緑友って何だろうという勉強から入りました。

ちやうど中村守利先輩の講演の印刷物をもらったんで、それらを読んで若い連中に話し合ってくれと言ったんですけど、なかなかまとまらなくて、最後には会報に載せるようにしたんですが、どのような形で載せるのか十人くらい集まって議論をしたりしました。

このような形で、緑友はこうしてできたんだと言うような勉強の期間を半年ぐらいつとりましたんで、あれでメンバーが緑友を理解してくれて、大会運営がずいぶん上手くなりましたね。

そういつたことで、僕らは、次世代に緑友会のことを受け渡したと思っっています。だから、広島大会が終わった後に主管グループに一切文句はつけないでやってとグループ長さんや常任の方にお願いしました。

ただし、こういうことだけはやってもらおうようにと言ったんですが、これをマニュアルにしてしまうと、またそれを見てそのとおりやらなければならぬと言う人が出てくる、それが今の最大の悩みですよ。

だから原点に戻る事が大切なんです。

次世代に緑友会のことを伝えるために、イベントの主管をするんだという気概を持っていたかかないと、たぶんうまく流れていかないだろうという気がします。

時の会長は、いかに次の世代を育てて会長を辞めるかということに主眼をおいていたかかないといけないと思うんです。

それと、僕の時代は、今年の予算案にしましても、はなからマイナスで、つまり収入が減ることを見込んで予算案を組んでいました。だから、新規グループの開拓もしますが、それよりも防戦一方で、どこか辞めそうなのがあったら、すぐに行つて辞めないでと言いました。そういうことが何回かあつて、今はもうだいぶんラクになりました。

それと、僕らが行くと何かを主管させられると殆んどどのグループが警戒をされるんですね（笑）。徳島の総会も、松浦さんに「徳島が最近沈んでいるので、ちょっと行こうかな」といったら、じゃあ、二人で行こうということになったんです。で、その時に「何しに一緒に来てるんです？」つて聞いたなら「いや、次の総会の主管をしてもらいに」つて言うんです。「いや、それはちょっとまだ早いんじゃないですか、向こうはやめるかどうかという話をするのに（笑）」と言ったんですが、ところが、がまんのかかないひとで、徳島に行つたらすぐ「実は・・・」つていきな

りプチあげてしまつたんです。

向こうもびつくりしてたけど、結局あれで徳島に火がついて、今ではもう常任幹事もだしている。

やっぱり、人それぞれのやり方があるんだなと、つくづく思いました。

それとインターネットが発達して、常任幹事会全員メールでやりとりできるようになったのが良かったですね。総務もラクになりました。

グループ長の方も今はもう半分ぐらい持たれてますんで、連絡はほとんどメールで済んでしまつてしょう。

でも、最初は、メールだけで済ませてしまつていうのはやはり弊害があるんじゃないかと、どうしても相手のことがわからないと、書いたことの真意が伝わらないという部分もあるんじゃないかと思つたんですね。

冗談のつもりで書いたきつい言葉が真面目にとられたりと、それを一番心配してはいたんですが、実際は逆でした。そういうふうになっていくと、逆に集まつた時にじゃあ今のうちにもつと話をしておこうということになるんです。

だから、今、常任幹事は非常に仲がいいですよ、気持ち悪いくらいに（笑）。

松浦

だから、さつき城戸さんが最初におっしゃつたような昔のように良い雰囲気になつてきたんですよ。

僕が宮地さんの鞆持ちで付いて行ってた頃の常任幹事会なんですが、城戸さんとか、利根川さん達がいらっしやった頃、僕らからしてみれば入り難いところがあって、この人達だけがガチッと固まっている、という雰囲気だったんですね。

我々はもう一歩も入れない、そういう雰囲気でした。そういう意味では非常に仲良かったですよ。

それがだんだんいろんな方が入ってきて崩れてきたというか、それはある意味でいいことかもしれないんですが、それが行き過ぎて、あまりにもバラバラになりすぎたかな、というところがあったんですね。

それが、緑友サーバーを使い出してから雰囲気が変わってきましたよね。

年に一度か二度しか会わない人でも、普段メールでやりとりしてるから、妙な親近感があって、久しぶりに会ってもついこないだ会ったみたいなね。

何事も「程よい加減」というのが大切なんですね。

利根川

それでは最後に、今、業界も大きな変化を迎えています。これからの緑友会に期待するということ。これを皆さん順に一言ずついただけますでしょうか。

吉川

竹田さんの時の二年間の内のスタッフの中で中村守利さんの存在というのは非常に大きくて、いろんな会議の中で、中村さんのご意見が出てました。

緑友が誕生して今に至るまで、脈々と続いている緑友の心がやっぱり大切だし大きいと思います。それと、会計監査の辺見さんのご意見も、印象に残っています。セミナー・総会にしても、スケジュールにしても細かいところまでチェックをされていた、そんなことも一つ想い出にあります。

新しい改革というのも大事ですけど、やはりそういう緑友の基本というのは、これからも持ち続けていって欲しいです。中村さんの講演を先程読まれたということですが、その当時の竹田さんの二年間というのも、基本を非常に大切にされた二年間だったと思います。

利根川

はい、有り難うございます。

佐々木さん、何か一言、ございましたらお願いします。

佐々木

はい。私は世代交代の波の時期に、ちょうど在籍させていただきました。

利根川さんのころからその兆しが出て、執行部あるいは全体の中で事情が全部わかる人からと、

長尾さん、松浦さんと、出ていただいて、完全に世代が変わりました。ですから、当然使う道具というのも変わってきました。

しかし、緑友の根底にあるものは同じですから、やはり途中にはいろいろな産みの苦しみというのもあったかと思いますが、それに懲りないで産みの苦しみだとプラスに捉えられて、現在の世代を作ったのかもしれません。

次の世代になる方は、ベースになる緑友の根底のものを失われないようにしながら、もつと思いつきりやっていただければよいと思います。

利根川

はい、ありがとうございます。

城戸さん、いかがでしょう。

城戸

そうですね。私もこの四月で引退しました。せがれと代わりましたので、今日もOBとして出てきていますが、いつも話しているのと同じですね。

心、緑友の心、精神というのは、先輩達がつくった基本です。それは一番大事にしてもらいたい。それが根底に流れていけば、どう変わってもまた軌道修正ができるんですね。それが崩れちゃった時には、戻すところがなくなっちゃいますから、それだけは守っていただきたいという

思いが、緑友学校で勉強した生徒として一番大切にしてほしいと思います。それだけは、伝統として延々と受け継いでいただきたいと思います。

利根川

ありがとうございます。では、小倉さん。

小倉

今お話を聞いて、あらためて緑友のすごさや、深さ、そういうものを勉強させていただきました。

その時その時にいろいろな障害があったと思うんですけど、一つ一つちゃんと乗り越えて、こうやって綿々と続いている。これからも、それを伝えていくのが、四十周年記念誌編纂担当としての私の仕事なんじゃないかと思いました。

利根川

はい、ありがとうございます。では、私の方からも一言。今までもずっとイベントをして、失敗したとかマイナスとかはほとんどなかったんじゃないかなと思います。それはやっぱり緑友の素晴らしさじゃないかと思うんです。先程言われたように、緑友の友情と研鑽という基本を失わなければ、手法はいくらでも変えていいんじゃないかと思えます。この緑友会の意義というのは、

我々が経験したことが、ただの印刷業というだけではなくて、自分の人生の一ページとして残っていくことにあるわけで、こんな素晴らしい出会いの会はたぶん他にはないんじゃないでしょうか。それをずっとやっぱ若い人に伝えていきたいなと思うんです。

「オレはこんな時代に緑友会にいたんだ、それで全国に友だちもできた」そういう緑友会の本当の素晴らしさというのを永遠に受け継いでいってほしいですね。ぜひそういう意味で若い人に期待していますし、また業界も大きな変わり目にきています。本当にこれから緑友会を百年・二百年、永遠に続けていきたいと思います。我々も微力ですけども、語り部として、小さな縁の下の力持ちになればと、そんなふうに感じています。

では、松浦さん、いかがでしょうか。

松浦

そうですね。二年間会長を務めさせていただいて、本当に時代の変わり目だということを感じました。

緑友が持っていた大事な本質の部分のひとつに、永遠に変わることのない、「緑友の心」というものがあります。

それと、最近の若い人たちに会議とかそういったことに対して、大変勉強されていて、非常に理論的な考えを持っていらっしゃる方が多くなってきたということです。

特にJCに所属された方が、グループ長・常任幹事会に出席されて、その方が議事法なんかを

勉強されていると、ちょっとこれはおかしいんじゃないかというように思われるんですね。

そんな方からたくさんさんの意見が私のところに来ました。「あなたもJCやってたんでしょ、なんで会議は、きちんとロバートールなんかを使ってやらないのか、こんなに混乱する会議は二度と出たくない」と。そういう人たちがだんだん増えてきているんです。

彼等は理性的な部分で組織として効率よく、しかも民主的に運営していくために言っているわけで、緑友で大切なその精神の部分はどうでもいいと言っているわけではないんですね。その精神をきちんと守るためには、会議なんかはもつときちんとやらなければならぬと言っているんです。

中村守利先輩もお話のなかで、理性と感性についてお話されましたけども、理性は理性としてきちんと生かしていく、それはもともと持っていた感性を守っていくためにあるんですよ、そういう科学的な考え方といいますか、そういう部分を持っている方が増えてきたということ、今後の緑友会の運営もかなり変わってくるような気がします。

今度の四十周年記念誌で、これまでのことをちゃんと受け渡すことができれば、もっと素晴らしい緑友になるんじゃないかと思えます。

利根川

はい、ありがとうございます。

では、これで、今回の座談会を終了させていただきますと思います。

みなさん、ありがとうございます。

第二回 座談会「緑友を語る」

日 時・・平成十二年十月十七日

場 所・・札幌・百留屋

出席者



長尾 良宣 氏
青森県印刷青年経営者会議
第二十一代会長



竹内 一博 氏
札幌青年印刷人の会
第十七代会長



(司会者)
松浦 正欣 氏
佐賀県印刷人若楠会
第二十二代会長

松浦

今日は、全国印刷緑友会四十周年記念誌の為のハウステンボス・次ぐ二回目の座談会を札幌で開きました所、お忙しいなかご出席いただきまして誠にありがとうございました。

今日ご出席の竹内さん、長尾さんに会長をされた二年間のエピソードをお話して頂いて、最後にこれからの緑友会の若い人たちに言い残すことがあれば一言お言葉を頂きたいと思っております。では、竹内さんの方からお願いします。

竹内

はい。福井総会で就任致しまして、それから三十周年の東京大会、セミナー、総会、佐賀大会と続き、名古屋セミナーの後青森総会で退任という任期でした。

私は十七代目の会長だったんですが、実は、ちょうど三十周年を迎えるという事を知らずに就任したんです。

といいますのも、当時は神戸から初の会長選出ということで、神戸の和田さんという方が会長に就任されることがほぼ決まっておりました。

ところが神戸の和田さんが会社の都合か何かで退会されたので、後任をどうするかずいぶん悩まれた結果、南の福岡の古賀さんから北の果てまでお話が降ってきたわけです。

その時の驚きや戸惑いはかなりのものでした。

私が所属しております札幌青年印刷人の連中にもなかなか本気にしてもらえず、応援がなけれ

ばこれはとてもできないなと思っておりました。

当時は自分の所属クラブから総務と書記を出しておりましたが、日程的にも金銭的にもとても連れていける余裕ありませんでしたので、誰に頼もうかという思案致しました。個人的にお引き受けできると申しましたが、これは一種の内閣ですから、内閣を形成するにあたって、官房長官と総務長官がいなければ話になりませんからね。

その時一番苦労したのが逸見さんの存在だったですね。

彼に対する評価は二分していたわけですが、緑友のことはとても詳しい人ですし、取りあえず相談しておいたほうが良いかなと思ひまして相談したんです。

私は札幌ですし、毎日顔を合わせるわけでもないですから、ざつくばらんに相談をしてみました。ですが、その過程で一種険悪な雰囲気になりましたね、嫌な思いをだいました。

そんなことをしておりましたら、初めて三十周年ということがわかりまして、記念の年の会長ということ、二度驚いたわけです。

人事で悩まされた上、記念大会になるということも聞いておりませんでしたから、そういう意識のないまま簡単に引き受けたのが運のつきでしたよ（笑）。

緑友会が三十周年ということは、長野が三十周年、神奈川正和会も三十周年、他にも三つくらい周年行事がありました。それに全部出席することになりました、結局全国をまわったのは、歴代会長でも私が一番多かったんではないでしょうか。よく日程が調整できたものだと思います。

本当に無茶苦茶な二年間だったんじゃないかな。

その上、セミナーも大会もかなり遠方で、佐賀大会の時は北の端から南の端でしたから。とにかく、全国走り回ったという思い出があります。

退任してから十二年経ちましたけど、お陰様で千人を超える仲間と知り合えました。まあ、そのうち名前と顔が一致しているのは百五十〜二百人と行ったところでしょうが（笑）。

今でも、全国どこに行っても向こうから声をかけて頂きます。

皆さん組合の幹部の委員長を務めてる方とかね。緑友のメンバーがたくさんいらつしゃって。

そういう十二年間の実績を見てみると、本当に勉強して学びあったことは貴重だったなと思います。

緑友を経験していなければ、組合の幹部など務まりませんからね。あの何年間かは、今の自分にとってもすごくプラスになったと思います。

札幌だけではなく全国の仲間と知り合えたということもとても良かった。

それから、私の時から始めたことだったと思うんですが、会長が二年間で何を成すかという目標として、スローガンを作ったんです。それが今でも残っていて、非常に嬉しいことです。

「ネットワーク」「フットワーク」「チームワーク」という三つのワークからとって「三つのW」いうんですが。これは、コンピュータ時代を予想すると同時に印刷業界が情報化時代に突入することを予想したもので、全国の仲間がインターネットで繋がっていくというね。その時はまだ今のような危機感は見えていなかったんですが、まあコンピュータによって何かが変わっていくのではという予感がしまして、その予感通りになったことは、緑友冥利につきます。時代の流れが

自分で考えていた通りになったというか、業界の変遷を感じ取れていたということがね。

それからやはり時代的背景としては、昭和天皇の崩御が大きく影響しましたね。

特に佐賀大会の時は苦労しました。

ちょうど昭和天皇がご危篤の頃で、世の中は緊縮ムードでしたから。その中で準備を進めるといふのは大変でしたね。結局最終的には私が責任を持ちますということで、組合の方ともお話しせてもらいました。

また参加者もたくさん集まりましたしね。

松浦

そうですね。私は佐賀大会の折には実行委員長を務めさせていただいております。

あの時は芸子さんを百人あげたんです。

長尾

今でも嬉野温泉の佐賀大会という歴史に残る大会として語り継がれておりますからね。

何百畳敷きの畳に会席料理が並んだんですよね。

松浦

あれは、和多屋別荘の協力もかなり頂いたんですよ。

料理も有明海の漁師さんに頼んだんです。和多屋さんには持ち込み料なしでということ交渉しましてね。その日の朝有明海で上った魚や蟹を調理して貰ったんですよ。

竹内

百人の芸子さんがずらっと並んでの出迎えは、平安絵巻を見るようでしたよ。

長尾

その時は、実は私はまだ緑友会には参加してなかったんですよ。三十周年大会で初めて参加させて頂いて、その後山梨の石和温泉に行った時から、緑友会の皆さんとは親しくさせて頂くようになりました。

松浦

そういえば、長尾さんも緑友会会長就任は結構急なお話だったようですね。

長尾

ええ。利根川さんから次期会長のお話を頂いた時は、何のお話かと思いました。

それで、先程も竹内先輩がおっしゃられてましたが、緑友会の中でも次期の構想がちゃんとして、次期会長は三役経験された方の中からというお話を聞いておりましたから。

ところが、利根川さんからお話を聞いた時には、実は本来ならば神戸の梶原さんがおやりになるべきところ、結局、梶原さんが無理だということで、私のところにお声がかかったんです。

とてもできませんと断り続けていたんですが、東京の榎本さん、利根川さんがわざわざ青森までお見えになったんです。おまけに中村先輩からお電話まで頂きまして。

また、榎本さんとは先程お話しした石和温泉の時に同室になったのが縁で、個人的におつきあいをさせて頂いていたこともあって、これだけの方に頼まれてはお断りもできなくなりました。

ただ、私は常任幹事の経験ありませんし、緑友会のことにはよくわかりませんから、利根川さんのお力も随所でお借りする形でお引き受けしたんです。

長崎の総会でご承認頂いた時は、本当にこれでいいのかと緊張のしっぱなしで、正直な話、今だから笑い話で済みますが、セミナーが常任幹事主管だということさえ、わかっていないような状態でお引き受けしたんです。

その時に利根川さんといういろいろとお話した中で、緑友の理念・原点というのはやはり各グループ同士の連携機関である、やっぱりネットワークだということ先輩方にも教わりました。自己実現の為に自分で勉強して行って、そして触発されて、周りの人と一緒に自分自身が向上していくことなんだと。共に伸びて行こうという姿勢が重要なのだということ教わりました。

緑友会の各会というのが、全国津々浦々あるわけですが、そこにただでは情報は入ってこない。しかも緑友会に出てこれる人というのは、ある程度限られてきます。

そこで各会の活性化の為に、やはり情報ネットワーク推進委員というものを設置して、お互

いに勉強してもらえればと思ったわけです。これは二年の間かなり活用して頂けたのではないかと思います。

二年間、本当に楽しい思い出ができました。ただ、あえて言わせて頂ければ、大会でも総会でもセミナーでも主管して頂く方達が本当に前向きにいろいろと準備して下さるのに、それに対して足を引っ張るような発言をされる方がいるというのはちょっと困りました。私は直接はつきりとお話させて頂きましたが、それでもなかなかわかって頂けない方もいらっしゃって、その辺が苦労した点で残念でした。

竹内

私の考えとしては、会長の所在地というのは、東京とか、大阪、名古屋にあるものと思っていたんです。まさか九州や北海道に話がくるとは、思っていませんでした。「全国」という名前がついていてもやはり無理だろうと。

それを最初に古賀さんが受けたところから、様相が変わってきたんですよ。

「全国」という名前がついているからには、中央だけでなく、地方の力も必要であると。それで古賀さんが二年間務められて、大地核変動が起きたわけです。

その流れが今も続いているんですよ。そういう点では、自分が会長を引き受けた時ももちろんですが、次期の会長をお願いするときの苦しみもありましたね。あまり個性が豊かすぎる方でも、全国をまとめることは出来ませんし。やはり調整力とか協調性も、必要になってきます。

会長という役目はやはり人物本位で選ばなくてはいけない。そういう姿勢は、中村会長から始まって、その中村イズムというのが徐々に今広がってきているんだと思います。

長尾

それは嬉しいことですよ。

先程竹内さんの「三つのW」のお話を聞いて、今の時代まさにネットワークだと思うんですよ。緑友会で私が一番嬉しかったのは、会社の大小に関わらず誰とでも話ができる、まず友達になって親しくなって、その中から会社のこと私事のこと家族のこと設備のこと、いろんな相談にしてくれる。

緑友会に入っていないければ、こういう世界はなかったですよ。

竹内

私も長尾さんと同じで、昭和四十四年に岐阜翠陽クラブ主催の犬山セミナーというのに、まだ二十七〜八歳にも関わらず札幌代表で参加したんですよ。

自分より十歳も年上の方に交じて。そこでパネルディスカッションをやらせてもらったんですが、話題を振られてもまだ印刷に携わって四〜五年でしょう、専門用語が使われてもわからななし、ただただ全国にはすごい方がたくさんいるというのが印象でした。

その後、札幌緑友会は解散になってしまっただんですが、セミナーでの体験もあって青年の集ま

りは絶対に必要だと感じまして、自分が発起人代表になって声をかけたら人が集まってくれたんです。それが、今日の札幌青年印刷人の会の歴史に繋がっているんです。

その後、緑友のネットワークに札幌も参加してはと、中村会長から声を掛けていただいたんです。札幌の例会の折に中村さん、作道さん、飯田さんの三氏がお見えになりました、札幌のような大都市にはぜひ加わって欲しいというお話を頂いて、そこから私が参加させて頂くようになったんです。

松浦

中村守利さんの影響は、大きいですよ。中村守利さんの考え方自体が、緑友の理念として定着したような感がありますから。

竹内

中村さんの経営理念や発想の豊かさなどは、一種のカリスマ性がありますよね。二年間で本当に勉強させて頂きました。

松浦

それにしても竹内さんは、ちょうど三十周年にあたったということで、大変だったと思います、その辺はいかがでしょうか。

竹内

そうですね。三十周年ということに気付いた時は、これは本当に大変なイベントだと思いましたよ。

出来たばかりの東京の赤坂プリンスで、参加者も八百名集めるということでしたから。それまでの大会は三百名くらいでしたから、これは天から降ってきたような数字でした。しかし実際に八百二十六名集まったんです。

記念講演はNHKの磯村氏にお願いして、私も心臓は強い方ですが、さすがに八百名の前で挨拶はどうしようかと思いました。来賓もそれなりの方が大勢いらつしゃいましたから。

何とか挨拶を済ませて、今度は酒をついでご挨拶にまわったんですが、これがまた大変でした。ついだらつがれるわけです。結局翌日はオプショナルツアーの見送りに行く予定でしたが、起きられませんでした（笑）。

ところで、松浦さんは、四十周年の時だったですよ。

松浦

そうですね、色々大変でした。しかし、三十周年大会レベルの大会は、今後はもう難しいでしょうね。そのくらい三十周年大会はハイレベルな大会だったと思います。

竹内

そうですね。景気の問題もあるでしょうが、あれだけの元気はなかなか出てこないでしょう。

長尾

三十周年の頃は、ちょうどバブルの最盛期だったんですよ。次の五十周年はひとつ渴を入れる意味も含めて、三十周年をお手本に元気の出るような大会をやって欲しいですね。

竹内

私の時だったかと思うんですが、緑友のインフォメーションを作ったんですよ。緑友会の活性化のためにも、緑友とはこういうものだというパンフレットを作るべきだということになりまして。

長尾

緑友の活性化の原点にあるのは、やはり各会の力だと思うんです。そういう意味ではうちの会も当時十数名だったのが、四十数名まで増えました。これは積極的に会員増強をはかった結果ですね。ただ、最近は減ってきてますが。

松浦

では、最後にこれからの緑友会に望まれることがありましたら一言お願いします。

竹内

やはり二十一世紀を迎えますから、もう少し緑友への参加意欲を高めて頂きたいですね。そして、認知度を上げて頂きたい。

その為にも、ある程度会員数とグループ数を増やして欲しいですね。今はバイヤーや業者の方の参加も増えてきていますから、印刷業界だけでなく、関連業界も含めた形で組合に次ぐ団体に成長して欲しいです。

そして、緑友は組合の役員の養成所ではないにも関わらず、人材が鍛えられているという、その事実を誇りに思っただけだと思います。それだけ素晴らしい歴史を持った団体だということ、認識して頂きたいですね。

松浦

佐賀の場合でも、組合役員の半分は緑友ですからね。

長尾

やはり、緑友に参加できる人というのはある程度決まっていますから、自分の会に帰ったとき

に、こういうところだったという話をしてもらいたいですね。
緑友で経験したことを、フィードバックできるような姿勢であって欲しいと思います。

竹内

今本当に感じるのが、緑友らしいフレッシュなイベントをやって欲しいということですね。せ
つかく頭が柔らかいんだから、もっとプラス思考で動いて欲しいです。
いわゆる個としてではなく、集団としての価値が問われる時代になってきていますから。

長尾

これからは、参加型のイベントを考えて欲しいですね。ハードはソフトからですから。

松浦

さて、まだまだたくさんのお話を聞かせたいところですが、時間が参りましたので、
こちらで今日の座談会を終わらせていただきます。
今日は貴重なお話ありがとうございました。

出席者



長田 照久 氏
山梨印刷若人会



中村 守利 氏
印刷同友会
第十四代会長



(司会者)
利根川 政明 氏
文京緑友会
第二十代 会長



松浦 正欣 氏
佐賀県印刷人若楠会
第二十二代会長



小林 直 氏
印刷同友会

第三回 座談会「緑友を語る」

日 時・・平成十二年十一月十三日(日)
場 所・・東京印刷会館 (三階会議室)

利根川

中村理事長、今日はお忙しいところ本当に有り難うございます。

十四代中村会長の時は、名簿を見ますと、常任幹事で個人指名が飯田さん、佐藤さん、中村さん、竹田さん、古賀さん。それからグループ指名ということで、仙台の東海林さん、新潟の澁谷さん、茨城の城戸さん、文京から私、そして岐阜の安藤さん、大阪の山口さん、それから広島の花田さん、亡くなってしまいました。それから下関の長阿彌さん、そして今日お越しいただいている小林さんが書記幹事、会計幹事が辺見さん、神戸の松本さん、監査で沖縄の大城さんというふうな、大変強固な、格調高い工業クラブであつたんですね。（笑）

早速ですが、当時一番印象に残ったことなど、その辺をお話いただければと思います。

昭和五十六年ですから、高度成長の真つ最中で、いい時代だったかと思うんですが。

中村

昭和五十六年の久留米の総会で、会長に就任致しました。

あの時は鈴木内閣の時代で、鈴木さんから中曽根さんが長期政権をとつた頃でした。

その頃の業界も、ニューメディアが出てきた時で、今はインターネットが出てきていますが、その時はNTTのキャプテンシステムというのがものすごい勢いで出てくるだろうということ、どんな世の中になるんだろうかと不安と期待が入れ混じつたときでした。

またそういつた中で、業界の中に「ニーズ」という言葉が出てきた時期でもありました。情勢

変化、顧客などに「ニーズ」という言葉が生まれ、ちょうど今までの印刷業界の流れが、新しい業態に生まれ変わろうかという、コンピュータ化の本当の初期の入口でした。

それで一番われわれの業界に刺激が強かったのが、NTTのキャプテンシステムと、三井物産系列の東京テレガイドでした。

その両方でメディアを変えていくといわれ、かつてテレビが出てきた時のように、プリントメディアはどうなるのか、無くなるのかというようなことが出てきて、今度こそは変わるよと言われたんです。それで、緑友の先輩の中津川さんなんかもすぐそのキャプテンシステムのメンバーに入られました、それに入らないと遅れるよと言われるんですね。

そういう時期に、久留米の総会で会長に就任しました。緑友会はものすごく混沌とした時代でした。

従来の流れのままでは企業が存続し得ないという中で、緑友会としても、ちょうど幹事長制度が会長制度に変わってまもなくの頃です。

私が会長になった時の久留米総会では所信のなかで、緑友会創立の精神というものは大事にしていかなければならないけれど、その上に積み重なってくる経営の心というものを、もつと大事にしていかなければならないと言いました。

当時、私が言った言葉に「経営の両輪」というのがあります。

片方は「経営の心」、もう片方は「経営の技術」、この両輪を高めていくために全国の若い者同士、仲間研鑽をしていこうじゃないかという提唱をしたことを思い出します。

そういったことでスタートしたんですが、実はその前の二十周年記念の時、作道さんが会長をされていた時ですね、この時東京で初めて二十周年大会というのを受け持ったんですよ。

その時は緑友会の変革の時代で、筒井さんが会長になった時に、会長制の賛成と反対に分かれてしまったわけです。特に同友会などは会長制反対でした。

緑友というのは、あくまでもお世話役ですから、幹事であるべきで、幹事のリーダーが幹事長だというふうだね。会長というのは、屋上屋を作るようなもので、組織がピラミッド式になってくることを恐れたわけです。

そういうことではなくて、緑友の心というものを大事にしていくのならば、会長ではなくて、幹事長なんだということを同友会としては唱えていました。

緑友会という会なんだから、会長でいいんだというグループとで侃々諤々やりあって、その当時私自身がちょうど同友会の幹事長をやっておりましたが、その時は緑友の執行部は、みんな辞表を持って常任幹事会を開いているような、非常に険悪な状況だったんですよ。

といいますのも、同友会は市村さんの思想でもってできたというような原点がありますので、原点を作った市村さんを慕っている人たちは、同友会が反対されているんだしたら、緑友会は否定されているんだということで脱退するところまで行きました。で、そういう創立の時の精神を持ったグループが脱退するんだしたら私たちも辞表を出そうじゃないかというようなことで、筒井さんや、岐阜の和歌山さんも、辞表を持って出ていたくらいでした。

そういう険悪な状態の時に、私は実は初めて同友会の幹事長として参加したんですよ。

それで、福島総会があった時に、結局それでもめたんですけど、結果的には会長になったという、いきさつがあったわけです。

そういうことがあった中で二十周年記念の東京大会をやったんですよ。

作道さんが会長になったばかりで二十周年をやるということ、その時に私が皆さんにお話したことは、緑友の原点を、本当に大事にしていこうではないかということなんです。

私は緑友の原点は、二つあると考えているわけです。

緑友会の性格と、緑友会の精神、これが一緒になってしまいうからわからなくなってしまいうわけですね。

緑友会の性格というのは、緑友会はグループの上に存在するものではないんです。人の上に人を作らずというような、あくまでも、グループの連携機関だということですね。従って、各グループは、お互いに立場を尊重し、自主を尊重していくというのが、緑友会の性格なんです。

もう一つ、緑友会の精神というのは、若者の集まりだから、若者として謙虚にして高邁な気持ちで、研鑽陶冶、人間形成をしようという崇高な精神のことです。

そういうことをしっかり捉えておかないと、入ってくる人も脱退する人も、メリットがあれば入るといふようなことになってしまいます。目先のメリットだけで、緑友会が振り回されて、緑友会の精神が忘れられてしまう。緑友会は直接的なメリットはないですが、遠大なメリットがあるんです。それは人間形成なんです。

緑友メンバーは、自己研鑽し、お互いに情報を交換しあいながら、その中で培っていくものな

のだと言うことを確認する場として、二十周年大会をスタートしたわけです。

その後、三十周年の大会の時にまた緑友の原点を話してくれないかということ、やっぱりお話ししたのが、友愛奉仕ということでした。

その上で、チャレンジ・トレーニング・情感触発、これがもう緑友の心ですよ、こういう緑友の心をしつかりと捉えた上で、ニューメディアとか、社会構造が変わっていくことに対しては、どんどんと変化万変して対応していこうということなんです。

その為にも、原点だけはしっかりとしていなければいけない。そういうことを皆さんにお話ししたわけです。それを持って、私は久留米の総会に就任しました。

久留米の総会の後、これももう一つ深めようということで、長野で総会がありました、その時には、よりフランクに、過去から、今まで流れてきた緑友会というものを見つめなおして、今後緑友会はどうあるべきかということを通じて普通に意見交換しようという話になったんです。

この時は長野の方も気を利かせて頂いて、一杯飲みながら話そうじゃないかと言うことになったんです。

堅いテーブルでやったっていい意見は出てこないからということで、浴衣がけでアルコールを飲みながら、グループごとにはバズセッションみたいな形で話をしたのが入口です。

その時に、総会・大会・セミナーという三つのイベントをやってきたけど、これは一体必要なのか、必要だとしたらどうあるべきなのか、必要でないのならどうあるべきなのかということも、どんどん話していったわけなんです。

緑友会には三つのイベントがあるけれども、言えば、これは皆が集まるのは一年にたった三回ということですね。これが二回に減ればやっぱりそれだけ触れあいというようなものも減るわけで、やっぱり三回は必要だろうとなったんです。

但し、総会も大会もセミナーもみんな一緒にニュアンスになってきていて、引き受けるグループもだんだんエスカレートして行って、総会もセミナーも大会みたいに、派手にどんどんやっていたことは改めて、性格をしつかり分けていきました。

大会は一大イベントとして、家族ぐるみで来てもらおうと、あの頃から家族も参加するようになったんです。それからセミナーはやっぱり勉強する会で、二次会の宴会というものは、補佐的な物にして、質素にやってよいのではないかと言うことになったんです。

だから経費を安くしていくべきだということで、その次の名古屋セミナーでは、初めてホステスはいらないということに女性なしでした。ところが、若い連中ばかりでしょう、女性がいないと、飲む、食べるだけになってしまって、あつというまに料理がなくなってしまった。(笑)女性がいれば、話しながらのテンポで流れて行って、時間もちょうどいいんですが、三十分もしたらもう料理が何も無い。そこで慌てて調理場に追加を頼んで、そういうこともありました。

で、総会は徹底的に話し合おうではないか、セミナーは徹底的に勉強しようではないか、大会はお祭りに家族を連れてきたり、イベントを企画したり、旅行なんかもつけて広げていこうということになって、札幌大会を次にやりましたが、前日にゴルフをやって翌日に大会をやって、それから北海道中の観光コースを組んだりして、家族ぐるみで楽しんでもらったんです。そうい

うことで、三つのイベントの色彩をきちっと分けた時代でした。

利根川

中村会長の時は、久留米の総会の後に新潟で大会をやったんですよ。

中村

そう、新潟でしたね。あれは緑友会の方にも悪い点があったと思うんですよ。

六月に就任して、秋には大会でしょう。就任した時には、もう前の会長が大会の準備をしてある。そうすると、前の会長と自分のポリシー、考え方と違うんですね。それで新潟大会は、私のポリシーに合わせて変えてくれないかということ言って、新潟も侃々諤々したんですよ。

というのも、新潟大会は就任最初のイベントにあたるから、前にいった「経営の両輪」これを高めていこうじゃないかということ提案したんですよ。「経営の心」と「経営の技術」を二本柱にしてしっかり勉強会をやって、これに対する考えや意見を、出して行こうではないかということやってもらったんです。

新潟さんにはご迷惑をかけたんですが、変えて貰って良かったと思います。

「経営の心」の方は、長野の横内先生に来て頂いてお話を頂いたんですが、お話を聞いた後、バズセッションという形で意見交換をやったんです。お話を聞くだけではなく、どう感じたかという意見交換はとても意味のあるものでした。

それから、「経営の技術」の方は北九州プリンティングの渡辺さんに講師になって頂いて「経営の技術」ということでお話を頂きました。またその後に、バズセッションをやって、要するに、聞きっぱなし、言いつぱなしではなくて、それをお互いに深め合っていく、そして自分のものにして、持って帰って頂くという思いがありました。

これが第一回の新潟の大会なんです。新潟の方もこれがまた、なかなか燃えるグループですから、佐渡観光なんかも組んで頂いて、大変内容の濃い大会をやってくれました。

小林

「今をいかすものは、一日をいかす。一日をいかすものは一年をいかす。一年をいかすものは一生をいかす」という言葉もおっしゃいましたね。

中村

そうそう、それで、「今をいかせ」というようなこともお話ししましたね、一番大事なことは、今後どうなるだろうと迷うことよりも、今を最大にいかすことだということですね。

従って、今日の大会を最大にいかして欲しいということを訴えました。

利根川

小林書記幹事が中村会長をしっかりと支えられて、立派な議事録もありますし、今言ったよう

に久留米、新潟、長野、名古屋、札幌、大阪、最後は下関で竹田さんにバトンタッチされたんですね。

側から見られてて、小林先輩の方も、中村会長の二年間には思い出があると思うんですが。

小林

そうですね、私も鞆持ちで、ずっとご一緒しておりましたから、非常に勉強になりました。

とにかく、中村さんは話される時に、大体皆さんの意見を聞かれるわけです。でも、結局腹は決まっている。そこで、いかにまとめるかということが上手なんです。皆が納得するようにまとめていかれる。皆一応しゃべっておりますから、「うんうんそうだ」と聞かれるわけです。だから、まとめる力がないとなかなか会長というのは務まらないものだなあと思っておりました。まあ、若いうちですから、それをどんどんぶつけて、お互いにディスカッションできたのが、非常に良かったと思います。ですから時間がなくて、皆から話を聞いていられない時は、どうしても話たい人だけ話せばいいんじゃないかということ、二、三の人に立って話してもらったなんていうこともあって。まあ、皆で話し合って決めていきますので、行動もスムーズに行きました。中村さんはいつもそういう難しい時に顔を出される方で、緑友会も、同友会もこういう困っている時にひよこつと顔を出されていらつしやいました。今、組合の方も一生懸命やって頂いていて、どうもそういう立場にいらつしやるようです。

緑友の時も二十周年の記念大会を東京でやるということで、同友会の幹事長をやられてた時に、次期会長が決まらないと二十周年記念大会の方針がなかなか決まらないということで、中村さんは困ったわけですね。

で、筒井会長の時だったんですが、次期がなかなか決まらないんです。

次期会長が決まらないと二十周年記念大会の方針がなかなか決まらないということで、中村さんは困ったわけですね。

同友会としての権限はあるけれど緑友会としての権限はないわけですが、筒井会長はもうお任せするという態度をとられましたので、仕方なくご自分で走られたわけです。

で、会長制度として、会長の下に副を三名つくるといふふうになっておりましたので、当然副の方が会長になるといふ順番になっておったわけなんです。副の方がみなさん都合がつかずに断られていたんです。

いろいろあって、やっと会長が作道さんに決まりましたね。それで二十周年大会ができたんです。その時も講演者がなかなか決まらなくて困っていたところ、中村さんご自分で飛び込んで糸川さんに話をつけてこられたんですね、みんなびつくりしましたよね。

中村さんはそういう事をなさる方で、私もその辺非常に尊敬しておりました。

中村

いやいや、本当にあの時はちょうどニューメディアが入ってきて緑友も曲がり角にきている、

実をいうと四面楚歌の時代でした。幹事長から会長に変わるということで、私は特に同友会という立場もありましたから疎外感があったんですね。同友会が一番反対していましたから。

小林

そこが一番つらいところでしたね。中津川さんが会長制には絶対反対だとやっていて、中村さんはあんまり現場に出ていない時で、変わった途端に表に出たらね。その反動がね。

中村

そうそう。だから、二十周年の記念大会は会長は決まらない、場所も決まらない、一体どうするのかと。最後には仙台が東京でやるべきだと言いだして、じゃあ東京でやるんだったら、同友会だけでやるわけにはいかないということで六グループでやろうということになったんです。そこで初めてグループを越えた主管になったわけです。ですから、初めは本当に名刺交換から入ったというような状況でした。

会長も作道さんが断られて、じゃあとということで九州まで渡辺さんを口説きに行く。そういう中で、かなりギリギリまで会長は決まりませんでした。

次期会長が決まったのは、年が明けて三月くらいで、やっと作道さんに「うん」と言わせて決めたという感じでした。

利根川

両先輩方、記念の大会としては二十年とそれから三十年をやられたんですが、その前に十年とというのはどうされたんですか：？

中村

十年というのは実はやってないんですよ。その前は六年というのがありましたが、これは緑友会の型が出来上がってきたから、東京で大会をやるのかといった感じでやりましたので、周年ではないんです。事実上周年大会というのは、二十周年の時が初めてでした。

最初のセミナーは、大磯でしたね。その頃はみんな勉強しようという非常に真摯な気持ちで、若者の意気込みというものを出していました。

利根川

二十周年の時は、雁の会というのが：。

中村

今だに続いています。雁の会というのは、二十周年記念大会で六グループから三人ずつ、全部で十八名出したんです。

大会を終わってから、そのメンバーが解散してしまっってはちょっと寂しい、せつかくこれだけ

燃えたんだからということ、ずっと残していくためにも会を作ろうということになったんです。実は私は実行委員長でありながら、これには賛成ではなかったんですよ。

というのも、こういうものを作ってもどうせ五、六年で尻切れトンボでなくなってしまうだろうと思っていたのです。どうせ自然消滅するくらいなら、作らない方がいいと思っていたのですが、皆が燃えてますから、引きずられてしょうがなく作ったわけです。その時に「雁」という詩があつて、「千羽ばかりの雁が一行になって飛んでいく」というね。これが緑友の心なんです。創立総会の時に流された「雁」の詩を二十周年の時に持つてきまして、そこから「雁の会」ということにしたんです。

そうしたら続くは続くはで、皆やめないんですよ。もう二十数年になりますが、素晴らしい会で、ここにいくと本当に和みます。

利根川

ありがとうございます。やっぱり我々も、本当に迷った時なんかには中村先輩の講演を聞いたりして、緑友の原点に戻ってみたりしますよね。

今日はちょうど、山梨から長田さんもお見えになってますが、長田さんは、結構長く役員をされていたんですね。城戸さんの時に二年、白井さんの時に総務を二年、で、その後私の代に会計をやつて頂いて合計六年。

山梨さんは、今はもう中堅になりましたが、その頃はまだ全国との接点もあまりないような

状況で、その牽引力とられたのが長田さんで、山梨の緑友を盛り立てるのに大変力になられたんですね。

長田

そうですね。山梨がいつ入会したかなあと考えていたんですが、中村先輩のお話で思い出しました。

名古屋セミナーの時、三人で日帰りでお邪魔したんです。その前から中村会長の方からアプローチを頂いておりまして、山梨若人会の幹事長の笠井さんも、一人で判断に困られた様子でしたので、とにかく一回行ってみようということ、近場の名古屋に行つてきたんです。

その時のセミナーの内容や、周りの人達の雰囲気というのがものすごく印象深く、帰りの車中でこれは絶対に入ろうと思つたんです。

会が無理なら、個人的にでも入ろうと言うくらい参加した連中は印象が強かったですね。それで翌年の長野総会で、正式に入らせていただいたんです。もし、その時中村会長でなかったら、山梨も二の足を踏んでいたんじゃないかと思ひます。

それまで実際に緑友会からのアプローチもなく、我々もそういう会があるということ自体知りませんでしたから、中村会長からお誘いをいただいたおかげで、参加できて、今でもこうして緑友に席をおいていただけるんです。

中村会長は本当に素晴らしい会長だったので、あの時山梨若人会も、スムーズに緑友会に目を

向けることができたんですね。それまで山梨自体は、本当に内輪だけでやってたんです。対外的なことは、緑友会が初めてでした。

ただ、全国というところが多いでしょう。山梨は交通の便もあまりよくありませんし、若人会の会員にもあまり強要もできなかったんですね。それで何年かは、私自身が行きたいというのもありました、私が一人で参加させていただいてたんです。

その出席率のこともあって、その後常任を何年もやらせていただいたんだと思います。それと白井さんが会長になられて、その頃の記録があったんです。それで思い出したんですが、白井さんが会長になられた時に「イノベーション・ネットワーク・マーケット」という三つを前面に出して、皆でネットワークを作っていくということと、それを大会・総会・セミナーの三つのイベントで勉強していくという方針を打ち出されたんですね。札幌総会で就任されて、沖繩大会、岐阜セミナーとありまして、広島総会、茨城大会、横浜でやった東京セミナー、そして大分の総会で利根川さんに会長を譲られたんです。

この二年間を見ておまして、やはり先程の三つが大きなテーマになっていたんですが、この時初めて名簿を作ろうという動きが実際に起こったんです。

実際に携わったのが、名古屋而立会の西川さん、岡田さんだったんですが、相当苦勞されてました。

顔写真が載ってますでしょう、人を知ることと、すごくいいですね。もちろん会社名なども載っておりますし、こういうことをやりたいとか一言載っておりますから、今でも充分役に立っています。

あと、事務局を作ろうという話が、この時かなり盛り上がってまして。実際には、常任幹事会で決定したところまでいったんです。ところが逸見さんの一言で、保留という形になって、まあ実際そのまま流れたんですが。

あと、「FRIENDS OF GREEN」ですね。当時、報告書のような形になっていたんですが、これをもっと活用できないかと言うことになったんです。千四百名いる会員でも実際に出ているのは一割くらいじゃないですか、それで実際には出てこないグループにもこういう活動をしているということを知らしめる為にも、内容の濃いものにして、ネットワークというものにつなげていくことになったんです。

千代田の米倉さんなんか、マーケティングの勉強をなさっている方でしたから、もっと活かせる内容にすべきだという話になったんですが、いかんせん原稿がなかなか集まらない。ただ、写真を増やすとかして、少しでも見やすくしていくという努力は続けています。今は、広報担当なものですから、山梨でこれを作らせてもらっています。

利根川

総務を担当されていたから、集金なんかかなりご苦勞されたんじゃないですか？

長田

はい、でも一番困ったのは、一般のグループ長の方からいろいろ意見が来ることです。

そういう時に、個人的にはこう思うけれども、常任の総意がとれてない、ましてや会長がどう思っているかわからないという。ですから、総務としてどう思っているのかと聞かれても、個人的にはこう思ってるんだけれども、言えないということがかなりありました。すぐに会長に振らなければならぬ。そういうこともあって、常任幹事というのは、特に横の繋がりを密にしておくべきだと思います。

だからといって閉鎖的にやるっていうことではないんですが、運営をする以上横の繋がりをきちんとしておかないと、一人一人が動けなくなってしまう。私は常任の時にはあまり他のグループには出掛けなかったんですが、常任幹事というのは、会長が行けないところに行くわけで、そこであまり会長と違う意見を出してもいけないですから。

中村

今の若い人にまかせるとどうも違う方向に行くんじゃないかと、心配して声をかけてくれる人もいるんですよ。でも、私は行かせていいと思うんです。間違っても勉強になる。違っていれば修正すればいい。それが良ければそっちに行くでしょう。ジェネレーションが違うんだから、若い人の感覚でどんどんと動かして行って、それにブレーキをかけるようなことはしなくていい。

長田

そうですね。上から言ってしまうともう何もできません。以前中村先輩からいただいたお話で「縦糸・横糸」のお話がありましたけれど。「縦糸は絶対に動いてはいけないけれど、横糸は自由にならわっていいんだ」という。

利根川

先輩方もこれからの緑友に対して期待もあると思います。まして今我々の業界では、東京の中でも中村会長が指揮して二〇〇五計画という大きな計画が進行しておりますし、業界が発展しないと、緑友も存在しないわけです。その辺も含めまして、中村会長の方から、お話をいただきました。

中村

先程お話したように、緑友会はフランクに屋上屋を作らないで、お互いを自主尊重してそして触れあって人間形成、人格陶冶をしていこうという集まりです。

全国的に広い舞台でそういうことをして、皆さん触れあって磨きあっておられるわけです。そういう中であって、現代に合うビジネスにつながっていくようにしたいですね。

メリットが緑友の目的ではないですが、逆にいうとそういうメリットがどんどん出てくるよう

にしないと、ただ友愛だけではだめです。

今はネットワークの時代で、舞台はできあがってるわけだから、あとは仲間同士のネットワークを進めていけるといいだろうなと思うんです。それがあって、初めて中村さんに原点になっていただいてよかったなあという思いが出てくるんだろうし。それが若者のベースだと思う。それで留まってはだめなんですね、私が全盛期の頃から強く言っているのが、そこで固まらないということなんです。

若い者同士でお互いに仕事の情報交換とか友愛とかいうと、そこで固まってしまうんです。そうではなくて、やっぱりそこから業界の中に、若い人達が繋がっていけるようにしたいと考えています。

緑友会そのものは業界の下部団体ではないですから。フランクに自由に誰の制約も受けずに研鑽しているわけですから、本当はそういうことの方が業界には必要なんです。

こういうところで、研鑽し切磋琢磨されているメンバーが、逆に業界の中に繋がってくると、業界にとって大きな力になる。今業界を見渡してみても、理事長や副理事長に緑友会出身がごろごろいるわけですよ。「やあ」と手を挙げただけで、気持ちに通じ合える、だから無理も言えるわけですよ。緑友の精神が生きている。だから、緑友会に望むことは、緑友会なりに勉強されて、緑友会なりにネットワークを組まれるということですね。

そして、そこだけで固まらないで、そのネットワークが業界にまで広がってくるようになって欲しいですね。

利根川

小林先輩、いかがでしょうか。

小林

中村さんの時代には確かにグループが少なかったんですが、我々の時で会員が千名弱で、今は四十八グループという大変な人数で、それだけの青年達が集まるグループになっています。侃々諤々な話し合いをしていたら、先輩達のようにそういう幹事会でめぐり会った人達と、旅行したり話し合ったりしています。そういう暖かい心を持った会を、続けていただきたいと思います。

利根川

長田さん、いかがでしょう。

長田

中村先輩の方からお話もありましたけれど、緑友の卒業生といえますか出身者が各界の重要なポジションをしめるようになってきたんですが、おそらく我々の前の世代の緑友の横の繋がりが非常に強かったんだと思うんですね。そういう繋がりがものすごく強かったから、二十年経ってもつながりが続いている。だから、若い人たちももっと横の繋がりを深めてというか、先輩が

おっしゃったように熱い気持ちを持ってそういうつきあいができるような緑友にしていけないとこれからは難しいような気がしますね。

利根川

松浦会長、いかがでしょう。

松浦

そうですね。緑友会というのは全国で同じ職業に携わっている人が集まっている特殊なグループなわけです。しかしながら、大変フランクに話し合えるといういい雰囲気を持っているところですので、そのところは何がどうあるうと変えてはいけないと思います。

人として育つための場であるということは、会長を務めさせていただいて、非常に感じたことなんです。そういう部分を、大事に残して、それを若い人たちにきちんと伝えていきたい。緑友というのは、非常に崇高な精神があって生まれたんですよということを、ぜひ伝えていきたいと思っています。

利根川

ではこのへんで座談会を、終わらせていただきたいと思います。大変お忙しいところ、ありがとうございました。

行事で綴る緑友四十年

「総

会

第二十回総会

名古屋・昭和五二・四・二三

●会場 名鉄グランドホテル

●ホスト 名古屋而立会

●参加者 二一グループ・五二名

●会費 一万五千元

●参加者

仙台刷親会（二名）、福島印刷彩友会（二名）、茨城緑友会（二名）、印刷同友会（二名）、千代田印刷人新世会（三名）、文京緑友会（二名）、東京写真製版若葉会（三名）、神奈川正和会（五名）、長野青年印刷人緑友会（二名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（四名）、大阪青年印刷人クラブ（七名）、神戸印刷若人會（五名）、広島印刷青年研究会（四名）、下関印刷人緑友会（二名）、北九州Y.P.クラブ（二名）、福岡印刷若葉会（二名）、久留米印刷緑友会（二名）、佐世保印刷若汐会（二名）、佐賀県印刷人若櫛会（二名）、沖縄県印刷青年研究会（一名）

●開会の言葉

●国家斉唱

●綱領唱和

●来賓紹介

●グループ紹介

●歓迎のことば

●会長あいさつ

●来賓祝辞

●祝電披露

●議長選出

（議案審議）

第一号議案 入退会の件

第二号議案 昭和五一年度事業報告

第三号議案 昭和五一年度決算報告

第四号議案 昭和五一年度会計監査報告

第五号議案 役員改選

第六号議案 新会長あいさつ

第七号議案 昭和五二年度事業計画

第八号議案 昭和五二年度予算計画

第九号議案 次期総会開催地の決定（代表あいさつ）

「名古屋の今昔」 前名古屋市長 杉戸清

●記念講演

●閉会の言葉

●記念撮影

●懇親会

【日本印刷新聞記事】

会長に作道道氏を選出
 全国印刷緑友会
 十月に東京で
 二十周年記念大会
 次期総会は神奈川で

全国印刷緑友会の新会長に作道亮雄氏（大阪青年印刷人クラブ）が選出され就任した。全国印刷緑友会の第二十回定期総会は四月二十三日午後三時から、名古屋市の名鉄グランドホテルで、名古屋而立会のホストによって開かれ、昭和五十一年度事業報告、同収支決算をいずれも原案通り承認するとともに、二十周年記念全国大会の開催をはじめとする別掲の昭和五十二年度事業計画、および総額で一八八万一千九百二円の同収支予算を決定。また、任期満了にともなう役員改選では、新会長に作道亮雄氏ほか常任幹事、会計などの新役員を選出した。二十周年記念大会は今秋十月八日、東京の帝国ホテルで開かれる。なお次期総会は神奈川で開催と決定。緑友旗がホスト役をつとめる神奈川正和会の代表に手渡された。

名古屋而立会のホストによる第二〇回総会は、全国から傘下二一グループの代表五十余人それに地元而立会のメンバーら多数が出席し、定刻の午後三時から渡辺守将副会長の開会のことばで始まり、国家斉唱、綱領唱和、来賓及び出席グループの紹介ののち、地元を代表して名古屋而立会の池田達彦会長が「記念すべき二〇周年

総会を名古屋で開催させてもらった。いろいろ行き届かないこともあると思うがお許しをいただきたい」と歓迎あいさつをのべ、次いで筒井尚亮会長があいさつを行った。

筒井会長は「緑友会の歴史は古く、今日ここに名古屋而立会のご努力で第二〇回全国印刷緑友会総会が盛大に開催されることは会員一同心から喜びとするところである」と前置し「顧みれば、月日のたつのは早いもので私が会長をお引き受けしてから二年間たった。この間、新たに広島の同志の加盟などもあって、人と人がその手をつないでできあがった和の精神が広く全国各地の若い印刷人に生まれてきた。緑友会にとって今年は二十年という歴史のうえにたつて、成長していく年である。ときあたかも印刷に対するニーズが高まり、高度化、細分化されて、今までの拡大生産方式からアイデアを求められる時代に入ってきた。このような厳しい時代こそ若い人が団結し、力を結集せねばならない。また今年には改選期である。むかしから新しい酒は新しい皮袋につげといわれる。新会長のもと今日を期してスタートを切ろう」と、二カ年間の会長在任に対する謝辞と今後の発展をめざしての決意をうながした。

次いで来賓代表の奥村敏雄愛知県印工組理事長の祝辞があつて、議長に若山晃一氏（ぎふ印刷翠陽クラブ）を選出し議案の審議に入った。

議題（一）入退会の件では、退会はなく、新たに広島印刷青年研究会（会員二四人）の入会を万場の拍手で承認した。

議題（二）昭和五十一年度事業報告および議題（三）同収支決算報告では、この一カ年間に成った創立二十周年記念事業の準備、茨城大会などの行事および総額で一六九万三千二百七十七円（次期繰越金二八万五千三百九十二円を含む）の収支決算を八十島

会計監査の報告（議題（四））とあわせ原案どおり承認。
 議題（五）役員改選では、選出方法を議長一任で筒井前会長の推薦指名と決定。筒井前会長から新会長に作道亮雄氏を指名、万場一致で就任を承認した。次いで作道会長から別掲の新役員を指名、承認した。

作道新会長は、このあとの就任あいさつ（議題六）のなかで新しいグループの育成のための努力、グループ活動への寄付、全国緑友会の効率運営を基本方針とし、具体的な事業を展開していく決意を披れきした。

議題（七）昭和五十二年度事業計画および議題（八）同予算では、第二十回定期総会の開催・工場見学会の開催、第二十回全国大会の開催（東京）、全国グループ長会議の開催、セミナーの開催などを五十二年度事業として行なう。また、このための予算として一〇八万一三九二円を計上。原案どおり決定。

議題（九）次期総会開催地では、神奈川正和会のホストで開催することと決定。以上で総会を終了。引き続き記念講演と懇親会がくりひろげられた。

新役員

▽常任幹事グループ 仙台刷親会、文京緑友会、神奈川正和会、ぎふ印刷翠陽クラブ、名古屋而立会、神戸印刷若人会、福岡印刷若葉会、沖縄県印刷青年研究会

▽個人幹事 筒井尚亮（千代田印刷人新世会） 飯田範夫（長野青年印刷人緑友会）、渡辺守将（北九州Y Pクラブ）、中村守利（印刷同友会）、長倉克彦（茨城緑友会）

第二一回総会

神奈川・昭和五三・四・十六

●会場 横浜国際会議場（総会）・華正楼本店（懇親会）

●ホスト 神奈川正和会

●参加者 十九グループ・五二名

●会費 一万三千元

●参加者

仙台刷親会（三名）、山形印刷研修会（二名）、東京写真製版若葉会（四名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、長野青年印刷人緑友会（二名）、名古屋而立会（二名）、沖縄県青年印刷若潮会（二名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（四名）、神戸印刷若人会（二名）、大阪青年印刷人クラブ（四名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y Pクラブ（二名）、茨城緑友会（四名）、千代田印刷人新世会（四名）、印刷同友会（四名）、文京緑友会（三名）、新潟印刷新世会（二名）、福岡印刷若葉会（二名）、愛媛印刷人青年会（二名）

●開会宣言

●国歌斉唱

●綱領唱和

●物故者に黙祷

●来賓紹介

●グループ紹介

- 歓迎のことば
- 会長あいさつ
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 総会議事
議長選出

(議案審議)

- 第一号議案 昭和五二年度事業報告
- 第二号議案 昭和五二年度決算報告
- 第三号議案 昭和五二年度会計監査報告
- 第四号議案 昭和五三年度事業計画
- 第五号議案 昭和五三年度予算計画
- 第六号議案 次期総会開催地の決定・代表挨拶
- 第七号議案 その他

- 記念講演
- 閉会のことば
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会が総会

青年組織の価値”確認“
十月に沖縄で全国大会

全国印刷緑友会(作道亮雄会長)は、四月十六日午前十時半から横浜市山下町の産業貿易センター・横浜国際会議場で、第二一回定時総会を開き、全国大会(沖縄)、セミナー(大阪)の開催などからなる五十三年度事業計画を決めるとともに、印刷業界の安定と発展のために青年組織の価値を高めてゆくことを認識し合った。会員の連携強化はかる

この日の総会には、北は仙台南は沖縄まで全国二二グループの所属会員七四人が出席し、ほぼ定刻どおり開幕。国歌斉唱、綱領唱和、地元・神奈川正和会の高橋清重幹事長による歓迎の言葉に続いて、まず作道会長が大要つぎのとおりあいさつした。

「昨年の記念大会以降、一段と不況色がまし、印刷会社も直接自分にかかわるほど最大の試練に立たされるようになった。このようなとき、青年印刷人として何をなすべきか。時代に対応した意識変革や企業合理化はもとより、会員相互の連携強化拡充をはかることが必要になってきた。それによって業者同士がいたずらな過当

競争をしなくなり、助け合い精神も生まれてこよう。これは長い緑友会活動ではぐくまれるもので、業界の安定と発展に寄与できる青年組織の価値を、改めて認識してほしいと思う」。

また、来賓として列席した川上久次神奈川県印工組理事長は「二十一年間にまかれた種が、研鑽の成果というかたちで芽を出しつつある。理論と実践のマッチは非常に難しいと思うが、理論先行のなかにこそ進歩がある。緑友会が全国業界のレベルアップに役立ってくれることを祈念する」との祝辞を贈った。

このあと、前会長の筒井尚亮氏（千代田印刷人新世会）を議長に選出して総会議事に入り、創立二十周年記念大会を柱とする五十二年度事業報告、同決算報告を了承。さらに五十三年度事業計画では、

① J C 印刷部会とのジョイント行事として、工場見学会に参加

② 第二一回全国大会を沖縄で開催

③ 第一一回セミナーを大阪で開催（来年二〜三月）

④ 全国グループ長・常任幹事合同会議の開催（八、十一月）

⑤ 会誌『緑友だより』の発行（年二回）、など八項目を決め、

これら諸事業を遂行するために総額二二三万円の予算を計上した。

事業計画のうち全国大会については、来たる十月六、七の両日、沖縄県那覇市の「パシフィックホテル沖縄」を舞台に繰り抜けることになった。沖縄青年印刷若潮会（大坂新正幹事長）が主管し、大会テーマも「青い空・海・協調と創造を求めて」に決定。行事内容は式典、記念公演会、五分科会を予定している。分科会を担当する各グループのうち、千代田新世会は「期待される後継者像」、長野緑友会は「小規模経営における企業内教育」を討論テーマにそれぞれ掲げたが、総会席上、作道会長

からは私案として、

① 不況時にどんな対策をとるべきか

② 経営に対する基本理念

③ 生産性向上のためにとるべき奨励策

④ 技術向上の対策

⑤ 損益管理をどうとるべきか、の五点が提示された。

その他事業計画としては、とくに組織拡充に力が注がれているが、現在、札幌および山梨の加入促進がはかれており、近いうちに参加の見通し、現会員数は二九グループの一〇一八名また、J C 印刷部会との協調では工場見学―セミナー参加のほか、より密接な交歓を望む意見が出され「生かされるものは生かしてゆく」（作道会長）との方針のもとに、スケジュールの調整などをはかってゆくことを申し合わせた。次期総会の開催地は岐阜で、主管のぎふ印刷翠陽クラブ（鴻村満幹事長）に対し、緑友会旗が伝達された。

なお、総会終了後は記念講演に移り、金原亭馬生師匠による「芸道あれこれ」に耳を傾けた。馬生師匠は、いきなり二つ目になった入門時の苦心談を中心に、お得意の寄席とは違って、笑いのなかにも教訓に富んだ話をしんみりと聞かせた。

第二二回総会

岐阜・昭和五四・四・十四

●会場 長良川ホテル

●ホスト ぎふ印刷翠陽クラブ

●参加者 二六グループ・五一名 オブザーバー四八名

計九九名

●参加者

仙台刷親会(四名)、山形印刷研修会(二名)、福島印刷彩友会(一名)、新潟印刷新世会(一名)、茨城緑友会(二名)、印刷同友会(二名)、千代田印刷人新世会(三名)、文京緑友会(二名)、東京写真製版若葉会(三名)、神奈川正和会(三名)、長野青年印刷人緑友会(二名)、東京プロセス製版青樹会(三名)、名古屋而立会(二名)、大阪青年印刷人クラブ(五名)、神戸印刷若人会(四名)、広島青年印刷研究会(三名)、青年印刷人緑友会(三名)、福岡印刷若葉会(一名)、北九州Y Pクラブ(二名)、久留米印刷緑友会(二名)、佐世保印刷若汐会(一名)、沖縄県青年印刷人若潮会(一名)、札幌青年印刷人の会(二名)、大分印刷若梅会(二名)

●開会宣言

●国歌斉唱

●綱領唱和

●来賓紹介

●参加グループ紹介

●歓迎のことば

●会長あいさつ

●来賓祝辞

●祝電披露

●議長選出

(議案審議)

第一号議案 入退会の件

第二号議案 昭和五三年度(第二期) 事業報告

第三号議案 昭和五三年度(第二期) 決算報告

第四号議案 昭和五三年度(第二期) 監査報告

第五号議案 役員改選

新会長あいさつ

前任会長退任挨拶

第六号議案 昭和五四年度(第二期) 事業計画

第七号議案 昭和五四年度(第二期) 予算計画

第八号議案 次期総会開催地決定の件

第九号議案 その他

●記念撮影

●記念講演 日本経済における「一般消費税」

印刷業界への影響について 中小企業診断士 宮崎哲也氏

●懇親会

【日本印刷新聞記事】

第二二回全国印刷緑友会総会
新会長に飯田範夫氏長野緑友就任

加入三十グループに
積極的に交流図る

全国印刷緑友会（作道亮雄会長）の新会長に飯田範夫氏（長野青年印刷人緑友会）が就任した。第二二回全国印刷緑友会岐阜総会が、岐阜印刷翠陽クラブ（鴻村満会長）の主管により、四月十四日午後二時から、岐阜県岐阜市の「長良川ホテル」で開かれ、任期満了にともなう役員改選で新会長に長野青年印刷人緑友会の飯田範夫氏を満場一致で承認するとともに、全国印刷緑友会大会（九月二十二、二十三日）、セミナー（五十五年二、三月）などの五十四年度事業計画ならびに予算総額二一三万六八九四円を決めた。

総会は定刻どおり、午後二時から、伊藤孟氏（岐阜印刷翠陽クラブ）の司会ではじまり、開会宣言、国歌斉唱、綱領唱和、来賓、参加グループ紹介が行なわれたあと、岐阜印刷翠陽クラブの鴻村会長が、「岐阜で総会が行なわれることを心から感謝する。八十年代へ出発するための原動力を見出してもらいたい」と歓迎のあいさつ。ついで、作道亮雄会長が、「エネルギー問題、高齢化問題さらに新しい産業構造のゆくえと、よってきたる生活変化への対応など、内外に多くの問題が山積し、長期

見通しをたてるにはむずかしい時期に直面している。こうしたなかでわれわれは緑友会を通じて主体性をもった経営方針の確立の要素を出すことを願うしだいである。この総会を価値あるものとしたい」と会長あいさつを行なった。ついで、来賓の藤田浩岐阜市長、林健次岐阜県印工組副理事長らのあいさつ、祝電披露があったあと、議事に入った。

議案審議は、筒井尚亮前会長を議長に行なわれ、昭和五十三年度入退会の件、同事業報告および決算報告の件が原案どおり承認された。入退会の件では、退会二グループに対し、入会三グループで、現加盟グループは三〇グループとなった。

任期満了にともなう役員改選では、作道会長が次期会長として飯田範夫氏（長野青年印刷人緑友会）を推薦、満場一挙で承認し、新旧会長が交代した。

また、五十四年度の事業計画としては、

- ①全国印刷緑友会大会（九月二十二、二十三日、ホスト・北九州YPクラブ）
- ②同セミナー（五十五年二、三月、ホスト・神戸印刷若人会）
- ③グループ長・常任幹事会（五、八、十一月）などが決まり、これからの事業を推進するための予算として総額二一三万六八九四円が計上された。

「飯田新会長あいさつ」緑友会は、親睦の会ではなく互いの情報を交換し、勉強しあうという会である。今後もこの会が永くつづくことをねがう。各地のグループの交流の場であり、この場を通じより多くの人たちと接することは大切なことと思う。今後も未加入グループに入会を働きかけたい。

大会の概要を発表
九月に北九州市で開く

第二二回全国印刷緑友会岐阜総会の席上、九月二十二、二十三日行なわれる全国印刷緑友会大会の概要が、主管である北九州Y Pクラブの渡辺実行委員長から発表された。

それによると、大会は、「緑友、いま語らいのとき」のテーマのもと、北九州の「ホテルニュー田川」で開かれる。今回は多くの会員が集まって、語らいのなかから何かを見出してもらおうということから、分科会に重点をおいているのが特徴。大会では、記念式典、記念講演、分科会が行なわれるが、分科会テーマについては、検討中であり、会員の人たちからも広く意見を求め、充実したものにしたいたいとしている。

第二三回総会

東京・昭和五五・五・十

- 会場 池袋東部バンケットホール
- ホスト 東京プロセス製版青樹会
- 参加人数 二三グループ・百十三名
- 参加費 一万五千円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（二名）、仙台刷親会（三名）、福島印刷彩友会（二名）、新潟県印刷新世会（二名）、茨城緑友会（五名）、神奈川県正和会（六名）、印刷同友会（十四名）、千代田印刷人新世会（十三名）、文京緑友会（九名）、東京写真製版若葉会（十一名）、長野青年印刷人緑友会（三名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（二名）、名古屋而立会（二名）大阪青年印刷人クラブ（四名）、神戸印刷若人会（四名）、広島青年印刷研究会（二名）、下関青年印刷人緑友会（一名）、福岡印刷若葉会（二名）、北九州Y Pクラブ（二名）、久留米印刷緑友会（三名）、大分印刷若梅会（三名）、沖縄県青年印刷若潮会（二名）、東京プロセス製版青樹会（二二名）

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長あいさつ

- 来賓祝辞
- 総会議事
議長選出
(議案審議)
- 第一号議案 昭和五四年(第二二期) 事業報告
- 第二号議案 昭和五四年(第二二期) 決算報告
- 第三号議案 昭和五四年(第二二期) 監査報告
- 第四号議案 昭和五五年(第二三期) 事業計画案
- 第五号議案 昭和五五年(第二三期) 予算案
- 第六号議案 次期総会開催地決定の件
- 第七号議案 その他
- 閉会のことば
- 記念講演 「成る政治と成らぬ政治」 明治大学教授 岡野加穂留
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

仙台で全国大会開く
緑友会総会事業計画など決定

第二三回全国印刷緑友会定期総会が五月十日午後一時から東京・池袋の池袋東武バンケットホールで開かれ、昭和五十五年(第二三期)事業計画、同収支予算額などが決定した。昭和五十五年(第二三期)事業計画としては、全国印刷緑友会長会及び第二三回全国大会(仙台)の開催、緑友だよりの発行、常任幹事会の開催などを通じて、全国の緑友メンバーがともに手を取りあつて業界発展に貢献する活発な活動を推進していくことがあげられている。この中で全国印刷緑友会長会及び第二三回全国大会が開催される仙台で六月七月に開かれる。今回は仙台刷親会のメンバーを交えての話し合いという、新しい試みがとり入れられることになっている。

東京プロセス製版青樹会の主管による今回の第二三回定期総会は、全国から二三グループ、一二〇人の緑友メンバーが出席して午後一時から始まり、国歌斉唱、綱領唱和、来賓および参加グループの紹介ののち、田島東京プロセス製版青樹会々長が「全国から多数ご出席いただいた緑友の仲間とお会いできることを喜ぶ。私どもの青樹会も今年で十年を迎えたが、この間全国の緑友の仲間からいろいろと指導、ご援助をいただき感謝している。私も青年印刷人を取りまく環境はきびしさを増しているが、印刷という共通点で結ばれている全国の仲間と力を合わせていけばバラ色の世界が開けていく。この八十年初頭の総会が価値多きものとなることを願う」と歓迎のことばを述べた。

次いで飯田会長が「より深刻化した資源・エネルギー情勢はすべての業種に影響を与えている。このときにあたって私どもは青年印刷人として、またグループのリーダーとして、いかなる事態にも臨機応変、適時適切な対応ができることを自ら図

るとともに会員相互の交流、拡大をはからねばならない。緑友はこれまで地道な努力によって着実な成果をあげてきた。今こそその必要性と価値を再認識し、私どもの活動が業界発展の一助になることを信じ、より活発な活動を推進していきたい」とあいさつ。来賓の久氷東印工組理事長の祝辞があつて、作道前会長を議長に選出し議事に入り、昭和五十四年度事業報告、同決算、五十五年度事業計画、同予算をいずれも質疑の上のうえ原案どおり承認可決した。また次期総会開催地としては久留米（福岡）を満場一致で決定して総会を終了。引き続き記念講演に入り、明大教授の岡野加穂留講師の「成る経済と成らぬ政治」の講演と懇親会が行なわれた。

事業計画

- 一、第二三回定期総会の開催（五月十日）
- 一、全国グループ長会議の開催（六～七月、仙台）
 - ①全国大会参加について
 - ②グループの現状と問題点
 - ③緑友会運営についての提案審議
- 一、第二三回全国大会の開催（八月八～九日、仙台刷親会主管）
- 一、緑友会セミナーの問題（五十六年二月～三月）
- 一、緑友だよりの発行（二回）
- 一、第二四回定期総会の準備
- 一、常任幹事会の開催

第二四回総会

久留米・昭和五六・五・十六

- 会場 久留米グランドホテル
- ホスト 久留米印刷緑友会
- 参加人数 二五グループ・九〇名
- 参加費 二万円
- 参加者
 - 札幌青年印刷人の会（一名）、仙台刷親会（一名）、山形印刷研
修会（三名）、長野青年印刷人緑友会（三名）、新潟県印刷新世
会（二名）、茨城緑友会（二名）、神奈川正和会（二名）、印刷同
友会（二名）、東京プロセス製版青樹会（四名）、千代田印刷人
新世会（三名）、東京写真製版若葉会（二名）、文京緑友会（一
名）、名古屋屋而立会（一名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（三名）、大阪
青年印刷人クラブ（四名）、神戸印刷若人会（五名）、広島青年
印刷研究会（四名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y
Pクラブ（三名）、佐世保印刷若汐会（一名）、大分印刷若梅会
（二名）、熊本印刷緑友会（五名）、沖縄青年印刷若潮会（二名）、
福岡印刷若葉会（十八名）、久留米印刷緑友会（二〇名）

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 歓迎のことば
- 会長あいさつ

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 総会議事
- （議案審議）
- 第一号議案 昭和五五年度（二三期）事業報告
- 第二号議案 昭和五五年度（二三期）決算報告
- 第三号議案 昭和五五年度（二三期）監査報告
- 第四号議案 役員改選
- 新会長あいさつ
- 前会長退任あいさつ
- 第五号議案 昭和五六年（二四期）事業計画
- 第六号議案 昭和五六年（二四期）予算計画
- 第七号議案 規約改正の件
- 第八号議案 次期総会開催地決定の件
- 第九号議案 その他
- 記念撮影
- 記念講演 「自衛隊の幹部教育について」 中村董正
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

新会長に中村守利氏
全国印刷緑友会
加入グループも三二に

第二四回全国印刷緑友会総会は、五月十六日午後二時から福岡県久留米市グラウンドホテルで開催され、五十五年決算、五十六年度予算、事業計画をいずれも原案通り承認するとともに、役員改選で中村守利氏（印刷同友会）を新会長に選任した。次期総会は長野で開催。なお同総会で新しく若竹会（東京・芝）の加入が認められ、加盟グループ数は三二となった。

総会は守永氏の司会で開会、国歌斉唱、綱領唱和、来賓である大隈九州地区協議会長、中野筑後印協組理事長両氏を紹介があり、中原敏行定期総会実行委員長（久留米緑友会）が「総会は明日の印刷業界を担う緑友会の仲間達が語り合う絶好の機会である。この総会をひとつの起点として、今後の緑友会の歩みを決定するために全国の仲間が一同に会し、友情を深めると同時に、当会を発展させる有意義な総会となるよう心がけ準備した」と歓迎のことは述べた。

ついで飯田全国印刷緑友会会長が一年を振りかえり協力を感謝するとともに「新たに迎える第二四期の時代背景を考えると、景気の低迷による企業倒産は前年度末までに史上最高を記録し、今年度も増加が予想されている。加えて法人税、印紙税、酒税な

どの大幅増税、公共料金の値上げなどで企業経営に厳しさが増すことは覚悟しなければならぬ。私達はこのような時に、確かなものへの思考確立を人間関係の絆、連帯のもとで行なう必要がある、それが緑友交流の中から得られることを願っている。それが緑友の心のつながりと主体的参加により創りだされる限り、緑友会の前進発展があると思う。新しい役員の下でスタートする二期をより発展の期とすべきである」とあいさつ。

大隈九州協議会長が「私も緑友会OBなので、当時の姿がよみがえり大変なつかしい。業界は第二次構改を迎えきびしい状況にある。皆さんの若々しい力で業界のレベルアップに尽くしてほしい」と祝辞を述べたセレモニーを終了し、作道前会長を議長に選任して、出席グループ二五グループで、議案審議に移った。

一号議案・事業報告

二号議案・決算報告

三号議案・監査報告、いずれも原案通り承認。

四号議案・役員改選 現会長飯田氏より中村守利氏を推薦し同氏受諾、新会長に就任。

同新会長が常任幹事、会計幹事として次の各氏、各グループを指名決定。

常任幹事 飯田範夫（長野）、竹内一博（札幌）

中村勝亮（千代田）古賀健一（福岡）

仙台刷親会、新潟県印刷新世会茨城緑友会、文京緑友会

ぎふ印刷翠陽クラブ、大阪青年印刷人クラブ

広島青年印刷研究会、下関青年印刷緑友会

会計監事 逸見節夫（東京プロセス製版）、松本孝昭（神戸）、大阪新正（沖縄）

五号議案・五十六年事業計画

①第二四回全国大会を九月四、五日新潟市、オークラホテル新潟で開催する。主管

新潟県印刷新世会

②第一五回セミナー開催、日時は未定

③全国グループ長、常任幹事合同会議は七月、十一月開催予定

④緑友会だよりの発行（二回）

⑤常任幹事会の開催

六号議案・五十六年度収支予算計画Ⅱ総額二三四万八四一八円

七号議案・規約改正Ⅱ書記を新設、書記Ⅱ小林（同友会）

八号議案・次期総会開催地Ⅱ長野青年印刷人緑友会（ホストグループ）

九号議案・新メンバーの加入は、東京・港区芝の若竹会（佐々木会長、二〇人）の加入。

七月のグループ会議は、七月二十五日より開催する西日本青年印刷人のつどいと併せて行なう。主管は神戸印刷若人会とする。

以上九議案を執行部原案通り承認した。

なお終了後中村会長よりOB会の設立を考慮しているむねの発表があった。

なお総会終了後、中村薫正陸上自衛隊幹部候補生学校長の記念講演と懇親会が開催された。

中村守利会長新任のあいさつ要旨

緑友会は自己研鑽の場でありこれを基にしたベンシアルコミュニケーション、友好の

場であるという発祥の原点を考え、あくまでその世話役ということでは会長を引き受け

た。自己研鑽のお手伝いということである。

われわれは印刷経営という使命が課せられているのだが、経営とは技術と心が両輪と
なっている。技術の練磨はよくいわれるが心の練磨は機会が少ないようだ。幸い緑友
会は北海道から沖縄まで仲間がいて、ノウハウの情報は多い。経営技術、経営の心、
この両輪の練磨を基本方針としてやっていきたい。

第二五回会総会

長野・昭和五七・五・十五

●会場 ホテル長野国際会館

●ホスト 長野青年印刷人緑友会

●参加人数 二六グループ・一〇一名

オプザーバー・三一名・計一三二名

●参加費 二万円

●参加者

東京プロセス製版青樹会(四名)、名古屋而立会(三名)、福島印刷
彩友会(一名)、若竹会(五名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(五名)、山形
印刷研修会(四名)、下関青年印刷人の会(二名)、仙台刷親会(二
名)、札幌青年印刷人の会(五名)、千代田印刷人新世会(二名)、大
阪青年印刷人クラブ(二名)、新潟県印刷新世会(二名)、大分印刷
若梅会(二名)、文京緑友会(三名)、茨城緑友会(四名)、広島青年
印刷研究会(三名)、沖繩青年印刷者潮会(一名)、熊本印刷緑友会
(二名)、神戸印刷若人会(三名)、神奈川正和会(一名)、印刷同友
会(五名)、福岡印刷若葉会(二名)、久留米印刷緑友会(一名)、北
九州Y.P.クラブ(一名)、東京写真製版若葉会(一名)、山梨県印刷
若人会(四名)、青森県印刷青年経営者会議(一名)、長野印刷緑友
OB会(二六名)、長野青年印刷人緑友会(三三名)

●開会の辞

●国歌斉唱

●綱領唱和

●来賓紹介

●参加グループ紹介

●歓迎のことば

- 会長あいさつ
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出

(議案審議)

- 第一号議案 昭和五六年度(第二四期) 事業報告承認の件
- 第二号議案 昭和五六年度(第二四期) 決算報告承認の件
- 第三号議案 昭和五六年度(第二四期) 会計監査報告
- 第四号議案 昭和五七年度(第二五期) 事業計画(案) 承認の件
- 第五号議案 昭和五七年度(第二五期) 予算計画(案) 承認の件
- 第六号議案 次期総会開催地決定の件
- 第七号議案 新グループ加入承認の件
- 第七号議案 その他

- 閉会の辞

- 記念撮影

- バズセッション

「緑友会の今後を語る」
 ↓ 総会・大会・セミナーのあり方と内容、開催方法 ↓

- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

新しい方向さぐる

全国から二六グループ参加

印刷緑友会総会

全国印刷緑友会(中村守利会長)の第二五回定期総会が長野青年印刷人緑友会(小林昌助幹事長)の主管により、五月十五日、長野市内のホテル長野国際会館で開かれ、前年度事業、決算、新年度計画、予算などを可決、次期総会開催地を下関と決定した。また、二十五年を一つの区切りとして、創立の原点を想起するとともに、緑友会のあり方を探る討議が行なわれたが、ここで交わされた多くの意見を参考に、今後、時代の推移に適合した運営を行なっていくことになった。なお同総会で新たに山梨県と佐賀県のグループ加入が承認され、この結果同会は三三グループとなった。

総会には全国から会員二六グループ一〇一人、これにオブザーバー三一人が参加して、午後二時から、新井和弘実行委員(長野)の司会により、倉田剛実行委員会副委員長の開会の辞で開かれた。

全員で君が代斉唱につづいて、古賀健一常任幹事(福岡)の唱導で全国印刷緑友会綱領を声高らかに唱和した。

ここで来賓として出席の清水長野県印組理事長代理、富山長野県用紙卸商協組理事

長、新井日軽印長野支部長、田中長野青年印刷人緑友会顧問、太田長野県印工組長野支部長の紹介が小林昌助実行委員（長野）からあり、ひきつづいて参加二六グループの紹介が行なわれた。

ついで、第二六回総会を主管した高木勇長野総会実行委員長（長野）から次のように歓迎のことが述べられた。「昨年の久留米総会で当総会主管の役を引受けて以来、長野青年印刷緑友会の総力をあげて準備してきた。長野は交通僻地であり、ご参集の会員に多くの迷惑をかけることになるので、その分有意義な総会になることを心がけてきた。今回は二十五日目という記念すべき総会にあたるため、「語り合う長野総会」を企画した。これからの緑友会発展のためにじっくりと意見交換をして実のある総会にしていきたい」

ひきつづいて中村守利会長から「厳しい経済環境下だが、この試練に耐えていくことで企業も発展する。こういう時こそ緑友のアイデンティティ（存在証明）を確立して協調と連帯を強めていこう」と力強いあいさつがあった。

来賓を代表して清水長野県印工組理事長代理から、「厳しい経済情勢のもとで、印刷業界も需給バランスを失くして困難な局面にあるが、若い印刷人の力を結集、沈滞した印刷業界から脱皮してもらいたい」と祝辞があり、ついで祝電が披露された。

ここで慣例により、飯田範夫前緑友会会長（長野）が議長席につき、定数報告（出席二六、委任状五）があつて総会成立を確認、第二五回定期総会の議案審議に入った。

第一号議案 昭和五十六年度（第二四期）事業報告承認の件は、久永信春常任幹事（東京・文京）から報告があつて承認。

第二号議案 昭和五十六年度決算報告承認の件は、逸見節夫会計幹事（東京・青樹会）の報告と松本孝昭監事（神戸）の監査報告があつて一四九万七二一〇円の決算を承認。

第三号議案 昭和五十七年度（第二五期）事業計画案承認の件は、中村会長が説明、五十七年九月四～五日に札幌市で第二五回全国大会を、五十八年二月五日に大阪市で第一六回緑友セミナーをそれぞれ開催すること、会員名簿を五十八年二月に発行することなどの事業計画を原案どおり承認した。第四号議案 昭和五十七年度予算計画案承認の件は逸見会計幹事から説明があり、総額二二四万〇八三二円の予算を承認した。

第五号議案 次期総会開催地決定の件は、中村会長から、下関青年印刷人緑友会の主管により下関で開催との報告があり、これを了承した。

第六号議案 新グループ加入承認の件では、山梨県印刷若人会（会員二三人）の入会を承認、同会笠井幹事長が、「名古屋セミナーにオブザーバーで参加、あたたかい歓迎を受け、有意義だった。これから多くの印刷人と語り合つて勉強させていきたい」とお礼のことが述べた。

第七号議案 その他では、加入申請のあつた佐賀県印刷人若楠会（宮地会長、会員三五人）を、同会の総会決議をまつて正式加入することを承認した。

これで全議案審議を終了、米山公明実行委員会副委員長（長野）閉会の辞で午後三時四十分総会を終わった。

沖繩に桜の苗木贈る

総会後、バズセツション、懇親会が行なわれたが、懇親会の席上、神戸若人会から、今年が沖繩復帰十周年にあたるため、これを記念して、沖繩県青年印刷若潮会に、桜の苗木一〇〇本を贈呈することが発表され、満場の拍手を浴びた。また、これに関連して、別途に緑友会としても贈呈してはどうかとの提案が出され、満場一致で賛成、常任幹事会で具体化を検討することになった。

定期総会出席会員グループは次のとおり。(順不同)

▽東京プロセス製版青樹会▽名古屋而立会▽福島印刷彩友会▽若竹会▽ぎふ印刷翠陽クラブ▽山形印刷研修会▽下関青年印刷人緑友会▽仙台刷親会▽札幌青年印刷人の会▽千代田印刷人新世会▽大阪青年印刷人クラブ▽新潟県印刷新世会▽大分印刷若梅会▽文京緑友会▽茨城緑友会▽広島青年印刷研究会▽沖繩県青年印刷若潮会▽熊本印刷緑友会▽神戸印刷若人会▽神奈川正和会▽印刷同友会▽福岡印刷若葉会▽山梨県印刷若人会▽青森県印刷青年経営者会議▽長野青年印刷人緑友会▽長野印刷緑友OB会

バズセツション

時代に沿った運営へ

総会終了後午後四時から、「緑友の今後を語る」をテーマに、総会参加者全員がA、B、C、Dの四グループに分れて、緑友総会、大会、セミナーのあり方と内容、開催方法などについて意見交換するバズセツションが行なわれた。

討議開催に先立って中村会長は、「二十五年前に、営業の第一線にあった若い印刷人から、他の地域の状況も知りたいという声が各地に起り、日本印刷新聞社の協力によって、その母体が生れた」と発足当時の経過を説明、昭和三十三年九月の創立以来、「緑友は上部機関ではなく、グループ間の横の連携をはかり、交流の中から自己も向上し、他も向上させることによって、業界のモラルアップ、レベルアップに貢献する」ことが創立の精神であったと述べ、あくまでも緑友が自己研鑽の場であることを基本として、その上に立って時代の流れに沿ったあり方、運営方法を討議してほしいと要望した。

約一時間半にわたる各グループの討議の結果、行事のあり方や内容については①総会、大会、セミナーの目的、性格を明確にする。②総会とセミナーなど行事を併合する③セミナーに日常的、具体的な問題も加える④会員同士の意見交換、研究発表の場とする⑤会員同士のふれ合いの機会が多い方がよいので、年三回ぐらいの会は必要⑥持ち回り開催は管理者の負担は大きい、グループの内部結束には役立つなどが出された。

また、開催方法については①できるだけ多くの参加者を得るため費用を抑える。②交通便利な東京、大阪など大都市での開催③公共施設の利用④時間と費用の活用法として二日間徹底開催などが出された。

これらの意見には、地方開催や回数などについて両論がみられたが、この意見をもとに常任幹事会で討議し、会の方針、運営などに逐次反映していくことになった。

第二六回総会

下関・昭和五八・五・二一～二二

- 会場 下関マリンホテル
- ホスト 下関青年印刷人緑友会
- 参加人数 三三グループ・一三五名
- 参加費 二万円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(一名)、青森県印刷青年経営者会議(二名)、
 仙台刷親会(三名)、山形印刷研修会(二名)、福島印刷彩友会(一
 名)、茨城印刷緑友会(五名)、印刷同友会(四名)、千代田印刷人
 新世会(三名)、文京緑友会(二名)、東京製版青樹会(三名)、東
 京プロセス製版青樹会(三名)、港支部若竹会(三名)、神奈川正
 和会(四名)、長野青年印刷人緑友会(三名)、名古屋屋而立会(十名)、
 ぎふ印刷翠陽クラブ(二名)、金沢青年印刷人クラブ(二名)、福井
 県印刷青年部(一名)、京都青年印刷人月曜会(三名)、大阪青年印
 刷人クラブ(四名)、神戸印刷若人会(五名)、広島青年印刷研究會
 (十名)、北九州Y.P.クラブ(十五名)、福岡印刷若葉会(八名)、福
 留米印刷緑友会(二名)、佐賀県印刷人若楠会(一名)、佐世保印
 刷若友会(一名)、熊本印刷緑友会(四名)、大分印刷若梅会(二名)、
 宮崎印刷はまゆう会(一名)、鹿児島県緑友会(一名)、沖繩青年印
 刷若潮会(三名)、下関青年印刷人緑友会(二名)

第一日目

- 開会の辞
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば

会長あいさつ

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出

(議案審議)

- 第一号議案 昭和五七年度(第二五期) 事業報告並びに承認の件
- 第二号議案 昭和五七年度(第二五期) 決算報告並びに承認の件
- 第三号議案 昭和五七年度(第二五期) 会計監査報告
- 第四号議案 昭和五八年度(第二六期) 役員改選
- 第五号議案 昭和五八年度(第二六期) 予算(案)承認の件
- 第六号議案 昭和五八年度(第二六期) 事業計画(案)承認の件
- 第七号議案 次期総会開催地決定の件
- 第八号議案 新グループ加入承認の件
- その他

- 閉会の辞
- 記念撮影
- バズセクション
- 懇親会開宴

緑友を語る「グループ活性化へ今、何を・・・！」

第二日目

- 卓話 「管理者の健康管理」 平岡泰彦
- 閉会式

【日本印刷新聞記事】

新年度事業、次々決まる
全国緑友会
新会長に竹田光宏氏
活性化と発展を目指す

全国印刷緑友会（中村守利会長）は五月二十一日午後一時半から山口県下関市の下関マリンホテルで第二六回定時総会を開き、昭和五十七年度事業報告・決算報告および五十八年度事業計画・予算計画をいづれも原案どおり承認した。また、任期満了に伴う役員改選では、竹田光宏氏が新会長に選出された。

総会は、三三グループ、一三五人が参加して開かれ、下関青年印刷人緑友会の横山博氏の司会で始まり、中村嘉和氏（下関）の力強い開会宣言のあと、全員起立して国歌斉唱、安藤公二氏（ぎふ）の先唱で緑友会の綱領唱和を行ない、来賓および参加グループ紹介後、長阿弥暁彦氏（下関）から歓迎のことばが述べられた。

続いて中村守利会長が「不況回復のきざしがやや見えてきましたが、まだまだ多難で厳しい時代は続きそうです。このような時代に求められるのは若い世代の台頭である緑友会は若い力の中心的存在であると自負しており、われわれ青年印刷人はどんな環境におかれても常にチャレンジする精神をもって進撃してゆきたい」とあいさつ、そのあと来賓の泉田芳次下関市長、原民夫山口県印工組副理事長から祝辞

が述べられた。

次いで飯田範夫常任幹事が議長に就任、議案の審議に入り、昭和五十七年度事業報告および決算報告、昭和五十八年度事業計画および予算計画をいづれも原案どおり承認した。

このあと任期満了にともなう役員改選が行なわれ、新会長に名古屋而立会の竹田光宏氏（竹田印刷（株）専務取締役）が選任された。竹田新会長は、「技術革新やOA化時代の到来など過去の延長線上で未来を予想することができない状況だが、反面こうした流れの時は新しい需要を喚起する時代でもある。このような大切な時期に青年印刷人として、また企業におけるリーダーとして、リーダーの役割りはいかにあるべきかを探求しつつ、緑友会各グループの活性化と企業の発展を目指して頑張ります」と会長就任のあいさつを述べた。

なお新役員は以下の通り決まった。

▽会長 竹田光宏（名古屋而立会）

▽個人指名常任幹事 中村守利（印刷同友会）、竹内一博（札幌青年印刷人の会）、利根川政明（文京緑友会）、和田正（神戸印刷若人会）、古賀健一（福岡印刷若葉会）

▽グループ指名常任幹事 三浦三男（仙台刷親会）、城戸憲次（茨城緑友会）、

山口雅也（千代田印刷新世会）、倉田剛（長野青年印刷人緑友会）、白井秀幸

（金沢青年印刷人クラブ）、山口博司（大阪青年印刷人クラブ）、安藤公二（ぎふ印刷翠陽クラブ）、花田佳雄（広島青年印刷研究会）

▽書記幹事 吉川正敏（名古屋而立会）

▽会計幹事 逸見範夫（東京プロセス製版青樹会）

▽会計監査Ⅱ小川勝利（神奈川正和会）、与那覇正俊（沖縄青年印刷若潮会）
 総会終了後、場所を移し、「各グループの活動状況と、今後よりグループを活性化
 するために思うこと」「これから求められるリーダーとは」をテーマに、一〇のテ
 ーブルに分れてバズセッションが行なわれた。
 その後、各テーブル長が意見をまとめ発表した。それによると、グループの活動
 状況は「ほとんどのグループが月一回の例会を開いているが、出席率が芳しくない」
 とされ、今後は「定年制の問題を検討する」「新入会員の増強を目指す」「緑友会
 の行事に参加する」などの意見が出された。
 またこれから求められるリーダー像としては、「何事も率先して一生懸命やる」
 「自己研鑽できる人」「自分を完全に燃焼できる人」「方向性を見定めることができる
 人」などが望まれるとしている。

第二七回総会

金沢・昭和五九・五・十二〜十三

- 会場 金沢シティホテル
- ホスト 金沢青年印刷人クラブ
- 参加人数 二九グループ・二二二名
- 参加費 一万九〇〇〇円
- 参加者
 札幌青年印刷人の会（一名）、仙台刷親会（一名）、茨城緑友会（七名）、印刷同友会（一名）、千代田印刷人新世会（二名）、文京緑友会（四名）、東京写真製版若葉会（三名）、東京プロセス製版青樹会（七名）、港支那若竹会（五名）、神奈川正和会（七名）、山梨印刷若人会（四名）、長野青年印刷人緑友会（三名）、名古屋而立会（十名）、きふ印刷翠陽クラブ（四名）、福井県印刷青年部（四名）、京都青年印刷人月曜会（三名）、大阪青年印刷人クラブ（五名）、神戸印刷若人会（五名）、広島青年印刷研究会（二名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y.P.クラブ（一名）、福岡印刷若葉会（一名）、久留米印刷緑友会（一名）、熊本印刷緑友会（一名）、大分印刷若梅会（二名）、宮崎印刷はまゆう会（三名）、鹿児島県緑友会（一名）、沖縄青年印刷若潮会（二名）、金沢青年印刷人クラブ（二三名）

第一日目

- 開会の辞
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば

- 会長あいさつ
- 来賓祝辞
- 議長選出

(議案審議)

- | | | |
|-------|--------------|-------------|
| 第一号議案 | 昭和五八年度(第二六期) | 事業報告並びに承認の件 |
| 第二号議案 | 昭和五八年度(第二六期) | 決算報告並びに承認の件 |
| 第三号議案 | 昭和五八年度(第二六期) | 会計監査報告 |
| | 昭和五九年度(第二七期) | 役員改選 |
| 第四号議案 | 昭和五九年度(第二七期) | 事業計画(案)承認の件 |
| 第五号議案 | 昭和五九年度(第二七期) | 予算計画(案)承認の件 |
| 第六号議案 | 次期総会開催地決定の件 | |

- 閉会の辞
- 基調講演 「未来に向かつてのばそう印刷」 村松礼二
- パネルディスカッション 「未来に向かつてのばそう印刷」
- 記念撮影
- 懇親会

第二日目

- グループ長・常任幹事合同会議
- 昭和五九年度(第二七期)方針について
- 昭和五九年度事業計画について
- 岐阜全国大会準備状況と内容について

- 金沢総会の反省
- 九州・山口青年印刷人の会について
- 第二八回総会について
- 未加入グループ情報
- その他
- 閉会式

【日本印刷新聞記事】

全国緑友会次期総会は茨城で
業界活性化を高める

全国印刷緑友会(竹田光宏会長)は五月十一、十二日の両日、石川県金沢市の金沢シテイホテルで第二七回定時総会を開き、昭和五十八年度事業報告・決算報告および五十九年度事業計画・予算案をいずれも原案どおり承認した。

総会は、十一日午後一時半から、二十九グループ、一二二人の参加で開かれ、金沢青年印刷人クラブの永野博信・前出猛両氏の司会、田中泰氏(金沢)の開会宣言、君が代斉唱、城戸憲次氏(茨城)の先唱による緑友会綱領唱和を行ない。来賓および参加グループ紹介のあと、横井勲氏(金沢)から歓迎のことは述べられた。

竹田会長はあいさつで「今日のニューメディア、高度情報社会の中で、われわれがリーダーとして企業と業界の活性化を高めなければならない。内外の情報を生かし、新しいシステムに対応できるようにまとめていきたい」と述べ緑友会員の団結

を訴えた。そのあと来賓の江川昇金沢市長、小川甚次郎金沢商工会議所副会長、福島茂一石川県印工組理事長から祝辞が述べられた。
 次いで飯田範夫氏（長野）が議長に就任、議案の審議に入り、昭和五十八年度事業報告および決算報告、昭和五十九年度事業計画および予算計画をいずれも原案どおり承認した。
 午後三時からの基調講演は講師に村松礼二氏を迎えて「未来に向ってのばそう印刷」をテーマに約一時間にわたり有意義な話を聞いた。午後四時からは、コーディネーターの村松礼二氏、パネラーの竹田光宏・古賀健一・白井秀幸各氏らによる熱心な討論がおこなわれ午後五時半に終了した。そのあと記念撮影、懇親会がおこなわれ、翌日にはグループディスプレイスカッションを行なったあと、二日間にわたった大会を閉会した。

次期総会は茨城印刷緑友会の主管でおこなわれる。

第二八回総会

茨城・昭和六十・五・二五～二六

- 会場 水戸プラザホテル
- ホスト 茨城印刷緑友会
- 参加人数 三四グループ・一九八名
- 参加費 二万二〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（三名）、青森県印刷青年経営者会議（三名）、仙台印刷親会（三名）、福島印刷彩友会（一名）、新潟県印刷新世会（二名）、印刷同友会（四名）、千代田印刷人新世会（九名）、文京緑友会（四名）、東京写真製版若葉会（五名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、港支部若竹会（二名）、神奈川県正和会（十二名）、山梨印刷若人会（九名）、長野青年印刷人緑友会（七名）、名古屋而立会（十四名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（十一名）、金沢青年印刷人クラブ（八名）、福井県印刷青年部（四名）、京都印刷人月曜会（四名）、大阪青年印刷人クラブ（四名）、青鷗会（一名）、神戸印刷若人会（六名）、広島青年印刷研究会（四名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y.P.クラブ（一名）、福岡印刷若葉会（二十名）、久留米印刷緑友会（二名）、佐賀県印刷人若楠会（三名）、佐世保印刷若汐会（二名）、熊本印刷緑友会（一名）、大分印刷若梅会（二名）、宮崎印刷はまゆう会（二名）、沖縄青年印刷若潮会（四名）、茨城印刷緑友会（三四名）

第一日目

- 開会の辞
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介

- 歓迎のことば
 - 会長あいさつ
 - 来賓祝辞
 - 議長選出
- (議案審議)
- 第一号議案 昭和五九年度(第二七期) 事業報告承認の件
 - 第二号議案 昭和五九年度(第二七期) 決算報告承認の件
 - 第三号議案 昭和五九年度(第二七期) 会計監査報告
 - 第四号議案 全国印刷緑友会会則変更(案)
 - 第五号議案 昭和六十年(第二八期) 役員改選
 - 第六号議案 昭和六十年(第二八期) 予算(案) 承認の件
 - 第七号議案 次期総会開催地決定の件
- その他

- 閉会の辞
 - 記念撮影
 - 父親学級 「おやし学入門く父の知らない子供の心理く」 矢口武正
 - 懇親会
- 第二日目
- 科学万博見学

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会
新会長に古賀健一氏
早速3C(挑戦・変革・創造)を提唱

全国印刷緑友会の新会長に古賀健一氏(祥文社印刷(株))が就任した。五月二十五日茨城県水戸市で開かれた第二八回定期総会で決まったもの。またグループの活性化。コミュニケーションの促進などを柱とする昭和六十年(第二八期)事業計画と予算二七万円もあわせて打ち出した。

総会は全国各地から三四グループ二〇〇人が参加して行なわれた。
議案は

- ① 昭和五十九年度事業報告
 - ② 同決算報告および会計監査報告
 - ③ 全国印刷緑友会会則変更案
 - ④ 昭和六十年(第二八期)役員改選
 - ⑤ 同事業計画案
 - ⑥ 同予算案
 - ⑦ 次期総会開催地決定の七項目。
- このうち、役員改選では、竹田宏会長から「新会長には、すばらしい英和と行動

力にあふれた古賀健一氏を指名したい」との発言があり、満場一致で承認。さらに古賀新会長が常任幹事一人（グループ十人、個人八人）、会計監査二人を氏名し、新体制が固まった。古賀新会長は、「大きな使命と責任を感じる」と前置きし、チャレンジ（挑戦する力）、チェンジ（変革の中で自分や業界を変える力）、クリエイト（創造する力）の三Cを提唱、知恵を出し会員同士研鑽することが企業ひいては会の発展につながると強調した。

また、六十年度事業計画はつぎの六項目が打ちだされた。予算は二三七万〇六四円。

- ① グループの活性化と変化に対応できる組織づくりをめざす。
- ② 総会、大会、セミナーの三大自然のそれぞれの性格を明確にし、より緊密なグループ同士、会員同士のコミュニケーションを図る
- ③ ニューメディアに対応できる業界をめざし、研究、研さんをする
- ④ 対外的に緑友会のPRを活発に行ない、関連業界を含めた業界全体のレベルアップの一役を担う
- ⑤ 三十周年を成功させるために準備を行なう
- ⑥ 新名簿作成のために資料を整理する。

第二九回総会

神奈川・昭和六一・五・十七

- 会場 横浜国際会議場
- ホスト 神奈川正和会
- 参加人数 二九グループ・一八九名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（一名）、仙台刷親会（三名）、福島印刷彩友会（二名）、茨城緑友会（五名）、印刷同友会（五名）、千代田印刷人新世会（十名）、文京緑友会（十名）、東京写真製版若葉会（五名）、東京プロセス製版青樹会（十二名）、東印工組港支部若竹会（八名）、山梨印刷若人会（二名）、長野青年印刷人緑友会（十八名）、名古屋而立会（四名）、さふ印刷翠陽クラブ（三名）、金沢青年印刷人クラブ（五名）、福井県印刷青年部（九名）、京都青年印刷人月曜会（四名）、大阪青年印刷人クラブ（二名）、神戸印刷若人会（六名）、広島青年印刷研究会（二名）、下関青年印刷人緑友会（一名）、北九州Y.P.クラブ（一名）、福岡印刷若葉会（十四名）、佐賀県印刷人若楠会（三名）、熊本印刷緑友会（二名）、大分印刷若梅会（二名）、宮崎印刷はまゆう会（二名）、沖縄青年印刷若潮会（二名）、神奈川正和会（二八名）

第一日目

- 開会の辞
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長あいさつ

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出

(議案審議)

- | | | |
|-------|-------------|-------------|
| 第一号議案 | 昭和六十年(第二八期) | 事業報告承認の件 |
| 第二号議案 | 昭和六十年(第二八期) | 決算報告承認の件 |
| 第三号議案 | 昭和六十年(第二八期) | 会計監査報告 |
| 第四号議案 | 昭和六一年(第二九期) | 事業計画(案)承認の件 |
| 第五号議案 | 昭和六一年(第二九期) | 予算計画(案)承認の件 |
| 第六号議案 | 次期総会開催地決定の件 | |
| 第七号議案 | その他 | |

- 閉会の辞
- 全員参加によるデイスカッション
- 記念撮影
- 懇親会

第二日目

- グループ長・常任幹事合同会議

【日本印刷新聞記事】

全国緑友会
活性化などを方針
会員育てに英知結集

- 全国印刷緑友会(古賀健一会長)の第二九回総会が神奈川県横浜国際会議場(産業貿易センタービル)で開かれ、第二九期(昭和六十一年度)事業計画として
- ① グループの活性化と会員相互の親睦を深める
 - ② リーダーシップを持ち行動力のある会員を育てるため、英知を集める
 - ③ 次年度に開催する全国印刷緑友会三十周年記念大会の諸準備を積極的に推進する
 - ④ 新名簿を作製する
 - ⑤ 目的を同じくする印刷青年の団体との緊密な連絡を打ち出した。

総会は今回の主管グループである神奈川県野村幸和氏の開会の辞で始められ、君が代斉唱、緑友会綱領唱和、川名神奈川県印工組理事長ら来賓紹介のあと、今回の総会の実行委員長である大西敏夫氏が歓迎のことばを述べた。

つづいて古賀会長があいさつし大要次のように語った。「緑友も来年三十周年を迎えむずかしい時期にきている。現在、印刷という仕事は生産的なとらえかたをさえているが、もつと文化的なことを展開して、文化的産業としてとらえかたをされなければならぬと思う。またチャレンジ、チェンジ、クリエイティブの三つのCを提唱してきたが、引き続きこの三つのCを積極果敢に展開していく、最後に来年三

十周年記念大会があり、それが緑友の力となることを信じている。ぜひリーダーシップをとって、積極的に挑戦し、グループの活性化を進めて欲しい」。

川名神奈川県印工組理事長の祝辞のあと、議長に緑友前会長の竹田光宏氏が選出され、議事に入った。

昭和六十年（第二八期）事業報告、同決算報告、それに対する監査報告がされ承認された。この後基本会員（一グループにつき月額）一〇〇〇円から五〇〇円値上げして一五〇〇円という会則変更の件を古賀会長が説明し、承認可決された。

昭和六十一年（第二九期）事業計画案は、先の五つの項目の他、第二九回全国大会を長野県松本市で、第二〇回セミナーを京都で開催することなどを決め原案どおり承認可決された。同予算案も一部会則変更のため、訂正のち承認可決された。

最後に次期総会開催地を福井県と決定し総会を終え、全員参加によるディスカッション、記念撮影、懇親会が開かれた。

第三十回総会

福井・昭和六二・五・十六〜十七

- 会場 芦原温泉グランディア芳泉
- ホスト 福井県印刷青年部会
- 参加人数 三三グループ・一五〇名
- 参加費 二万四〇〇〇円
- 参加者
 - 名古屋而立会（五名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（五名）、金沢青年印刷人クラブ（二二名）、下関青年印刷人緑友会（一名）、北九州Y.P.クラブ（一名）、福岡印刷若葉会（九名）、熊本印刷緑友会（三名）、沖縄青年印刷若潮会（二名）、分印刷若梅会（一名）、東京プロセス製版青樹会（二名）、福島印刷彩友会（一名）、山形印刷研修会（一名）、神戸印刷若人会（五名）、広島青年印刷研究会（一名）、大阪青年印刷人クラブ（五名）、佐賀県印刷人若楠会（二名）、刷友青山会（三名）、青森県印刷青年経営者会議（二名）、京都青年印刷人月曜会（七名）、佐世保印刷若汐会（二名）、福井県印刷青年部会（十七名）

第一日目

- 開会の辞
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば

- 会長あいさつ
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出

(議案審議)

- 第一号議案 昭和六一年度(第二九期) 事業報告承認の件
 - 第二号議案 昭和六一年度(第二九期) 決算報告承認の件
 - 第三号議案 昭和六一年度(第二九期) 会計監査報告
 - 第四号議案 昭和六二年(第三十期) 役員改選
 - 第五号議案 昭和六二年(第三十期) 事業計画(案) 承認の件
 - 第六号議案 昭和六二年(第三十期) 予算(案) 承認の件
- 次期総会開催地決定の件 其他

- 閉会の辞
- 記念撮影
- バズセツション
- 休憩・入浴
- 懇親会

- 第二日目
- グループ長・常任幹事合同会議

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会の第三十回定期総会が五月十六日、福井県・芦原温泉の「グランディア芳泉」に、全国から三三グループ、一五〇人の青年印刷人を集めて開かれ、各種の議案を審議、原案どおり承認そのうち役員選挙では新会長に竹内一博氏を選んだ。

会は午後一時半、今総会の主管である福井県印刷青年会の関耕太郎会長による開会の辞ではじまり、国家斉唱、来賓紹介、参加グループ紹介、歓迎のことばのあと、会長あいさつと続いた。

古賀健一緑友会会長は「三十年とひと口にいうが、その間印刷業界は再編成期、隆盛期、激変期と分けることができる。業界と共に歩んできた緑友の歴史もまたしかりである。今後四十年と緑友会が発展するために何が必要か、真剣に討論すべきである」とし、今総会または全国大会に向け緑友各グループの団結を強調した。

ひきつづき来賓祝辞となり、村田琢治福井県印工組副理事長から歓迎のことばがおくられたあと、総会議事に移った。

この日の議案は六十一年度事業報告・決算報告・役員改選、六十二年度事業計画、予算案、次期総会開催地決定などすべて原案通り承認。

このうち役員改選では新会長に札幌青年印刷人の会所属の竹内一博氏(竹内印刷工業(株)代表取締役)が選ばれた。次期総会は山梨県で開催することなどが決まった。

新人事は竹内会長からの推せんで個人指名の常任幹事八人、会計監査二人、グル

ープ指名の常任幹事十グループなど新たに決定。
新体制のもとでの六十二年度事業計画では、ヘッドワーク（頭脳思考）、ネットワ
ーク（情報網の確立）、チームワーク（組織の強化と協力）という。“三ワーク”の
完成がうたわれている。

行事予定は今年八月一日に開催される第三十回全国大会（東京）、六十三年二月六
日に行なわれる第二十一回全国印刷緑友会セミナー（大阪）などがおもなところ。

総会終了後、全国大会実行委員長の山口雅也氏（千代田印刷人新世会）から、大
会参加の呼びかけ、古賀前会長の退任あいさつがあり午後三時閉会。

第三十回総会

山梨・昭和六三・五・十四～十五

- 会場 石和温泉・石和グランドホテル
- ホスト やまなし印刷若人会
- 参加人数 三四グループ・一八四名
- 参加費 二万円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（六名）、青森県印刷青年経営者会議（六名）、仙
 台印刷親会（四名）、山形印刷研修会（一名）、福島印刷彩友会（一名）、
 茨城印刷緑友会（八名）、印刷同友会（五名）、千代田印刷人新世会
 （五名）、文京緑友会（八名）、東京写真製版若葉会（四名）、東京プロ
 セス製版青樹会（八名）、東印工組港支部若竹会（三名）、刷友青山会
 （五名）、神奈川正和会（八名）、長野青年印刷人緑友会（十五名）、名
 古屋而立会（十名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（六名）、金沢青年印刷人ク
 ラブ（八名）、福井県印刷青年部会（三名）、京都青年印刷人月曜会
 （二名）、大阪青年印刷人クラブ（八名）、関西写真製版青樹会（二名）、
 神戸印刷若人会（四名）、広島青年印刷研究会（三名）、下関青年印刷
 人緑友会（一名）、北九州Y.P.クラブ（一名）、福岡印刷若葉会（五名）、
 佐賀県印刷人若楠会（四名）、熊本印刷緑友会（二名）、大分印刷若梅
 会（二名）、宮崎印刷はまゆう会（二名）、沖縄県青年印刷若潮会（二
 名）、東京青年印刷人協議会（五名）、やまなし印刷若人会（二七名）

第一日目

- 開会の辞
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば

- 会長あいさつ
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出
- 総会議事
- （議案審議）
- 第一号議案 昭和六二年度（第三十期） 事業報告承認の件
- 第二号議案 昭和六二年度（第三十期） 決算報告承認の件
- 第三号議案 昭和六二年度（第三十期） 会計監査報告
- 第四号議案 昭和六三年度（第三一期） 事業計画（案）承認の件
- 第五号議案 昭和六三年度（第三一期） 予算（案）承認の件
- 次期総会開催地決定の件
- その他

- 閉会の辞
- 記念撮影
- フリータイム
- 夕食会

- 第二日目
- グループ長・常任幹事合同会議

【日本印刷新聞記事】

緑友会山梨総会
三十年機に財政再建
緑友基金五〇〇万円超える

全国印刷緑友会（竹内一博会長）は、五月十四日午後三時から山梨県石和温泉の石和グランドホテルで、やまなし印刷人若人会・全国印刷緑友会山梨総会実行委員会主管の第三一回定期総会を開き、昭和六十三年度事業計画案など全議案を承認可決した。次期の第三二回総会は青森県印刷青年経営者会議の主管で青森県十和田湖で開かれる。

総会は佐藤茂雄氏（やまなし印刷若人会）の開会の辞ではじめられ、君が代斉唱につづき大鶴紀元氏（熊本県印刷緑友会）の先導により綱領唱和、小澤澄夫山梨県副知事、依田欣也山梨県印工組理事長以下、副理事長、専務理事、土屋健二山梨県軽印刷業組合副理事長らの来賓紹介、全国印刷緑友会三九グループの紹介があり、主管グループやまなし印刷若人会の藤森純一会長が歓迎のことばを次のように述べた。

「山梨にきてその印象はどうか。富士山があり自然に恵まれた環境、そして武田信玄ブームと山梨は活気づいている。『人は石垣、人は城』という信玄公の名文句があり、人を重んじた武将であったことをうかがわせる。ひとりひとりの力を発揮す

る。それが組織の力となる。緑友会もそういう会だ。今総会は登録から解散までグループ単位で動いてもらうことにし、親睦を深め、知り合うことを中心に設営した。山梨総会が思い出多き会となることを願う」

このあと竹内全国印刷緑友会会長が、「昨年の福井総会で会長に就任し、皆さんのおかげで一年間大過なく務めた。昨年は緑友会三十周年という節目にあたり、在京グループの努力、支援をいただき、参加者は八八〇人を数え盛大に式典を開くことができた。二月の大阪セミナーも内容の充実したものだ。大阪青年印刷人クラブの皆さんに大変お世話になった。このように行事も活発に行なわれたが、財政面でも緑友基金が五四五万円を数えるなど三十周年を契機に財政が再建された。実のある、意義ある使い方をしたい、この三十一期から大きな変化への旅立ちとなつていくと思う。企業三十年説は会運営にもあてはまると思う。気を引き締めて緑友会発展に寄与していきたい」とあいさつした。

来賓を代表して小澤山梨県副知事、依田山梨県印工組理事長が祝辞を述べた。このなかで小澤副知事は「盛りだくさんの事業をし、五百万円の緑友基金をみても、真面目な会という印象を得た」と話し、依田理事長は「資料をいただき三十周年を拝見し、この会に参加している人は数年後それぞれの地のリーダーシップをとる人ということがわかった。また緑友会の原点として、心のふれあいと自己研鑽の場」とあり、深く感銘をうけた。若者の柔軟な姿勢と皆さんの英知を結集し、技術革新などの波をくぐりぬけ熱意をもつて進んで欲しい」と激励した。

松島義昭全印工連顧問らの祝電披露につづき、古賀健一前会長（福岡印刷若葉会）を議長に議事に入った。はじめに第一号議案・昭和六十二年度（第三十期）事業報

告を竹内会長が、第二号議案・同決算報告を城戸憲次会計が述べ、佐々木孝朗監査が監査報告し、一括審議の結果、原案どおり承認可決。第三号議案・昭和六十三年（第三十一期）事業計画案を竹内会長、第四号議案・同予算案を城戸会計が行ない全会一致で可決した。このなかで事業計画として

①情報の公開：佐賀大会の体験発表、名古屋セミナーは業界、ユーザー、市民を巻こんで大きな器でやる。これは今までのセミナーが閉鎖的だったので、いろいろな人に聞いてもらいたいということを開く

②会員数が千二百を切っており会員の増強並びに未加入グループへのアプローチを行なう

③目的を同じくする印刷青年団体（全青協・JC印刷部会など）との緊密化

④各グループ例会への訪問―をあげた。第五号議案・次期総会開催地決定については、青森県青年経営者会議の主管で五月十三日に青森県十和田湖の十和田観光ホテルで開くことが決まった。

なお次期総会までの行事は第三一回佐賀全国大会（第六回九州山口青年印刷人大会併催） 十月一、二日嬉野温泉和多屋別荘・佐賀県藤津郡嬉野町、電話〇九五四―四二一〇二一〇（主管・佐賀県印刷人若楠会）、第二二回全国印刷緑友会セミナー 昭和六十四年二月十八日名古屋（主管・全国印刷緑友会常任幹事会、協力グループ・名古屋而立会）

第三二回総会

青森・平成一・五・十三～十四

- 会場 十和田観光ホテル
- ホスト 青森県印刷青年経営者会議
- 参加人数 三二グループ・一七六名
- 参加費 二万円
- 参加者

沖縄青年印刷若潮会(一名)、大分印刷若極会(三名)、熊本印刷緑友会(三名)、佐世保印刷若汐会(二名)、佐賀県印刷人若楠会(二名)、福岡印刷若葉会(四名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、広島青年印刷研究会(三名)、愛媛印刷人青年会(二名)、神戸印刷若人会(三名)、大阪青年印刷人クラブ(五名)、京都青年印刷人月曜会(二名)、福井県印刷青年部(二名)、金沢青年印刷人クラブ(九名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(五名)、名古屋而立会(五名)、長野青年印刷人緑友会(二名)、やまなし印刷若人会(四名)、神奈川正和会(四名)、刷友青山会(一名)、東印工組港支部若竹会(二名)、東京プロセス製版青樹会(五名)、東京写真製版若葉会(二名)、文京緑友会(九名)、千代田印刷人新世会(五名)、印刷同友会(四名)、茨城緑友会(二名)、福島印刷彩友会(二名)、山形印刷研修会(二名)、仙台刷親会(五名)、札幌青年印刷人の会(八名)、秋田市印刷懇話会(五名)、青森県印刷青年経営者会議(四四名)

第一日目

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば

- 会長あいさつ
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出
- 総会議事

(議案審議)

- 第一号議案 昭和六三年度(第三一期) 事業報告承認の件
 - 第二号議案 昭和六三年度(第三二期) 決算報告承認の件
 - 第三号議案 昭和六三年度(第三一期) 会計監査報告承認の件
 - 第四号議案 平成元年度(第三二期) 役員選任の件
 - 第五号議案 平成元年度(第三二期) 事業計画(案)承認の件
 - 第六号議案 平成元年度(第三二期) 予算(案)承認の件
- 次期総会開催地決定の件

- 記念撮影
- 部屋会議
- 交流会

第二日目

- グループ長・常任幹事合同会議
- 自己紹介
- 本年度重点事業計画について

- A) 未加入グループへのアプローチ
- B) 例会への訪問
- 佐賀大会について
- 一年間日程確認
- その他

【日本印刷新聞記事】

第三二回青森総会を開催

全国印刷緑友会

城戸会長（茨城印刷緑友会）が誕生
対外的PRを展開

全国印刷緑友会は五月十三日午後三時から、青森県青年経営者会議（大久保一博会長、秋元清仁青森総会実行委員長）の主管により、青森県十和田湖畔の十和田観光ホテルで第三二回全国印刷緑友会青森総会を開催し、席上、役員改選を行ない、新会長に茨城印刷緑友会の城戸憲次氏（株）きど印刷所）を選出した。今後二年間、城戸体制で全国印刷緑友会を運営することになった。事業計画としては緑友会としては緑友会の強化を図るため全国印刷緑友会の総合案内パンフレットを作成、対外的なPRを展開することになった。

総会は青森県印刷青年経営者会議の松尾幸夫氏の司会で進められ、同会の田中日露史氏の開会のことばで幕をあげた。君が代斉唱に続いて、立花建男氏のリードで綱領唱和が行なわれ、来賓の青森県印工組の赤間条二理事長、伊藤喜三郎副理事長、沢田正喜副理事長、木村義昭副理事長、伊藤景造専務理事、中谷静夫常務理事、日本軽印刷工業会の山協定信青森支部長が、司会者から紹介された。続いて、この日参加の全国印刷緑友会傘下グループが紹介された。

歓迎あいさつを青森県印刷青年経営者会議の大久保会長が大要次のように述べた。

「平成元年度という非常に区切りの良い年に総会を開くことができ嬉しい。それも一七〇人もの参加で開催でき、これも皆さんをはじめ、六五社の協賛会社、常任幹事・グループ長の支援のたまものである。全国印刷緑友会は三十年のあいだ友情で結ばれ、情報交換を交わし、企業または地域社会に貢献してきた。現在、青森県経済は停滞している。このような時に全国印刷緑友会の若いパワーを、その意気込みを吹き込んでほしい。今日は、ゆっくりと、じっくりと語り合っていたきたい」

このあと今総会で任を終える竹内一博会長が次のようなあいさつを行なった。

「福井の総会で会長に就任し、東京での三十周年大会の世話役ができた。身に余る光栄であり、緊張の連続であった。三十周年が終わったあとの佐賀大会は人が集まるか心配だったが、三五〇人が参集しそんな心配を吹き飛ばした。しかも手作りの体験発表があり、実りある大会になった。名古屋セミナーも而立会の活躍で開催できた。このセミナーは会員だけでなく業界人に聴講してもらい全国印刷緑友会を理解してもらうことを意図して開いたが、成功したと思う。また傘下グループの三

十周年行事に参加して大変参考になった。印刷緑友会基金も東京大会などのおかげで倍増した。

今総会で会長の任を終える。多くの心暖かい同志の支援によりなんとか二年間働くことができた」

赤間青森県印工組理事長が来賓を代表して「十和田湖は四季を通じて素晴らしいところである。今日あいにく雨だが、緑したたる雨の十和田湖もいいものだ。私は新緑の十和田湖が好きである。皆さんの会、全国印刷緑友会と同じである。有意義で実りある会であるよう祈る」と開催地の十和田湖と緑友会を重ね合わせたお祝いの言葉を贈った。

祝電披露に続き、議案審議に入った。

千代田新世会がPRパンフ担当

会則により古賀前会長が議長に付き、第一号議案の昭和六十三年度第三期事業報告を竹内会長が行ない承認された。第二号議案の同決算報告を城戸会計が、これに対する監査報告を大鶴紀元監査が行ない承認を得た。第三号議案の役員改選では竹内会長が城戸氏を指名、全会一致で承認した。

ここで議長が古賀元会長から竹内直前会長に移り議事進行された。第四号議案の平成元年度第三期事業計画案は城戸会長が説明した。城戸会長は永年務めた会計職の経験から全国印刷緑友会の財政が苦しいことを強調。会員拡大を図り健全な緑友会活動を展開することを主眼に対外的なPRを行ない、具体的には緑友会の総合案

内パンフレットを作成し緑友会の存在を知らしめていくことを提案。このパンフを使い未加入グループにアプローチし会員拡大を図っていくとし、承認を得た。このほかに

①平成元年にあたり緑友の原点を再確認する

②緑友だよりの充実を図る

③緑友OB会の発足の再検討をあげた。なおPRパンフレットは東京の千代田印刷新世会が編集を担当し、米倉伸三氏（千代田新世会）が編集委員を務める。

第五号議案・同予算案は白井会計が説明、PRパンフは緑友基金を一五〇万円から二〇〇万円位を切り崩して製作することで承認を得た。また次期総会開催地については愛媛印刷人青年会の主管で、四国・愛媛で開くことが決められ、議案審議を終了した。最後に青森県印刷青年経営者会議の長尾良宣氏の閉会のことばで総会の幕を閉じた。

場所を移して参加者全員で記念撮影し、このあと各部屋に別れて緑友会の今後のあり方について話し合った。午後六時三十分から交流会が開かれ、互いに懇親を深め緑友の精神の原点である友愛を確かめた。

第二三回総会

愛媛・平成二・五・十二～十三

- 会場 後温泉「宝荘ホテル」
- ホスト 愛媛印刷人青年会
- 参加人数 三一グループ・一八三名
- 参加費 二万円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(三名)、青森県印刷青年経営者会議(四名)、仙台刷親会(二名)、山形印刷研修会(一名)、茨城緑友会(二名)、印刷同友会(四名)、千代田印刷人新世会(四名)、文京緑友会(六名)、東京写真製版若葉会(二名)、東京プロセス製版青樹会(三名)、東印工組港支部若竹会(五名)、神奈川正和会(五名)、刷友青山会(三名)、やまなし印刷若人会(二名)、長野青年印刷人緑友会(二名)、名古屋而立会(十四名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(七名)、金沢青年印刷人クラブ(六名)、福井県印刷青年部会(五名)、大阪青年印刷人クラブ(四名)、神戸印刷若人会(七名)、広島青年印刷研究会(十五名)、下関青年印刷人緑友会(六名)、福岡印刷若葉会(三名)、佐賀県印刷人若楠会(二名)、熊本印刷緑友会(三名)、大分印刷若梅会(七名)、別府印刷組合青年部(二名)、宮崎印刷はまゆう会(三名)、沖縄青年印刷若潮会(三名)、愛媛印刷人青年会(三二名)

第一日目

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 祝電披露
- 議長選出

●総会議事

(議案審議)

- 第一号議案 平成元年度(第三二期) 事業報告承認の件
- 第二号議案 平成元年度(第三二期) 決算報告承認の件
- 第三号議案 平成元年度(第三二期) 会計監査報告
- 第四号議案 会則変更の件
- 第五号議案 平成二年度(第三三期) 事業計画(案)承認の件
- 第六号議案 平成二年度(第三三期) 予算(案)承認の件
- 第七号議案 次期総会開催地決定の件
- その他

- 閉会のことば
- 記念撮影
- トーキングタイム
- 湯情タイム
- 懇親会

第二日目

- グループ長・常任幹事合同会議

【日本印刷新聞記事】

定期総会たけなわ

全国印刷緑友会

将来展望を語り合う

全国から一七〇人参加

一七〇人が交流深めた緑友会総会

第三三回全国印刷緑友会の定期総会が五月十二日、全国印刷緑友会（城戸憲次会長）主催、愛媛印刷人青年会（西原透会長）主管のもと、愛媛県松山市・道後温泉「宝荘ホテル」で開かれた。全国から三一グループ、約一七〇人の青年印刷人が集まり、平成元年度事業報告・決算報告、同二年度事業計画・予算案、次期総会開催地などの審議を行なったほか、記念撮影、トーキングタイム、湯情タイム、懇親会などで交流を深めた。なお、次期三四回総会は札幌青年印刷人の会主管により北海道札幌市で開催されることに決まった。

総会は午後二時、愛媛印刷人青年会の桑田正一氏による開会のことはで幕を開けた。国歌斉唱、綱領唱和、来賓紹介、参加グループ紹介とつづき、岡田浩治愛媛総会実行委員長による歓迎のあいさつに移った。

岡田実行委員長は「私たち愛媛印刷人青年会一同は、昨年六月から実行委員会を組

織し、今総会が成功を収めるよう万全の準備を整えた。全国の若手印刷産業人が交流を深め、友情をあたためよう緑友の原点に立ち帰り、思い出深い総会としたい。今回参加してくれたのは三一グループ、約一七〇人余り。これだけ多くの仲間が集まってくれたことにより、私たちの所期の目的は達成できた。あとは日本最古の温泉である道後温泉につきかり、裸の心で親睦を深めていこう」と述べた。

城戸緑友会会長が壇上に立ち「今総会は緑友の原点を見つめながら、今後の進路を見極める意味において大切な総会となるであろう。そのため審議終了後にトーキングタイムを設けていただいた。どうかこの機会を逃すことなく、緑友会の将来についての展望を語りあってほしい」とあいさつ、今総会にかける意気込みを表した。

伊賀貞雪愛媛県知事（代理）、村上時雄松山市長（代理）ら来賓からの祝辞が披露されたあと、緑友会前会長である竹内一博氏が議長となり議案審議が行なわれた。この日の議案は①平成元年度事業報告②同決算・会計監査報告③会則変更④平成二年度事業計画⑤同予算⑥次期総会開催地決定⑦その他で、いずれも原案どおり承認された。

それによると、会則変更の件では会費の値上げが決まった。月額基本会費一五〇〇円が二二五〇円に、同会員割会費一人につき一〇〇円が一五〇円になるなど、いずれも五〇%の値上げである。これについて城戸会長は「当会唯一の情報媒体である『緑友だより』を真の情報誌にするための予算確保」と説明している。これにより平成元年度決算では年間七五万円であった『緑友だより』の発行費が、九〇万円にアップした。そのほか、会長活動費補助金も八万から二〇万円に引き上げられるなど、積極的運営に欠かせない費用の充当ぶりが目立つ。全体の予算も、平成元年度の三

一六万一四一二円に対し、平成二年度は三四五万八四一二円と約三〇万円の上乗せで承認された。

平成二年度の主な事業としては、第三三回全国大会が今年九月一、二の両日、名古屋市内において名古屋而立会主管のもと開かれる。また、第二四回セミナーは、常任幹事会主管、神戸印刷若人会協力のもと神戸で行なわれる。日時は平成三年二月九日が予定されている。

審議終了後、午後四時から記念撮影。そのあと各部屋に戻りトークンタイムとなり、情報交換をはじめ緑友会の将来についての議論が交わされた。

夜七時からの懇親会では、冒頭、西原透愛媛印刷人青年会会長が歓迎のあいさつ。にぎやかに鏡割りが行なわれ、伝統芸能である伊予万才が繰り広げられるなど華やいだ雰囲気のうちに進んだ。最後は緑友会恒例となった「くつがなる」を全員が手をつなぎながら合唱して終えた。

第二四回総会

札幌・平成三・五・二五

- 会場 ジヤスマック・プラザ
- ホスト 札幌青年印刷人の会
- 参加人数 三三グループ・一四〇名
- 参加費 二万円
- 参加者

青森県印刷青年経営者会議(五名)、仙台刷親会(二名)、新潟県印刷新世会(三名)、山形県印刷研修会(二名)、茨城印刷緑友会(十名)、印刷同友会(四名)、千代田印刷人新世会(三名)、文京緑友会(四名)、東京写真製版若葉会(四名)、東京プロセス製版青樹会(六名)、東京工組港支部若竹会(三名)、神奈川正和会(二名)、刷友青山会(三名)、やまなし印刷若人会(三名)、長野青年印刷人緑友会(二名)、群馬県青年印刷研究会(一名)、名古屋而立会(十名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(三名)、金沢青年印刷人クラブ(五名)、福井青年印刷部会(一名)、京都青年印刷人月曜会(一名)、大阪青年印刷人クラブ(六名)、神戸印刷若人会(三名)、愛媛印刷人青年会(六名)、広島青年印刷研究会(四名)、北九州Y.P.クラブ(二名)、福岡印刷若葉会(四名)、熊本印刷緑友会(二名)、大分印刷若梅会(五名)、佐世保印刷若汐会(二名)、長崎青年印刷人会(一名)、沖縄青年印刷若潮会(四名)、旭川(三名)、札幌青年印刷人の会(二二名)

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長あいさつ

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出
- (議案審議)
- 第一号議案 平成二年度(第三三期) 事業報告承認の件
- 第二号議案 平成二年度(第三三期) 決算報告承認の件
- 平成二年度(第三三期) 会計監査報告
- 第三号議案 会則変更の件
- 第四号議案 役員改選の件
- 第五号議案 平成三年度(第三四期) 事業計画(案) 承認の件
- 第六号議案 平成三年度(第三四期) 予算(案) 承認の件
- 第七号議案 次期総会開催地決定の件
- 閉会のことば

- チェックイン
- グループ長会議(オフロタイム)
- ゆかたトーキング
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

新会長は白井秀幸氏
 全国印刷緑友会 札幌に三三グループ集い総会

全国印刷緑友会(城戸憲次会長)は五月二十五日、第三四回定時総会を札幌青年印刷人の会(竹内一博会長)主管のもと、北海道札幌市の「ジャスマックプラザ」で開き、任期満了に伴う役員改選で新会長に白井秀幸氏(金沢青年印刷人クラブ、(株)アーツ)を選出するとともに、「緑友の仲間はより賢明な事業経営者をめざさなければならぬ」を基本方針にイノベーション作り、ネットワーク作り、マーケティング作りを推進していくことを決めた。なお、次期三五回総会は、広島青年印刷人研究会主管により、広島で開催されることになった。

総会は午後三時、札幌青年印刷人の会の小谷佳克氏による開会の言葉で幕を開けた。国歌斉唱、綱領唱和、来賓紹介、参加グループ紹介とつづき、竹内一博札幌青年印刷人の会会長が歓迎のあいさつ、「全国から三三グループ・一四〇人近い参加があり感謝している。北海道での開催は今回で三回目、皆さんで緑友の輪を広げたいこう」と述べた。

つづいて城戸会長が「新しいメンバーも加わり、これから進む道も変わってくると思う。私の任期が終り、また新しい緑友のチャレンジが始まる。皆さんの協力をお願いする」とあいさつした。

来賓の木野口功北海道印刷工業組合理事長が祝辞を述べたあと、竹内一博氏を議

長に選出し、平成二年度（第三三期）事業報告・同決算報告、会則変更の件、役員改選の件、平成三年度（第三四期）事業計画案・同予算案、次期総会開催地の決定の七議案を審議し、いずれも原案どおり承認した。

会則変更の件では、常任幹事数を現在の「一八人以内」から「二五人以内」としたほか、常任幹事会にブロック担当、イベント担当を新たに設置し、役員の責任分担を明確にした。この件について城戸会長から「二年という短い任期のなか精力的に活動していくための措置」との説明が行なわれたが、その際、一部から「細則が増えることにより緑友本来の姿を失ってしまうのではないか」との意見も出された。

役員改選では、城戸会長が、新会長に白井氏を指名し、承認を得たのにつづき、白井氏が常任幹事を指名した。就任のあいさつに立った白井氏は「緑友の底力を発揮して、業界発展のために頑張る」と抱負を語った。

三年度は、

①イノベーション作り

②ネットワーク作り

③マーケティング作り―の三事業を推進し、社会変革や技術革新に適応できる能力を養っていく。予算は約四一二万円。

審議終了後、引き続き常任幹事およびグループ長会議を開き、白井新会長が「もつとオープンに、そして若い人たちに理解してもらえるような会にしていきたい」とあらためてあいさつした。自己紹介のほか、十月に沖縄で開かれる全国大会の説明や会員名簿作成についての討議を行った。

六時半からの懇親会では、来賓の松島通昭全青協議長が祝辞を述べたあと、退任

する城戸会長と竹内直前会長に花束が贈られた。和やかにこん談がつづき最後は緑友会恒例の全員が手をつなぎながらの『くつがなる』合唱となり散会した。

新役員はつぎのとおり。

- ▽会長 白井秀幸（金沢青年印刷人クラブ、(株)アーツ）
- ▽直前会長 城戸憲次（茨城印刷緑友会、(株)きど印刷所）
- ▽総務 長田照久（やまなし印刷若人会、伸興印刷(株)）
- ▽会計 利根川政明（文京緑友、利根川印刷）
- ▽書記 岡田浩治（愛媛印刷人青年会、岡田印刷(株)）
- ▽広報 米倉伸三（千代田印刷人新世会、(株)ミイレー）
- ▽名簿 西川誠也（名古屋而立会、西川印刷(株)）

第二五回総会

広島・平成四・五・九

- 会場 広島ターミナルホテル
- ホスト 広島青年印刷研究会
- 参加人数 三三グループ・一八二名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(四名)、仙台印刷親会(二名)、山形印刷研修会(一名)、茨城印刷緑友会(七名)、印刷同友会(五名)、千代田印刷人新世会(三名)、文京緑友会(七名)、東京写真製版若葉会(二名)、東京プロセス製版青樹会(四名)、東印工組港支部若竹会(一名)、刷友青山会(二名)、神奈川正和会(四名)、長野青年印刷人緑友会(三名)、やまなし印刷若人会(三名)、名古屋而立会(十二名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(四名)、金沢青年印刷人クラブ(八名)、京都青年印刷人月曜会(二名)、大阪青年印刷人クラブ(四名)、神戸印刷若人会(八名)、愛媛印刷人青年会(十六名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、北九州Y.P.クラブ(一名)、福岡印刷若葉会(七名)、佐賀県印刷人若楠会(二名)、長崎青年印刷人(二名)、熊本印刷緑友会(十名)、大分印刷若楠会(十名)、宮崎印刷はまゆう会(二名)、沖縄青年印刷若潮会(三名)、広島青年印刷研究会会員(二四名)、広島青年印刷研究会会友(十六名)

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長挨拶

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 総会議事

(議案審議)

- 第一号議案 平成三年度(第三四期)事業報告承認の件
- 第二号議案 平成三年度(第三四期)決算報告承認の件
- 第三号議案 平成三年度(第三四期)会計監査報告
- 第四号議案 平成四年度(第三五期)事業計画(案)承認の件
- 第五号議案 平成四年度(第三五期)予算(案)承認の件
- 第六号議案 新規加入の件
- 次期総会開催地決定の件

- 閉会のことば
- 記念撮影
- チェックイン
- トーキングタイム
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

ネットワーク強化

全国緑友 9月に水戸で全国大会

広島青年印刷研究会が主管した「第三五回全国印刷緑友会広島総会」は、五月九日午後二時半から、広島市のターミナルホテルで開かれた。全国から三四グループ、約二百人の青年印刷人が参加、三年度の事業、決算報告や四年度予算案など六事項を審議し、いずれも原案どおり承認した。本年度事業としては第三五回全国大会を九月に茨城印刷緑友会の主管により水戸市で行なうほか、第二六回セミナーの日程も決めた。来年度の総会は、大分印刷若梅会の主管で実施される。

総会では国歌斉唱、綱領唱和につづき、実行委員長の佐々木孝朗氏による歓迎のことばで始まった。

白井秀幸全国印刷緑友会会長があいさつ「昨年の札幌総会で会長に就任して一年、会員の友情に支えられたおかげでがんばれた。もう一年、なんとか皆さんの期待に応えていきたい。現在は不透明な時代であり、ますます不安感が増しているが、こういう時こそ仲間が集い、同志的結合をはからなければならぬ。本年は会員名簿も完成し、より一層ネットワーク化が進むと思われる。本総会においてもトーキングタイムでネットワークについて取り上げている。これを機会に全国を網羅した仲間たちが、情報交換に努めることができれば幸いである」と述べた。

来賓を代表して松田栄治広島県印工組理事長が祝辞を述べ、祝電が披露された後、

全国緑友会の前会長である城戸憲次氏が議長となり審議を開始。

上程議案は

- ①平成三年度事業報告
- ②同決算報告、会計監査報告
- ③平成四年度事業計画
- ④同予算案
- ⑤新加入の件
- ⑥次期総会開催地―の六項目

四年度の主な事業は、九月二十六、二十七の両日に水戸京成ホテルで開かれる全国大会のほか、常任監事会・在京グループの主管で来年二月十三日にホリデーイン横浜で実施されるセミナー。また、ことし六月の完成を目指していた会員名簿は、八月か九月に発刊できる予定。

新規加入は東印工組の山之手支部山青会で、会長代理の伊藤厚志氏（株）正文堂が紹介された。

議事終了後、午後四時半からトーキングタイム、六時半すぎから懇親会が催された。

第三六回総会

大分・平成五・五・十五

- 会場 大分東洋ホテル
- ホスト 大分印刷若梅会
- 参加人数 三五グループ・一四二名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(八名)、仙台刷親会(六名)、茨城印刷緑友会(三名)、印刷同友会(二名)、千代田印刷人新世会(二名)、文京緑友会(七名)、東京写真製版若葉会(二名)、東京プロセス製版青樹会(三名)、東印工組港支部若葉会(二名)、刷友青山会(三名)、東印工組山之手支部山青会(一名)、神奈川正和会(二名)、長野印刷人緑友会(二名)、やまなし印刷若人会(二名)、名古屋而立会(八名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(九名)、会沢青年印刷人クラブ(四名)、能登半島印刷人クラブ(一名)、大阪青年印刷人クラブ(三名)、神戸印刷若人会(六名)、愛媛印刷人青年会(三名)、広島青年印刷研究会(二名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、北九州Y.P.クラブ(一名)、福岡印刷若葉会(三名)、久留米印刷緑友会(四名)、佐賀県印刷人若楠会(三名)、長崎青年印刷人会(四名)、熊本印刷緑友会(十一名)、鹿児島県印工組青年部(二名)、沖縄県印刷若潮会(二名)、別府印刷組合青年部(三名)、大分印刷若梅会(十九名)、大分印刷若梅会OB(四名)

第一日目

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば

- 会長挨拶
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 総会議事
(議案審議)
- 閉会のことば
- 記念撮影
- チェックイン
- トーキングタイム
- 懇親会

第二日目

- グループ長・常任幹事会会議

【日本印刷新聞記事】

緑友会 新会長に利根川政明氏
組織活性化へ委員会設置

全国印刷緑友会(白井秀幸会長)は五月十五日、大分市内のホテルで第三六回定時総会を開催、新会長に文京緑友会の利根川政明氏(利根川印刷(株))を選任した。

利根川新会長は就任あいさつの中で、加盟各グループの活性化のための具体策として常任幹事会に組織活性化委員会を設置することを明らかにした。

なお、次期総会は来年五月仙台刷親会の相当により宮城県で開かれる。総会には全国の三四グループから約百五十人の青年印刷人が出席した。

国歌斉唱、緑友会綱領唱和、グループ紹介の後、野中孝志大分総会実行委員長が「厳しい経済環境の中、印刷業界は経営方針、社員教育などの充実と、情報の発信基地としての役割を果たすべき重要な時期に来ている。その中で全国緑友会メンバーとふれあい、情報交換できることは、大いに意義のあることで、その準備ができたことは無上の喜びである」と歓迎のあいさつをした。

白井会長があいさつに立ち、「この機会をもって二年間の会長を終えることになるが、イノベーション、ネットワーク、マーケットの醸成を目標として掲げ、多くの方々の暖かい友情とご支援に支えられた。そして、新会長はじめフレッシュな常任幹事、グループ長によるチャレンジが始まるわけで、まさに『新たな時代の流れをつかむ』総会になるものと期待している」と述べた。

高山泰四郎大分県印工組理事長から祝辞が贈られた後、城戸憲次前会長（茨城印刷緑友会）を議長にして議事に入った。

上程議案は

- ①平成四年度事業報告
- ②同決算報告、監査報告
- ③会則変更
- ④五年度役員改選

- ⑤同事業計画
- ⑥同予算案

⑦次期総会開催地―の七事項で、いずれも原案どおり承認された。役員改選では、白井会長から「新会長には利根川政明氏をとの推薦があり、昨年の第一回常任幹事会で了承された。その後、第一回グループ長会議でも承認されたので、次期会長として利根川氏を選任した」との報告が行われた。

あいさつに立った利根川新会長は「緑友会も設立三十六年を迎えたわけだが、先輩たちの先見性には頭が下がる。これから先、われわれがやるべきことは、緑友の精神を次世代につなげることであり、この会が永遠に栄える組織とすることだ。そのためにも各傘下グループ自体が活性化しなければならぬ」と述べた。そのために組織活性化委員会を設置することを提唱した。また、役員人事では新たに広報、渉外、OB担当、名簿担当の幹事を決め、きめの細かい体制で臨みたいとの抱負を披れきした。

午後五時からはトークンタイムとなり「グループの活性化について」をテーマに約一時間、各グループの現状が話し合われた。

新役員はつぎのとおり。

- ▽会長 利根川政明（文京） 利根川印刷（株）
- ▽直前会長 白井秀幸（金沢）（株）アーツ
- ▽総務 梶原伸郎（神戸） 梶原出版印刷（株）
- ▽会計 長田照久（山梨） 伸興印刷（株）
- ▽書記 米倉伸三（千代田）（株）ミイレー

- ▽広報Ⅱ安藤博（岐阜）安藤印刷（株）
- ▽渉外Ⅱ伊藤文二（札幌）国文社工業印刷（株）
- ▽OB・名簿Ⅱ西川誠也（而立）西川印刷（株）
- ▽会計監査Ⅱ糸洲昇（沖繩）総合プロセス製版（株）、榎本則義（同友）（株）榎本印刷所《ブロック担当》
- ▽北海道・東北Ⅱ長尾良宣（青森）長尾印刷（株）
- ▽関東・信越Ⅱ木村明（長野）（株）ツルガ、小倉克夫（茨城）（株）二鶴堂印刷所
- ▽東京Ⅱ西岡義栄（神奈川）（株）エイコープリント、小森善信（同友）（株）小森コーポレーション、大内靖（青樹）（株）大内プロセス▽中部Ⅱ中村寿男（金沢）（株）正和工業所
- ▽近畿・中国・四国Ⅱ佐々木孝朗（広島）佐々木印刷（株）、西原透（愛媛）第一印刷（株）
- ▽九州・北Ⅱ松浦正欣（佐賀）松浦印刷（株）▽九州・南Ⅱ山口善生（長崎）（有）東洋印刷

第二七回総会

仙台・平成六・五・二一

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長挨拶

- 会場 作並温泉「岩松旅館」
- ホスト 仙台刷親会
- 参加人数 三二グループ・一五〇名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者
 - 沖縄県印刷若潮会（二名）、大分印刷若梅会（三名）、熊本県印刷緑友会（三名）、佐世保印刷若汐会（一名）、長崎青年印刷人会（二名）、佐賀県印刷人若楠会（二名）、福岡印刷若葉会（二名）、広島青年印刷研究会（一名）、愛媛印刷人青年会（一名）、神戸印刷若人会（四名）、大阪青年印刷人クラブ（五名）、金沢青年印刷人クラブ（五名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（八名）、名古屋而立会（十七名）、長野青年印刷人緑友会（二名）、やまなし印刷若人会（二名）、神奈川正和会（三名）、東印工組山之手支部山青会（二名）、刷友青山会（二名）、東印工組港支部若竹会（二名）、東京プロセス製版青樹会（二名）、東京写真製版若葉会（二名）、文京緑友会（六名）、千代田印刷人新世会（三名）、印刷同友会（五名）、茨城印刷緑友会（四名）、福島印刷彩友会（二名）、山形印刷研修会（六名）、青森県印刷青年経営者会議（五名）、札幌青年印刷人の会（二名）、郡山凹凸クラブ（二名）、仙台刷親会（四十名）

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出
- (議案審議)
- 第一号議案 平成五年度(第三六期) 事業報告承認の件
- 第二号議案 平成五年度(第三六期) 決算報告承認の件
- 平成五年度(第三六期) 会計監査報告
- 第三号議案 新グループ入会承認の件
- 第四号議案 平成六年度(第三七期) 事業計画(案)承認の件
- 第五号議案 平成六年度(第三七期) 予算(案)承認の件
- 第六号議案 次期総会開催地決定の件
- 閉会の言葉
- 記念撮影
- トーキングタイム
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

”時代の風にのる緑友“

印刷緑友会仙台総会
原点に戻り語ろう

全国印刷緑友会(利根川政明会長)の第三七回定期総会が、五月二十一日午後一時から、仙台市青葉区の作並温泉・岩松旅館で「時代の風にのる緑友」をスローガンに開催された。

総会には三二グループ(内オブザーバー参加一グループ)の二五二人が参加した。君が代斉唱、綱領唱和につづいて、参加グループが紹介された。平野邦夫仙台総会実行委員長の歓迎の言葉があり、利根川会長が「総会の原点である語らいの場を多く持っていたくためにトーキングタイムの時間を多くとった。『グループの活性化』そして『緑友ネットワーク』を通じて自社の改善、経営計画の見通しのキーワードの発見に活発な情報交換をしていただきたい」とあいさつした。

来賓として総会に出席した江馬宮城県印刷工業組合理事長は「業界には沢山の課題が山積している。しかし不況の中で開催した94みやぎ印刷機材展の成功を見るにつけても、印刷業界の今後には明るさが見える。この仙台総会での討論をおして、業界全体の発展を大きく寄与されることを希望する」と祝辞を述べた。

十月十五・十六日に大阪大会

議案審議に入り、平成五年度の事業報告・決算報告を承認した。新グループとして、徳島一二会の新規加入を承認し、緑友会の参加グループは四五になった。

その後、平成六年度の事業計画・予算案が審議され、十月十五、十六日に行われる大阪大会、七年二月十八日に開催されるセミナー等の事業を含む三九七万円の予算が承認された。最後に次年度の総会は長崎印刷人会が主管して行うことを決め、議案審議を終えた。

記念写真の撮影を行った後、一五テーブルに別れてのトークキングタイムが三時から、約二時間行われた。その後テーブルリーダーの報告があり、印刷緑友会のありかたなどについて意見が披露された。

テーブルごとに募集した標語は出席者全員の投票によって、優秀作品三点が選ばれ、懇親会の席で発表された。

総会終了後、行われた懇親会では、全国のグループから寄せられた各地の銘酒が参加者に振る舞われた。この席で発表された三点の標語は「いま君がキーボード」「感謝刷る、愛刷る、心刷る」「手をあげてヤア」と言おう遠くてもであった。また、郡山凸凹クラブから早い時期での緑友会への再加入を検討していることが述べられた。

総会旗が、仙台刷親会から次年度開催地長崎印刷人会にバトンタッチされ、佐藤元仙台刷親会長の締めで仙台総会は幕を閉じた。

第二八回総会

長崎 平成七・五・十三

- 会場 ホテルグリーンコースト長崎
- ホスト 長崎青年印刷人会
- 参加人数 三四グループ・一三四名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(一名)、青森県印刷青年経営者会議(六名)、秋田県印刷経営青年部会(二名)、仙台刷親会(三名)、山形印刷研修会(十三名)、茨城緑友会(五名)、印刷同友会(三名)、千代田印刷新世会(三名)、文京緑友会(五名)、東京写真製版若葉会(二名)、東京プロセス製版青樹会(二名)、東印工組港支部若竹会(一名)、刷友青山会(一名)、東印工組山の手支部山青会(二名)、神奈川正和会(二名)、やまなし印刷若人会(三名)、長野青年印刷人緑友会(二名)、名古屋而立会(六名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(六名)、金沢青年印刷人クラブ(二名)、能登半島印刷人クラブ(二名)、大阪青年印刷人クラブ(二名)、神戸印刷若人会(三名)、愛媛印刷人青年会(二名)、広島青年印刷研究会(四名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、北九州Y.P.クラブ(一名)、福岡印刷若葉会(二名)、佐賀県印刷人若楠会(二名)、佐世保印刷若汐会(六名)、熊本印刷緑友会(三名)、大分印刷若梅会(五名)、黎明さつま(三名)、沖縄青年印刷若潮会(二名)、長崎青年印刷人会(二十名)

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長挨拶

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出
- (議案審議)
- 第一号議案 平成六年度(第三七期) 事業報告承認の件
- 第二号議案 平成六年度(第三七期) 決算報告承認の件
- 第三号議案 平成六年度(第三七期) 会計監査報告
- 第四号議案 平成七年度(第三八期) 役員改選の件
- 第五号議案 平成七年度(第三八期) 事業計画(案)承認の件
- 第六号議案 平成七年度(第三八期) 予算(案)承認の件
- 閉会のことば 次期総会開催地決定の件
- 記念撮影
- チェックイン
- グループ長会議
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

各地で総会

新会長に長尾良宣氏選ぶ

全国印刷緑友会

「友情と研鑽」につとめる

全国印刷緑友会(利根川政明会長)は五月十三日、長崎県で第三八回総会を開催、役員の改選で新会長に青森県印刷青年経営者会議所属の長尾良宣氏を選出した。

長尾新会長は「緑友会は友情とふれあいの気持ちと重視し、いろんな問題を語り合う場でもある。自己実現のため大いに勉強し、新しいモラルをぜひとも確立したい」と抱負を述べるとともに、緑友会の意義についても語った。なお、来年の総会は五月二十五日、山形県の天童市で開かれる。

総会は長崎県内のリゾートホテル「ホテルグリーンコート長崎」で午後二時から始まった。長崎青年印刷人会の平山雅則氏が開会のことばを述べた後、国歌斉唱、綱領唱和、来賓紹介、参加グループ紹介と進行した。

今総会の実行委員長である松尾一成氏による歓迎のことばの後、利根川会長が「私はこの総会で二年間の会長職の任期を満了するが、その間、『自らのグループの

活性化なくして全国緑友の活性化はない』ということを目標にし、全国三三グループを訪問した。その結果、新たに三グループが緑友会に加入してくれたことをうれしく思う。本総会で新しい会長、常任幹事、グループ長による新執行部が発発した、緑友五〇周年に向けてのチャレンジがスタートする。新執行部へのさらなるご支援、ご協力をお願いしたい」とあいさつした。引き続き、長崎県印刷工業組合の岩永義人理事長が祝辞を述べ、祝電が披露された。

議案の審議は二時半すぎから、城戸憲次元会長（茨城印刷緑友会）が議長に就任して始まった。

上程議案は

- ①平成六年度事業報告
- ②同決算報告
- ③平成七年度役員改選
- ④同事業計画
- ⑤同予算案
- ⑥次期総会開催地―六項目。

六年度事業報告、同決算報告とも原案どおり承認された。

役員改選については利根川会長から報告があった。それによると、昨年十一月に常任幹事会、今年二月にグループ長会議をそれぞれ開き、後任人事についての協議を重ねた結果、新会長には青森県印刷青年経営者会議の長尾良宣氏（長尾印刷（株）

代表取締役）を選んだとのこと。

長尾新会長は就任あいさつで「緑友会には第三一回山梨総会の時に初めて参加した。それ以来、たくさんの仲間もでき、学ぶことも多く感謝している」と語り、今後とも同会の発展に力を尽くすとした。

つぎに会長自ら新しい常任幹事、グループ長を発表した。平成七年度の事業計画としては「友情と研鑽」との方針がまず示され、第三八回大会（平成七年八月四、五日、熊本県阿蘇プリンスホテル）、第二九回セミナー（平成八年二月十七日、金沢市民芸術ホール）などの日程を確認した。七年度収支予算額は四〇六万四二二円を計上。

緑友会の新役員はつぎのとおり。

- ▽会長 長尾良宣（青森県印刷青年経営者会議）
- ▽直前会長 利根川政明（文京緑友会）
- ▽常任幹事 伊藤文二（総務、札幌青年印刷人の会）、小倉克夫（広報、茨城県印刷緑友会）、西岡義栄（会計、神奈川県正和会）、棚橋泰仁（名簿担当、名古屋而立会）、佐々木孝朗（書記、広島青年印刷研究会）、山口善生（渉外、長崎青年印刷人会）
- ▽会計監査 梶原伸朗（神戸印刷若人会）、松浦正欣（佐賀県印刷人若楠会）

第三九回総会

山形 平成八・五・二五

- 会場 天童ホテル
- ホスト 山形印刷研修会
- 参加人数 三二グループ・二二三名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営会議(五名)、秋田緑友会(五名)、仙台刷親会(七名)、福島印刷彩友会(二名)、郡山凸凹倶楽部(二名)、茨城印刷緑友会(三名)、印刷同友会(三名)、千代田印刷人新世会(三名)、文京緑友会(四名)、東京写真製版若葉会(二名)、東京プロセス工組青樹会(二名)、東京工組港支部若竹会(三名)、刷友青山会(一名)、東印工組山の手支部山青会(一名)、神奈川正和会(五名)、山梨印刷若人会(五名)、長野青年印刷人緑友会(七名)、名古屋而立会(六名)、さぶ印刷翠陽クラブ(六名)、金沢青年印刷人クラブ(三名)、大阪青年印刷人クラブ(四名)、神戸印刷若人会(二名)、広島青年印刷研究会(二名)、福岡印刷若葉会(一名)、佐賀県印刷人若楠会(三名)、長崎青年印刷人会(三名)、熊本印刷緑友会(二名)、分印刷若梅会(一名)、黎明さつま(二名)、沖縄県印刷若潮会(二名)、山形印刷研修会(二名)

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎のことば
- 会長挨拶

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 議長選出

(議案審議)

- 第一号議案 平成七年度(第三八期) 事業報告承認の件
 - 第二号議案 平成七年度(第三八期) 決算報告承認の件
 - 第三号議案 平成七年度(第三八期) 会計監査報告
 - 第四号議案 平成八年度(第三九期) 事業計画(案)承認の件
 - 第五号議案 平成八年度(第三九期) 予算(案)承認の件
- 次期総会開催地決定の件

- 閉会のことば
- パネルディスカッション
- 記念撮影
- チェックイン
- グループ長会議
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

活性化に向けて
各種の事業計画
印刷緑友会山形総会

全国印刷緑友会（長野良宣会長）は五月二十五日、山形・天童市の天童ホテルで第三十九回山形総会を開き、平成七年度事業・決算・会計監査報告、同八年度事業計画・予算案などの議案を審議し、いずれも原案どおり承認した。八年度は「緑友情報ネットワークの活用とグループの活性化」を基本方針に総会・大会・セミナーをとおして全国四六青年印刷人グループの活性化を図る。

長尾会長あいさつ ハード・ソフトを含めた技術革新の波は大変なスピードで進んでおり、プリプレスの電子化は他産業を巻き込んで印刷の概念を大きく変えつつある。このような混沌の時代の中での経営基盤の確立、フルデジタル化、グローバルなネットワーク化などへの対応には、明瞭な経営理念の再構築はもちろん、今以上に経営の抜本的な体質の強化と改善をエネルギーギッシユな行動力で進めていかなければならない。二十一世紀の業界を担う青年印刷人として、取り組まねばならない多くの問題を緑友会の大きな友情と信頼の輪の中で情報交換し、研鑽していく時である。

〔八年度の大会・セミナーの日程〕

第三十九回全国大会

主管Ⅱやまなし印刷若人会

日時Ⅱ平成八年十月十九・二十日

場所Ⅱ山梨県甲府湯村温泉郷・常盤ホテル

第三十回セミナー

主管Ⅱ大阪青年印刷人クラブ、神戸印刷若人会

場所Ⅱ神戸市産業復興センター

第四十回総会

長野 平成九・五・二四

- 会場 ホテル国際²¹
- ホスト 長野青年印刷人緑友会
- 参加人数 三二グループ・一六二名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（二名）、青森印刷青年経営者会議（六名）、秋田印刷緑友会（二名）、仙台刷親会（七名）、山形印刷研修会（四名）、新潟県印刷新世会（四名）、茨城印刷緑友会（三名）、印刷同友会（四名）、千代田印刷人新世会（三名）、文京緑友会（五名）、東京写真製版若葉会（二名）、東京プロセス工業協同組合青年部青樹会（二名）、東印工組港支部若竹会（三名）、刷友青山会（一名）、東印工組山の手支部山青会（二名）、神奈川正和会（五名）、やまなし印刷若人会（十三名）、名古屋而立会（六名）、さぶ印刷翠陽クラブ（五名）、金沢青年印刷人クラブ（三名）、大阪青年印刷研究会（二名）、北九州Y.P.クラブ（二名）、福岡印刷若葉会（二名）、佐賀県印刷人若楠会（十一名）、長崎青年印刷人会（二名）、熊本県印刷緑友会（三名）、大分印刷若梅会（二名）、鹿児島県印刷工業組合黎明さつま（四名）、沖縄印刷若潮会（二名）、長野青年印刷人緑友会（四二名）

- 開会のことば
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓・新グループ紹介
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓祝辞

- 議長選出
（議案審議）
- 第一号議案、第七号議案
- 閉会のことば
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

第四十回総会前日におこなわれた長野青年印刷緑友会四十周年式典の記事（日本印刷新聞）

式典・演奏会を挙行
 四十周年迎えた長野
 青年印刷人緑友会

昭和三十三年七月に発足した長野青年印刷人緑友会（羽田好男幹事長）は今年で創立四十周年を迎え、五月二十三日、長野市・ホテル国際21で記念式典ならびに記念演奏会を挙行した。記念式典には現役、OBのほか、長野県印工組、関連業界団体、各地区の全国印刷緑友会加盟の青年会など関係者約百人が出席し、席上、羽田幹事長は「四十年は通過点である。印刷産業の新たな未来に向け、われわれ一人ひとりの英知を結集し、一丸となって業界発展のために尽くしたい」と決意を述べた。式典は、二階「弥生の間」で行われ、開会の辞、国歌斉唱、緑友会綱領唱和、来賓

紹介のあと、羽田幹事長が「印刷業界は今、デジタル化、マルチメディア化など高度情報システムの急速な進展に伴い、大きく変わろうとしている。その大きな変化をいかに受け止めて、どのように明日の印刷業界の新しいビジョンを描き、実現させていくかがこれからの課題。そこで本年、当会の不動産の事業方針である

①自己啓発

②相互親睦

③業界と社会への役割

の三本柱に印刷産業電子メディア研究会の設立という、もう一つの柱を加えた。これは、四十周年特別事業として長野県印工組の付託を受け、当会のメンバー企業で構成し、コンピューターネットワークによるマルチメディア関連の協同受注・制作のシステム化に向け研究活動を始めたところである。四十年は通過点。印刷産業の新たな未来に向けて、われわれ一人ひとりの英知を結集し、一丸となって業界発展のために尽くしたい」と抱負を述べた。

式典終了後、記念演奏会としてインディアンハーブ奏者の倉沢信子さんの演奏を堪能した。

「天 会」

第二一回大会

沖繩 昭和五三・十・六〜七

- 会場 沖繩パシフィックホテル
- ホスト 沖繩県青年印刷若潮会
- 参加人数 二八グループ・二八三名
- オプザバー・ゲスト参加 四団体十二名 計二九五名
- 参加費 二万五〇〇円
- 参加者

印刷同友会(三十六名)、名古屋而立会(十三名)、北九州Y.P.クラブ(十六名)、神奈川県(十三名)、仙台刷親会(十九名)、久留米印刷緑友会(五名)、下関青年印刷人緑友会(九名)、神戸印刷若人会(九名)、金沢青年印刷人クラブ(七名)、東京写真製版若葉会(七名)、茨城緑友会(十六名)、広島青年印刷研究会(十三名)、長野青年印刷人緑友会(九名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(十名)、新潟県印刷新世会(七名)、大阪青年印刷人クラブ(二十名)、文京緑友会(四名)、大阪写真製版二世会(二名)、福岡印刷若葉会(二十名)、佐世保印刷若汐会(五名)、札幌青年印刷人の会(二名)、大分印刷若梅会(七名)、福島印刷彩友会(一名)、東京プロセス製版青樹会(五名)、熊本印刷緑友会(二名)、日本青年会議所印刷部会(二名)、東京青年印刷人協議会(一名)、札幌青年印刷人の会(二名)、沖繩青年印刷若潮会(二九名)

第一日目

- 開会宣言
- 国家斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓及びグループ紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 全国印刷緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 歓迎のことば
- 来賓祝辞
- 閉会の辞
- 記念講演 「琉球の歴史と文化」 新屋敷幸繁氏
- 分科会

第一分科会 千代田印刷人新世会

「後継者の悩みと

後継者の執るべき経営姿勢とその理念について」

第二分科会 長野青年印刷人緑友会

「小規模経営における企業内教育」

第三分科会 仙台刷親会

「印刷業に於けるサービスを探るゝ不況時対策として」

第四分科会 福岡印刷若葉会

「不況過当競争激化の時代に当たり

時代の転換期に如何に対処していくべきか」

第五分科会 新潟県印刷新世会

「地方都市に於ける印刷業の諸問題」

●懇親会

第二日目

- 分科会報告
- 次期大会開催地代表挨拶
- 緑友会旗伝達
- 記念撮影
- 観光出発

【日本印刷新聞記事】

盛大に沖縄大会開く 全国印刷緑友会

全国から二九グループが参加
五分科会で問題を討議

「碧い空 海、協調と創造を求めて」を主テーマにして、二九グループが加盟する全国印刷緑友会の第二一回沖縄大会が、十月六、七の両日、沖縄県那覇市内のパシフィックホテルで開催された。三〇〇人が参加して開かれた大会は、式典、記念講演、五つに分れての分科会討論で第一日目を終り、第二日目は全体集会で各分科会報告、次期大会開催地の北九州YPクラブ代表あいさつと緑友会旗伝達、ホテルプールサイドでの記念撮影のち、沖縄本島南部の戦跡めぐりと、多彩な行事であった。

沖縄の歴史講演も

ホテル内大会場で開かれた緑友会第二一回大会式典は、沖縄青年印刷若潮会の与那覇正俊氏の力強い開会宣言で始まり、参加三〇〇人の君が代斉唱、綱領唱和、物故者への黙祷のあと来賓やグループ紹介があった。ついで大会実行委員長の大城新正氏（沖縄若潮会会長）、緑友会会長作道亮雄氏のあいさつのもと、平良幸市県知事（代）、平良良松那覇市長（代）、西平守栄沖縄県印工組理事長らがそれぞれ祝辞を述べた。式典はこれで終了、沖縄の歴史・風土・分化などに詳しくふれた記念講演を沖縄大学学長の新屋敷幸繁氏から聞いた。

全国化へ一層努力

緑友会大会第一日目の作道亮雄会長のあいさつ（要旨）
緑友会三十年に向けての第一歩としての第二一回大会は、沖縄若潮会の熱意あふれる主管のもとに開かれた。全国二九グループのほか、ゲストグループ、それにオブザーバー参加に大分、札幌のグループが加わり三〇〇人の大会になった。しかしまだ全国の結集はされておらず、この沖縄大会を機にいつそう全国組織化の努力を進めたい。そのためには加盟者もスリーピンググループであってはならない。

こん回の沖縄大会のすべてを通じ緑友の喜びを大きくよみがえらせていき、緑友三十年に向けての新しい気運を盛りあげていきたい。

参加者全員が発言

Ⅱ分科会Ⅱ

大会の午後三時半過ぎから分科会討論に入り、同五時半までの二時間、参加者全員が発言する討論を交わした。分科会のテーマは当面する緑友会員や各グループの抱える問題を取りあげており、次の項目を各分科会で話し合った。（討論内容は次号掲載）

第一分科会 後継者の悩みと後継者の執るべき経営姿勢とその理念について（担当グループ千代田印刷人新世会、リーダー中村勝亮・島崎文雄両氏）

第二分科会 小規模経営における企業内教育（担当・長野青年印刷人緑友会、リーダー宮下博、飯田範夫両氏）

第三分科会 印刷業におけるサービスを操るⅡ不況時対策として（担当・仙台刷親会、リーダー庄子義、斎藤健二両氏）

第四分科会 不況過当競争激化の時代に当りⅡ時代の転換期に如何に対処していくべきか（担当・福岡印刷若葉会、リーダー前田福一、青柳泰秀両氏）

第五分科会 地方都市に於ける印刷業の諸問題（担当・新潟県印刷新世会、リーダー渡辺慶一郎、高見潔両氏）

次期は九州で開催

緑友会大会第二日目は、十月七日午前八時半から、各テーブルリーダーによる分科会報告のあと、次期大会開催地（北九州市）でホストをつめる北九州YYPクラブに対する緑友会旗伝達と同じクラブ代表の「決意にもえ、大いに論議し会を発展させたい」とのあいさつがあり終了した。

このあとホテルのプールサイドに全員が集合、記念撮影をおこなったのち、沖縄

南部の戦跡めぐりと観光をおこない、大会行事のすべてを終了した。

なお、こん回の大会にオプサーバーとして参加した、大分印刷若梅会と札幌青年印刷人の会に対し、感謝の気持ちを込めた記念品が沖縄若潮会から贈られ、作道会長も「両会とも緑友会とは、いっそう前向きな関係が進んでいることから、近いうちに会の一員として迎えたい」とあいさつした。また、仙台刷親会からは、六月の宮城県沖地震に対する救援に対する謝辞と地震の教訓をまとめたパンフレットが全員に贈られた。

二十年史編さん進む

緑友会は今年で満二十周年を迎えたことにより、かねてから初代会長市村道德氏（東京・印刷同友会）を中心に進められてきた『二十年史』について、同氏から大会中、特別報告がおこなわれた。市村氏は「編さん作業は着々と進んでいるが、まだ一、二の不足する記録があり、それらを充実させ生き生きとした二十年の歩みを綴りたい。各グループの協力を」と要請、編集にたずさわる役員からは、各グループ紹介のゲラ刷りが手渡され、内容を充実してもらうよう要望された。同二十年史は、早ければ年内、おそくとも来春そうそうには発行される予定。

第二二回大会

- 会場 北九州 昭和五四・九・二二～二三
ホテルニュー田川
- ホスト 北九州Y.P.クラブ
- 参加人数 二八グループ・二四六名
- ゲストオブザーバー 七名 計二五三名
- 参加費 二万円
- 参加者

第一日

- 開会宣言
- 国家斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓及びグループ紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 全国印刷緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 歓迎のことば
- 来賓祝辞
- 閉会の辞
- 記念講演 「夢あつての人生」 宮崎康平
- 分科会テーマ「省資源時代における印刷業のあり方」
↳ 諸資材の上昇傾向への対応と印刷料金対策 ↳
- 第一分科会 茨城緑友会
- 第二分科会 名古屋而立会
- 第三分科会 福岡印刷若葉会
- 第四分科会 印刷同友会
- 懇親会

第二日

- 卓話 「中東石油情勢と今後の経済展望」 益田憲吉
- 閉会式
- 大会旗伝達式
- 次期開催地挨拶

【日本印刷新聞記事】

北九州で盛大に緑友会大会

活発に情報を交換

全国二八グループが参加

全国印刷緑友会（飯田範夫会長）の第二二回北九州大会が九月二十二、二十三の両日、北九州市・小倉で、全国の緑友メンバー二八グループから二五〇人が出席して盛大に開かれ、式典、記念講演、分科会討議および懇親パーティーなどの大会行事を通じて、厳しい環境におかれている印刷業界の今後のあり方などについて活発な意見交換を行なうとともに、懇親を深めた。なお次期大会は仙台刷親会のホストで開かれることが決定した。

北九州市小倉のホテルニュー田川で行なわれた今年の第二二回全国印刷緑友会大会は、二十二日午後一時からの式典でその幕をあげた。

北は札幌から南は沖縄までの全国印刷緑友会加入の二八グループ代表二五〇人が出席するなか、式典は北九州Y Pクラブの大石氏の司会で開会。山本氏の力強い開会宣言、国歌斉唱、綱領唱和、物故者への黙祷ののち来賓として出席の谷市長、大

熊福岡県印工組副理事長、吉田北九州印刷協同組合理事長および参加グループの紹介が行なわれた。

次いで渡辺大会実行委員長の歓迎のことばと飯田全国印刷緑友会会長のあいさつが行なわれた。渡辺実行委員長は「この緑友大会も第二二回を迎え年ごとにグループ、メンバーも増え喜びにたえない。これは会員の皆さんが昨今の経済情勢や印刷業界の先行きに大きな不安と期待の錯綜した中で将来の展望を見出そうという表われだと思われる。今回は、分科会で『省資源時代における印刷業のあり方』をとりあげており業界あるいは私どもが、この省資源時代にどのように対処すべきかをおおいに緑友の仲間達と語り、今後の経営の一助にしてみられれば幸いと思っている。記念講演会では、島原鉄道の元経営者であり、『まぼろしの耶馬台国』の著者として知れる宮崎康平氏から「夢あつての人生」、さらには西日本新聞社の解説委員・益田憲吉氏の講演を準備しており、心の糧としていただければホストグループとして喜びにたえない。準備不足もあるがご容赦いただきたい」と、地元を代表して歓迎の言葉をのべた。

また飯田会長は、「最近のわが国の経済情勢は、石油環境の悪化による先行き不安などを残しながらも実質成長率は、年率六%台にもどり、長期にわたる不況のトンネルから抜け出し、ようやく明るさがみえ始めた。とはいうものの、一般的には依然として容易ならぬ事態がつづいている。

業界の浮沈は経済社会の影響に大きく左右されるが、このようなときこそ、人間

関係を密にして、同友と意見の交換をし、体験を語り合うなどの自己の研鑽にためまぬ努力を重ねることが重要であり、これらの語らいを通して現実を正しくはあくし将来の業界発展への指標の一端をさぐり出していただきたい」と述べ、この九州大会の意義を強調した。次いで来賓の谷北九州市長、大熊福岡県印工組副理事長、が祝辞を述べ、式典を終了。引き続き三時五十分から二八グループが四分科会に別れて、いずれも「省資源時代における印刷業のあり方」をテーマに、茨城緑友会、福岡印刷若葉会、名古屋而立会、印刷同友会をテールリーダーに活発な意見の交換がくりひろげられた。

和やかに開催祝う

人間関係を密して、緑友の輪を全国に広げよう―全国印刷緑友会九州大会の開催を祝う、記念懇親会が初日の午後六時三十分から会場のホテル・ニュー田川大ホールで、全国から出席の二五〇人が集まって盛大に催された。懇親会は、名物の小倉祇園太鼓、バナナのたたき売り、若松五平太ばやしといったアトラクションが続々と飛び出す中で午後八時すぎまでくりひろげられたが、宴たけなわのとき、次期大会開催地に決まった仙台刷親会（宮城）のメンバーがハッピ姿で登場、仙台の七夕を各グループに配り、次期大会への参加を呼びかけた。

第二三回大会

仙台 昭和五五・八・八〜十

- 会場 ホテル仙台プラザ
- ホスト 仙台刷親会
- 参加人数 二五グループ・二七〇名
- 参加費 二万五〇〇〇円
- 参加者

沖縄県青年印刷若潮会（八名）、大分印刷若梅会（二名）、熊本印刷緑友会（二名）、福岡印刷若葉会（七名）、久留米印刷緑友会（一名）、北九州Y.P.クラブ（十三名）、下関青年印刷緑友会（四名）、北九州Y.P.クラブ（九名）、神戸印刷緑友会（七名）、神奈川正和会（八名）、東京写真製版若葉会（六名）、文京印刷緑友会（五名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、千代田印刷緑友会（十三名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（六名）、茨城青年印刷新世会（十一名）、福島印刷新世会（七名）、長野印刷緑友会（八名）、札幌青年印刷人の会（十二名）、山形印刷修会（十七名）、大阪青年印刷人クラブ（十名）、日本青年会議所印刷研究会（四名）、仙台刷親会（六二名）

第一日目

- 司会 平野邦夫・東海林忠夫
- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓及び参加グループ紹介
- 大会実行委員長挨拶

- 全国印刷緑友会会長挨拶
- 来賓祝辞
- 閉式の辞
- 記念講演 「現代の家庭や社会に思うこと」 佐々木わく里
- 記念撮影
- 懇親パーティー

第二日目

- 分科会テーマ「変革の時代を生き抜く我々は今・・・」
（八十年代の印刷業を展望する）
- 第一分科会 事務・フォーム印刷部会 神奈川正和会
- 第二分科会 出版印刷部会 千代田印刷人新世会
- 第三分科会 商業印刷部会 新潟県印刷新世会
- 第四分科会 写真製版・関連部会
 東京写真製版若葉会・東京プロセス製版青樹会
- 第五分科会 経営・労務部会 ぎふ印刷翠陽クラブ

- 閉会式
- 大会実行委員長挨拶
- 大会旗伝達・次期開催地挨拶
- 閉会宣言
- オプションツアー出発

【日本印刷新聞記事】

全国緑友会大会開く

仙台

親睦深め八十年代展望

式典、講演、分科会などで

星祭の中でより一層の飛躍と連帯を第二三回全国印刷緑友会仙台大会が、全国印刷緑友会（飯田範夫会長）の主催、仙台刷親会（佐藤好孝会長）の主管により、八月八、九の両日、仙台市のホテル仙台プラザで開かれた。参加者は、初日の式典、記念講演、懇親パーティー、二日目の分科会、閉会式を通じ親睦を深めるとともに、変革の時代といわれる八〇年代の展望などを語り合った。

大会のメイン行事である式典は八日午後二時から、ホテル仙台プラザの斉藤報恩館大ホールで開かれた。開式宣言、国歌斉唱、綱領唱和、物故者黙祷、来賓および参加グループ紹介などが型どおり行なわれたあと、佐藤大会実行委員長が「一九八〇年代の最初の大会であり、大いに話し合っこの仙台大会が有意義な、そして楽しいものであったと感じられることを念じる」と歓迎のあいさつ。

ついで、飯田全国印刷緑友会会長が「エネルギー問題はじめ、今後の経済環境を考えると大変きびしいものがある。しかも、未来の予測はむずかしい。多くの緑友仲

間の意見、考えの中から時代の流れの方向を大局的につかみ、積極的に開拓することにより、今後への手がかりを探り出してほしい」と今大会への期待をのべた。

このあと、山本宮城県知事（代理）、島野仙台市長、今野宮城県中小企業団体中央会会長、高橋宮城県印工組理事長らの来賓あいさつがあり、式典を終了。

次期大会は新潟に

ひきつづき同所で記念講演、ホテル正面で記念撮影が行なわれたあと、同ホテル三階「松島」で懇親パーティーが盛大に開かれ、緑友の仲間が一堂に会して語り合い、そして楽しみ合った。また、パーティーの席上、次期大会（昭和五十六年七月三十一日～八月一日、新潟）を主管する新潟県印刷新世会のメンバーが、PRをかねて多くの参加を呼びかけ満場の拍手をあびた。

営業・経営・人材

当面する問題を話し合う分科会は、九日午前九時から十一時二十分まで、事務・フオーム印刷部会、出版印刷部会、商業印刷部会、写真製版・関連部会、経営・労務部会の五つに分かれて開かれた。今回は、「変革の時代を生き抜く我々は今……：八〇年代の印刷業を展望する」をテーマに、各分科会とも熱心な討議がもたれた。

商業印刷部会は、新潟県印刷新世会がテーブルリーダーになり行なわれ、営業戦略、経営管理、人材育成などを当面する諸問題について協議した。商業印刷部会は西日本と東日本の二つのグループに分かれ一時間半にわたって話しあいがくりひろげら

れ、その後、両方の討議内容が総括して発表された。その要旨はつぎのとおり。

一、昨今の諸資材の高騰にともなう料金の値上がり率は、全体的には一〇％程度。今後はこうした実情をふまえて、印刷業界全体がこれまでのような委託加工業的体質から、サービス業的体質へ転換し、ニーズに対応できる業界づくりをしなければならぬ。

一、経営管理面については、自社の原価を的確に把握する。

一、人材の育成は最大の課題。低賃金、暗いイメージを一掃し、若年者が集まるようレベルアップをはかる。優秀な若い人が入ってくることにより、業界の地位も向上する。

第二四回大会

新潟 昭和五六・九・四〜五

- 会場 オークラホテル新潟
- ホスト 新潟県印刷新世会
- 参加人数 二六グループ・二三八名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

沖繩青年印刷若潮会(二三名)、佐世保印刷若汐会(二二名)、福岡印刷若葉会(五名)、北九州Y Pクラブ(五名)、久留米印刷緑友会(一名)、大分印刷若梅会(五名)、下関青年印刷人緑友会(三三名)、広島青年印刷研究会(五名)、神戸印刷若人会(六名)、大阪青年印刷人クラブ(十一名)、名古屋而立会(八名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(七名)、神奈川正和会(六名)、東京都印刷工業組合芝支部若竹会(三名)、文京緑友会(六名)、東京印刷工友会(八名)、仙台刷親会(十九名)、札幌青年印刷人の会(十二名)、東京写真製版若葉会(三名)、福島印刷彩友会(四名)、印刷同友会(二二名)、新潟県印刷新世会(五九名)

第一日目

- 工場見学
- 開式宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓及び参加グループ紹介
- 新潟県印刷新世会会長挨拶
- 全国緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 閉式の辞
- 記念講演 「若人に期待するもの」 稲葉 修
- 記念撮影
- 分科会

Aグループ 経営の心「繁栄の心の法則を語る」
 Bグループ 経営の技術「経営技量の要点を語る」

- 閉会式
- 大会実行委員長挨拶
- 大会旗伝達
- 次期開催地挨拶
- 閉式宣言
- 懇親パーティ

第二日目

- 観光出発

【日本印刷新聞記事】

第二四回全国印刷緑友会大会
 青年印刷人新潟に集う
 研さんの成果上げる
 各地から二六グループ

全国印刷緑友会（中村守利会長）の第二四回大会は新潟県印刷人新世会（渋谷義徳会長）新潟市のオークラホテル新潟を会場に九月四日、「ひろげよう・たかめよう・たしかめよう緑友の使命を」をテーマに掲げ、全国からの二六のグループ二四八人が一堂に集い式典、記念講演、人と技術の原点を探究する二つの分科会、閉会式、懇親パーティーと正味八時間のプログラムをこなした。明秋の第二五回大会は札幌市で札幌青年印刷人の会（竹内一博会長）のホスト役でひらく。

全国印刷緑友会の新潟大会式典は、君健男新潟県知事（代理・田淵孝輔商工労働部長）、川上喜八郎新潟市長（代理・本間孝明助役）、堀川政雄新潟県中小企業青年中央会会長、柳沢卯木新潟県印刷工業組合理事長などを来賓に招き、植原福男式典担当委員、小島京子BSN新潟放送アナウンサーの司会、福島正樹副実行委員長の、力強い開式宣言で開会した。国歌斉唱、綱領唱和、物故者への黙祷（大阪青年印刷

人クラブ・故秋山光氏）、来賓および参加グループの紹介につづいて渋谷義徳新潟県印刷人新世会会長より「本大会のテーマに英知を結集し、緑友発祥の原点をたしかめ、経営の諸問題を研究し討議する機会を得たことは大きな意義をもつもの」、中村守利全国印刷緑友会会長より「新潟大会は、すべての行事を通し大いに語り友愛の輪をひろげることがをモットーにして、一瞬の今をいかに最高に表現できるかの研鑽の場にする意義のある大会になることを心から願う」とあいさつがあった。

来賓あいさつに移り、君同県知事（代読）、川上同市長（代読）、堀川政雄新潟県中小企業青年中央会会長につづいて柳沢新潟印刷工業組合理事長は「二世会がよろこんで継げる業界に、欧米と同様のトップクラスの産業にレベルアップをはかりたい。私も二代目だが、昭和三十年初め新潟商工会議所では印刷は雑貨に含まれ、現在のように工業部会の一翼を担う立場になかった。四半世紀をかけて今日まで来た長い道のりは、若い皆さん方との協力で、今後は必要とする日時を大幅に短縮できるとと確信している」と緑友のパワーと英知の発揮と結集を期待した。

久永舎春全日本印刷工業組合連合会会長、塚田益男（社）日本印刷技術協会会長らほかからおくられた祝電を披露し、村上智副実行委員長の開式の辞で閉会した。

第二五回大会

札幌 昭和五七・九・四〜五

- 会場 京王プラザホテル札幌
- ホスト 札幌青年印刷人の会
- 参加人数 二六グループ・二二七名
- オプザーバー三団体・三十名 計二五七名
- 参加費 二万五〇〇〇円
- 参加者

仙台刷親会(十一名)、福島印刷彩友会(六名)、茨城緑友会(十名)、久留米印刷緑友会(二名)、印刷同友会(二八名)、千代田印刷人新世会(七名)、文京緑友会(七名)、東京プロセス製版青樹会(七名)、東京印刷工業組合港支部若竹会(六名)、神奈川正和会(八名)、長野青年印刷人緑友会(十二名)、名古屋屋而立会(十六名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(八名)、金沢青年印刷人クラブ(八名)、神戸印刷若人会(八名)、広島青年印刷研究会(十一名)、沖縄青年印刷若潮会(二名)、下関青年印刷人緑友会(五名)、北九州Y.P.クラブ(十五名)、佐世保印刷若汐会(二名)、福岡印刷若葉会(四名)、大分印刷若梅会(三名)、山梨印刷若人会(二名)、東京写真製版若葉会(九名)、新潟県印刷新世会(十四名)、大阪青年印刷人クラブ(十名)、福井県印刷青年部(四名)、青森県印刷青年経営者会議(二名)、札幌青年印刷人の会(二五名)

第一日

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓及び参加グループ紹介
- 物故者の黙祷
- 札幌青年印刷人の会会長挨拶
- 全国印刷緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 閉式の辞
- 記念講演 「印刷産業とエレクトロニクス」 一見敏男
- 分科会
- 懇親パーティ

第二日

- 講演
- 分科会総括 一見敏男
- 閉会式
- 大会実行委員長挨拶
- 大会旗伝達
- 次期開催地挨拶
- 閉会宣言
- 記念撮影
- 観光出発

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友札幌大会

”電子時代の印刷“で討論

印刷媒体の優位認む

新事態への対応も急げ

第二五回全国印刷緑友会札幌大会は、傘下二五グループにオブザーバー二団体が加わり二六〇人が全国から参加して行なわれ、九月三日から五日まで多彩な行事を展開したが、中心行事として「印刷産業とエレクトロニクス」をテーマにして、新しい事態に直面しているこれからの印刷業の経営についての講演と討議会を二日間にわたって行なった。その結果、印刷物は他の情報媒体に比較して優位な特性を数多くもっているため、早急に電波媒体などに置き換わることはなく、逆にエレクトロニクスをハードに取り入れるなど対応策を講ずることにより新分野も期待できるとのまとめが発表された。しかし環境の変化から現状の形のままの存続は不可能であることは一様に認められた。またこの大会で新たに青森印刷青年経営者会議の入会を正式に認めた。

四日午後十二時三十分からの開会式は札幌市内「京王プラザホテル」エミネンスホ

ールで今井健一氏（札幌）の司会によりはじめられ、国歌斉唱のあと、全国緑友会綱領唱和が城戸憲次氏（茨城）のリードで力強く行なわれた。

つづいて来賓、参加グループ紹介、物故者への黙祷のあと、竹内一博氏（札幌青年印刷人の会会長）のあいさつがつぎのように行なわれた。

「全国から青年印刷人のメンバーを一堂にあつめ二五回大会を開くことができたことは非常に嬉しい。緑友に加盟して四年三〇人足らずの小グループのわれわれが大会をひらくことについて不安もあったが、関係者の協力で無事開催できたことを感謝したい。われわれ青年印刷人にとって大切なことは種々の制約を超えた連帯である。沖縄から北海道まで全グループの参加した二五回大会は、その連帯が一応成った記念すべき大会だと思う。厳しい環境の中、いまこそ青年印刷人がその力を試されるときであり、この大会の意義も大きい」

つづいて、中村緑友会会長があいさつ。大会の研修テーマとなった「印刷産業とエレクトロニクス」を取り上げた考え方を説明、エレクトロニクスにより変革を迫られて、大幅な変化が予想される印刷業に従事するわれわれは、変化に対して積極的な姿勢が常に求められ、“選択と個性の時代”を創って行かなくては成らない。第三の波より怖いのはむしろ、常識を出られない考え方で、超常識の意識をもつことこそ、これからの経営にとって大切なことである旨述べた。

このあと板垣札幌市長、飯村北海道印刷工組理事長らから来賓祝辞があつて開会式を終り、十五分休憩のあと記念講演会に入った。

全国から二六十人参加

午後一時半から同所で開かれた記念講演会では、東洋インキ製造（株）広報部長一見敏男氏が、「印刷産業とエレクトロニクス」と題し、約一時間半にわたり講演を行った。この講演はつづいて行なわれた同様テーマの分科会への問題提起という意味も含めて、エレクトロニクスによる「第三の波」にさらされている情報媒体としての印刷物の可能性を追求するとともに、印刷産業の経済環境と見通しを詳しく解説して、出席会員に感銘を与えた。

一見講師は、第二次情報時代到来の背景となったエレクトロニクス化の進展を、それぞれのメディアにつき解説し、印刷産業にもここ一、二年次つぎとエレクトロニクス技術を導入、実用化されつつあることを述べ、その七割は製版部門に集中している、レスポンス自動製版機などの実例をあげて説明した。

次に、印刷媒体に取って替ると思われるWPなど各種OA機器。電波あるいは有線により新しく登場しつつあるエレクトロニクスメディア。ハードコピー系統としては、インキジェット方式など新しい画像方式を紹介。印刷物のあり方に大きな影響を与えることは必至とした。

これらを踏まえて印刷の将来予測につき楽観的な要素、悲観的な要素をそれぞれ挙げて、一般予測では、やや悲観的な傾向が強いが、その実際を見通すことは、かなり難しい。こうしたいわば、乱気流の時代には、「新たな現実を理解し、受け入れ、

これを利用してしようとする者にとつての好機である」とドラッカーの言葉を引用して、将来予測の上にたち自らの企業の強さを知り戦略をたてる必要がある。企業の数だけ戦略はあるはずと力説した。

このあと出席者は一二グループに分かれ、講演テーマと同様の討論を行なった。二時間にわたる熱心な討論が各テーブルで行なわれたが、一見講師のきびしい印刷に対する予測に、逆に誘発された形で、印刷媒体の他のメディアに対する優位性が強調され、対応策についても積極策が活発にだされた。各テーブルリーダーはこの意見をまとめ、一見講師に提出、翌朝の総括の材料とした。午後六時からは懇親パーティーがにぎやかに行なわれた。

積極的取り組みこそ必要

次回広島での再会約す

翌五日は朝食後、午前九時から、一見講師による分科会の総括が行なわれ、大要つぎのように報告があった。

見通しについては、アンケート一八三人中楽観論一七人（九・三％）、悲観論三六人（一九・七％）、中間一三〇人（七七・一％）という結果だが討論の内容はかなりきびしい受け止め方をしている。印刷媒体の他のメディアに対しての優位性として①記録性・保存性がよい、②量産ができる、③サイズの変化が多様、④価格が安い、

⑤持ち歩ける、⑥画像、色彩がシャープ（工芸的な芸術を加味）、⑦マルチ的な比較ができる（内容を）、⑧受手に強制的に働きかけができる（特定、不特定にかかわらず）、⑨文字情報が早く伝えられる（連続性）、⑩種々の素材にできる（水、空気以外）、⑪装飾性の付加価値ができる、⑫受注産業だからリスクが少ない、⑬関連機器産業の発展に伴う、などが列挙され、このように多くの特性を兼ね備えた媒体は他に見当たらない。

対応策としては積極的な態度こそすべての基本として、①ユーザーとのふれ合い、人間関係をつくることは他にはできない②企画立案などクリエイティブで勝負できる③OA・エレクトロニクスの弱点、デメリットをつく、例えば企画、感性がOAにはない、④エレクトロニクスを印刷のハードのひとつとして利用する、⑤高品質のものを追求する、⑥新分野への進出、新市場の拡大、かつてエレクトロニクス部品を印刷サイドで生産したように……等々多くの戦略が提起された。

従って印刷は新技術をつぎつぎと取入れ、新しい事態への対応さえ怠らずに取組んでゆけばこれからの情報爆発時代に、需要は減少することなく新しい道をつぎつぎと開いてゆくことになろう。変化はあっても消滅することはあり得ないというのが結論であった。

このあと閉会式が行なわれ、次期開催地広島市の広島青年印刷研究会へ大会旗の伝達などが行われ、全員広島での再会を約して午前十時閉会、全日程を終えた。

第二六回大会

広島 昭和五八・九・二三～二四

- 会場 広島全日空ホテル
- ホスト 広島青年印刷研究会
- 参加人数 三四グループ・二八二名
- 参加費 二万五〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（八名）、青森県印刷青年経営者会議（二名）、仙台印刷親会（九名）、山形印刷研修会（二名）、福島印刷彩友会（二名）、新潟県印刷新世会（一名）、茨城印刷緑友会（十三名）、印刷同友会（三名）、千代田印刷人新世会（十一名）、文京緑友会（九名）、東京写真製版若葉会（五名）、東京プロセス製版青樹会（六名）、東印工組港支部若竹会（十七名）、神奈川正和会（八名）、長野青年印刷人緑友会（十四名）、古屋而立会（二名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（十五名）、金沢青年印刷人クラブ（六名）、福井県印刷青年部（五名）、京都青年印刷人月曜会（一名）、大阪青年印刷人クラブ（十名）、神戸印刷若人会（十三名）、下関青年印刷人緑友会（六名）、北九州Y.P.クラブ（十三名）、福岡印刷若葉会（四名）、久留米印刷緑友会（二名）、佐賀県印刷人若楠会（三名）、佐世保印刷若汐会（五名）、熊本印刷緑友会（一名）、大分印刷若楠会（三名）、宮崎印刷はまゆう会（一名）、鹿児島県緑友会（二名）、沖縄青年印刷若潮会（五名）、広島青年印刷研究会（三七名）

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓及びグループ紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 全国印刷緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 記念講演 「酒と人生」 佐々木久子
- 平和公園原爆慰霊碑献花
- 記念撮影
- 原爆記念資料館見学
- 懇親会
- 挨拶
- 鏡開き
- 乾杯
- アトラクション
- お手々つないで
- 万歳三唱

第二日目

- パネルディスカッション 「文化の時代を創造する」 日隈健壬
- 閉会式
- 大会実行委員長挨拶
- 次期開催地大会旗伝達
- 次期開催地代表挨拶
- 閉会宣言

【日本印刷新聞記事】

三四グループ、二八二人参加 緑友広島大会

将来へ貴重な提言

次期は岐阜で来年九月に

第二六回全国印刷緑友会広島大会は九月二十三日と二十四日、市内全日空ホテルにおいて、会員三四グループ二八二人が参加して、式典、記念講演、原爆慰霊碑献花、懇親会、パネルディスカッションなど多彩な行事を行なったが、パネルディスカッションでは、「文化の時代を創造する」とのテーマで、現代の文化の様相と、その中における印刷媒体の位置づけ、将来の見通しなど、興味ある討論が行なわれた。なお次期大会は来年九月岐阜で開催される。

式典は午後一時から地元広島青年印刷研究会国光俊彦氏の開会宣言、国歌斉唱ではじまり、和田正氏（神戸印刷若人会）の先唱で綱領唱和、出席各グループ紹介のあと、ホストグループ広島の花田佳雄会長があいさつ、「一年前から大会準備にグループ会員の力を積み重ねた。北海道から沖縄まで、このように多数の参加を得たことを誇りに思っている。この大会を意義あるものにしたたい」旨述べた。

つぎに全国緑友会竹田光宏会長があいさつを行ない、われわれ若い力が、いろいろの課題に当面する印刷業界前進の活力となろうと力強く訴えた。来賓祝辞に移り、竹下広島県知事、荒木広島市長、松田広島県印刷工組理事長からそれぞれお祝いとこれからの活躍に期待することは贈られたが、松田理事長はエレクトロニクス時代になって、印刷の前途に危惧をもつ向きもあるが、伝統のものに常に新しい息吹きを与えることよって不滅であると強調した。

これで式典を終り、記念講演会に移り、広島県生れで雑誌「酒」佐々木久子さんから一時間四十分にあたる講演を聞いた。佐々木講師は日本酒製造の話から文化の伝承、伝統の意味と、日本人の生活を今一度再確認する必要があると説き、一同に感銘を与えた。

午後四時から全員参加して平和公園内の原爆慰霊碑に献花、原爆記念資料館見学を行なったあと、午後六時から懇親会に移り第一日目の日程を終了した。

翌二十四日は午前八時五十分からパネルディスカッションを行ない、「文化の時代を創造する」とのテーマで、コーディネーターに広島修道大助教授日隈健王氏、パネラーを中国新聞編集委員長野靖氏、モルテンゴム社長民秋史也氏、緑友会前会長中村守利氏がつとめ、それぞれの立場から、今日の社会変革と文化のかかわりを説明し、文化財生産者としての印刷人への提言などが行なわれた。

長野氏は「東京とそれ以外の地方との種々の格差を認め、地方に在住するものとして東京に負けない個性をもたなくてはならない。情報革命で中央情報を直接入手

することが可能になるので、それをその地方なりに消化してゆくことが文化を担う者の使命である」と語った。

民秋氏は「東京は日本の文化の中心とは思っていないが、当社は市場密着型で、市場のニーズを直につかみ生産し、消費者にフィードバックする立場から大消費地として東京に進出した。これは“地方の時代”、中小企業の時代“といわれるのが、変わり身の早さを意味すると思うので、デュツセルにもロスにも進出した。いろいろの人の交流の中から文化ができてゆくと思う」と述べた。

中村氏は東京にいますかえって情報オンチになってしまふ。中央と地方の格差はなくなり、これからは本格的な企画の勝負になってゆくと思う。顕在ニーズだけでなく、潜在ニーズまで掘り起す。その前に顧客の研究を行ない、中味の濃いいわゆる“企業文化”をつくってゆかなくてはならない、と述べた。

さらにに討論の中で民秋氏は「得意先からチョット来いといわれてから仕事が始まる、受身の印刷業では早晩消えてなくなるのではないか、変化の中から新しい文化が生まれるとするならば、企業文化を創造するためにプレゼンテーションができる、われわれの気づかない点の提供が欲しい。身近かなところでは、当社のパッケージへの意見、小ロットを大ロットと同様コストで作る。読むだけでなく見るキレイな印刷を具体的に示して欲しい。これが新しい印刷企業文化をつくるのではないか」と興味ある提言を行なった。

第二七回大会

岐阜 昭和五九・二九～三十

- 会場 岐阜グランドホテル
- ホスト ぎふ印刷翠陽クラブ
- 参加人数 三十グループ・二七六名
- 参加費 二万五〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、仙台刷親会(十二名)、茨城緑友会(十四名)、印刷同友会(十一名)、千代田印刷人新世会(八名)、文京緑友会(七名)、東京写真製版若葉会(四名)、東京プロセス製版青樹会(五名)、東印工港支部若竹会(十名)、神奈川正和会(八名)、山梨印刷若人会(七名)、長野青年印刷人緑友会(十四名)、名古屋而立会(三六名)、金沢青年印刷人クラブ(七名)、福井県印刷青年部(六名)、京都青年印刷人月曜会(十二名)、大阪青年印刷人クラブ(十二名)、神戸印刷若人会(十五名)、広島青年印刷研究会(十名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、北九州Y.P.クラブ(七名)、福岡印刷若葉会(五名)、佐賀県印刷若楠会(二名)、佐世保印刷若汐会(三名)、熊本印刷緑友会(二名)、大分印刷若梅会(二名)、宮崎印刷はまゆう会(二名)、沖縄青年印刷若潮会(四名)、東京青年印刷人協議会(三名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(四三名)

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓及びグループ紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 全国印刷緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 記念講演 「今なぜ坪内経営が注目されブームを呼んでいるのか」 内藤国夫
- 記念撮影
- 懇親会
- あいさつ
- 鏡割
- 乾杯
- アトラクション
- お手々つないで
- 万歳三唱

第二日目

- グループ長・常任幹事合同会議
- 第十八回緑友セミナーについて
- 第二八回茨城総会について
- 常任幹事の担当制について
- 全国青年印刷人連絡協議会と緑友の関係について
- 各グループの状況・情報交換
- その他
- 閉会式
- 大会実行委員長挨拶
- 次期開催地代表挨拶
- 閉会宣言

【日本印刷新聞記事】

研鑽と友愛を深める

全国緑友会

成果を企業に生かす

活力蓄えた岐阜の大会

全国印刷緑友会（竹田光宏会長）の岐阜大会が、九月二十九、三十の両日、岐阜市長良川畔の岐阜グランドホテルで開かれた。同大会は今回第二十七回目に当たり、ぎふ印刷翠陽クラブ（安藤公二会長）が担当、大会には全国から青年印刷人三〇〇人が参加、式典、記念講演、懇親会、グループディスカッションなどを通して、研鑽と友愛を深めた。

大会は二十九日、午後一時三十分からの式典ではじまった。

若山和正大会実行委員長の開会宣言ののち、君が代斉唱、綱領唱和、物故者への黙祷、来賓およびグループ紹介が行なわれ、安藤公二大会実行委員長が歓迎のあいさつを次のように述べた。「業界環境は急速に変化しており、高度情報化社会の到来が目前に迫っている。この中で、示そう緑友の英知、つかもう新たな時代の流れ“

をテーマに、全国の緑友の仲間が語りあい。新時代に備えてエネルギーを蓄積できる場としていただければ幸いである」。

また竹田光宏全国印刷緑友会会長は「二日間にわたって、講演会、懇親会、グループディスカッションなど各種の行事がある。交流を深めるとともに、大会で得たものを持ち返って、それぞれの地域の仲間伝えてもらいたい」とあいさつした。さらに来賓の上松陽助岐阜県知事（代理）、蒔田浩岐阜市長、大鹿浩司岐阜県印工組理事長が祝辞を述べ、それぞれ次代を担う青年をほげました。

ひきつづき開かれた記念講演会では、内藤国夫（ジャーナリスト）講師が「今、なぜ坪内経営が注目され、ブームを呼んでいるのか」をテーマに、その背景、人間像、坪内経営の特徴などについて解説、聴講者に新たな時代へむけて示唆を与えた。

休憩ののち、懇親会が開かれ、なごやかな雰囲気の中で交流が深められた。

三十日は午前九時からグループに分かれてディスカッションが行なわれ、当面の問題などについて活発な討議が展開された。

第二八回大会

神戸 昭和六十・九・二二（二三）

- 会場 神戸国際交流会館
- ホスト 神戸印刷若人会
- 参加人数 三三グループ・二七九名
- 参加費 三万円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（二名）、青森県印刷青年経営者会議（一名）、
 仙台刷親会（七名）、山形印刷研修会（二名）、茨城緑友会（十名）、
 印刷同友会（十一名）、千代田印刷人新世会（三名）、文京緑友会
 （七名）、東京写真製版若葉会（三名）、東京プロセス製版青樹会
 （七名）、東印工港支那若竹会（五名）、神奈川正和会（八名）、長野
 青年印刷人緑友会（二名）、名古屋而立会（十二名）、ぎふ印刷翠
 陽クラブ（十七名）、金沢青年印刷人クラブ（五名）、福井県印刷青
 年部（八名）、京都青年印刷人月曜会（十五名）、大阪青年印刷人ク
 ラブ（三二名）、関西写真製版青鸚会（二名）、広島青年印刷研究會
 （八名）、下関青年印刷人緑友会（三名）、北九州Y.P.クラブ（十名）、
 福岡印刷若葉会（二十名）、佐賀県印刷人若楠会（五名）、佐世保印
 刷若汐会（二名）、熊本印刷緑友会（五名）、大分印刷若梅会（二名）、
 宮崎印刷はまゆう会（四名）、沖縄青年印刷若潮会（四名）

第一日目

- 開会の辞
 - 国歌斉唱
 - 綱領唱和
 - 遊INGコミュニケーションタイム
- 一、これからの社会のウエルネス（新しい健康の考え方） 柳敏晴
- 二、N A S A の体験学習

第二日目

- 記念講演 「ゆとり」 藤本義一
- 閉会式
- 記念撮影

【日本印刷新聞記事】

緑友会神戸大会を開く

挑戦と創造のとき

古賀会長 変革の方向強調

全国印刷緑友会（古賀健一会長）の神戸大会が九月二十一、二十二日の両日、神戸ポートアイランドの国際交流会館（神戸国際会議場）と神戸ポートピアホテルで開かれた。

同大会は今回二十八回目を抑え、神戸印刷若人会（羽渕茂治幹事長）が担当。大会には全国から青年印刷人三〇〇人が参加、式典、記念講演、懇親会、コミュニケーションタイム「N A S A」の体験学習などを通じて、友好を深めた。

大会は二十一日午後一時から、小河秀昭氏（神戸）の司会ではじめられ、高尾八洲雄氏（神戸）の開会宣言ののち、君が代斉唱、宮地敏昭氏（佐賀）による綱領唱

和、物故者への黙祷、来賓およびグループ紹介が行なわれ、若葉真弘大会実行委員長が歓迎のあいさつを次のように述べた。「私たちを取り巻く経済環境は非常に厳しいものがあり、欧米各国との貿易摩擦は極めて激しく、市場開放をせまる圧力はますます強くなっている。そこで今日は青年印刷人として一時仕事を忘れ家庭を忘れて、YOU（友）I（愛）遊 i n g で遊びに徹して、人生における「ゆとり」、仕事の中での「ゆとり」について大いに語り合い、考えてほしい」。

また、古賀健一全国印刷緑友会会長は、「本年度の活動方針として、挑戦・変革・創造こそ、現在の時代をそのまま反映しているものだと感じている。青年として挑戦し変革し、創造していくことが時代や我々の活動している情報産業の場からも要求されている」とあいさつ。さらに、来賓の中畑裕行兵庫県印工組理事長から「ゆとりある業界を創造して、先輩から受け継いだ立派な緑友会を次の世代に渡してほしい」とあいさつ、ひきつづいて行なわれた「遊 i n g コミュニケーションタイム」では、柳敏晴（神戸YMCAフィットネスセンター所長）が、「これからの社会とウエルネス（新しい健康の考え方）」をテーマに、社会人の一日をスライドで説明、次に参加者全員がTシャツに着替え小グループに分かれてのコミュニケーションタイム「N A S A」の体験学習が行なわれた。休憩ののち懇親会が開かれ、なごやかな中で交流が褒められた。

二十二日は午前九時三十分から、作家の藤本義一氏を迎え、「ゆとり」をテーマに講演会が開かれた。

第二九回大会

長野 昭和六一・九・十三～十四

- 会場 美ヶ原温泉ホテル
- ホスト 長野青年印刷人緑友会
- 参加人数 三五グループ・二九五名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（四名）、青森県印刷青年経営者会議（二名）、仙台印刷親会（九名）、山形印刷研修会（八名）、茨城印刷緑友会（十名）、印刷同友会（二二名）、千代田印刷人新世会（七名）、文京緑友会（八名）、東京写真製版若葉会（一五名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、東印工組港支部若竹会（三名）、神奈川正和会（六名）、山梨印刷若人会（一六名）、名古屋而立会（十一名）、ぎふ印刷薬陽クラブ（十四名）、金沢青年印刷人クラブ（四名）、福井県印刷青年部（七名）、京都青年印刷人月曜会（十三名）、大阪青年印刷人クラブ（十二名）、神戸印刷若人会（一八名）、愛媛印刷人青年会（二名）、広島青年印刷研究会（七名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y.P.クラブ（三名）、福岡印刷若葉会（十一名）、佐賀県印刷人若楠会（七名）、佐世保印刷若汐会（二名）、熊本印刷緑友会（一名）、大分印刷若楠会（一名）、沖縄青年印刷若潮会（三名）、東京青年印刷人協議会（四名）、松本二世会（七名）、長印工組諏訪支部緑友委員会（五名）、長野印刷緑友OB会（十九名）、長野青年印刷人緑友会（四十名）

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓及び参加グループ紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 全国印刷緑友会会長挨拶
- 来賓祝辞

- 祝電披露
 - 閉会宣言
 - パネルディスカッション 「ハイテク時代我が社の戦略」
 - 記念撮影
 - 懇親会
 - 開会の辞
 - 歓迎のことば
 - 来賓祝辞
 - 全国印刷緑友会会長挨拶
 - 鏡開き
 - 乾杯
 - アトラクション
 - 大会旗伝達
 - 次期開催地代表挨拶
 - お手々つないで
 - 万歳三唱
 - 閉会の辞
- 第二日目
- 全国グループ長・常任幹事合同会議
 - オプショナルツアー

【日本印刷新聞記事】

第二九回 全国印刷緑友会長野大会
活発にパネル討論

”いま”と”将来”に確信持つ

全国印刷緑友会（古賀健一会長）の第二九回全国印刷緑友会長野大会（塚田貞俊実行委員長）が、九月十三日午後一時から長野県松本市の美ヶ原温泉ホテルで開かれ、ハイテク時代の対応を話し合うとともに、グループの活性化にむけて情報交換した。

式典は、午後一時から芙蓉の間で行なわれ、司会進行を渡辺茂光氏がつとめ、開会を小林昌助氏が宣言した。つづいて君が代斉唱、全国印刷緑友会綱領を竹内隆文氏が行なった。このあと来賓及び参加グループの紹介、塚田大会実行委員長あいさつ、古賀全国印刷緑友会会長あいさつが行なわれた。この中で塚田実行委員長は「われわれは何を勉強したらよいか、また、われわれが困っていることは、皆さんも困っているであろうと思ひ、全国三八グループ、一二〇〇人にアンケートをして答えてもらった。その結果をまとめ、今日のパネルディスカッションの資料とした。今日なにかをつかむことを確信している」と述べ、古賀会長は「学生時代を思い出すと、いろいろな友達が思い浮かぶ。ケンカがつよいもの、頭のいいもの、そのどちらでもないものがいたと思う。それを現在の業界におきかえると、ケンカにつよく必要はないが、頭がよくなければ駄目だと思う。力がなく、頭もよくなく、お

金もない業界では無視され、淘汰されていってしまう」とこれからの業界について述べた。

来賓祝辞では、長野県知事吉村午良氏（代理）、松本市長・和合正治氏（代理）、東印工組副理事長・野村正道氏、長野県印工組顧問・小林克平氏があいさつした。祝電披露のあと、小林紀夫氏の閉会宣言で式典を終了した。

会場を桔梗の間に移し、パネルディスカッション「ハイテク時代 我が社の戦略」と題し、パネリストに一見敏男氏（東洋インキ製造（株）顧問）、太田節三氏（宮腰機械製作常務）、測野平氏（株）電通メディア開発局次長）の三氏、コーディネーターに塚田武司氏（蔦友印刷（株）副社長）があたり、活発に質疑応答がなされ、これからはいかにエレクトロニクスを使いこなすかがカギとなることが報告された。

午後六時から、会場を芙蓉の間にもどし懇親会が開かれた。開会の辞を司会の木村明氏が述べ、塚田実行委員長の歓迎のことは、松本商工会議所・栗林副会頭の来賓祝辞、古賀会長あいさつと進み、つづいて古賀会長、竹田前会長、塚田実行委員長の三氏による鏡開きが行なわれ、竹田前会長の音頭で乾杯し祝宴に入った。

懇親会はアトラクションが行なわれるが、なごやかに進み大会旗伝達、また来年は三十年目を迎え、全国大会を東京で開催する。これにあたり在京六グループ（印刷同友会、千代田印刷人新世会、文京緑友会、東京写真製版若葉会、東京プロセス青樹会、東印工組港支部若竹会、神奈川正和会）が主管し、代表して山口雅也実行委員長（千代田印刷人新世会）が三十周年記念大会に向け抱負を述べた。お手々つないで、万才三唱のあと増田富治氏の閉会の辞で第二十九回全国印刷緑友会長野大会を終了した。

第三十回大会

東京 昭和六二・八・一

- 会場 赤坂プリンスホテル
- ホスト 全国印刷緑友会在京グループ
- 参加人数 四三グループ・七二八名
- 参加費 二万三〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（十一名）、青森県印刷青年経営者会議（九名）、仙台刷親会（十七名）、山形印刷研修会（二名）、福島印刷彩友会（四名）、新潟県印刷新世会（八名）、茨城緑友会（六名）、やまなし印刷若人会（十五名）、長野青年印刷人緑友会（二四名）、名古屋而立会（三名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（三名）、金沢青年印刷人クラブ（十九名）、福井県印刷青年部会（九名）、京都青年印刷人月曜会（四名）、大阪青年印刷人クラブ（三名）、関西写真製版青樹会（四名）、神戸印刷若人会（三二名）、愛媛印刷青年会（六名）、広島青年印刷研究会（三二名）、下関青年印刷人緑友会（九名）、北九州Y.P.クラブ（十七名）、福岡印刷若葉会（三二名）、久留米印刷緑友会（二名）、佐賀県印刷人若楠会（二四名）、佐世保印刷若汐会（二名）、熊本印刷緑友会（九名）、大分印刷若梅会（十一名）、別府印刷組合青年部会（二名）、宮崎印刷はまゆり会（二名）、鹿児島県緑友会（二名）、沖縄青年印刷若潮会（十五名）、新黄会（九名）、東京青年印刷人協議会（十名）、日本青年会議所印刷部会OB（二名）、印刷同友会（五八名）、千代田印刷人新世会（四八名）、文京緑友会（五七名）、東京写真製版若葉会（二三名）、東京プロセス製版青樹会（二五名）、東印工組港支部若竹会（三二名）、刷友青山会（十五名）、神奈川正和会（三十七名）

- 記念式典
- 記念演奏 ヴィオラ村山勝美・ピアノ久邇之宵
- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓者ご紹介
- グループ紹介

- 大会実行委員長挨拶
- 緑友会会長挨拶
- 来賓ご祝辞
- 祝電披露
- スライド 「緑友三十年の足跡」上映
- 感謝状贈呈 全国印刷緑友会歴代幹事長・会長十六名
- 記念講演 「世界の中の日本」 磯村尚徳
- 記念撮影
- パネルディスカッション 「新たな緑友のビジョンを求めて」
- 懇親会
- 開会宣言
- 開会挨拶
- 乾杯
- ショータイム
- ゲームタイム
- 実行委員紹介
- 次年度大会開催地紹介・大会旗伝達
- お手々つないで
- 閉会挨拶

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会

盛大に三十周年祝う

”3つのW“掲げ努力を約束

全国印刷緑友会（竹内一博会長）は、八月一日正午から東京・千代田区の赤坂プリンスホテルで三十周年記念東京大会を三九グループ約八百人の参加で開催し、NHK放送総局特別主幹・磯村尚徳氏の「世界の中の日本」と題した記念講演や「新たな緑友のビジョンを求めて」をテーマにしたパネルディスカッションを開いたほか音と光をふんだんにとり入れた懇親会で創立三十周年を祝った。

式典は村山勝美さんのヴィオラ、久邇之宵氏のピアノ演奏ではじめられ、河野俊昭氏（岐阜印刷翠陽クラブ）のリードで全国印刷緑友会綱領唱和が行なわれた。物故者への黙とう、来賓紹介、三九グループの紹介のあと山口大会実行委員長が「意義ある大会を大いに祝って欲しい。大勢の大先輩達に出席してもらい大変嬉しい。三十周年を大きな節目とし、心と心がふかまることを祈念している」と述べ、つづいて竹内会長が「三九グループが一つも欠けることなく出席できたことは素晴らしい」と前置きし、緑友会の草創期から現在までを述べ、「今後は三つのW（ヘッドワーク、

ネットワーク、チームワーク)を掲げ、頭脳を駆使し、情報を活用して、青年らしくかまえず、うそをつかず、謙虚に精励努力する」とあいさつした。

新村全国印工連合会長、片山日写工連合会長らの来賓祝辞、祝電披露、スライドを使って「緑友三〇年の足跡」を上映し、歴代一六人の幹事長・会長への感謝状の贈呈が行なわれ記念式典を終了した。

記念講演はNHK放送局特別主幹・磯村尚徳氏を講師に招いて行なわれ、同氏は「世界の中の日本」と題し、現在の日本の世界での位置など世相を絡め、二十一世紀をどう展開すべきかを示唆した。つづいてのパネルディスカッションでは、緑友のメリット、緑友の方向性など活発な討議が行なわれた。

一時間の休憩ののち懇親会が、タレントの三波豊和さんと須永美加子さんの司会で進められ、第九代会長の丸谷慶二郎氏(仙台刷親会)の乾杯の発声で祝宴となった。懇親会ではシンセサイザーとドラムの先鋭的な音と、レーザーリアムの光の渦の中で、楽しくショータイム、ゲームなどがあり、実行委員の紹介、次年度大会開催地の佐賀を佐賀印刷人若楠会の会員がスライドを使って紹介、大会旗が山口実行委員長から竹内会長へ、そして竹内会長から宮地若楠会会長へと手わたされた。最後に全員で恒例の「おててつないで」。利根川副実行委員長がお礼の言葉をのべ閉会。

第三二回大会

佐賀 昭和六三・十・一〜二

- 会場 嬉野温泉和多屋別荘
- ホスト 佐賀県印刷人若楠会
- 参加人数 三六グループ・三四八名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(一名)、青森県印刷青年経営者会議(二名)、仙台刷親会(十名)、山形印刷研修会(一名)、茨城印刷緑友会(五名)、印刷同友会(三十名)、千代田印刷人新世会(八名)、文京緑友会(十名)、東京写真製版若葉会(二名)、東京プロセス製版青樹会(二名)、東印工組港支部若竹会(五名)、刷友青山会(二名)、神奈川正和会(六名)、やまなし印刷若人会(四名)、長野青年印刷人緑友会(十五名)、名古屋而立会(十四名)、さぶ印刷翠陽クラブ(八名)、会済青年印刷人クラブ(十七名)、七名、福井県印刷青年部会(三名)、大阪青年印刷人クラブ(七名)、神戸印刷若人会(十二名)、愛媛印刷人青年会(二名)、広島青年印刷研究会(八名)、下関青年印刷人緑友会(八名)、北九州Y.P.クラブ(十六名)、福岡印刷若葉会(二十五名)、久留米印刷緑友会(四名)、佐世保印刷若汐会(十四名)、熊本印刷緑友会(十三名)、大分印刷若梅会(九名)、別府印刷組合青年部(三名)、宮崎印刷はまゆう会(七名)、鹿児島県緑友会(六名)、沖縄青年印刷若潮会(九名)、大牟田印刷組合青年部(八名)、佐賀県印刷人若楠会(五十名)

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓及び参加グループ紹介
- 物故者に黙祷
- 大会実行委員長挨拶
- 全国緑友会会長挨拶

- 来賓ご祝辞
- 参加グループ紹介
- 祝電披露
- 閉会宣言
- 記念撮影
- セミナー
- 開会宣言
- 事例発表（Ⅰ） 「CTS文字出力によりデータベース活用」 新井和弘
- 事例発表（Ⅱ） 「C・I戦略について」 米倉伸三
- 事例発表（Ⅲ） 「カラー名刺戦略」 渡辺守将
- 懇親会
- 開会
- 歓迎のことば
- 来賓の紹介
- 会長挨拶
- 乾杯
- アトラクション
- 福引抽選会
- 大会旗伝達
- 次期開催地代表挨拶
- 九州山口青年印刷人大会次期開催地発表

- 次期開催地代表挨拶
- くつがる
- 万歳三唱
- 閉会

第二日目

- グループ長・常任幹事会

【日本印刷新聞記事】

であい・ふれあい・葉隠の里で
全国印刷緑友会佐賀大会
一層の連帯を誓う
セミナー・事例発表も

青年印刷産業人で組織している全国印刷緑友会（竹内一博会長）の第三一回全国大会が十月一日、佐賀県の嬉野温泉で開かれた。今大会は佐賀県印刷人若楠会が主管となり行なわれたもので、日本各地から三七グループ、三五〇人の青年印刷人が集まり連帯を深めた。"であい・ふれあい・葉隠の里で"をテーマにした今回の緑友大会は、会員相互のネットワーク体制をすすめるうえで電話によるイベント伝言

での計画的な参加者数把握と、新しい試みである会員自身によるセミナー・事例発表会の二つが功を奏したのか、従来にない充実した盛り上がりを見せた。

大会は嬉野温泉「和多屋別荘」で午後一時から開かれた。山崎雅秀若楠会副会長による開会宣言のあと、君が代斉唱、緑友会綱領唱和、来賓紹介と続き、物故会員への黙祷が捧げられた。

今大会の実行委員長である松浦正欣若楠会副会長が歓迎の言葉を述べたあと、竹内緑友会長が要旨次のようにあいさつをした。

「今大会の際立った特徴として二つのことがあげられる。一つはネットワーク網を駆使して大会への参加を呼びかけたことと、あと一つはわれわれ自身の手により勉強会が持てたことである。今後とも青年の英知を結集して印刷業界の未来を担っていくよう」

そのあと、香月熊雄佐賀県知事（代理）、山口秀市同県中小企業中央会会長、久野桂一九州地区印刷協会長、鳥居博全青協議長、原晴己同県工組副理事長ら来賓各氏から祝辞が寄せられた。このうち鳥居全青協議長は、緑友会が業界に果たしてきた功績を称えたあと、「二〇〇〇年に向かって印刷業界がソフト化。造注化するためには青年同士のネットワーキ化が何よりも先決。そのためにも緑友会はじめ全青協、青年商工会議所印刷部会の三団体が力を合わせねばならない」と強調、さらなる団結を訴えた。

参加三七グループの紹介が行なわれた後、祝電が披露された第一部の式典は終了した。

全員が和多屋別荘の玄関前に集まり記念撮影をしたあとセミナー・事例発表会に移った。この日の発表者は新井和弘氏（株）Qプレス、長野青年印刷人緑友会、米倉伸三氏（株）ミイレー、千代田印刷新世会、渡辺守将氏（株）ワタナベプリンティングセンター、北九州YPクラブOBの三人。

それぞれの持ち時間は事例発表が四十五分間で、質疑応答は十五分という構成。各氏のテーマは新井氏「データベースを利用したCTS文字出力」、米倉氏「CI戦略について」、渡辺氏「カラー名刺戦略」。いずれの発表も、実践的であり今後の経営を考えるに当たっての参考となったもよう。

午後六時半から記念懇親会が催された。宮地敏昭若楠会会長による歓迎の言葉に続き、来賓祝辞、竹内緑友会会長のあいさつとすすみ、乾杯の音頭は古賀健一緑友会前会長が取った。

宴半ばにして緑友大会旗が佐賀から金沢へバトンタッチされ、金沢青年印刷人クラブの高桑秀治代表幹事がいさつ、「百万石の城下町・金沢へぜひ来ていただきたい」とアピール、次期第三二回大会への参加を促した。

緑友の愛唱歌「くつがなる」を全員が歌ったあと万歳三唱し大会は終了した。

なお、同日開催された第六回九州・山口青年印刷人大会では、次期開催地は鹿児島と決まった。

第三二回大会

金沢 平成一・八・二六

- 会場 金沢市文化ホール・金沢東急ホテル
- ホスト 金沢青年印刷人クラブ
- 参加人数 三七グループ・三五〇名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(九名)、仙台刷親会(八名)、山形印刷研修会(二名)、新潟県印刷新世代(八名)、茨城印刷緑友会(十七名)、印刷同友会(二十名)、千代田印刷人新世代(四名)、文京緑友会(六名)、東印工組港支部若竹会(三名)、東京写真製版若葉会(三名)、東京プロセス製版青樹会(七名)、神奈川県正和会(七名)、印刷青山会(二名)、やまなし印刷若人会(三名)、長野青年印刷人緑友会(十六名)、名古屋而立会(二四名)、きふ印刷翠陽クラブ(七名)、能登半島印刷人クラブ(五名)、福井県印刷青年部会(十五名)、京都青年月曜会(一名)、青鵬会(一名)、大阪青年印刷人クラブ(七名)、神戸印刷若人会(十八名)、愛媛印刷人青年会(十名)、広島青年印刷研究会(五名)、下関青年印刷人緑友会(一名)、北九州Y.P.クラブ(十二名)、福岡印刷若葉会(七名)、大牟田印刷協同組合青年部(三名)、佐賀県印刷人若楠会(十一名)、大分印刷若楠会(三名)、宮崎印刷はまゆう会(二名)、沖縄青年印刷若潮会(十名)、金沢青年印刷人クラブ(四名)、熊本印刷緑友会(二名)、佐世保印刷若汐会(一名)

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介
- 物故会員黙祷
- 大会実行委員長挨拶
- 来賓ご祝辞

- 参加グループ紹介
- 祝電披露
- 閉会宣言
- 記念講演 「製紙・印刷業界の展望」 王子製紙代表取締役社長 千葉一男
- 事例発表 「情報産業をめざして」一〇〇億円への挑戦」 宮地敏昭
- 記念撮影
- 懇親会
- 開会宣言・歓迎のことば
- 全国印刷緑友会会長挨拶
- 祝辞
- 来賓紹介
- 乾杯
- バンド演奏
- ビンゴゲーム
- 新入グループ紹介
- 次期大会開催地発表
- 大会旗伝達
- 次期大会開催地代表挨拶
- セミナーPR
- 総会PR
- くつがなる

- 万歳三唱
- 閉会

第二日目

- グループ長・常任幹事会

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会

第三二回金沢大会開く

全国印刷緑友会の主催、金沢青年印刷人クラブの主管による第三二回全国印刷緑友会金沢大会（白井秀幸実行委員長）が、八月二十六、二十七の両日の金沢市で開かれた。大会には全国から緑友傘下の三六グループ、オブザーバーの一グループを合わせ三四三人の青年印刷人が結集、団結を強め懇親を深めるとともに、記念撮影、事例発表など意欲的な研修活動を展開、二十一世紀に飛躍をはかる印刷業の課題を探った。なお、次期大会は平成二年九月一、二の両日、名古屋市に場所を移して開催される。主管は名古屋而立会。

二一世紀の課題探る

青年印刷人三四三人が結集

二十六日午後二時からの式典は、同市高岡町にある金沢市文化ホールで行なわれた。金沢青年印刷人クラブの高桑秀治氏の開会宣言につづき、君が代斉唱、綱領唱和、来賓紹介、物故会員黙とうの順で進んだ。

白井大会実行委員長が「本日のこの大会が、人のネットワークを生み出し、それが情報のネットワークにひろがっていき、さらに通信を介したビジネスのネットワークへとひろがっていくことを期待している」と歓迎あいさつを行なったのち、城戸憲次全国印刷緑友会会長が壇上に立ち、要旨次のとおり述べた。

「今大会では記念講演のほか、前佐賀大会と同じく事例発表会を企画した。緑友が緑友から学び、それをお返しする。その繰返しは緑友道場の真の姿だと思っている。企業の大小にかかわらず、そんな仲間を一人でも多く作っていく、これが緑友会に参加していることの意義だと思う。この大会ではまず、初めての人に話しかけていただきたい。そして一人でも多くの人と触れあってほしい。そこから緑友の輪がひろがる。これが会長としての私のお願いである」

次いで来賓を代表して山岸勇・石川県商工労働部次長、山出保・金沢市助役、中島徳太郎・金沢商工会議所副会頭、福島茂一・石川県印刷工業組合理事長の四氏から祝辞が披露された。

参加グループの紹介が終わったあと、祝賀披露、福島理夫同青年印刷人クラブ会員による閉会宣言で式典は幕を閉じた。

午後三時から約一時間半。王子製紙（株）代表取締役社長・千葉一男氏による記

念講演が行なわれた。演題は「製紙業界・印刷業界の展望」。

講演の前半は主として製紙業界の現状と将来予測、それによると、製紙、新聞用紙とも昨年度は対前年一〇%を超える需要増があり、今後とも紙の生産、販売は好調さが続くとの見通し、また近年、製紙業界においても得意先管理、他社との差別化が強く認識されてきたとのことである。

後半は王子製紙中興の祖であり、戦前の製紙王と謳われた藤原銀次郎氏の経営哲学と生きざまを論じ、青年印刷人に感銘を与えた。

約五分間の休憩の後、事例発表が四十五分間行なわれた。テーマは「受注産業から情報産業をめざして」。発表者は佐賀県印刷人若楠会の宮地敏昭氏（株）宮地印刷）

同氏は昭和三十六年以来、会社売上高の目標を定め一億円達成（昭和十八）、一〇億円達成（同六十三年）を成し遂げ、平成十年には一〇〇億円をめざしている。

現在、佐賀県内の印刷需要一三〇億円といわれるなか、一〇〇億円を達成させることは並大抵ではない。そのため同氏は地域の情報センター的役割を社業に取込み、生活情報誌 月刊ぷらざ の発行、佐賀市五万七一〇〇世帯に無料配布することにより、情報産業化への足がかりとしている。また同県内でも売上一〇〇億円をめざす企業家一〇氏が集まり、"チャレンジ一〇〇"の名称で地元紙にPR、公言することにより引くに引かれぬ背水の陣を敷くことも戦略の一つであるという。

同氏のエネルギーシユな語り口には、何が何でも売上一〇〇億を達成させる意気込みが感じられ、緑友会の事例発表に最適のテーマであった。

午後五時二十分すぎ、大会参加者全員が文化ホール前に集まり記念撮影。同六時

からは場所を東急ホテルに移して懇親会が設けられた。石川県指定の無形文化財「御陣乗太鼓」が威勢よく演じられた後、永野博信同青年印刷人クラブ代表監事、城戸緑友会会長のあいさつが続ぎ、鳥居博全国青年印刷人協議会議長、緑友OBを代表して若山晃一氏（岐阜・日本印刷（株）社長）の二氏から祝辞が述べられた。そのあと竹内一博緑友会前会長の音頭により乾杯、新入グループ紹介や大会旗伝達、セミナーPR、総会PRなど一通りのセレモニーが終わり、緑友恒例の『くつがなる』を全員で歌い、午後八時前閉会した。

第三三回全国印刷緑友大会は名古屋而立会主管のもと名古屋大会として開かれる。会期は平成二年九月一日、二日。会場は名古屋城前の名古屋キャッスルホテル。実行委員長は西川誠也氏が担当。

なお、次期セミナーは東京、次期総会は愛媛県松山市で開催される。

第三三回大会

名古屋 平成二・九・一〜二

- 会場 ホテルナゴヤキャッスル
- ホスト 名古屋而立会
- 参加人数 三八グループ・四〇四名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（五名）、青森県印刷青年経営者会議（六名）、仙台刷親会（十五名）、新潟県印刷新世会（二名）、山形印刷研修会（二名）、茨城印刷緑友会（十八名）、印刷同友会（十一名）、千代田印刷人新世会（五名）、文京緑友会（九名）、東京写真製版若葉会（五名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、東印工組若竹会（四名）、神奈川正和会（九名）、刷友青山会（三名）、やまなし印刷若人会（六名）、長野青年印刷人緑友会（十五名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（二十七名）、金沢青年印刷人クラブ（十五名）、能登半島印刷人クラブ（四名）、福井印刷青年部会（八名）、京都青年印刷人月曜会（二名）、大阪青年印刷人クラブ（十一名）、関西写真製版青鸚会（二名）、神戸印刷若人会（二名）、愛媛印刷人青年会（十三名）、広島青年印刷研究会（六名）、下関青年印刷人緑友会（三名）、北九州Y.P.クラブ（三名）、福岡印刷若葉会（八名）、佐賀県印刷人若梅会（七名）、佐世保印刷若汐会（二名）、熊本印刷緑友会（二名）、大分印刷若梅会（五名）、別府印刷組合青年部（二名）、宮崎印刷はまゆう会（二名）、鹿児島県緑友会（一名）、沖縄青年印刷若潮会（十八名）、長崎青年印刷人会（二名）、名古屋而立会（七三名）、名古屋而立会OB（五名）

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 大会実行委員長挨拶
- 全国会長挨拶
- 来賓ご祝辞
- 祝電披露

- 参加グループ紹介
- 記念講演 「世界一の商品作りに命をかける」 横内祐一郎
- アペタイザー 寸劇「ある印刷会社の風景」 劇団きまぐれ
- 記念撮影
- 懇親会

第二日目

- 講話 「ハガキ道に生きる」 坂田成美

【日本印刷新聞記事】

盛大に名古屋大会開く
全国印刷緑友会

団結強め親睦深める
三五三人の青年印刷人が結集

全国印刷緑友会の主催、名古屋而立会の主管による第三三回全国印刷緑友会名古屋大会（西川誠也実行委員長）が、九月一、二の両日名古屋市中で開かれた。大会では全国から緑友傘下の三九グループ、三五三人の青年印刷人が結集、団結を強め懇親を深めるとともに、記念講演、寸劇『ある印刷会社の風景』が催された。なお、

次期大会は平成三年十月十八日、沖縄市で開催される。主管は沖縄県印刷若潮会。

一日午後一時からの式典は名古屋市の西区のホテルナゴヤキャッスルで行なわれた。名古屋而立会の愛葉裕明氏開会宣言につき、君が代斉唱、綱領唱和、来賓紹介、物故会員黙祷の順で進んだ。

西川大会実行委員長が「人手不足、人材不足、三区、集まればこんな話題が出る。しかしみんな気がついていない。何をすべきか、どうすればよいかは誰もが皆わかっている。あとはするか、しないかだと思う。講演会、寸劇においては、経営者、そしてわれわれ二世の経営に対しての姿勢と考え方をまとめた。あつい姿勢でこの二日間を過ごしていただきたい」と歓迎のあいさつ。

城戸憲次全国印刷緑友会会長は「仲間が多いということは情報が多いということ。人の話を聞いて、おのれに置き換え人のために何をしてあげられるかが、われわれがこれからすることだと思っている。おのれのことを考えるよりも、人のことを考える人になってほしい。また、而立会さんが作っていただいたこの場で、楽しい仲間を作っていたほしい」と述べた。

次いで、来賓の大河内信行愛知県印刷工業組合理事長が祝辞を贈った。

祝電披露、参加グループの紹介で式典を終了した。

午後二時から約二時間にわたり、フジケン（株）会長・横内裕一郎による記念講演が行なわれた。

演題は「世界一の商品作りに命かける」。横内氏は、前半は農事を通じての同氏の人生を歩み、後半は「世界一の商品作り」を経営ロマンに掲げ、世界のエレキギタ

ーメーカーとして飛躍を続けるフジケンのトップとしてのロマンがいつぱいの経営学を披露した。

午後四時からは、各グループで約一時間、アペタイザーが行なわれた。

午後六時から記念撮影、十五分からナゴヤネオフィルハーモニーの演奏、劇団きまぐれによる寸劇「ある印刷会社の風景」が披露された後、吉川正敏而立会会長、城戸緑友会会長からあいさつ、松島通昭全国青年印刷人協議会議長から祝辞が述べられた。そのあと竹内一博前会長の音頭で乾杯、新入グループ紹介、大会旗伝達、セミナーPR、総会PR、大会PRなどが行なわれ、緑友恒例の『くつがなる』を全員で歌い、午後八時すぎ閉会した。

次回の第三四回全国印刷緑友大会は沖縄県印刷若潮会主管のもと平成三年十月十八日に沖縄大会として開かれる。会場は沖縄グランドキャッスル。実行委員長は宮城通昭氏。

なお、次期セミナーは平成三年二月九日に神戸で開催。次期総会は北海道札幌市で平成三年五月二十五日に開催される。

第二四回大会

沖繩 平成三・十・十八

- 会場 沖繩グランドキヤッスル
- ホスト 沖繩県印刷若潮会
- 参加人数 三八グループ・三四三名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(三名)、仙台刷親会(十四名)、新潟県印刷新世会(三名)、山形印刷研修会(一名)、茨城印刷緑友会(十二名)、印刷同友会(十六名)、千代田印刷人新世会(四名)、文京緑友会(七名)、東京写真製版若潮会(十名)、東京ワロセス製版青樹会(十名)、東印工組港支留学生會(三名)、神奈川正和会(三名)、群馬県青年印刷研究会(一名)、刷友青山会(四名)、やまなし印刷若人會(三名)、長野青年印刷人緑友会(十一名)、名古屋而立会(三十五名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(十一名)、金沢青年印刷人クラブ(十四名)、能登平島印刷人クラブ(四名)、大阪青年印刷人クラブ(十一名)、神戸印刷若人會(十四名)、愛媛印刷人青年會(五名)、広島青年印刷研究会(三名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、北九州Y.P.クラブ(十九名)、福岡印刷若潮会(十二名)、佐賀県印刷人若潮会(十名)、長崎青年印刷人會(五名)、佐世保印刷若潮會(八名)、熊本印刷緑友会(六名)、大分印刷若梅会(十二名)、別府印刷組合青年部(二名)、宮崎印刷はまゆう会(四名)、鹿児島県緑友会(一名)、東印工組山の手支部山青会(三名)、沖繩青年印刷若潮会(四一名)

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故会員黙祷
- 来賓紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 緑友会会長挨拶

- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 参加グループ紹介
- 閉会宣言
- 記念講演 「海をあるく」写真家 中村征夫
- ゆんたくタイム
- 記念撮影
- 懇親会
- 開会挨拶
- 祝辞
- 乾杯
- 次期セミナーPR
- 次期総会PR
- 次期大会開催地紹介・大会旗伝達
- くつがなる
- 閉会挨拶

第二日目

- 常任幹事・グループ長会議

【日本印刷新聞記事】

イノベーション作りを討議
全国印刷緑友会・沖縄大会

自己革新力育成へ
三八グループ、三三三三人が参加

全国印刷緑友会（白井秀幸会長）主催、沖縄県印刷若潮会（喜久里均会長）主管による第三四回全国印刷緑友会沖縄大会が十月十八、十九の両日、沖縄市の沖縄グランドキャッスルで開かれた。

十八日の大会では、「いちやりばちよーでーいんおきな輪」のスローガンのもとに全国から緑友傘下の三八グループ、三三三三人が集まり、式典、講演会、ディスカッション、懇親会などを通じて会員同士の団結と懇親を深めた。

午後二時からの式典は、藤村隆雄氏（若潮会）の司会で始まり、石川和雄副実行委員長（若潮会）の開会宣言、君が代斉唱、梶原伸郎氏（神戸印刷若人会）の先導による綱領唱和、物故会員黙祈、来賓紹介とつづき、宮城通治大会実行委員長が「亜熱帯の島・沖縄へお越しいただき、若潮会一同心から歓迎する。沖縄県印刷若潮会十年の短い歴史の中で、二度も全国大会開催の機会を与えていただき感謝する。

本大会のテーマ「いちやりばちよーでーいんおきな輪」は、会員同士の出会い、触れ合いによる自己啓発、相互啓発を当地沖縄で大いにやっていたいただきたいという意味である。明るい太陽のもと二十一世紀の印刷業界の方向性、あるべき姿を共に考えどのような行動を起こさなければならぬか意見交換をしていきたい」とあいさつ。白井秀幸全国印刷緑友会会長は「情熱あふれる若潮会に主管していただいた大会は、きつと満足していただけるものと思う。最良を誇る平成景気にもかげりが見られ、私たちの印刷経営を取り巻く環境には、多方面にわたって改革が起こり、その対応には急を要するものが多くなり、それを乗り越える意識の改革は不可欠となっている。グループディスカッション「ゆんたくタイム」では、私が掲げる目標の一つである。「イノベーション作り」をテーマに話し合っていき、とくに自己革新力Ⅱ変化に適応する能力を身に付けていただきたい」と述べた。

来賓の比嘉廣沖縄県中小企業団体中央会会長、西平守栄沖縄県印刷工業組合理事長から祝辞が贈られた。

祝電披露、参加グループの紹介、仲田龍三氏（若潮会）の閉会宣言で式典を終了。

記念講演は午後三時から行われ、潜水と水中写真を独学で学び国内外の海で精力的に取材活動が続けている写真家の中村征夫氏が、「海をあるく」をテーマに話した。

午後四時四十五分からグループディスカッション「ゆんたくタイム」が行なわれたあと記念撮影。

午後六時からの懇親会では、新垣智氏（若潮会）の司会で全国印刷緑友会・白井

秀幸会長、全国印刷人協議会・松島通昭議長がそれぞれあいさつ、全国印刷緑友会・城戸憲次前会長の音頭で乾杯し、南国らしくプールサイドで歓談が繰り広げられた。

なお、次期セミナーは平成四年二月八日に岐阜県、総会は平成四年五月九日広島県、大会は平成四年九月二十六・二十七日に茨城県でそれぞれ開催される。大会旗が次期開催県の茨城印刷緑友会・林明氏へ伝達されたあと、恒例どおり『くつがなる』を全員で歌い喜久里若潮会会長の閉会のあいさつで散会した。

翌十九日は常任幹事・グループ長会議が午前六時から八時まで行なわれたあと、オプショナルツアーへ出発した。

第二五回大会

茨城 平成四・九・二六～二七

- 会場 茨城教育会館
- ホスト 茨城印刷緑友会
- 参加人数 三七七名
- 参加費 二万七〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(七名)、仙台印刷親会(十五名)、山形印刷研修会(二名)、福島印刷彩友会(一名)、新潟県印刷新世会(一名)、群馬県青年印刷研究会(二名)、印刷同友会(二二名)、千代田印刷人新世会(八名)、文京緑友会(十一名)、東京写真製版若葉会(六名)、東京プロセス製版青樹会(五名)、東印工組港支部若竹会(七名)、刷友青山会(四名)、東印工組山の手支部山青会(五名)、神奈川正和会(七名)、やまなし印刷若人会(八名)、長野青年印刷人緑友会(六名)、名古屋屋而立会(二八名)、きふ印刷翠陽クラブ(八名)、金沢青年印刷人クラブ(十一名)、大阪青年印刷人クラブ(六名)、神戸印刷若人会(八名)、愛媛印刷人青年会(四名)、広島青年印刷研究会(四名)、北九州Y Pクラブ(二名)、福岡印刷若葉会(五名)、大牟田印刷クラブ(一名)、佐賀県印刷人若楠会(一名)、長崎青年印刷人会(二名)、熊本印刷緑友会(一名)、大分印刷若梅会(十一名)、別府印刷組合青年部(一名)、鹿児島県印刷工業組合青年部(一名)、沖縄県印刷若潮会(十四名)、茨城印刷緑友会(三五名)、茨城印刷緑友会OB(八名)

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故者に黙祷
- 来賓及びグループ紹介
- 大会実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓祝辞

- 歓迎のことば
- 閉会の辞
- 記念講演 「音楽と人生」 池辺晋一郎氏
- グループディスカッション 「語り合い in Meと！」

【日本印刷新聞記事】

茨城で第三五回大会
緑友会三六グループ、二七〇人が交流深める

全国印刷緑友会（白井秀幸会長）は、九月二十六、二十七日の両日、茨城県水戸市の水戸京成ホテルで第三五回全国印刷緑友会茨城大会を開催した。今回は「語り合い in Meと！」のキャッチフレーズのもと、二十六日に式典、記念講演、懇親会、二十七日にグループ長会議、市内観光、さらに二十五日には記念ゴルフ大会を開くなど多彩な催しを展開、全国から集まった三六グループ二七〇人の青年印刷人が交流を深めた。

式典は二十六日午後一時から行われた。玉村正夫氏（茨城印刷緑友会）の開会宣

言につづいて、弦楽の伴奏に合わせて全員で君が代を斉唱、次いで綱領唱和、物故会員への黙祷を行った。

林明大会実行委員長が「水戸の言葉に、いしこい（あまりよくない）、ごちゃっぺ（合理的ではない）、しゃーんめ（しょうがない）というのがあるが、そう言われないうちに、われわれの熱きハートをもってはりきってやりたい。ぜひ、水戸のいろいろな面を堪能してほしい」と歓迎の言葉を述べた。

白井会長が「業界はたいへんな不況に見舞われており、構造的にも日本型資本主義の新しい展開が必要になっている。われわれはこの難関を乗り越えて生き残るために、諸問題を根源から見直して業界として取り組んでいかななくてはならない。緑友会は大いに語り合う場。心置きなく語り合って、何か問題解決のヒントを得て、各社の経営に活かしてほしい」とあいさつした。

来賓を代表して河原井市郎茨城県中小企業団体中央会会長が「若い印刷産業人の熱気溢れる行動力と柔軟な発想力で、当面する課題の解決に邁進することを祈念する」、雨森進茨城県印刷工業組合理事長が「茨城大会が盛大に開催され、地元工組としても光栄である。私も緑友会の創生期に席を置いた同志として感慨深いものがある。当面の課題を打開するためにも、お互いが共通認識と努力のもとにネットワーく構築の思想を拡大し、一体となって印刷産業の新たなイメージを作り上げていきたい」と激励。祝電披露、参加グループの紹介があり式典を終えた。

記念講演では、水戸市出身の作曲家、池辺晋一郎氏が「音楽と人生」のテーマで

約一時間講演した。池辺氏は、音楽と長く関わってきた経験から「音は自然の摂理を身につけた生き物である」と定義づけ、応援歌によって人々の気持ち盛り上がる例などをあげて説明した。また、幼年期に架空の地図を書いたり、電化製品を分解して中身を見るのが好きだったと話し、「今の子供たちにはそういう気力がなくなっている。どんなに技術が進歩しても手仕事の部分は絶対に失ってはいけない。これは音楽も印刷も同じである」と締め括った。

記念撮影のあと、「語り合い in Meと！」と題してグループディスカッションを行った。

六時から開かれた懇親会では、はじめに白井会長が「お互い、本音が出てくることに大きな意義がある。和やかに親交を深めてもらいたい」とあいさつした。

来賓の根本保史全国青年印刷人協議会議長が「全国印刷緑友会、日本青年会議所印刷部会、全青協の三団体が若手印刷人のネットワークである。印刷業界を明るく、よい業界にしたいという志は皆同じである。今後とも語り合っていこう」と呼び掛けた。

白井会長、城戸憲次直前会長、根本全青協議長、城戸高史JIC印刷部会長、林実行委員長らにより鏡開きが行われ、城戸JIC印刷部会長の発声で乾杯し祝宴に入った。

祝宴では、茨城県指定文化財である伝統芸能『水戸大神楽』が披露されたほか、ジャンケン大会も行われ、全国から集まった青年印刷人は大いに楽しんだ。宴半ば、

『くつがなる』を全員で合唱したあと、茨城印刷緑友会とOBらが登壇し、代表して城戸直前会長が「皆さんの友情に厚くお礼申し上げます」と感謝の言葉を述べて散会した。

なお、次期大会は、青森県印刷青年経営者会議の主管で、平成五年八月六日に開催される予定。

第三六回大会

青森 平成五・八・六〜七

- 会場 青森グランドホテル
- ホスト 青森県印刷青年経営者会議
- 参加人数 三七グループ・四二三名
- 参加費 三万円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（九名）、仙台刷親会（十八名）、山形印刷研修会（二名）、福島印刷彩友会（二名）、新潟県印刷新世会（三名）、茨城印刷緑友会（十九名）、印刷同友会（三四名）、千代田印刷人新世会（二三名）、文京緑友会（十八名）、東京写真製版若葉会（十名）、東京プロセス製版青樹会（九名）、東印工組港支部若竹会（二名）、刷友青山会（八名）、東印工組山之手支部山専会（十一名）、神奈川県立会（二名）、やまなし印刷若人会（五名）、長野青年印刷人緑友会（二三名）、名古屋而立会（二三名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（十六名）、金沢青年印刷人クラブ（二六名）、能登半島印刷人クラブ（五名）、大阪青年印刷人クラブ（十二名）、神戸印刷若人会（九名）、愛媛印刷人青年会（九名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y.P.クラブ（十七名）、福岡印刷若葉会（九名）、大牟田印刷クラブ（二名）、佐賀県印刷人若楠会（十一名）、長崎青年印刷人会（二名）、佐世保印刷若汐会（二名）、熊本県印刷緑友会（五名）、大分印刷若梅会（二十名）、別府印刷組合青年部（四名）、沖縄県印刷若潮会（十四名）、青森県印刷青年経営者会議（二八名）

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故会員黙祷
- 来賓ご紹介
- 参加グループ紹介
- 報道関係ご紹介
- 実行委員長挨拶

- 緑友会会長挨拶
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 閉会宣言
- 記念講演 「愛せば故郷」 講師 伊奈かつぺい氏
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

第三六回
 全国印刷緑友会あおもり大会
 八月六日
 祭りを観ながら懇談
 「ねぶた」のエネルギー浴びる

全国印刷緑友会（利根川政明会長）は、八月六、七日の両日、青森グランドホテルで「第三六回全国印刷緑友会あおもり大会」を開催する。主管は青森県印刷青年経営者会議。緑友会は今年五月の大分総会で役員改選を行い、白井秀幸氏に代わって利根川氏を会長に選任、「緑友会の原点に戻り、組織を活性化させる」のローガンのもと、委員会の新設や職務マニュアルの作成、役員の若返りを図るなど着々と組織改革を進めている。新執行部にとってあおもり大会は最初の大イベント。

利根川会長は、「初めて青森で大会を開催することができる。とくに東北四大祭りの中でも勇壮さと歴史を誇るねぶた祭り期間中でもあり、うれしく思うとともに、設営した青森県印刷青年経営者会議の皆さんのご苦勞に感謝申し上げます。大会が緑友の友情の輪をさらに広げるものとなるように期待している」と大会の意義を強調する。

初日の六日は、正午から登録受付、一時半から二時半まで式典、二時半から三時四十五分まで記念講演となる。記念講演の講師はタレントの伊奈かつぺいさん。伊奈さんは、普段は現役サラリーマンで週末に限りテレビ・ラジオでタレント活動をするとする異色タレント。ねぶた祭りをテーマに、歴史や楽しみ方などをユーモアたっぷりに語る。

講演後、メモリアルシップ「八甲田丸」をバックに記念撮影。五時から約一時間半にわたり懇親会が行われる。さらに、七時からのねぶた祭りを観覧しながら「語り合いタイム」が予定されている。七日は、同ホテルで午前七時から八時半までグループ長会議が開かれ、そのあと七・八日一泊二日の日程で恒例のオプショナルツアーとなる。今回は、A「八甲田山と十和田湖を訪ねて」、B「秘境恐山・下北半島を訪ねて」、C「城下町弘前と津軽半島を訪ねて」、D「十和田湖と仙台七夕を訪ねて」の四コースが設定されている。大会参加料は三万円（登録料二万八〇〇〇円・ねぶた観覧席料二〇〇〇円）、同伴者は二万二〇〇〇円（登録料二万円・ねぶた観覧席料二〇〇〇円）。オプショナルツアー参加料（二人）は、Aコース三万二〇〇〇円、Bコース三万三〇〇〇円、Cコース二万九〇〇〇円、Dコース三万八〇〇〇円。

立花健男実行委員長あいさつ

全国印刷緑友会の皆様には、ますますお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。さて、今年の第三六回全国印刷緑友会大会は、初めてみちのく「あおもり」で開催されることになった。熱気あふれる「ねぶた祭り」の会期中でも最も盛り上がる八月六日に行われる。「あおもり」の短い夏の夜空にゆらりと浮かび上がる「ねぶた」、天地を揺さぶられ感動されることと思う。全国の緑友の仲間が「あおもり」に集い、熱き交流をより深め、「ねぶた」の強烈なエネルギーを浴びて明日への歓喜と英気を養っていただきたいとメンバー一同張り切っている。八月六日の「あおもり大会」で、ぜひお会いしましょう。心よりお待ち申しあげている。

第三七回大会

大阪 平成六・十・十五～十六

- 会場 三井アーバンホテルベイタワー
- ホスト 大阪青年印刷人クラブ
- 参加人数 四一グループ・三三二名
- 参加費 二万八〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(三名)、青森県印刷青年経営者会議(五名)、秋田県印刷経営青年部会(二名)、仙台刷親会(十一名)、山形印刷研修会(二名)、福島印刷彩友会(一名)、郡山凸凹倶楽部(三名)、茨城印刷緑友会(十一名)、やまなし印刷若人会(十三名)、長野青年印刷人緑友会(九名)、印刷同友会(八名)、千代田印刷人新世会(十名)、文京緑友会(十一名)、東京写真製版若業会(六名)、東京プロセス製版青樹会(五名)、東印工組港支部若竹会(一名)、刷友青山会(一名)、東印工組山の手支部山青会(一名)、神奈川正和会(七名)、名古屋而立会(三名)、さぶ印刷翠陽クラブ(二三名)、金沢青年印刷人クラブ(十九名)、能登半島印刷人クラブ(四名)、京都青年印刷人月曜会(九名)、神戸印刷若人会(十八名)、愛媛印刷人青年会(二名)、徳島二会(四名)、下関青年印刷人緑友会(二名)、北九州Y.P.クラブ(三名)、福岡印刷若業会(六名)、佐賀県印刷人若楠会(七名)、長崎青年印刷人会(四名)、佐世保印刷若汐会(二名)、熊本県印刷緑友会(十名)、大分印刷若梅会(四名)、鹿児島県印工組青年部(一名)、沖縄県印刷若潮会(四名)、大阪青年印刷人協議会天青会(九名)、大阪青年印刷人協議会一水会(一名)、大阪青年印刷人クラブ(五九名)

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故会員黙祷
- 来賓ご紹介
- 参加グループ紹介
- 報道関係ご紹介
- 実行委員長挨拶

- 緑友会会長挨拶
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 閉会宣言
- 記念講演 「ラジオ屋稼業人からみた現代社会」 講師 諸口あきら氏
- 記念写真
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

”ふれあい・トーク“

印刷緑友会 大阪で交流深める

全国印刷緑友会(利根川政明会長)は十月十五日、大阪市港区の三井アーバンホテル大阪ベイタワーに全国から約三五〇人の青年印刷人を集め、「第三七回全国印刷緑友会大阪大会」を開催した。

今大会のテーマは”ふれあい・トーク“というもので、メンバーの友情と交流を深めるのがおもな目的。郡山凸凹倶楽部、徳島二会、秋田県印刷経営青年部会の

三グループが新たに加入しての今大会は、いつも大会にもまして活気にあふれたものとなった。

大会は式典終了後、歌手でラジオのパーソナリティーとしても活躍している諸口あきら氏を講師に招き、「ラジオ屋稼業人からみた現代社会」と題した講演を聴いた。そのあと記念撮影を行い、夜は懇親会を楽しんだ。翌十六日は早朝から常任監事・グループ長会議を開いた。

式典は午後一時半から始まり、君が代斉唱、綱領唱和、物故会員黙とうと続いた。今大会の実行委員長である安福一郎氏（大阪青年印刷人クラブ）があいさつを述べた後、利根川会長が壇上に立ち、二十四年ぶりに大阪で開かれた大会が成功した喜びを語った。また緑友の先輩諸氏、OBへの感謝をあらわした。

来賓として井戸幹夫大阪府印工組理事長、日比野信也全国青年印刷人協議会議長、萩原誠日本青年会議所印刷部会部会長の三氏が祝辞を述べたが、日比野、萩原両氏とも、各青年団体が協力しあう必要性を強調した。

午後二時半からは記念講演で、諸口氏のはぎれのよい語り口と絶妙なテンポ、実体験に裏打ちされたアジア情勢など、約一時間半の講演は印象深い内容となった。

利根川会長のあいさつ 業界を取り巻く環境は景気回復の兆しが見え始めたとはいえ、まだまだ厳しい情勢が続いており、一方、電子化のスピードも一段と早くその対応に追われている。そうした中、われわれ青年印刷人の使命、役割が大事な時期を迎えており、緑友会の存在が問われている。そのような時、新たに三グループ

が加入したことは大きな喜びであり、各グループの入会にご苦労いただいた先輩の皆様、常任幹事の皆様には本当に感謝する次第である。

第二八回大会

熊本 平成七・八・四

- 会場 阿蘇プリンスホテル
- ホスト 熊本県印刷緑友会
- 参加人数 三七グループ・三六七名
- 参加費 二万八〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(四名)、青森県印刷青年経営者会議(六名)、秋田県印刷経営青年部会(二名)、仙台印刷会(十八名)、山形印刷研修会(二名)、福島印刷彩友会(三名)、茨城印刷緑友会(六名)、やまなし印刷若人会(十三名)、長野青年印刷人緑友会(二十名)、印刷同友会(十八名)、千代田印刷人新世会(十二名)、文京緑友会(六名)、東京写真製版若葉会(六名)、東京プロセス製版青樹会(九名)、刷友青山会(二名)、東印工組山の手支部山青会(五名)、東印工組港支部若竹会(二名)、神奈川県印刷若人会(十七名)、名古屋而立会(三名)、ぎふ印刷製陽クラブ(七名)、金沢青年印刷人クラブ(十名)、大阪青年印刷人クラブ(五名)、神戸印刷若人会(十四名)、広島青年印刷研究会(七名)、下関青年印刷人緑友会(五名)、愛媛印刷人青年会(五名)、北九州Y.P.クラブ(四名)、福岡印刷若葉会(十八名)、大牟田印刷クラブ(六名)、佐賀県印刷人若楠会(八名)、佐世保印刷若汐会(一名)、長崎青年印刷人会(九名)、大分印刷若梅会(十名)、別府印刷組合青年部(八名)、黎明さつま(七名)、沖縄青年印刷若潮会(十一名)、熊本印刷緑友会(五七名)

第一日目

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故会員黙祷
- 来賓ご紹介
- 参加グループご紹介
- 報道関係ご紹介

- 実行委員長挨拶
- 緑友会会員
- 来賓祝辞
- 祝電披露
- 閉会宣言
- 記念講演 坂田信弘
- ドリンクタイム
- 神楽
- 記念写真
- チェックイン
- 懇親会
- 開会挨拶
- 乾杯
- カントリーミュージック
- 次期開催地紹介
- 閉会の挨拶

第二日目

- 常任幹事・グループ長会議

【日本印刷新聞記事】

盛大に全国印刷緑友会熊本大会

触れあい、語り合う

三三七人の会員、OBが参加

全国印刷緑友会の第三八回熊本大会が八月四日、熊本県阿蘇町「阿蘇プリンスホテル」で、全国加盟グループ三七団体・三三七人が参加して行われた。

午後一時からの大会式典は、熊本県印刷緑友会波佐間英樹氏の司会、同下田充郎氏の開会宣言ではじめられ、君が代斉唱、緑友会綱領の唱和（依田訓彦常任幹事のリード）・物故会員黙悼のあと、出席来賓の城野巖熊本印刷工組理事長、高田陽太郎日本グラフィックサービス工業会熊本支部長、日比野信也全青協会長、北川和喜中央会青年協議会会長、藤井弘樹熊本印工組副理事長、島田同専務理事らを紹介した。

参加グループも北海道から沖縄まで三六グループ、それに主管の地元熊本印刷緑友会五九人が紹介され、会場内に元気なエールが交換され大会気分が盛り上がった。

つづいて実行委員長大鶴紀元氏があいさつ、全国から出席した会員ならびにOB、

臨席の来賓に歓迎と感謝のことばを述べたあと、「用紙の値上げ、価格競争の激化、加えて景気回復の足踏みなど、業界の経営環境に明るさが見えない。一方マルチメディアなどのツールの、印刷に与える影響なども未知の状況で流動的である。このような環境で全国から集まった会員が、これからの方向について大いに論じ合っていたいただきたい。」ちよつと勉強・文化を嗅ぎ・遊んで・また遊んで：」がこの大会の望みであり、交流の実を挙げていただければ、この大会準備に全力を投入した熊本県印刷緑友会の本望するところ」と述べた。

つぎに長尾良宣会長があいさつ、「すばらしいふれあいの場を作ってくれた熊本の本メンバーに感謝する」と前置きして「緑友大会のもつ大きな意義、ふれあい、語り合い」で、それぞれのネットワーク作りに努めていただきたい」と語った。

来賓祝辞に入り、城野熊本印工組理事長から歓迎のことばのあと「この大会を通じて新たな友情が生まれ、経営環境が目まぐるしく変化する印刷業界に対応するネットワークができれば幸いである。

やがて印刷業界は、君達の時代になる。それは明日かも知れない。明るい業界にするため、日々研鑽をお願いしたい」と述べた。このあと日比野全青協議長からもお祝いのことばが贈られた。

県知事、熊本市長、阿蘇町町長、JC印刷部会長らからの祝電披ろうがあり、池田和隆氏（熊本緑友会）の閉会宣言で式典を終了。

午後二時からは、プロゴルファー坂田信弘氏の講演をきき同三時半から阿蘇波野

村伝統神楽を鑑賞したあと、六時半から懇親会を行った。
なお次の開催地は、金沢（二月セミナー）、山形（五月総会）、山梨（八月大会）
と決まった。

第三九回大会

山梨・平成八・十・十九～二十

- 会場 常磐ホテル
- ホスト やまなし印刷若人会
- 参加人数 三三グループ・二七五名
- 参加費 二万七〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（二名）、青森県印刷青年経営者会議（五名）、秋田緑友会（二名）、仙台刷親会（三名）、山形印刷研修会（六名）、郡山凸凹倶楽部（四名）、茨城印刷緑友会（十四名）、印刷同友会（十三名）、千代田印刷人新世会（八名）、文京緑友会（八名）、東京写真製版若葉会（六名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、東印工組山の手支部山青会（五名）、東印工組港支部若竹会（二名）、刷友青山会（二名）、神奈川正和会（七名）、長野青年印刷人緑友会（三名）、名古屋而立会（三名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（十六名）、金沢青年印刷人クラブ（五名）、大阪青年印刷人クラブ（九名）、神戸印刷若人会（八名）、徳島二二会（九名）、広島青年印刷研究会（六名）、北九州Y.P.クラブ（二名）、福岡印刷若葉会（十名）、佐賀県印刷人若人会（九名）、長崎青年印刷人会（二名）、熊本県印刷緑友会（四名）、大分印刷若梅会（五名）、黎明さつま（五名）、沖縄県印刷若潮会（六名）、やまなし印刷若人会（三九名）

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 物故会員黙祷
- 来賓紹介
- 参加グループ紹介
- 歓迎の挨拶
- 会長挨拶

- デジタル塾
- 記念撮影
- インターネットカフェ
- 懇親会
- 万歳三唱

【日本印刷新聞記事】

印刷緑友会

デジタルの可能性を探る

成果あげた山梨大会

青年印刷二七五人が集う

全国印刷緑友会主催、やまなし印刷若人会主管の第三十九回山梨大会が十月十九日、甲府市湯村温泉郷・常磐ホテルで開かれ、全国から二七五人の青年印刷人が参加した。今回は「マルチな午後」のテーマのもと、デジタル塾と銘打って、テレビ会議、デジタルカメラによる撮影会、インターネットカフェなど話題のマルチメディア、インターネットを取り上げ、印刷業における可能性を探った。

午後一時過ぎから式典が行われ、あいさつに立った長尾良宣会長は「変化の激しく厳しい社会・経済環境の時こそ、全国の緑友会の仲間が友情と信頼を深め、青年印

刷人として明日の業界を大いに語り合い、情報交換を通じて相互研鑽していかねばならない。山梨大会では全国の心から語り合える仲間との熱き交流を通じて楽しく、お互いに刺激し合いながら、友情の絆をより強固なものとし、それぞれの新たな情報ネットワークの構築に努めてほしい。また、今後インターネットをわれわれの仕事の中で、どのように活用していけるか可能性を探ってほしい」と述べた。

来賓を代表して天野建山梨県知事、樋口盛亮全国青年印刷人協議会議長、宮田如龍山梨県印刷工業組合理事長らが祝辞を述べた。

午後二時からのデジタル塾では、大会会場と東京・渋谷にある大日本スクリーン製造（株）のサイバープラザ「PROVISION」をISネット128で結び、パネラー四人が「マルチメディアってなに？——印刷業界はどうなるの？」をテーマにテレビ会議を行った。その中でパネラーとして参加した郡司秀明氏（大日本スクリーン）は印刷業界の方向性について「印刷物をホームページにすることよりも、インターネットホームページやデジタル化されたデータをいかに印刷物に繋げていくかといったインターネット構築の方が重要」と訴えた。

会場には数十台のマッキントッシュコンピュータが開放された。モデル撮影会では、アップル社製デジタルカメラ「QuickTake150」で撮影し、マッキントッシュで画像処理して富士写真フィルム社製超高画質フルカラーデジタルプリンタ「PICTOGRAPHY3000」で出力するなど、参加者は最新のメディアを体験した。

【緑友会の今後の行事】

〈第三十回神戸復興支援セミナー〉

日時 平成九年二月八日

会場 神戸市産業振興センター

主管 全国印刷緑友会常任幹事会

運営 大阪青年印刷人クラブ、神戸印刷若人会

〈第四十回長野総会〉

日時 平成九年五月二十四日

会場 ホテル国際 21

主管 長野青年印刷人緑友会

〈緑友会四十周年東京大会〉

日時 平成九年八月二日

会場 ホテル日航東京

主管 緑友在京グループ

第四十回大会

東京 平成九・八・二

●会場
●ホスト

ホテル日航東京
緑友会在京グループ共同担当
印刷同友会、千代田印刷人新世会、文京緑友会、
東京写真製版若葉会、東プロ協組青年部青樹会、
東印工組港支部若竹会、刷友青山会、東印工組
山之手支部山青会、神奈川正和会

●参加人数 三五グループ・五二五名
●参加費 二万三〇〇〇円、同伴一万五〇〇〇円(中学生以下無料)

●参加者

札幌青年印刷人の会(六名)、青森県印刷青年経営協議会(八名)、秋田印刷緑友会(四名)、
仙台刷製会(三名)、山形印刷研修会(四名)、福島彩友会(五名)、郡山凸凹倶楽部
(四名)、茨城印刷緑友会(五名)、やまなし印刷若人会(六名)、長野印刷人緑友会(十
六名)、名古屋刷友会(三七名)、ぎふ印刷製陽クラブ(二八名)、倉沢印刷人クラブ(十
三名)、大阪青年印刷人クラブ(二六名)、神戸印刷若人会(十二名)、徳島土云(五名)、
愛媛印刷人青年会(一名)、広島青年印刷研究会(八名)、北九州Y.P.クラブ(十名)、福
岡印刷若葉会(十名)、佐賀県印刷人若楠会(十二名)、長崎県印刷人会(四名)、熊本
印刷緑友会(五名)、大分印刷若梅会(四名)、黎明さつま(六名)、沖縄県印刷若潮会
(五名)、印刷同友会(五四名)、千代田印刷人新世会(四四名)、文京緑友会(三三名)、
東京写真製版若葉会(十六名)、東プロ協組青年部青樹会(十四名)、東印工組港支部若竹
会(十九名)、刷友青山会(六名)、東印工組山之手支部山青会(七名)、神奈川正和会
(十三名)
オアザバー…岩手青年印刷人協議会(一名)、千葉県印刷工業組合青年部親和会(一名)
関東団体青年会…東京青年印刷人協議会(十名)、東印工組豊島支部刷伸会(十名)、東京D
T.P.協同組合青年部(一名)

●大会テーマ「変わろうよ……！緑友」

全国印刷緑友会も創立四十周年を迎えることとなりました。

この間、社会、経済環境において、大きな変化がありました。また、私共印刷界においても、大きな変革の波が押し寄せてきております。このような状況の中で、緑友会も時代の変化に対応できる会になればと思っております。

今回のテーマは、先輩が礎かれたこれまでの経緯を否定しようというものではありません。時代の流れを見極めて、それに向かって進みましょうというつもりです。

●記念講演 「この構造変化をいかに乗り切るか！」塚田益男

●記念撮影

●開会宣言

●国歌斉唱

●物故会員黙祷

●国旗、会旗掲揚

●大会実行委員長あいさつ

●全国印刷緑友会会長あいさつ

●来賓祝辞

●来賓紹介

●参加グループ紹介

●報道関係紹介

●歴代会長表彰

●乾杯

●シヨータイム (ザ・キングトーンズ)

●インフォメーション

●大会旗伝達

●綱領唱和

●閉会の辞

【日本印刷新聞記事】

四十周年を迎え新たな決意

全国緑友会東京大会五三〇人が”出会う“

今年で創立四十周年を迎えた全国印刷緑友会（松浦正欣会長）は八月二日、東京・台場のホテル日航東京で四十周年東京大会を挙行した。東京大会は「変わろうよ……！緑友」をテーマに記念講演、大会式典・懇親会の二部構成で行われ、全国から三五グループ・五百三十人の現役・OBが出席した。席上、松浦会長は「緑友会で一番大事なことは、いろいろな人たちとの出会いではないか。本大会が新たな人との出会いの場になることを祈念したい」と語った。大会式典では、第十七代から第二十一代までの歴代会長に記念品を贈り、その功績を称えた。記念講演では、

塚田益男前全印工連会長・日本印刷技術協会最高顧問が「この構造変化をいかに乗り切るか！」をテーマに講演し、二十一世紀における印刷界のニッチ戦略を提唱した。

メインの大会式典は、午後五時四十五分から行われた。はじめに芝崎孝大会実行委員長が「本大会のテーマは先輩がこれまで築いてこられた経緯を否定するものではなく、われわれの意識のことである。四十年を経て社会・経済環境も大きく変化し、会員も世代が変わって緑友会に対して創立時とは違った感覚が出てきている。十年後、二十年後に対し、新たなアイデンティティを求めていかなければならない」と主旨を説明した。

次いで、松浦会長が「緑友会は、他の業界団体には類を見ない、どこからも管理、干渉、援助を受けることなく、会員グループに対しては干渉をしない自主的民主的なグループとして四十年間発展し続け、現在四一グループ・一千二百人の会員で構成されるまでになったのは、諸先輩の情熱と行動力のお陰である。今年度の基本方針の中にもあげたが、人との出会いが人生を明るくし、迷いをふっ払させてくれる。時には人に感銘を与え、時には人生やビジネスの道を示してくれる。新世紀を間近に迎えようとする今、緑友の仲間との出会いが必ずや私たちの心を勇気づけ、進むべき道に明りを灯してくれるはずである。やはり緑友会で一番大事なことは、いろいろな人たちとの出会いではないか。本大会が新たな人との出会いの場になることを祈念したい」とあいさつ。

来賓祝辞では、野村正道全印工連会長が「この十年間は激動の変化が印刷業界にあり、ますます変化は続くだろう。勉強をすることも多く、若い人に頑張ってもら

うことが業界を良くする一番の近道である」、門脇宏治日写工連会長が「もう製版だ、印刷だと言っている時代ではない。もつと日本全体の印刷界の構築を考えていかなければ生き残りは難しい。ぜひ、皆でコミュニケーションをとって日本の印刷業を立派なものとして後世に残していこう」と述べた。

歴代会長への記念品贈呈では、第十七代・竹内一博（札幌青年印刷人の会）、第十八代・城戸憲次（茨城印刷緑友会）、第十九代・白井秀幸（金沢青年印刷人クラブ）、第二十代・利根川政明（文京緑友会）、第二十一代・長尾良宣（青森県印刷青年経営者会議）ら歴代会長が在任中のヒット曲にあわせて登壇し、松浦会長からクリスタル製トロフィーを手渡された。

引き続き、懇親会に入り、作道亮雄氏（第十二代会長）の音頭で乾杯し閉宴した。懇親会では、ザ・キング・トーンズのライブショーなどを楽しんだ。宴半ば、次期セミナーを主管する仙台刷親会と、次期総会を主管する青森県印刷青年経営者会議を紹介した。大会旗伝達では、松浦会長から次期開催地である鹿児島島の岩重昌勝鹿児島県印工組青年部黎明さま会長に大会旗を手渡された。

大会実行委員による綱領唱和のあと、小宮山貴史大会実行副委員長の閉会の言葉で散会した。

なお、式典に先立ち、午後三時半から記念講演が行われ、塚田益男全印工連会長・日本印刷技術協会最高顧問が「この構造変化をいかに乗り切るか！」をテーマに、現在の経営環境、技術環境の変化、二十一世紀における経済社会の特徴、印刷界のニッチ戦略などを解説した。

「セミナー」

第十一回セミナー

広島 昭和五三・二・四～五

- 会場 ホテルニューヒロデン
- ホスト 広島青年印刷研究会
- 参加人数 二十グループ・九三名
- 参加費 一万八〇〇〇円
- 参加者

仙台刷親会、茨城緑友会、神奈川正和会、長野青年印刷人緑友会、広島青年印刷研究会、名古屋而立会、印刷同友会、下関青年印刷人緑友会、福岡印刷若葉会、北九州Yトクラブ、東京プロセス製版青樹会、神戸印刷若人会、ぎふ印刷翠陽クラブ、千代田印刷人新世会、文京緑友会、沖縄青年印刷若潮会、大阪青年印刷人クラブ、久留米印刷緑友会、佐世保印刷若汐会、熊本印刷緑友会、大阪写真製版二世会、愛媛印刷人青年会、金沢青年印刷人クラブ、日本青年会議所印刷部会（各人数不明）

第一日目

司会 宇都宮五郎

●開会式

●第一講「これからの経営環境と経営体質創り」 東海大学助教授 鈴木博氏

●原爆慰霊碑参拝献花 資料館見学

●懇親パーティー

第二日目

●第二講「心の経営実践の道」 積水化成工業（株） 川本貢氏

●第三講「経営管理と広商野球」 広島商業高校野球部長 畠山圭司氏

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会（作道亮雄会長）では、二月四、五の両日、広島市内のニューヒロデンホテルにおいて第十回全国印刷緑友会セミナーを開いた。このセミナーには、全国の緑友会々員多数が参加し、東海大学政経学部助教授鈴木博氏の「これからの経営環境と経営体質創り」、広島商業高校野球部長畠山圭司の「経営管理と広商野球」、積水化成工業（株）専務川本貢氏の「心の経営実践の道」の講演を熱心に聴講、三日間にわたる有意義なセミナーを終了した。

セミナー第一日の四日は、定刻、地元広島 of 宇都宮五郎氏（広島美術印刷）の司会で開会、国歌斉唱のあと黒飛晴晶氏（電話印刷（株））が印刷綱領を朗読。ついで広島青年印刷研究会・国光俊彦会長のあいさつ、全国印刷緑友会・作道亮雄会長のあいさつがあったのち講演に入り、鈴木博氏が「これからの経営環境と経営体質創り」と題し約二時間に渡る講演を聴いたあと、参加者全員で原爆慰霊碑に参拝、原爆犠牲者の冥福を祈って、献花、原爆慰霊碑をバックに記念撮影のあと、原爆資料館を見学。同夜は宿舍のニューヒロデンホテルにおいて懇親パーティーを開いた。

第二日の五日は、午前九時から講演に入り畠山圭司氏から「経営原理と広商野球」、川本貢氏から「心の経営実践の道」を約三時間にわたり聴き、正午過ぎ閉会した。

作道亮雄会長あいさつ

セミナーは、緑友会三十周年へ向かったの第一歩ともいべき行事であり、広島青印クラブの積極的な努力によって、ここに開催できましたことは、まことにご同慶に思う次第です。さて、昨年来の円高による外圧問題は、今後大きく日本の産業や社会情勢に変化をおよぼすことでしよう、われわれ印刷業界についても、その影響は、必死と 생각합니다。印刷業界は、これまで、一般的に好、不況に左右されない業種としてやってこれたと思うのですが、今後、そうである保証はありません。私は、従来の努力では、到底追いつかないものがあるのでは、と感じており、余ほど思い切った措置を講じることが迫られるのではないかと感じます。

鈴木博氏講演の「これからの経営環境と経営体質創り」の要旨はつぎのとおり。

鋭い視線むけよう

「人を見つめるため、時代の動きをとらえるため、私たちは都市へ、町へ、自然へ向かってゆく。いま起こりつつある現象へ、明日大きな流れとなる兆しを含んだ事実には、私たちはかつて誰も向けたことのない鋭く澄んだ視線を向ける」

これは、某社のコンセプトであるが、現在のようない時代に乗込み、生きてゆくための体質づくりをどうするか——これが経営の大きな課題となる。

それには前記のように、全社員が新しい時代の流れをつかむために鋭い視線を向けることが必要だ。体質組織風土をどう変えてゆくか。それを組織開発という概念でとらえ、職場全体を変えなければならぬ。

経営にとって一番重要なのは、人と人との関係、良い苗を育てようとする土壌づくりである。

刺激を与えることも一つの方法だ。何か新しいことをやろうとした時に、重役がただ反対するのではなく、別のアドバイスを与える。また、仕事の組合せを考えてみる。たとえば校正をやっている人間に営業を、また、その反対を、短期間でよいから違った仕事をやらせて、それぞれの立場のむずかしさを自覚させる。努力だけではダメ

企業を守るためには、努力しただけではだめで、その努力の内容が重要な点である。やったことがいくらになっただかという結果において評価されなければならないし、そのことを社員一人ひとりにわからせなければならない。

会社は、それぞれ技術というプロセスを持っているが、それだけではなく、ここで働いている人のしくみ、その社会的体系である土壌をどのように変えてゆくか。今までの技術革新の時代には、技術体系の革新ということだけで経営のメリットがあり、新しい技術が開発され、新しいものがどんどん出てくる中で、ただ従業員は何となくいわれたことをやっているだけで、経営は充分にもうかっていた。問題はこのような状況から新しい時代に生きてゆくためには、どのように転換してゆくか、どう人を動かしてゆくかにかかっている。

官僚型から参加型へ

それには、職場の体系を官僚型の構造から参加型へ、主体性を導き出せるような構造へ、働きが、生きがいとなる組織へ、と変えてゆくことが必要である。

これは、マネージメントのあり方、リーダーシップのあり方、人のまとめ方が変わってきているということである。

官僚型の構造とは、人の力を摂取できない構造のことで、人間をむりやり一つの

やり方の型にはめ込み、人を使うことが権限なんだということにこり固まっているので、権限が大きい小さいかが重要になり、これが人をまとめてゆく力になっている。これは命令と服従という形で人を働かせるという考え方で、変化に弱い構造である。

参加型の構造は、一人一人が当事者意識を持つ事から始まり、どうしたら効率的に働けるかということをお互いが考えてゆく。又、外界の変化を社員に伝え、あらゆる情報を提供しなければならない。

最前線がしつかり

市場をはっきり見つめ、仕事は上から与えられるものだという考え方から、お客をはっきり意識させるお客志向の考えを徹底することで、お客の変化を敏感に感じ取る体質を作ってゆかなければならない。そのためには一番お客に接している最前線社員がしつかりしていなければならぬ。そして、そういう人間をうまくまとめゆくのがマネージャーで第一線の監督者である。具体的に、なぜその仕事をするのかをはっきり説明し、お客の状態によって効率の上げ方が変わってゆく。命令ではなく、アドバイスを与えそして、社員は本人がどうしたら一番よいかを考え、論理で働いてゆかなければならない。

社長がコストを下げると言っても、実際に印刷している人間が下げようと思わなければ下がる。実際に校正している人間が早く校正するにはどうしたらよいか考えなければ、早くはならない。従って、その第一線に大きく影響を与えているのはその人達をまとめるマネージャーで、そのポストに第一級の人物を投入しなければならぬ。

社員以外は皆お客

”自分の会社の社員以外は皆お客” という所からお客を意識させ、他社と差をつけてゆく。また、お客に対し、価値ある提案ができればならない。ただ物を売るだけではなく、こういう使い方をすればこうなるというように価値ある生活を提案することによって、お客を引きつける。

真剣勝負の今年

また、いくら新しいこと、重要なことを感じ、考えても、行動しなければ、何も生まれない。そのためにはたとえば、五十二年はどうやってきたか、五十三年の基本方針は何か、重点目標は何か、では一月はどうやるのか、というようにはっきりと目標を具体化し、それをさらに品質についてはどうか、コストについて、量、納期、安全については、と細かく目標をたて、考え方と行動とを分けて行なわなければならない。

今年、真剣勝負の年とし、他社よりも何か勝れているものを作り出そう。

※この広島セミナーは「第十回」となっているが、資料調査すると「第十一回」が正しい。したがって、次回大阪セミナーも「第十一回」となっているが「第十二回」となる。
昭和五五年「神戸セミナー」より正しい回数「第十三回」と修正してある。

第十二回セミナー

京都 昭和五四・二・二三～二四

- 会場 楠荘
- ホスト 大阪青年印刷人クラブ
- 参加人数 二一グループ・一一七名
- 参加費 二万円
- 参加者

仙台刷親会（三名）、茨城緑友会（一名）、神奈川正和会（五名）、長野青年印刷人緑友会（四名）、千代田印刷人新世会（七名）、広島青年印刷研究会（十名）、名古屋而立会（五名）、印刷同友会（八名）、下関青年印刷人緑友会（三名）、福岡印刷若葉会（三名）、北九州Y.P.クラブ（四名）、東京写真製版若葉会（四名）、大分印刷若梅会（七名）、新潟県印刷新世会（四名）、神戸印刷若人会（四名）、東京プロセス製版育樹会（二名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（五名）、文京緑友会（一名）、沖繩青年印刷若潮会（五名）、神戸印刷若人会（一名）、大阪青年印刷人クラブ（三二名）

第一日目

- 司会 中村恵昭
- 開会式
- 国家斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 会長挨拶
- 第一講「戦後民主主義を問い直す」 京都大学教授 会田雄次氏

- 第二講「エネルギー問題と日本経済の将来」 作家 境屋太一氏
- 記念撮影
- 夕食会

第二日目

- 朝食
- グループ長及び常任幹事合同会議
- 第三講「日本人の生死観」 大徳寺 立花大亀老師
- 閉会挨拶

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会（作道亮雄会長）では、三月二十三、二十四日の両日、京都市東山区の楠荘で第一一回セミナーを開き、約一〇〇人が出席した。

第一日目のセミナーは午後二時から中村恵昭氏（太陽美術印刷（株））の司会で、国歌斉唱、綱領唱和、グループ紹介があり、作道会長は「われわれはここ数年低成長時代に対処してひたすら企業体質強化と原価低減のため努力をして参りました。しかし、今後も同じ視野からその勢力を継続するか、また別な視点から新しい架橋を試みるかを考えなければならぬ時機を迎えているのではないのでしょうか。

今後も依然として厳しい業界環境が続いてゆくでしょうが、われわれは新しい時

代の潮流を待つのみの方勢でなく、世界の動きや歴史の流れから次の局面を想定し、積極的にそれに対応する条件を創ってゆかなければなりません。また、他人の言動に簡単に左右されない自立した姿勢の確立、そういった努力が強く望まれる時機に来ていると思えます」とあいさつがあり講演に入った。

講演は京都大学教授・会田雄次講師が「戦後民主主義を問い直す」と題し、一時間半にわたって講演し、引き続き作家・堺屋太一講師が「エネルギー問題と日本経済の将来」と題し、別項のような講演を行ない、一日目を終了した。

二日目は九時三十分から十一時まで大徳寺立花大亀老師が「日本人の生死観」、歴史上の人物から現代世相までを講演してセミナーを閉会した。興味を呼んだ堺屋太一氏の「エネルギー問題と日本経済の未来」と題する講演要旨は次のとおり。

何事に対しても日本人は短期的である。たとえば石油ショックの時は大さわざをしていたのに二、三年もたつとすっかり忘れ、昨年まですごしてきたが、昨年の暮れにイランで途方もないことが起こった。従来イランという国の政権が発展して、産油国の中では最も安定した国の一つだといわれていた。

ところが昨年の十一月頃からおかしくなり、十二月にはデモ・ストが発生し、今年一月になるとバーレビ国王が国外に脱出、その後ホメイニ氏が出現、新しい政権をつくってしまった。

イランという国は一日五五〇万バレル（八八万キロリットル）の石油を生産しており、世界ではソビエト、アメリカ、サウジアラビアに次いで四番目の生産量、

輸出でいうとアメリカとソビエトは輸出余力がないのでサウジアラビアに次いで世界で二番目である。日本の総石油輸入量の大体一七%ぐらいをイランが占めている。従って、日本の石油輸入はかなり減ることになる。幸か不幸かサウジアラビア、その他の国が増産をしたので一七%まるまる減ったわけではないが、この一月から三月向けの船積みペースで見ると、大体八%の減少で、二月末から三月の状態は、従来に比べ一〇%ぐらい減少、昭和四十八年の石油ショックで一番ひどかった時とほぼ同じ減少率となる。

あの時はあれほど大さわざしたのに、今落ち着いていられるのは、政府や石油業界が進めていた備蓄政策のおかげである。石油ショックが起こる直前四十八年の十月末、日本にあった石油の備蓄量というのは五十九日分ぐらい。ところが今度のイラン事件が起こる直前の一月末現在で大体九十一日分ほどあり、三十二日分多かつたおかげでわれわれは今助かっているわけである。この三十二日分を一〇%ぐらい輸入が減って食いつぶすとしても三百二十日分持つ。大体一年ぐらいこの状態が続いても日本は持ちこたえられる。

第十三回セミナー

神戸 昭和五五・二・二三～二四

- 会場 神戸三宮ニューポートホテル
- ホスト 神戸印刷若人会
- 参加人数 二四グループ・一五八名
- 参加費 二万円
- 参加者

北九州Y.P.クラブ(三名)、印刷同友会(十名)、東京写真製
版若葉会(二名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(九名)、金沢青年印
刷人クラブ(五名)、神奈川正和会(七名)、下関青年印刷人
緑友会(四名)、文京緑友会(三名)、広島青年印刷研究会
(十一名)、名古屋而立会(八名)、久留米印刷緑友会(三名)、
仙台刷親会(三名)、沖縄県青年印刷若潮会(四名)、千代田
印刷人新世会(九名)、大分印刷若梅会(六名)、東京プロセ
ス製版青樹会(四名)、大阪青年印刷人クラブ(二十名)、福
岡印刷若葉会(六名)、新潟県印刷新世会(二名)、愛媛印刷
人青年会(二名)、佐世保印刷若沙会(一名)、長野青年印刷
人緑友会(五名)、神戸印刷若人会(三三名)

第一日

- 開会式
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 会長あいさつ
- 第一講 「八十年代経営の哲学」 神戸大学名誉教授 稲葉襄
- 記念撮影
- 第二講 「一九八〇年の世界と日本」 長谷川慶太郎

第二日

- グループ長常任幹事合同会議併催議事
- 第二三回総会について
- 第二三回全国大会について
- 第十四回セミナーについて
- 第三講 「仕事と人間性」 亀井一成
- 閉会あいさつ

【日本印刷新聞記事】

銀問題も話し合う

神戸で緑友会セミナー開催

全国印刷緑友会（飯田範夫会長）の主催、神戸印刷若人会（南由夫幹事長）の主
管による「第一三回全国印刷緑友会セミナー」が、二月二十三、四の両日、神戸三
宮のニューポートホテルで開催され、北海道から沖縄に至るまで全国一二四人の印
刷業界の若人が一堂に会し、資材問題などを学ぶとともに、懇親を深めた。学習会
では時の問題である、銀価格は値下げ基調に入った、石油は量的には絶対心配ない。
円安は限界に来ており、年内一ドル二〇〇円の攻防となろうなどが発表された。

セミナーは午後一時、神戸印刷若人会・児島勝一氏の司会で始まり、国歌斉唱、綱
領唱和。グループの紹介などがあり、つづいて神戸印刷若人会の南由夫幹事長の飲

迎のことば、飯田範夫会長の挨拶、来賓を代表して中畑裕行兵印工組理事長の祝辞が述べられ、午後一時半より三時まで、稲葉襄神戸大学名誉教授による「八〇年代経営の哲学」を聴講、つづいて記念撮影が行なわれた。このあとポर्टピア&ピア・デモンストレーション、午後四時より五時半まで、「日本株式会社挑戦」の著書などで有名な、フリージャーナリスト長谷川慶太郎氏の「一九八〇年の世界と日本」と題する講演を聴講。午後六時より懇親夕食会に入り、第一日を終了した。

第二日目は午前八時よりグループ長および常任幹事合同会議午前九時半より十一時まで、神戸市灘区・王子動物園学芸員の亀井一成氏の「仕事と人間性」と題する講演を聴講した。

第十四回セミナー

東京 昭和五六・二・十四

- 会場 笹川記念会館
- ホスト 常任幹事
- 参加人数 二四グループ・一九一名
- 参加費 資料なし
- 参加者 資料なし

- 第一講 「一九八一年の景気動向と企業対策」 齊藤栄三郎
- 第二講 「私はいかがして少数精鋭軍団をつくった」 高木禮二
- 第三講 「話す仕事・書く仕事」 三國一朗
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

全国から二〇〇人参集
緑友会セミナー開く

全国印刷緑友会（飯田範夫会長）のセミナーが二月十四日、東京・港区三田の「笹川記念館」において、全国からの加盟会員約二〇〇人が参集して開かれた。

この日は午後一時から「八一年の景気動向と企業対策」⇨齊藤栄三郎代議士、「私はこうして少数精鋭軍団をつくった」⇨高木禮二明光商会社長、「話す仕事、書く仕事」⇨三国一朗氏とそれぞれのテーマでの講演を四時間半にわたり聞いた。

午後六時からは参加者全員で懇親会を開き、グループ紹介などで各地各グループ間の交流が行なわれた。最後は恒例の「お手々つないで」の大合唱で再会を約しつつ午後七時半閉会した。

全国から集まった会員が熱心に受講

第十五回セミナー

名古屋・昭和五七・二・六

- 会場 名古屋ホテルキャッスルプラザ
- ホスト 名古屋而立会
- 参加人数 二四グループ・一七三名
- 参加費 オブザーバー三名 計一七六名
- 参加者 一万五〇〇〇円

札幌青年印刷人の会（二名）、仙台刷親会（七名）、茨城緑友会（九名）、下関青年印刷人緑友会（二三名）、印刷同友会（二七名）、千代田印刷人新世会（十一名）、文京緑友会（二二名）、東京写真製版若葉会（十名）、東京プロセス製版青樹会（十五名）、東印工組港支部若竹会（二名）、神奈川正和会（十八名）、長野青年印刷人緑友会（十一名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（七名）、金沢青年印刷人クラブ（二名）、大阪青年印刷人クラブ（六名）、神戸印刷若人会（六名）、広島青年印刷研究会（四名）、佐世保印刷若汐会（一名）、福岡印刷若葉会（三名）、久留米印刷緑友会（二名）、新潟県印刷新世会（三名）、熊本印刷緑友会（二名）、大分印刷若梅会（四名）、名古屋而立会（十五名）

- 第一講 経営の技術 「職人集団の活性化」 浅野 哲男
- 第二講 経営の心 「深層心理の解明とその活用」 山中 典士
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

緑友セミナーより

「活性化で売上三倍に」 アイシン精機（株） 工場長 浅野 哲男（講演要旨）

経営者にとって、永遠の命題は企業の体質強化である。このため管理法（QC・IE、ZD、トヨタ生産方式）が経営手段として導入されているが、これらの管理法を用いても、企業の中の組織手段が生きいきと動いているとか、壮絶なエネルギーで働いている状況でなければ効果はない。

従業員の成長なくして、企業の成長はあり得ない。そういう意味では、従業員の成長が日々遂行される業務を通じて実現することも望ましい。従業員が自発的動機によってよりよい仕事を達成しようとして、取り組んだとき、一層の成果を生む。

経営の課題は、どうやって生き生きとした職場をつくりあげるか、問題意識が旺盛で行動的な職場をつくっていくか、業務を通じつつ、従業員をいかに成長させていくかである。

一工場から独立

アイシン精機工場は五十一年二月、これまでの会社の一工場から一つの事業部となり独立会社になり得る体質への転換を迫られるに至った。私は本社の生産技術部から、工機への移籍を命じられ、新設の企画課長として事業部、工場の運営企画を担当することになった。

当時の工場はオイルショックの後遺症もあり、生産高、利益とも伸び悩み、やや沈滞したムードであった。これは、量産向上でのトヨタ生産方式、かんぱん制度の洗礼

を受けず、合理化、体質強化運動から取り残されていた”腕に自慢の職人集団であり、個人個人は力をもっているが、チームとして活動して、プラスチックを出すことができないでいたことによる。

この現状を思い切って打破し、工場を根底から洗い直し、工場に新風を吹き込まなければ改革はできないと考え、そのための手段として取り組んだのが「活性化活動」である。

この活動は、五年間で事業部としての体制を固めることを基本方針にし、思い切った現状打破を行ない、工場を根底から洗い直し、工場に新風を吹き込むことを万策とした。これにもとづいてたてたのが特別推進活動すなわち、五・五作戦である。これは、現場監督者を中心にプロジェクトチームをつくり、工数の五割低減、不良品の五割低減を目標とするものであった。具体的には、工場全体のワークサンプリング、工場の美化、現場を工程別に再編成、改善専門班の設置を活動内容としてスタートした。成果は直後には急激に上がったが、四、五ヵ月目になると横ばいとなり、六ヵ月目には伸びなくなった。原因は企画課や一部のリーダーが中心の活動となり、従業員の末端までが主役になっていないということに起因していた。

そこで、工場革新のような大手術は真に全員の参加が得られないと達成できないということに気がつき、箱根で行なわれた「組織革新研究会」に参加し、その組織活性化の考え方を導入することとした。

活性化が出发点

第一回の派遣者は、中堅現場監督者六人であったが、これら参加者が眼を輝かせ燃えて帰ってきて、「われわれの感激を他の仲間にも体験させたい」「会社で何かをやりたい」と口々に熱意を語った。この熱意が以後の当工場が歩行ラリーという道具を使

いながら工場全員を巻き込んで活性化していった活動の出発点となった。

歩行ラリーとは、用意されたコマ地図をたよりに歩いてゴールにもどってくるという競技である。チーム編成は最小単位が二人のペア。図表のように、ペアの成績がチームの成績、ユニットの成績、キャンパスの成績につながるように組織され、会社の組織と同じ形をとりながらチームワークの大切さを学べるようになっていく。

この歩行ラリーは、現場の事実をよく見て行動しないと間違いをおかし、とんでもない方向に行ってしまう、ユニット、キャンパスにめいわくをかけることとなる。

歩行ラリーは通常二度行なわれ、実施の前に実行計画をたてて実施し、その結果を経験した事実にもとづいてまとめる。つまり、第一回の経験を第二回にどう活かしたか、その向上の度合いを重く見るわけである。

好評な歩行ラリー

当社では五十二年二月に第一回の歩行ラリーを実施以後、昨年十月まで一〇回実施しているが、当初は参加者も少なくまた参加対象も部門ごとであった。しかし回数を重ねるにともない「いろいろな教育、研修に参加したが、今回ほどやったという実感と感動を受けたことはなかった」、「今まで自分の判断、行動はまちがってないと思っていたが、これは誤りであったことを体験で教えられた」、「お互いに協力すれば何事もできることがわかった」など、好評であったことから、第七回からは工場全員が参加するようになった。

この歩行ラリーによる基礎教育の成果に確信をえて、企業内の課題をとり入れた活性化活動の実践にふみ切った。

「いちにちひと善」、「計測技能教育」、「かんぱん研究会」、「品質点検ラリー」といっ

た実践運動を導入した。この結果は、例えば「いちにちひと善」活動は、全員がその日に改善したことをカードに書いてはり出し一カ月毎日競うものだが、当工場は運動の始めの頃は、いつもビリであったが、これが近年はトップにおどり出、しかもトップの座を維持してきている。

この活性化活動は、その後、職場のSSフリー工期短縮オリンピック、協力工場の活性化研究会、新入社員の教えない教育、小集団経営体制の実施、不良予知活動、設備の品評会、一ポイントレッスン―保全ラリーなど、その実践活動は広がり、大きな成果をあげ定着した。

グループで計画

最近はこの定着の基盤のうえにたつて「全員参加の工場経営」、当社ではSKフリーと呼んでいるが、これと取組んでいる。

このSKラリーは全員を製品グループ化し、経営計画をたてこれを実行していくというものである。売上げ、利益、人員、残業、稼働、材料費、経費などすべての経営予算について計画をグループごとにたて、実行を競争するわけである。もちろん途中に経営相談室によるチェックポイントや、発表の機会をもつなどしているが、計画は実行すれば必ず達成できる仕組みが前提となっている。結果はきわめて良く、売上高(三〇%)、生産性(一六%)ともに計画を上回る成果をあげている。このため会社全体の生産高は五十年を一〇〇とすると、五十五年三〇〇という伸びを示すに至っている。

この活性化活動はすでに六年になるが、誰もが課題達成と生きがいの両立を望んでいることがわかった。同時に自分が勇気をもって、まず行動を起こすことが革新への道である。座して待っても機会は訪れない。

第十六回セミナー

大阪・昭和五八・二・五

- 会場 大阪グランドホテル
- ホスト 常任幹事会・大阪青年印刷人クラブ
- 参加人数 二三グループ・一七九名
- 参加費 オブザーバー五団体・五名 計一八四名
- 参加者 一万三〇〇〇円

札幌青年印刷人の会（一名）、仙台刷親会（一名）、印刷同友会（八名）、千代田印刷人新世会（五名）、文京緑友会（六名）、東京写真製版若葉会（五名）、東京プレス製版青樹会（七名）、山梨印刷若人会（二名）、長野青年印刷人緑友会（四名）、名古屋而立会（十二名）、福井県印刷青年部（二名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（九名）、金沢印刷若人会（十八名）、広島青年印刷研究会（五名）、下関青年印刷人緑友会（二名）、北九州Y Pクラブ（二名）、福岡印刷若葉会（四名）、久留米印刷緑友会（二名）、佐賀県印刷人若楠会（四名）、大阪青年印刷人クラブ（七一名）

- 開講式
- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和会長あいさつ
- 第一講 経営の心
- 第二講 経営の技術
- 第三講 経営の心
- 記念撮影

「国際経済摩擦と日本の立場」 近藤 駒太郎
 「八〇年代における若手リーダーの考え方」 牛尾 吉朗
 「新時代に生きぬく経営者の条件」 和田 英雄

- 懇親会
- 会長あいさつ
- 乾杯
- おてつないで
- 閉会あいさつ

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会セミナー開く

危機感もって対処

経営の”心”と”技術”学ぶ

第一六回全国印刷緑友会セミナーは三月五日午後一時から大阪グランドホテルで約一八〇人の会員が集まり開かれた。講演に先立ち開講式では花田佳雄氏（広島青年研究会）の司会で古賀健一氏（福岡印刷若葉会）が開会宣言をし、全員起立で国歌斉唱のあと長阿弥暁彦氏（下関青年印刷緑友会）のリードで綱領唱和。会長あいさつでは中村守利会長は、危機感をもって無限の可能性への挑戦を“と呼びかけた。

講演では

- ①経営の心―「国際経済摩擦と日本の立場」近藤駒太郎氏（天和屋繊維工業（株）社長）
- ②経営の技術―「八〇年代における若手リーダーの考え方」牛尾吉朗氏（ウシオ工

業（株）社長）、③経営の心―「新時代生きぬく経営者の条件」和田英雄氏（経営コンサルタント）がそれぞれ語られ、聴講の緑友会員に大きな感銘を与えた。

中村守利会長あいさつ要旨

第二五期全国緑友会行事も、昨年九月の札幌で大会が盛会裡に開催され、また、今期最後の行事として本日大阪セミナーを全国緑友の多数の参加を得て開講の運びとなった。この一年、全国緑友の皆さんのあたたかい友情にあらためてお礼を申しあげます。わが国の経済情勢は世界的不況の継続するなかで、対米国・EC諸国との貿易摩擦への対応を中心として多数の局面が続いております。

国内経済沈滞のなかで印刷業界も需要減という厳しい環境におかれ、一万エレクトロニクスという超大型の技術革新の波が押し寄せ、これから印刷産業も需要動向の变革、情報革命など予測され、不安感すら感じられます。

未知への期待感以上の不安感を感じますが、しかし、不安感だけを抱いているときではありません。不安感とは心の動揺を招き集中力を失い、決断力を欠き、経営を遂行するバイタリティを失います。この多難の現況で大切なことは、不安感を持つより危機感を持つことです。危機意識は現状を打破し成功に導く気力の源泉です。

危機感とは人をつくり、人は歴史をつくり、いつたのは西郷隆盛です。不安感とは人を育てるのではなく、危機感が人材を育てるのです。

かつて日本は戦火に焼かれ丸裸となりました。その時は不安感を持っているなどということではなく、生きていく力をすべて燃焼させてたち向った。これが危機感です。これを日本人の心に点火し燃焼させ、世界でトップレベルの高度成長をとげたわけです。政治の力ではなく、いったん緩急のことあらば燃える日本人の心が無

限の可能性に挑戦していこうという姿が廢墟の中で無から有をつくったわけです。われわれ若い世代もこの歴史につちかわれた大和魂をもっています。

エレクトロニクスに代表される新しい幕開けの時、この精神の発露の可能性に燃える自分自身を持つことが命題です。このセミナーがこの心づくりの動機づけとなれば幸いです。

第十七回セミナー

東京 昭和五九・二・四

- 会場 日本工業倶楽部
- ホスト 常任幹事会
- 参加人数 三二グループ・二五二名
- 参加費 一万五〇〇〇円
- 参加者 資料なし

- 開講式
- 第一講 「企業成長と経営者能力」 清水 龍
- 第二講 「二一世紀型経営・未来へのノウハウ」 藤井 康男
- 記念撮影
- 懇談会

【日本印刷新聞記事】

自助努力で対処
 緑友会セミナー
 見極めたい変化と節目

一七回目をむかえた全国緑友会セミナーが二月四日、東京・千代田区の日本工業倶楽部で開かれた。主催は全国印刷緑友会（竹田光宏会長）、会場には北は北海道から南は沖縄まで、全国から二五〇人あまりの会員が参加、講演二題を聞くとともに懇親を深め、情報交換を行なった。

開会宣言につづいて国歌斉唱、綱領唱和、初代会長・故市村道徳氏に対する黙祷が捧げられ、竹田会長はつぎのようにあいさつした。

「景気は上向いてきたというが、自分たちの実感ではますます悪くなる感じだ。この中で自分たちが成長してゆくには自助努力しかない。現在は新しい時代に向けての節目にあたる。流れに合った変化をしなければならぬ。今日の講演を聞いて変化の先どりをしてほしい。」

このあと講演に移り、慶應義塾大学・清水龍螢教授と（株）龍角散の藤井康男社長の二氏が洒脱な口調で経営者に必要な事項を話した。清水教授は「企業成長と経営者能力」と題して次のように語った。

わが国の場合、企業の成長が止まるのは現状肯定になるからだ。同じことを続けてやると楽になるのは当然だが、企業の外は絶えず変化している。安定製品ばかりに力を入れていると、外の変化についてゆけなくなる。企業と生業の違いは、経営者が一日に三十分ぐらい考える余裕があるかどうか、の違いである。

経営者の戦略的意志決定としては、①かしかりの論理の遂行②根まわし③公式の決定の三点である。①の場合は、絶えず回りの役員に貸しをつくっている雰囲気が必要ならぬ。ただし貸しをつくっている顔をしてはだめだ。

経営者はまず問題意識の明確化が必要だ。この中で情報を集める。それと野心が必要だ。決断力はむずかしいことを考えるからわからなくなるのであって、進むか退くか留まるかの三点から選ぶ。

続く藤井社長は「二十一世紀型経営ノ未来へのノウハウ」と題して、長期的にものを見るアナログ経営の必要性を訴えた。実際に同社では関連の(株)ヤトロンで五年先、十年先を見てどんな病気が多くなるかを予想して薬をつくっている。具体的には高齢化社会を見越して老人向けの薬だけを研究しているという。

講演会のあとで懇親会が持たれ、安達秀雄氏の乾杯音頭のあと全国から集った会員が親しく懇談した。

第十八回セミナー

大阪 昭和六十・二・二二

- 会場 会場 大阪コクサイホテル
- ホスト 常任幹事会・大阪青年印刷人クラブ
- 参加人数 二七グループ・一八〇名
- 参加費 一万五〇〇〇円
- 参加者 資料なし

- 開講式 「大阪の歴史的特質とこれからの大阪」 木津川計
- 第一講 「勝負に勝つための条件と鶴岡式統率法」 鶴岡一人
- 第二講 「関西商法に学ぶもの」 佐藤一段
- 第三講
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

全国緑友会
勇気と連帯を

二二世紀、在り方探る
大阪で十八回目のセミナー

全国印刷緑友会（竹田光宏会長）の第一八回全国セミナーが二月二日、大阪のクサイホテルでおこなわれた。

セミナーは、大阪青年印刷人クラブの全面的な協力のもと、北は札幌青年印刷人の会から、南は宮崎印刷はまゆう会まで、全国から青年印刷人約二百人が集まった。午後零時四十五分、茨城印刷緑友会の城戸憲次氏の開会宣言で開校式が始まり、君が代斉唱、緑友会綱領唱和のあと、竹田会長のあいさつがおこなわれ、「商売の本場大阪の地で、大阪商人の考え方、哲学、生きざまなどを勉強することにより、自らの企業経済の参考にしてほしい。また、この機会に全国から集まった緑友会の仲間との交流も一層深めて、次なる時代にむかう勇気と連帯を高めていきたい」と青年印刷人としての方向づけを行なった。

講義にうつり、木津川計氏（雑誌『上方芸能』編集長）、鶴岡一人氏（元南海ホークス監督、現NHK野球解説者）、佐藤一段氏（大阪新聞社編集局長）ら三氏による講演が六時までつづけられた。

講師の紹介と講演内容は次の通り。

▽木津川計氏「大阪の歴史的内容特質と、これからの大阪」―氏の大坂文化振興にかける情熱と執念は強烈で、一時低迷を続けていた上方芸能にスポットを当て、今日のブームを作り出した代表的人物である。現在の巨大都市大阪が抱えるさまざまな問題を歴史的、文化的に分析してみせ、二十一世紀における大阪のあり方を熱っぽく説き問題提起を行なった。

▽鶴岡一人氏、「勝負に勝つための条件と鶴岡式統率法」―日本プロ野球史上に残る名監督。厳しさの中にも人情の機微を解した細やかな愛情を注ぎ、選手を巧みに統率する指導法と勝つためのチーム作りには定評があった。厳しい勝負人生を勝ち抜いてきた勝負師特有の哲学と体験による知恵と教訓は、青年印刷人の心をとらえた。

▽佐藤一段氏「関西商法に学ぶもの」―三十年余り経済畑一筋に歩み、経済ジャーナリストとして、関西財界人の哲学・生きざまを冷静に観察することにかけては天下一品、氏が今まで深くかわりあつたダイエー中内社長や、サントリーの佐治社長ら関西商人の「手本」ともいえる経営者のなまの姿をビビットに伝えることにより、関西商法の本質解明した。

講演終了後、全員で記念撮影をし、中村守利緑友会前会長の乾杯の音頭で懇親の宴に入った。

第十九回セミナー

名古屋 昭和六一・二・八

- 会場 第二豊田ビル
- ホスト 名古屋而立会
- 参加人数 二四グループ・一九四名
- 参加費 資料なし
- 参加者 資料なし

- 開講式
- 第一講 「ニューメディアと印刷の未来」 田原総一郎
- 第二講 「ヨガと心の健康、体の健康」 北山 佐和子
- 第三講 「人間と動物の知恵くらべ」 中村幸昭
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

印刷の未来像探る

緑友会 一九〇人集めセミナー

全国印刷緑友会（古賀健一会長）の第一九回全国印刷緑友会セミナーが二月八日、名古屋市中区の第二豊田ビル八階ホールでおこなわれた。

セミナーには、全国二三グループ一九〇人が集まり、午後一時から、高木茂男氏（名古屋而立会）の司会で、長野青年印刷人緑友会の塚田貞俊氏による緑友会綱領唱和、来賓が始まり、君が代斉唱、沖縄県印刷若潮会の糸洲昇氏による緑友会綱領唱和、来賓紹介、グループ紹介につづいて、古賀会長のあいさつがおこなわれた。

古賀会長は「新しい抱負と希望をもって昭和六十一年が発したが年末の円高基調がつづいている。貿易関係には直接関係がない業界とはいえ、ニューメディアを代表するキャプテンシステムの新会社も地方都市で発足する状況に到り、印刷業界だけでなく一般の生活にも大きな変化が訪れている。このセミナーを大いに活用していただき、自らの企業や緑友会の各グループ活動の参考にしてほしい」とあいさつ、その後講演にうつり、田原総一郎氏（評論家）、北山佐和子（ブライフマンヨガセンター主宰）、中村幸昭氏（鳥羽水族館館長）ら三氏によって午後六時までつづけられた。

講師の紹介と講演内容は次の通り。

▽田原総一郎氏「ニューメディアと印刷の未来」Ⅱ岩波映画、東京12チャンネル

ディレクターを経て、現在は評論家として活躍中。業界が悪くても、一企業が良いたちところもある。こわいのはアウトサイダーが出てくることである。たとえば、国鉄が悪いのは私鉄ではなくトラックなどである。また、脱と言うことばがはやったが、いまは拡に変わってきており、他産業への進出がふえてきている。

▽北山佐和子氏「ヨガと心の健康・体の健康」▽大学在学中からヨガの第一人者と言われ、沖正弘導師に入門したのがヨガとの出会い。現在はビジネスマンヨガなど二十教室をもって指導にあたっている。

▽中村幸昭氏「人間と動物の知恵くらべ」▽昭和三十年以来、鳥羽水族館館長として動物と生活を共に、また、自然に学ぶ健康などをコメディタッチで講演した。講演終了後、全員で記念撮影、竹田前緑友会会長の乾杯の音頭で懇親の宴に入った。

第二十回セミナー

京都 昭和六二・二・七

- 会場 京都国際ホテル
- ホスト 常任幹事会
- 参加人数 二八グループ・一六〇名
- 参加費 一万七〇〇〇円
- 参加者 資料なし

- 挨拶
- 第一講 「能にみる霊験の世界」 金剛永謹
- 第二講 「京都の歴史における西陣の変遷」 川島春雄
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

日本古来の心学ぶ
緑友会、京都でセミナー

今年、創立三十周年を迎えた全国印刷緑友会（古賀健一会長）の定例行事であるセミナー（二十回目）が、二月七日午後一時から京都府・中京区二条城前の京都国際ホテルで開かれ、金剛流の能楽師・金剛永勤氏が「能にみる靈験の世界」、西陣織工場組合理事長であり（株）川島織物会長の川島春雄氏が「京都の歴史における西陣の変遷」と題し講演を行ない、日本古来の心を説いた。

中村安博氏（京都青年印刷人月曜会）の開会宣言で開演、君が代斉唱、綱領唱和、来賓紹介、グループ紹介が行なわれ、つづいて古賀会長が次のようにあいさつ。

「会長になってから、全国各地の緑友会に招かれるが、どの会も気力と迫力があり、見ていると印刷業界も安泰と感じる。今年は一四〇円台といわれる円高など日本経済は試練を迎えている。また売上税という大きな問題もある。これには業界一丸となり、団体の力を結集して、何とかしなければと個人的に思っている。このように激動の年だが、全国印刷緑友会三十周年という節目の開催で、社会構造の変化が激しいこのときに、心の故郷である京都で、金剛永勤氏に“能の心”を、川島春雄氏には“西陣の文化”をおしえてもらい、これを心のやすらぎとし、明日からの

経済活動の源とすることを期待する」。

来賓を代表して京都府印工組の梶本副理事長が「時代を担う青年印刷人の皆さんへの期待が今一番大きい。今日のセミナーで研鑽して、将来に生かすことを願う」とあいさつした。

このあと第一講として、「能に見る靈験の世界」をテーマに金剛永勤氏が講演した。金剛氏は能の歴史から話しはじめ「奈良時代に中国から輸入されたもので猿楽、雅楽と呼ばれ、滑稽なものとして民間に広まったものが猿楽で、これがちに演劇化し、狂言となった。滑稽なものを高級化させるため日本の独特の美意識である“わび”“さび”など他の芸術も取り入れ大成した」と述べた。このあと能の本質・特質について面をつかって説明した。また「海外へ行くと禅や能への興味が強くなっていることがわかる。これはお金万能の経済界が破綻してきており、禅、能は自分の心をコントロールする力を持っていると思われるなど、二十世紀が欧米型の物質文明で、二十一世紀は中国・韓国・日本などアジア型の心の時代になるといわれる由縁である」とした。このあと能の“羽衣”の一部を実演し、「能は人間の本質的なものを追及したもので、人間の心の奥そこを見据えた演劇である」と結んだ。

休憩をはさんで第二講を西陣織工業組合理事長であり（株）川島織物会長の川島春雄氏が「京都の歴史における西陣の変遷」と題し講演を行なった。川島氏は西陣の歴史から語り「能と同じように中央権力（特権）を利用するなど政治との結びつきで織物も伸びたが、首都が東京に移り、天皇とその取り巻きも東京へ行ってしまわれたということもあり、現在伸び悩んでいる。キモノはなくならないが、現在はやはり洋服が主流であり、洋に対応しなければならぬ。またフォーマルではなく

カジュアルを開発しなければならない」と今後の西陣織の生き方を述べ講演を終了した。
講演のあとは記念撮影のあと、にぎやかに懇親会が開かれ、今回のセミナーの開催地であり、運営を行なった京都青年印刷人月曜会の上木忠夫氏および古賀会長のあいさつのあと、前会長である名古屋而立会の竹田光宏氏の音頭で乾杯し祝宴に入った。

第二一回セミナー

大阪 昭和六三・二・六

- 会場 都ホテル大阪
- ホスト 大阪青年印刷人クラブ
- 参加人数 三五グループ・二二九名
- 参加費 二万円
- 参加者 資料なし

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓祝辞
- 第一部 「顧客第一主義を貫くMK商法と経営戦略」 青木定雄氏
- 第二部 「新しい時代、新しいメディア、新しい表現」 谷口正和氏
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会

大阪でセミナー開催

二一世紀に生残る経営学ぶ

全国印刷緑友会が主催し、同常任幹事が主管する第二一回全国印刷緑友会セミナーが二月六日開催され、全国から二八グループ約二百人の緑友の“仲間”が経営のメッカ大阪で、二十一世紀に生き残る経営について学んだ。

セミナーが開かれたのは大阪市天王寺区にある「都ホテル大阪」、正午から登録受付が始まり、開講式は午後一時。

青森県印刷青年経営者会議の立花建男氏が力強く開会宣言をしたあと、国歌斉唱、緑友会綱領の唱和とつづいた。

開会あいさつに立った竹内一博会長は「いまや緑友会は全国にネットワークを広げつつある。会員がこうして集まることで新たに団結力も生まれてくる。三回目を迎えた本セミナーで大いに勉強し、価値ある情報を各自の活動の場に、そして自社に持ち帰ってほしい」と述べ、また今年開かれる山梨総会・佐賀大会に一人でも多く参加するよう訴えた。

次いで来賓としてあいさつに立った石川忠大阪府印工組副理事長は、現在の印刷業界の動向として、第三次構改の始動や、コンピュータによる技術改新の急激さなどをあげ、「印刷界の次代を担うエリートである皆さんが、力を蓄え、業界発展の

ため尽くしてほしい」と述べ、青年印刷人に寄せる期待を示した。

午後一時から始められた講演は、途中十五分の休憩をはさんで午後五時十五分まで続けられた。

この日講師をつとめたのは、タクシー業界の革命児といわれるMK(株)の青木定雄会長と、グラフィックデザイナーでありマーケティング関係の著書も多い(株)ジャパンライフデザインシステムの谷口正和代表の二氏。

両氏とも特有の経営理念を持ち、時代の読み方、情報のつかみ方等に的確な手腕をもつだけに、示唆に富んだ講演内容であった。

青木氏は社員教育の重要さと、経営者自信が第一線の働き手であり、情熱をこめて経営にあたることの難しさとやりがいについて述べ、また谷口氏は“流行る”という現象の不可思議さと、近い将来予想される二十四時間営業時代への対応の仕方等について語った。

第二二回セミナー

名古屋 平成一・二・十八

- 会場 名古屋国際センター
- ホスト 名古屋而立会
- 参加人数 三十グループ・二〇四名
- その他関係者一〇〇名 計三三四名
- 参加費 一万五〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(九名)、
 仙台印刷親会(一名)、茨城緑友会(四名)、印刷同友会(六名)、千
 代田印刷人新世会(四名)、文京緑友会(八名)、東京写真製版若葉
 会(五名)、東京プロセス製版青樹会(四名)、東印工組港支部若竹
 会(一名)、神奈川正和会(三名)、刷友青山会(一名)、やまなし
 印刷若人会(四名)、長野青年印刷人緑友会(三名)、ぎふ印刷翠陽
 クラブ(二名)、金沢青年印刷人クラブ(十一名)、福井県印刷青年
 部会(三名)、大阪青年印刷人クラブ(二名)、広島印刷研究会(四名)、
 (十一名)、愛媛印刷人青年会(二名)、福岡印刷若葉会(六名)、佐賀県印刷人
 北九州YPクラブ(一名)、熊本印刷緑友会(二名)、大分印刷若梅会(三名)、
 若楠会(二名)、別府印刷組合青年部会(一名)、宮崎印刷はまゆう会(二名)、沖縄
 青年印刷若潮会(三名)、名古屋而立会(六七名)

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 全国緑友会会長挨拶
- 名古屋而立会会長挨拶
- 第一講 「戦略経営・分社経営・全社員経営」 後藤昌幸
- 第二講 「何がホンダを急成長させたか」 杉浦英男

- 記念撮影
- 交流会

【日本印刷新聞記事】

印刷緑友会
 戦略

全国印刷緑友会(竹内一博会長)の主催、名古屋而立会(永野勉会長)主管の第
 二二回全国緑友会セミナーが二月十八日、名古屋市中村区の名古屋国際センターで
 開かれ、全国から三一グループ約二〇〇人と、一般参加者約一〇〇人が、戦略経営、
 分社経営などを学んだ。

セミナーの開講式は午後一時から始まり、名古屋而立会の西川誠也氏が開会宣言
 をしたあと、国歌斉唱、やまなし印刷若人会の長田照久氏による緑友会綱領唱和、
 名古屋而立会の小出一郎氏によるグループ紹介とつづいた。

開会のあいさつに立った竹内一博会長は「ここ名古屋は自動車の町といっても過言
 ではない。而立会の皆様の努力によって、ダイハツさん、ホンダさんのトップの経
 営者の話を聞く機会を設けることができた。この意義あるセミナーを聴講していた
 だきこれからの印刷業の活性化につないでほしい」と述べた。

つづいて、主管である名古屋而立会の水野弁会長は「昨年のお阪でのセミナーでは
 心から感動したことを覚えている。その感動をこの名古屋の地でも得られないかと

思い竹内会長にお願いし、こうして盛大に開催できたことに対して心からお礼を申し上げる」とあいさつを述べた。

この日講師を務めたのは、分社経営を確立し、自由で愛情のある自主独立主義の組織をつくった滋賀ダイハツ販売(株)の後藤昌幸代表取締役会長と、世界のホンダとして技術力を世に問うたブレインの一人である本田技研工業(株)の杉浦英男常任相談役。

後藤氏は、「二位はビリと同じだ、敗けなのである」「赤字は悪や」という同氏の信念を披露。「その経営の思想は戦略会計(西順一郎氏の発想)によって裏打ちされ、さらにそれを逆転の発想で、経営をより一層分かりやすいものとした。それによって会社経営が確立し、自由で愛情のある自主独立実力主義の組織を作った。さらにそれを全社員に理解させ、全社員経営を推進した」と話した。

杉浦氏は、創業者の本田宗一郎氏と藤沢武二氏の二大経営者につかえ、技術の前に思想が先であるという両経営者のホンダイズムを具現化、物事を素直に受けとめる感受性、先見と柔軟さで新しい価値を生み出す知恵、困難に立ち向かい実践する意欲、行動力などを自ら実践した最高参謀としての業績を披露した。

第二三回セミナー

東京 平成二・二一・十七

- 会場 ホテルグランドパレス
- ホスト 在京八グループ
- 参加人数 三三グループ・二七六名
- 参加費 東青協他十八グループ・六九名 計三四五名
- 参加者 一万五〇〇〇円

札幌青年印刷人の会(一名)、青森県印刷青年経営者会議(四名)、仙台印刷親会(一名)、山形印刷研修会(一名)、茨城印刷緑友会(二十名)、やまなし印刷若人会(七名)、長野青年印刷人緑友会(三名)、名古屋而立会(二五名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(七名)、金沢青年印刷人クラブ(九名)、福井県印刷青年部会(三名)、京都青年印刷人月曜会(一名)、大阪青年印刷人クラブ(十一名)、千代田印刷人新世会(二五名)、文京緑友会(二名)、東京写真製版若葉会(十二名)、東京プロセス製版青樹会(十九名)、東印工組港支部若竹会(十六名)、刷友青山会(六名)、神奈川正和会(十二名)、神戸印刷若人会(十一名)、愛媛印刷人青年会(六名)、広島青年印刷研究会(六名)、下関青年印刷人緑友会(一名)、北九州Y.P.クラブ(一名)、福岡印刷若葉会(三三名)、佐賀県印刷人若楠会(五名)、佐世保印刷若汐会(二名)、大分印刷若梅会(四名)、熊本印刷緑友会(一名)、別府印刷組合青年部(一名)、沖縄青年印刷若潮会(二名)、東青協日本橋支部青年部(六名)、東青協京橋支部京青会(四名)、東青協新宿支部青年部(十名)、東青協浅草支部刷草会(五名)、東青協墨田支部一二三会(一名)、東青協江東支部江東印刷青年会(三名)、東青協城南支部青年部会(四名)、東青協山之手支部山青会(五名)、東青協城西支部青年会(五名)、東青協豊島支部刷仲会(九名)、足立支部YAP(一名)、東青協墨東支部友和会(二名)、三多摩支部青年印刷研究会(二名)、東青協北支部ノースユニーククラブ(二名)、東青協新富会(一名)、日本青年会議所印刷部会(三名)、東京製本二世連合会(五名)、群馬県青年印刷研究会(二名)、印刷同友会(三九名)

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- 来賓紹介

- グループ紹介
- 会長挨拶
- 東青協議長挨拶
- 実行委員長挨拶
- 来賓挨拶
- 第一講 「企業における女性社員の活性化と経営者のあり方」 古島町子
- 第二講 「魅力ある会社・魅力ある産業への転換」 村松礼二
- グループディスカッション
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

全国印刷緑友会

魅力ある会社テーマに

東青協と共催でセミナー

第二三回全国印刷緑友会セミナーが、二月十七日午後十二時四十五分から東京・九段下のホテルグランドパレスで開かれた。今回は東印工組東京青年印刷人協議会との共催で、緑友会、東印工組各支部青年部から約三五〇人が参加した。セミナー

では鐘紡（株）常務取締役・古島町子さんが女性社員の活用の仕方について、印刷関連企業生産技術コンサルタント・村松礼二氏が魅力ある会社づくりについて話した。講演後にはグループディスカッションが行なわれるなど活発な意見交流が繰り返された。

セミナーに先立ち、十二時四十五分から一時十五分まで式典が開かれた。司会を利根川伸行氏（文京緑友会）が務め、釜田利夫氏（豊島刷伸会）の開会宣言で幕が開き、参加者全員で君が代斉唱。笠木信夫氏（大分印刷若梅会）のリードで全国印刷緑友会綱領唱和のうち、参加グループの紹介が行なわれた。

全国印刷緑友会・城戸憲次会長が「三四八人と、ちょっとした大会ぐらいの人数が集まった。今回は初めての試みとして東印工組東京青年印刷人協議会と共催という形で開いた。在京八グループの皆さんが緑友会の基本である手作りということを中心に、このセミナーを設定してくれた。講師の話聞き、それをもとに話し合うというものだ。このセミナーで何か一つでも会社のために、仕事のためになることを学んでほしい」とあいさつ。

続いて東青協・鳥居博議長が「緑友会のセミナーにわれわれ東青協、東印工組支部青年会の会員が参加し、話し合う場をいただいたことは印刷産業の発展にとつて大きな意義があると思う。現在、印刷産業は情報化とか、技術の高度化など大きな問題を抱えている。今日はこれらの問題を本音で語り合いたい」、米倉伸三実行委員長が「同じ志を持つ青年印刷人が日夜ミーティングを重ねてきた。その結果として、このように大変多くの方が参加し、内容の充実したセミナーを開くことができた。今日は有意義に過ごし、よりよい人間関係を作り、本日のテーマである魅力ある会

社作りの足掛かりにしていたきたい」とあいさつした。

来賓を代表して新村重晴東印工組理事長があいさつしたあと、セミナーに入った。第一講の「企業における女性社員の活性化と経営者のあり方」では、古島講師が「女性の有効活用をどうやればいいかは、理屈の問題ではなく、感性、あるいは基本的なものの考え方、生き方、思想の問題である。理屈的には女性も男性と同じ仕事ができると分かっていても、基本的なところでは男尊女卑の考えが残っており、女性の登用を躊躇してしまう。その考え方を根底からなくさなくてはならない。女性に限らずよい人材を引っ張ってくるには、経営ポリシーと具体的な制度をとることである」と話した。

第二講の「魅力ある会社魅力ある産業への転換」では前半に講師の村松氏が「魅力ある会社とは」という命題を参加者に投げ掛け、後半はこれに対してグループディスカッションを行なう形をとった。村松氏は印刷会社の現状として深刻な雇用問題、人手不足と人材不足、労働時間短縮化への対応などをあげ、「魅力ある会社を造るには雇用環境の受け皿づくり、生き甲斐のある職場づくり、人材育成の計画的な対応、経営の質の向上などを図らなければならない」と話した。後半のグループディスカッションでは各テーブルごとに意見交換を行なった。

第二回セミナー

神戸 平成三・二・九

- 会場 ホテルシエレナ
- ホスト 神戸印刷若人会
- 参加人数 三三グループ・二二二名
- 参加費 一万七〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会（二六名）、仙台刷親会（二名）、山形印刷研修会（二名）、茨城印刷緑友会（十二名）、印刷同友会（四名）、千代田印刷人新世会（四名）、文京緑友会（九名）、東京写真製版若葉会（一名）、東京プロセス製版青樹会（五名）、京都青年印刷人月曜会（一名）、大阪青年印刷人クラブ（二二名）、関西写真製版青樹会（二名）、愛媛印刷人青年会（十二名）、広島青年印刷研究会（六名）、下関青年印刷人緑友会（一名）、北九州Y.P.クラブ（一名）、福岡印刷若葉会（五名）、佐賀県印刷人若楠会（六名）、熊本印刷緑友会（一名）、東印工組若竹会（二名）、神奈川県印刷若葉会（四名）、やまなし印刷若人会（二名）、長野青年印刷人緑友会（三名）、名古屋屋而立会（二二名）、ぎふ印刷翠陽クラブ（十三名）、金沢青年印刷人クラブ（十一名）、福井県印刷青年部会（四名）、大分印刷若梅会（五名）、沖縄青年印刷若潮会（三名）、群馬県青年印刷研究会（二名）、秋田市印刷懇話会（三名）、神戸印刷若人会（三十八名）

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 会長挨拶
- 来賓挨拶
- 実行委員長挨拶
- 第一講 「モラール・サーベイ主旨説明」

水口可保

- グループデイスカッション
- 第二講 「世界の動き」 守野正美
- 記念撮影
- 交流会

【日本印刷新聞記事】

二二〇人が本音で語り合う
印刷緑友会のセミナー

全国印刷緑友会（城戸憲次会長）主催、神戸印刷若人会（安田充利会長）による第二四会全国印刷緑友会セミナーが二月九日、神戸市中央区の「ホテル・シエレナ」で行なわれ、全国から三三グループ、約二二〇人が出席して、水口可保（株）神戸経営代表取締役による「モラル・サーベイ主旨説明」を聞き、宇野正美（株）リバティ情報研究所長から「世界の動き」について学んだ。

セミナーは、正午から登録受付が始まり、開催式は午後十二時四十五分から、兵田好雄氏（神戸印刷若人会）の司会で進められ、神戸印刷若人会の大園政弘氏の開会宣言、国歌斉唱、名古屋而立会の岡田吉生氏による緑友会綱領唱和のあと、小河秀昭氏（神戸印刷若人会）が出席したグループを紹介した。
あいさつに立った城戸憲次会長は「人手不足の深刻化、労働時間の短縮、人件費

の高騰などの問題が山積みし、今こそわれわれ青年印刷人の真価が問われるのではないかと思う。本日のセミナーは、神戸印刷若人会のメンバーが一年がかりで行なったアンケートをベースにしたデイスカッションをするといふ始めての形式のセミナーである。本音で語り合えるセミナーを目指し、何かを学んで帰っていただきたい」と述べた。

来賓の中畑裕行兵庫県印工組理事長、松島通昭全青協議長のあいさつにつづいて、今回のセミナー実行委員長である羽瀨茂治氏が「昨年末から大きな問題が山積みとなり、われわれ若い印刷人にもふりかかってくるであろう。これら一つ一つを解決していかなければならない時がきたのではないかと思う。今日のセミナーが明日への糧となることを祈念する」と歓迎のあいさつを述べた。

午後一時二十分から始められた第一講では、神戸印刷若人会が一年がかりで全国のメンバーから取ったアンケートの集計、分析を行なった（株）神戸経営の水口可保氏が「モラル・サーベイ主旨説明」について報告つづいてグループデイスカッションが行なわれた。

第二講では、「世界の動き」と題して（株）リバティ情報研究所長の宇野正美氏が中東問題、当面する問題と今後の展開について一時間半にわたって講演した。続いて記念撮影、交流会が行なわれ会員同士が親睦を深めた。

第二五回セミナー

岐阜 平成四・二・八

- 会場 岐阜グランドホテル
- ホスト ぎふ印刷翠陽クラブ
- 参加人数 三一グループ・二二七名
- 参加費 一万六〇〇円
- 参加者 資料なし

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 会長挨拶
- 来賓挨拶
- 実行委員長挨拶
- 講演会 「今、信長に学ぶもの」 津本陽

- グループディスカッション
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

ネットワーク強化へ

第二五回緑友会セミナー

全国三一グループ二〇〇人が参加

全国印刷緑友会（白井秀幸会長）主催、ぎふ印刷翠陽クラブ（安藤博会長）主管による第二五回全国印刷緑友会セミナーが二月八日、岐阜市長谷川河畔の岐阜グランドホテルで全国から三一グループ、二二五人の参加で開かれた。小説家の津本陽氏による「今 信長に学ぶこと」と題した一時間半の記念講演、「ネットワーク作り」をテーマにグループディスカッションに続いて、記念撮影、懇親会が行なわれた。

正午から登録受付が始まり、開講式は午後一時から矢田康博氏（ぎふ翠陽クラブ）の司会で進められ、井上雅弘氏（ぎふ印刷翠陽クラブ）の開会宣言、国歌斉唱、玉川久雄氏（福岡印刷若葉会）による緑友会綱領唱和、物故者への黙祷、出席グルー

プの紹介と続いた。

開会のあいさつに立った岡田忍実行委員長は「印刷業界は依然として受注産業型の企業形態が多く、景気の低迷の影響を少なからず受けているのが現状である。このような経済状況のなかでわれわれは緑友の仲間としてより一層の研鑽と親睦を深め、来る二十一世紀に向けて確かな道標を見つけなければならない」と述べた。

セミナーを主催する全国緑友会の白井会長は「ここ数年来、低金利、金余りをベースに社会は成長し続け、その行き過ぎをストップさせる政策によってバブルは崩壊、企業の経営体質の建て直しは急務となっている。今年こそ、性根を入れてやっていかなければならないと思っている。私どもが今やらなければならぬ努力、革新力を身につけていくということが大切な時期だと考えている」とあいさつ。来賓の大鹿洪司岐阜県印工組理事長があいさつして式典を終了した。

午後二時から記念講演会に入り、緑友会メンバーのほかに印刷関連、一般の人達も聴講した。

午後三時四十五分から十五のテーマをもとに二〇グループに分かれてのディスカッションが行なわれその結果が田中尚幸氏（名古屋而立会）野村昇司氏（ぎふ翠陽クラブ）、松浦正欣氏（佐賀県印刷人若楠会）からそれぞれ報告された。

一五のテーマはつぎのとおり。

「企業理念と企業イメージ」「求人支援プロジェクト」「社員教育ネットワーク」「販促支援プロジェクト」「企画・情報交換ネットワーク」「新需要開拓」「マーケティング

イング情報」「文字データベース」「オフ輪転情報交換ネットワーク」「印刷新技術研究会」「特殊印刷情報交換会」「平台オフセット情報交換ネットワーク」「後加工情報交換会」「ビジネスフォーラム印刷物デザインネットワーク」「印刷周辺ネットワーク」
午後五時半から記念撮影、懇親会行われ、会員同士の親睦を深める歓談が繰り広げられた。

第二六回セミナー

横浜 平成五・二・十三

- 会場 ホリデイ・イン横浜
- ホスト 在京九グループ
- 参加人数 三五グループ・三一六名
- 参加費 一万二〇〇〇円
- 参加者 資料なし

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓挨拶

- 第一講 「緑友会で学んだ経営者の心」 中村守利
- 休憩
- 第二講
 - A 講「人を活かすコンピュータ」 白井慶吾
 - B 講「人を活かす技術」 薊周次
 - C 講「人（女性）を活かす職場」 仲林勝利
- 休憩
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

三〇〇人参加しセミナー
緑友会 若いエネルギーが結集

全国印刷緑友会（白井秀幸会長）は二月十三日、横浜市中区のホテル「ホリデイ・イン横浜」で第二六回全国印刷緑友会横浜・東京セミナーを開催、全国各地から三〇〇人を超える青年印刷人が参加した。第一講では、第一四代全国印刷緑友会会長の中村守利氏（株）プレシーズ代表取締役社長）が「緑友会で学んだ経営者の心」をテーマに、緑友会活動から学んだ真の経営者が持つべき経営マインドについ

て講演、第二講では、「人を活かす」をテーマに三分科会が開かれ、緑友会メンバーの白井慶吾（株） スタッフエス代表取締役社長）、薊周次（株）小森コーポレーション国内営業本部印刷技術部長）、仲林利勝（金山印刷（株）千葉工場長）の三氏が、ハード・ソフトの両面から人材活用について講演した。

講演に先立ち、午後一時から開講式が行われた。川上彰久氏の司会で進められ、西岡義榮氏の開会宣言につづいて、全員で国歌斉唱ならびに綱領唱和。

利根川政明実行委員長が「業界を取り巻く経済環境が深刻化しており、若いエネルギーを捉えて乗り切っていくことが大切である。今回は『人は活かす』イノベーションを中心に、手作りのセミナーを企画したので、ぜひ明日からのイノベーションに役立ててほしい」と歓迎の言葉を述べた。

白井会長が「昨年は、印刷業界に戦後経験したことのない不況が訪れ、都心から地方へと浸透していった。このようななか、われわれには、経営の原理・原則を徹底して実行する力と、この変革を乗り越えていく革新力を持つことが求められている。それにはひとが最大のポイントとなる。今回のセミナーでは、自社を革新するヒントを得ていただけるものと確信している」とあいさつした。

来賓を代表して、平井琢美神奈川県印工組副理事長が「若さと熱意と新しい発想を持って、次の時代を切り拓いてほしい」、日比野信也東印工組東京青年印刷人協議会副議長が「この不況で、人、企業業界が影響を受けているが、半分はわれわれにも原因がある」とそれぞれあいさつをした。

講演は午後一時四十分から始まった。第一講では、中村守利氏が「緑友会で学んだ経営者の心」をテーマに約一時間半講演した。中村氏は、歴代会長との付き合いなどから他人と触れ合い、刺激し合うことよって自分が触発・啓発され、感性を磨かれてきたことを顧みて、「緑友会は感性のトレーニングの場である。二十一世紀は感性の時代と言われているが、現代は感性が理性に圧迫されている。感性は、人間の命を支えているものであり、緑友会は感性の集まりでなければいけない」と訴えた。また、経営者として社員との接し方について、「仕事をさせる時は、理性に向かつて説得するのではなく、感性に向かつて納得させることが大切である。感性が納得すれば、自ずと責任感が生まれてくる」と説いた。

三時半からの第二講は分科会形式で行われた。白井慶吾、薊周次、仲林勝利の三氏が講師となり、三会場に分かれて講演した。白井氏は「人を活かすコンピュータ」、薊氏は「人を活かす技術」、仲林氏は「人（女性）を活かす職場」をテーマに、それぞれの視点から人材活用についての持論を述べた。

講演終了後、記念撮影が行われ、六時から懇親会となった。

懇親会は石川正憲氏の司会で進められ、はじめに白井会長があいさつ、「中小印刷業が生き延びるためにはネットワーク、情報交換が残された方法である。胸襟を開いて大いに話し合い、悩みを一つでも解決し、お互いの友情を深めてほしい」と述べた。

城戸憲次前緑友会会長の発声で乾杯し祝宴となった。五月十五日に開催される第

三六回全国印刷緑友会大分総会を主管する大分印刷若梅会と、八月六、七日に開催される第三六回全国印刷緑友会あおもり大会を主管する青森県印刷青年経営者会議のメンバーが紹介され、それぞれがPRして参加を呼び掛けた。白井会長から次回セミナーを主管する福岡印刷若葉会の玉川久雄幹事長にセミナー旗が伝達された。

第二十七回セミナー

福岡 平成六・二・十九

- 会場 博多都ホテル
- ホスト 福岡印刷若葉会
- 参加人数 三六グループ オブザーバーグループ
計三七グループ・三〇九名
- 参加費 一万二〇〇〇円

●参加者
 札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(四名)、仙台印刷親会(三名)、茨城印刷緑友会(九名)、印刷同友会(七名)、千代田印刷人新世会(八名)、東京写真製版若葉会(二名)、文京緑友会(十一名)、東京プロセス製版青樹会(五名)、東印工組山之手支部山青会(二名)、刷友青山会(一名)、神奈川県(八名)、やまなし印刷若人会(四名)、長野青年印刷人緑友会(四名)、名古屋而立会(十八名)、ぎふ印刷翠陽クラブ(十七名)、金沢青年印刷人クラブ(十一名)、能登半島印刷人クラブ(三名)、大阪青年印刷人クラブ(八名)、神戸印刷若人会(十三名)、愛媛印刷人青年会(二名)、広島青年印刷研究会(五名)、下関青年印刷人緑友会(四名)、北九州Y.P.クラブ(十二名)、久留米印刷緑友会(三名)、大牟田印刷研クラブ(十名)、佐賀県印刷人若楠会(九名)、長崎青年印刷人会(十七名)、佐世保印刷若友会(八名)、熊本印刷緑友会(十一名)、大分印刷若梅会(十六名)、別府印刷組合青年部(四名)、鹿児島県印工組青年部(三名)、沖縄県印刷若潮会(三名)、徳島二二会(二名)、福岡印刷若葉会(五八名)、福岡印刷若葉会O.B.会(四名)

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓紹介

- 第一部 「森重隆のマーケティング概論」 森重 隆氏
- 第二部 「ハイテクノロジーコミュニケーションズ」 稲垣 長利氏
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

印刷緑友会青年印刷人が交流
成果あげた福岡セミナー

第二七回全国印刷緑友会福岡セミナーが二月十九日、福岡市の博多都ホテルで開催された。同セミナーが東京、大阪、名古屋圏以外の地域で実施されるのは今回の福岡が初めて。主管の福岡印刷若葉会はじめ、緑友に加盟する三六団体およびオプザーバー合わせて三〇八人の青年印刷人が参加、会員相互の交流を深めるとともに勉強への意欲を示した。

セミナーの講師は森重隆氏（株）森硝子店社長」と稲垣長利氏（ハイテクノロジー・コミュニケーションズ（株）社長）の二人。森氏の演題は「森重隆のマーケティング概論」であり、稲垣氏は「ハイテクノロジー・コミュニケーションズ」というもの。しかし、両氏とも演題に関係なく自由かつ達な話しぶりで座を沸かせた。とくに森氏は社会人ラクビーの名門・新日鉄釜石のスタープレイヤーであり、同時に監督でもあった立場から、チームプレーにおけるリーダーシップについての体験談を語り、

聴講者の共感を博した。

開講式は午後一時すぎに始まった。福岡印刷若葉会を代表して松尾善和氏が開会宣言し、国歌斉唱、出席者全員による緑友会綱領の唱和と続いた。

グループ紹介の後、間直樹実行委員長があいさつ、「今回は変化すること、しないことをテーマとした」と、今セミナーの意図を述べた。

ひきつづき、利根川政明全国緑友会会長が登壇し、セミナーを主管した福岡印刷若葉会の労苦をたたえた。また今後の活動方針としてネットワークの重要性を示唆した。来賓を代表して久野桂一福岡県印刷工業組合理事長が祝辞を述べ、約十分間の休憩を経て午後一時四十分から講演の開始。

第一講の「森重隆のマーケティング概論」は演題とは異なり、話のほとんどは森氏のラクビー哲学であった。時折ユーモアを交えて語るその内容は、勝負師の生きざまを彷彿とさせ、味わい深いものとなった。

第二講、稲垣氏の「ハイテクノロジー・コミュニケーションズ」は、主としてこれからの経営者として、身につけなければならない姿勢、考え方を説いたもので、会議の進め方であるとか、情報収集の仕方など、数多くの事例が紹介された。

利根川会長のあいさつ、昨年五月、会長に就任以来、加盟各グループを訪問して親睦を深めてきた。十一月にはグループ長の一泊会議を開き、今後の活動方針を検討した。その中の協議として大会、総会、セミナーのあるべき姿も模索した。また、全国のネットワークを充実させることも、これからの懸案事項である。とにかく本日のセミナーは有意義に内容なので、この場限りでなく、自社に持ち帰れるよう真剣に聴いていただきたい。

第二八回セミナー

名古屋 平成七・二・十八

- 会場 愛知芸術文化センター
- ホスト 名古屋而立会
- 参加人数 三三グループ・二六一名
- 参加費 一万二〇〇〇円
- 参加者 資料なし

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓挨拶
- 休憩
- 第一部 「会社は誰のもの」 木野瀬吉孝
- 第二部 「印刷の無くなった日」 岡田吉生
- 記念撮影

●懇親会

【日本印刷新聞記事】

緑友会が名古屋セミナーを開催

今こそ総力を結集

高い次元へのチャレンジ

第二八回全国印刷緑友会名古屋セミナーが二月十八日、名古屋市東区の愛知芸術文化センターで開催された。同セミナーには東京、大阪をはじめ主管の名古屋而立会メンバー、緑友に加盟する三三団体およびオプザーバー合わせて二六二人の青年印刷人が参加、さきの阪神大震災で大きな被害に合った神戸印刷若人会のメンバーも参加。犠牲者に対して参加者による黙祷を捧げたのち、開講式が行われ会員相互の交流を深めるとともに勉強への意欲を示した。

開講式は午後一時半すぎ名古屋而立会、棚橋泰仁氏の司会で始まり、名古屋而立会を代表して水谷隆夫氏が開会宣言、国歌斉唱、出席者全員による緑友会綱領の唱和と続いた。

参加者グループ紹介の後、牛田信治実行委員長があいさつ「新しい年を迎えて、

いきなりの阪神大震災に見舞われ、多くの犠牲者の人々、今なお避難生活を送られている人々に対して心からお見舞いと一日でも早く復興されることを願っている。いまこそ緑友の綱領にもあるように「総力を結集して同志的結合をはかろう」という結束の力を見せるときではないかと思う。本セミナーは『名古屋で語ろう、印刷人の魂（こころ）』のスローガンのもと演劇と講演を通じて、印刷人の心を感じ取ってほしい」と、本セミナーの意図を述べた。

利根川政明全国緑友会会長が登壇し、セミナーを主管した名古屋而立会の苦労をたたえ、また、今後の活動方針として現状の自分に、さらに目標を掲げ、より高い次元へチャレンジすることを示した。

来賓を代表して岩田宗雄愛知県印工組副理事長が祝辞を述べた。休憩を経て講演に入った。

演劇と講演で問題点を探る

今回のセミナーは演劇と而立会会長の木野瀬吉孝氏と全国印刷緑友会常任幹事の岡田吉生氏の講演が行われた。

第一部は「会社は誰のもの」をテーマに、ある印刷会社の社員と上司による社内退職金規約、会社経営者について。

第二部は「印刷の無くなる日」をテーマに、十年後の二〇〇五年を想定、印刷会

社に務める主人と奥さんの会話が始まり、マルチメディアショッピングと折込チラシを取り上げ、大手印刷会社の営業部長の地位を捨て、中小印刷会社に移った人間と印刷をこよなく愛する社長が織りなす人間模様を通じて、現在の印刷業の問題点を浮き彫りにしたものである。

利根川会長あいさつ

一月十七日未明に発生した阪神大震災。新しい年を迎え意気揚揚スタートした途端に大きな震災が神戸を襲い、五千人を起す尊い生命を失い心からご冥福を祈るとともに、避難されている人々に対して心が痛む思いである。

日本国民が国難として、どう乗り切っていくか、また、神戸の皆さんがいち早く力強い復興していただくかが日本国民の課題ではないかと思う。こうしたなか神戸から二人が参加していただきほっとしている。今回の震災に対して全国のメンバーから心配の電話をいただき全国からの義援をお願いした。

神戸だけでなく大阪も見えないところで被害を受けているが、大阪はいいから神戸に支援してほしいとのことで神戸印刷若人会に義援ということ皆様にお願いした。

さて、而立会さんが考えていただきオムニバス形式でわれわれに良いテーマを与えてくれると思う。

われわれが置かれている業界の立場を考えると、全く方向が判らない、電子化、オンデマンド化のなかでわれわれのお客さんはどのようにわれわれを見ているか、

われわれもお客さんの業態を勉強し、お客さんの電子化がどのようなになっているかを無視して、自分自身で勝手に電子化することが良いのかと言った難しい問題があるが、演劇をヒントにして明日からの経営にプラスになるようにしてほしい。

会場で義援金募集

神戸印刷若人会に贈る

全国印刷緑友会・名古屋セミナー会場の受付に今回の阪神大震災で被害を受けて神戸印刷若人会に贈る義援金箱が置かれ、参加者より、心暖まる気持ちが集められた。

セミナー終了後、会場を中日パレスに移して懇親会が行われ、席上、利根川会長より神戸印刷若人会・柴田平寿幹事長に三三グループより総額六四五万円余りが贈られた。それに対して柴田幹事長は「皆さんはテレビで見ていただいていると思うが、あれは間近で見れば、その凄まじさが違ってくる、どのように表現してよいか判らないが、昨日まであった物が形を変えているのを、ライブで見ていると、この先どのようなのかと不安感でいっぱいである。若人会のメンバーも全壊、半壊が九件、自宅の崩壊、半壊が六件、死亡者、ケガ人が一人も出なかったのが幸いだと思っっている。神戸若人会は来年四十周年を迎えることになる。準備をしようとした矢先のできごと、先行きが真暗の状態ではあるが、多額の義援金を皆様からいただき、この緑友の友情に敗けないように来年はわれわれの出来る範囲で実行したい。今日はいっぱい飲んでわれわれを勇気づけてほしい」とお礼の言葉を述べた。

第二九回セミナー

金沢 平成八・二・十七

- 会場 金沢市民芸術ホール
- ホスト 金沢青年印刷人クラブ
- 参加人数 三六グループ・二四三名
- 参加費 一万二〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(五名)、秋田印刷緑友会(五名)、仙台刷親会(二名)、山形印刷研修会(三名)、郡山凸凹倶楽部(二名)、茨城印刷緑友会(七名)、印刷同友会(十一名)、千代田印刷人新世会(七名)、文京緑友会(六名)、東京写真製版若業会(四名)、東京プロセス製版青樹会(六名)、東印工組港支部若竹会(一名)、刷友青山会(一名)、東印工組山の手支部山青会(二名)、神奈川正和会(六名)、やまなし印刷若人会(十二名)、長野青年印刷人緑友会(四名)、名古屋而立会(十九名)、きふ印刷翠陽クラブ(三三名)、能登半島印刷人クラブ(六名)、大阪青年印刷人クラブ(十二名)、神戸印刷若人会(十名)、愛媛印刷人青年会(二名)、広島青年印刷研究会(三名)、北九州YPクラブ(一名)、福岡印刷若業会(二名)、大牟田印刷クラブ(二名)、佐賀県印刷人若楠会(五名)、長崎青年印刷人会(三名)、佐世保印刷若業会(二名)、熊本県印刷緑友会(四名)、大分印刷若梅会(三名)、黎明さつま(二名)、沖縄県印刷若潮会(三名)、金沢青年印刷人クラブ(五四名)、金沢青年印刷人クラブOB会(七名)

- 開会宣言
- 綱領唱和
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓祝辞
- 第一部 「日米出版・印刷事情」
- 第二部 「クイズ!!緑友ゼミナール」

チャールズ・シロー・イノウエ氏

- 閉講
- 記念撮影
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

二五〇人が交流
印刷録友会金沢セミナー

全国印刷録友会（長尾良宣会長）主催の第二九回金沢セミナーが二月十七日、金沢市民芸術ホールで開かれ、全国から集まった三六グループ二五〇人の若手印刷人がセミナーをおして友情と信頼の輪を広げた。

午後一時から開講式が行われ、永野博信実行委員長が「高度情報化が進んで社会の価値感が多様化し、サービス、商品のライフサイクルが非常に短くなっている。企業としては需要と供給の双方向のコミュニケーションが今後ますます必要になる。情報産業の担い手である印刷業はユーザーニーズを的確に捕らえて十分活躍できると確信する」とあいさつした。

ついで、長尾会長が「変化が激しい経営環境であればあるほど、変化をビジネス

チャンスとして捉え、二十一世紀の業界を担う若手印刷人が、今こそ将来を真剣に考え、時代にマッチした自己感性と明確な経営理念の再構築を図っていかねなければならぬ。当会は全国の青年会の連帯機関で、個々の触れ合いの中から喜びや悩みをもつ感性かつ情感あふれた会である。緑友の輪をさらに広げ、二十一世紀を担う青年印刷人としての心意気を大いに語り合う中で、より強い心のネットワークづくりの場となるよう願っている」とあいさつした。

来賓祝辞では、吉田國男石川県印工組理事長が「印刷産業は情報サービス産業として確固たる位置付けをすべく努力を重ね、マルチメディアを核とする高度情報化時代到来に対応していかねばならない。セミナーが将来を見据えた印刷産業の方向づけ、事業の発展繁栄の一助となるよう期待している」と述べた。

セミナーに入り、第一部講演では、タフツ大学ドイツ語・ロシア語・東洋言語文学部助教授兼ハーバード大学ライシャワーセンター研究員のチャールズ・シロー・イノウエ氏が「日米出版・印刷事情」と題して講演し、日本の出版印刷を称えた。第二部「クイズ緑友ゼミナール」では、職場におけるセクハラ、パートタイマーの残業割増、刷版フィルムの所有権、インターネットの規則、労災保険適用の範囲など身近な問題を地元劇団が出题し、金沢青年印刷人クラブの代表者四名がそれぞれ解答し、参加者が正解者を当てるといったクイズ形式で学んだ。そのあと坂井美紀夫弁護士が解説した。

懇親会は、六時半からホテル日航金沢で行われ、西野健治金沢青年印刷人クラブ

会長が「今回で緑友会の三大事事を全て開催したが、各行事を開催するたびにクラブ内が活性化している。金沢セミナーが友情の輪をつくる一助になれば幸いである」と成果を述べた。このあと利根川政明直前会長の音頭で乾杯し開宴。祝宴では、長尾会長から次回大阪セミナーを主催する大阪青年印刷人クラブ・井下精二会長にセミナー旗が手渡された。

第三十回セミナー

神戸復興支援・平成九・二・八

- 会場 神戸市産業振興センター
- ホスト 大阪青年印刷人クラブ
- 参加人数 三三グループ・二五五名
- 参加費 一万五〇〇〇円
- 参加者

札幌青年印刷人の会(二名)、青森県印刷青年経営者会議(四名)、秋田印刷緑友会(二名)、仙台刷親会(三名)、山形印刷研修会(二名)、茨城印刷緑友会(六名)、印刷同友会(五名)、千代田印刷人新世会(八名)、文京緑友会(四名)、東区専(真製版若葉会)二名、東印工組港支部若竹会(二名)、刷友青山会(一名)、東京プロセス協同組合青年部青樹会(三名)、東印工組山の手支部山青会(一名)、神奈川正和会(四名)、やまなし印刷若人会(四名)、長野青年印刷人緑友会(四名)、名古屋而立会(十二名)、ぎふ印刷刷親会(十名)、金沢青年印刷人クラブ(八名)、愛媛印刷刷親会(十名)、広島青年印刷人研究会(四名)、北九州Y.P.クラブ(八名)、福岡印刷若葉会(六名)、佐賀県印刷人若楠会(四名)、長崎青年印刷人会(二名)、熊本県印刷緑友会(六名)、大分印刷刷親会(六名)、別府印刷組合青年部(一名)、黎明さつま(三名)、沖繩県印刷若潮会(二名)、大阪青年印刷人クラブ(五十七名)、神戸印刷刷親会(三名)、神戸印刷若人会OB(十一名)

- 開会宣言
- 国歌斉唱
- 綱領唱和
- グループ紹介
- 実行委員長挨拶
- 会長挨拶
- 来賓挨拶

- 目録贈呈
- 休憩
- 第一講 「震災復興とマルチメディアの活用―K I M E C 構想の展開―」
木村義秀氏
- 第二講 「印刷とインターネットがもつと仲良くなるために」 田中和宏氏
- 懇親会

【日本印刷新聞記事】

全国緑友会

業界の将来語り合う

神戸復興支援セミナー開催

全国印刷緑友会（長尾良宣会長）は、大阪青年印刷人クラブ・神戸印刷若人会の運営により「第三十回神戸復興支援セミナー」を、二月八日、神戸産業復興センターで開いた。全国から三三グループ二五五人の若手印刷人が集まり、今、とらえよう二十一世紀の姿マルチメディア未来都市神戸“をテーマに、セミナーを通して友情と信頼の輪を広げた。

午後十二時四十分から開講式が行われ、大阪青年印刷人クラブの森川耕司氏が開会を宣言。国家斉唱、緑友会綱領の唱和、参加グループ紹介が行われたあと、松口正実行委員長が「印刷業界は情報産業の担い手としてマルチメディアの新展開を創

造していかねければならない。今回のセミナーは、震災を機にマルチメディア都市に変貌しようとしている神戸において体験していただき、直面する諸課題の解決への糸口になればと考えている」とあいさつ。

引き続き、長尾会長が「印刷業界を取り巻く環境はデジタル化への技術革新の波が早いスピードで運んでいる。これらにどのように対応すればよいかむずかしい選択を迫られている。変化の激しい時であればあるほど、明日の業界を担う青年印刷人として、エネルギーシユな創造力をもって明日の業界を語り合い、時代にマッチした自己感性の確立と明確な経営ビジョンの再構築を図るための場にしてほしい」とあいさつした。来賓を代表して井戸幹雄大印工組理事長が祝辞を述べた。

セミナーでは、阪神大震災で両親または片親を失った十八歳以下の震災遺児のために、剰余金を財団法人神戸新聞厚生事業団の池口善英理事長を通じて阪神淡路大震災被災高校生支援「くすのき基金」に寄付、長尾会長から池口理事長に目録が贈られた。

休憩のあとセミナーに入り、第一部講演では、神戸市震災復興本部総括局・復興計画部・マルチメディア推進室長の木村義秀氏が「震災復興とマルチメディアの活用―K I M E C 構想の展開」と題して講演。セミナー会場と神戸国際交流会館内にある神戸リサーチセンターを結んで、神戸大学大学院教授の田中克己氏をパネラーに迎えてテレビ会議が行われた。

第二部は、アドビシステムズ・P S G マーケティングディレクターの田中和宏氏が「印刷とインターネットがもつと仲良くなるために」と題して講演。

懇親会は、午後六時からハーバーランドニューオータニで行われた。井下精二大

阪青年印刷人クラブ会長、小河秀昭神戸印刷若人会幹事長の歓迎のことば、長尾会長、来賓の岡宏伸兵庫県印工組理事長、利根川英二日本青年会議所印刷部会部会長の祝辞があり、利根川政明前会長の音頭で乾杯し開宴。長尾会長から次回セミナーを主催する仙台刷親会代表にセミナー旗が手渡された。

第三二回セミナー

仙台 平成十・一・三十一

- 会場 宮城県秋保温泉「ホテル佐勘」
- ホスト 仙台刷親会
- 参加人数 三二グループ・二〇二名
- 参加費 二万六〇〇〇円(宿泊込み)
- 参加者

沖縄県印刷若潮会(三名)、黎明さつま(三名)、大分印刷若梅会(三名)、熊本県印刷緑友会(三名)、長崎青年印刷人会(二名)、佐賀県印刷人若楠会(七名)、福岡印刷若葉会(五名)、北九州Y.P.クラブ(二名)、広島青年印刷研究会(五名)、神戸印刷若人会(五名)、大阪青年印刷人クラブ(五名)、金沢青年印刷人クラブ(二名)、きふ印刷翠陽クラブ(四名)、名古屋而立会(十名)、長野青年印刷人緑友会(二名)、やまなし印刷若人会(四名)、神奈川正和会(四名)、東印工組山之手支部山青会(一名)、刷友青山会(一名)、東京都印刷工業組合港支部若竹会(二名)、東京プロセス工業協同組合青年部青樹会(三名)、東京写真製版若葉会(二名)、文京緑友会(五名)、千代田印刷人新世会(三名)、印刷同友会(四名)、茨城印刷緑友会(八名)、福島印刷緑友会(二名)、山形印刷研修会(八名)、秋田印刷緑友会(三名)、青森県印刷青年経営者会議(十二名)、札幌青年印刷人の会(四名)、仙台刷親会(六九名)、宮城県印刷工業組合青年会(一名)、日本グラフィックサービス工業会宮城県支部青年部青風会(三名)、オブザーバー(三名)

グループディスカッションテーマ

- 一、全員参加の経営
- 二、インターネットと印刷業
- 三、DTP化の実例
- 四、マルチメディア印刷業としてのフルデジタル化について
- 五、コンピュータによる経営情報管理システム
- 六、作業工程の管理法

- 七、企業理念の構築
- 八、労働環境の現状
- 九、リサイクル自然にやさしい印刷
- 十、印刷営業に伴うトラブルとその対策
- 十一、印刷技術に伴うトラブルとその対策
- 十二、オンデマンドいろいろ
- 十三、新製品アイディア紹介
- 十四、グループ長による各地の活動と提案
- 十五、変わろうよ緑友会

【日本印刷新聞記事】

第三一回仙台セミナー

二一世紀に向け議論展開
全国印刷緑友会
仙台セミナー開く

「語りつくそうー緑友の和」をメインテーマに、全国印刷緑友会（松浦正欣会長）の第三一回仙台セミナーが一月三十一日、宮城県仙台市で開かれた。技術の変革や業界構造の変化が進行する中、相互交流や情報交換にとどまらず、二一世紀に

向けた問題や課題について活発な議論が展開された。

秋保温泉のホテル佐藤で開催された仙台セミナーには、全国の三二グループから合わせて二〇〇人が参加、「インターネットと印刷業」「企業理念の構築」「リサイクル 自然にやさしい印刷」など、技術、経営、営業にまたがる一五テーマでテーブルディスカッションを行った。

このうち、グループ長による「各地の活動と提案」では定年制、会員の増強、活性化、役員の任期などの問題について意見交換。なかでも、ピンクチラシの回収運動が会員の意識改革、グループの活性化につながった仙台刷新会の事例が注目を集めた。

セミナーに先立つ開講式で、あいさつに立った松浦会長は「技術変革の落ち着く先がほぼ見えてきた。セミナーで徹底的に話し合い、生の情報を持ち帰ってそれぞれの企業を成長させてほしい」と述べるとともに、会の基本方針である「人と人のつながり」を、今後も重視していく考えを示した。

また、中村等実行委員長（仙台刷新会会長）は「社会の価値観が変化しているように、印刷業界も大きな変化に直面している。こういう時こそチャンスであり、交流を深めて二十一世紀への展望を開こう」と呼び掛けた。

なお、開校式並びにセミナー後、懇親会が開かれ、来賓として高橋孝昌仙台中央警察署長、宮城県印工組の江馬成夫理事長、佐々木勝副理事長、小泉智夫組織総務委員長、千葉了正教育委員長らが出席、開講式で江馬理事長、懇親会で高橋署長があいさつを行った。高橋署長は仙台刷新会の環境浄化運動を高く評価するとともに、「若い人たちの社会貢献活動」の広がりを訴えた。

五月に青森で総会

全国印刷緑友会は五月二十三日、青森県印刷青年経営者会議（坂本勝克）の主管により第四十一回総会を開く。会場は青森県三沢市の古牧温泉洪沢公園「古牧グラウンドホテル」。

宿泊料を含む登録料は二万三〇〇〇円（同伴者は二万円）。

緑友の仲間

札幌青年印刷人の会・青森県印刷青年経営者会議・秋田印刷緑友会・仙台刷親会・山形印刷研修会・福島印刷彩友会・郡山凸凹倶楽部・新潟県印刷新世会・茨城印刷緑友会・印刷同友会・千代田印刷人新世会・文京緑友会・東京写真製版若葉会・東京プロセス工業協同組合青年部青樹会・東京印刷工業組合港支部若竹会・神奈川正和会・やまなし印刷若人会・長野青年印刷人緑友会・名古屋而立会・ぎふ印刷翠陽クラブ・金沢青年印刷人クラブ・京都印刷人月曜会・大阪青年印刷人クラブ・神戸印刷若人会・徳島一二会・愛媛印刷人青年会・広島青年印刷研究会・北九州Y Pクラブ・福岡印刷若葉会・佐賀県印刷人若楠会・長崎青年印刷人会・佐世保若汐会・熊本県印刷緑友会・大分印刷若梅会・別府印刷組合青年部・鹿児島県印刷工業組合青年部黎明さま・沖縄県印刷若潮会

尚、四十周年時緑友会員でありましたが、会の解散等の事情で出稿いただけなかったグループ
刷友青山会・東印工組山之手支部山青会・下関青年印刷緑友会・大牟田刷研クラブ

札幌青年印刷人の会

設立 昭・五一
初代会長 竹内 一博
現グループ長 伊藤 文二
会員数 名

昭和五一年夏のことだったと記憶しております。札幌駅近くのホテルの一室に、約十五名の若き印刷人が集まりました。呼び掛け人は竹内一博氏を中心とした数名。この日が「札幌青年印刷人の会」の誕生でした。

我が印刷人の会は、”あんなモノ、又そのうちに霧散露消するよ” ススキノぼつかり行つて何を勉強しているんだ”等という陰口の数々は馬事東風・熊耳北風、結構チームワーク良く発会の精神にのつとり、研鑽に親睦に毎月一回の例会をコツコツと重ねて行きました。

そんな中、全国印刷緑友会から当然の事ながらの誘惑があり、五三年の沖繩大会にオプザーバー二名を派遣し、翌年の岐阜での総会で正式入会、更に三年後には僅か二十数名で第二五回の大会まで引き受けてしまいました。当時の印刷界は、今にも増して(?) 勉強熱心であり、大会でもハ研鑽とデイスカッションVが大きな柱となっており、このテーマ探しにはまだ発足間もなく歴史の浅い会にとつては大きな負担となりました。

当時の印刷界は、構造改善事業の成果が、活版から写植へと大転換を遂げ、スキヤナーの普及により印



刷物のカラー化が大いに進んだ時代でした。そんな中、かの月刊PLAYBOYの愛読者であった一会員から、衝撃的な特集記事のコピーが例会時に配られました。(当時はカラーコピーのまだない時代ですから、等身大ピンナップだったということはゼツタイありません)内容は「コンピュータのダウンサイジング化により生活環境が一新し、オフィスから紙が無くなり、在宅業務が日常化し、電子会議システムにより居ながらにして全国規模の会議が実現、恋人の贈り物もオンラインショッピングにより全世界の有名店から購入が可能になる」という近未来小説が、当時日本の市場に回り始めたワープロやマイコン等を駆使して展開されていました。

第二五回全国印刷緑友会札幌大会のメインテーマ「我々印刷業界にとつて、コンピュータは敵か見方か」は、IT革命が叫ばれている昨今、時代の先取りともいえるテーマを掲げて大会を設定できたことは、あのインターネット時代を先取りした山梨大会に匹敵する画期的な大会運営であったと自負しております。

その後、昭和六二年から二年間、当会会長であった竹内一博氏が緑友会友会の会長に就任、平成三年には第三四回の総会、そして二十世紀最後の総会も主管させていただきました。発足当初は団塊の世代が半数近くを占め、年齢分布図はかなり下半身デブの状況でしたが、いつしか肥満体を経て頭デッカチとなり、二三年生まれの私としては数の多さとは裏腹に肩身の狭い思いをしておりましたが、現在ではチャーターメンバーは私と三二年生まれの会員の二人だけとなり、その間、有力メンバーを拡充強化し、真の青年印刷人として生まれ変わろうとしていることは、この度の総会に参加された方々にはお分かりの事実だと思えます。

これからも発会の精神を忘れずに「研鑽と親睦」の実りある交流を重ねていくならば、緑友にも北海道の印刷界にも貢献をし続け、札幌青年印刷人の会の名は、記憶・実績・エピソードを刻んでいくものと思われず。

(伊藤文二)

青森県印刷交流会議（あおもり A P E C）

設立 昭・五五・九・二十
 初代会長 立花 建男
 現グループ長 中谷 博
 会員数 三二名

当会は一九八〇年九月に設立されました。当時、業界は高度経済成長の中で業績も伸びてはいましたが、反面価格競争も厳しくなっていました。各社の営業マンは、後継者と目されているいわゆる二世が活躍しており、初代会長となった立花氏が定期的に若い者同志が集い、相互の連携と将来の業界を語り合う会を作ろうと県内に呼びかけ十七名の会員による「青森県印刷青年経営者会議」（印青経）が発足したのでした。

当初は親睦を図る事が第一と、飲みニケーションの例会でしたが、県内でも津軽と南部とは地理的にも遠く、青森市を中心としたメンバーが集まる事が多くなり、青森市だけのメンバーによる「二世会」が誕生しました。数年間「二世会」を中心とした「印青経」との合同活動が続いていましたが、刷友青山会の逸見氏と立花氏との交友から「印青経」として緑友会に加入する事となり「二世会」は「印青経」に合併する事となりました。



緑友会第三十回記念大会にメンバー数名が参加した事が全国とのつながりを広げる事となり、その

後当会がグループ指名の常任幹事となり、毎年の行事に積極的に参加する様になりました。以後、第三十回和田湖総会、第三十六回ねぶた大会、第四一回三沢総会を主管致しております。特に第三十六回の大会は、利根川氏が第二代会長に就任した年であり、全国から四四〇名の緑友の仲間が集い、ねぶた祭りの興奮の中で熱く燃えた八月六日の夜は今も語られ忘れない思い出となっています。

緑友会の行事を主管する毎に、会員も増え会員資格も印刷業界だけでなく、企画・デザインを含めた関連メーカーも入会しており、会員同志の活発な情報交換が行われています。当会は、今年創立三十周年を迎えます。新世紀を迎えるにあたり、今後従来の印刷のワクを越えたビジネスが多様化すると思われる事から会の名称を変更し、異業種との交流も含めてさらなるネットワークの構築を目指して、新生「あおもりAPEC」として活動を展開していきます。

秋田印刷緑友会

設立 平・六・十二・八
 初代会長 塚田 均
 現グループ長 塚田 均
 会員数 十四名

秋田印刷緑友会設立前の秋田県での青年印刷人グループ活動の状況と申しますと、秋田県印刷工業組合の青年部組織として、「秋田県印刷経営青年部会」が組合員の後継者育成のため活動を進めており、全国印刷緑友会発足当時参加母体となっていた「秋田市印刷懇話会」は、秋田市内に限られた営業マンの研修グループとして活動しておりました。そして、日本グラフィック工業会秋田県支部の青年グループ「点晴会」と「秋田県印刷経営青年部会」が交流を始めた頃でした。

このような状況の中、秋田県印刷経営青年部会に参加する有志の中から、「後継者という条件で青年部会に参加できない人がいる」「印刷工業組合とグラフィック工業会と組織は別々でも事業内容は一緒ではないか」「関連業界との情報交換の場がほしい」といった声が上がりました。これらの条件を現存する組織で取り込んでしまうことは非常に困難な状況でしたので、既存の概念に囚われない活動の出来る新しい組織を創ろうということになりました。



何度か設立の話し合いが持たれる中で、全国緑友会の名前と活動内容が上がりました。かつては秋田から参加をしていた話や、個人として参加した経験のある方の話などを参考に、新しい組織は全国緑友会に参加することを基本にして意見が一致しました。

この年の七月、当時会長を務められていた利根川政明社長をお訪ねし、設立のための経緯と全国印刷緑友会への参加を申し入れたところ、ご快諾をいただき「すぐにでも秋田に行く」とのことでした。早速にも会則案を決め、会員の勧誘等の準備を進めた結果、その年の十二月八日十四名の参加者のもと、利根川会長ほか数名の常任幹事の皆様にもご臨席いただき、秋田印刷緑友会を発足することができ現在に至っております。会員も若干の異動はあったものの十四名を維持し、今後の拡大と現会員の活性化によりアクティブな活動を目指しております。

誕生してまだ日が浅い会ですが、会員の交流並びに情報交換を第一に、全国印刷緑友会の事業への参加を中心に、東北青年印刷人連絡協議会への参加、PAGE・IGAS等機材展への参加、新年会・忘年会等の開催等を主な事業として活動を続けております。総会は四月、年会費三万円、予算規模は四十万円。会員資格についての制限は会の趣旨に賛同する者であればこれといって有りません。

(塚田 均)

仙台刷親会

設立 昭・三十・二・十九
 初代会長 皆川 忠次郎
 現グループ長 大泉 和俊
 会員数 五十名

昭和二十九年、M印刷のK氏がバイクで営業中、交通事故で亡くなった。殺伐たる業界の雰囲気の中で過酷な競争にさらされ、失敗のツケが個人にかぶさってくる時代。アーサーミラーの戯曲「セールスマンの死」さながらの出来事が仙台刷親会創立となる。

当会の発足とその活動は、全国に影響を与え東京で市村道徳氏（緑友初代幹事長）がまとめていた印刷同友会と呼応して緑友を生むキッカケ、さらに「東北青年印刷人連絡協議会」（東青連）設立へと広がっていった。「東青連の設立総会（秋田市）には夜明けに仙台を出発し夕方遅く着いた。悪路を重ねての長旅以上に金集めに苦労したからな、それだけ仲間がほしかったのさ」「緑友も第四回（S二六）と第十回（S四二）の大会を仙台でやったが、第十回の前には刷親会の会旗と会歌を制定した。図案も作詞・作曲も会員から募集し、今では当たり前だが「印刷社会の理想と実現」をテーマとした仙台大会の記録を一ヶ月で全国に配布し、緑友仲間を驚かしたこともなつかしい」当時を回想する先輩の言葉から親睦を基に置きながらも業界刷親に燃える



初期の活動の一端を知ることが出来る。

仙台刷親会は設立当初から「営業マン」の会である点が緑友のほかのグループとは違う。とは言っても昭和三十年代、四十年代までは会社規模の大小を問わず経営者も営業の一員となり、刷親会員であり続け、業界行事を一手に引き受ける業界にとって、必要不可欠の存在であった。会の活動が変わってきたのは激動の、七〇年代と言われた昭和四五年ごろからで、コールドタイプ移行期にあたり、工業組合が組織化され組合が音頭を取って勉強会をやるようになり、会運営の流れが少し変わり、余暇の活用、会の若返りが盛んに言われた時代でもあった。

昭和五十年七月の創立二十周年、五五年の第二十三回緑友仙台大会のころまでは、会創立当初のマグマ（熱気）に触れた会員が健在で、会の活動も業界で認められていたものの、各社で経営陣と営業が別れてくるようになってからは会も会計的に困ることが度々あり、さらには工組の「営業士制度」や「青年部」の発足で会員構成の変化、予算規模の縮小など試練を受け「刷親会独自の立場と活動」を模索しつつ営業マンの質的向上に努めてきた。

仙台刷親会は緑友に先立つこと三年、四十有余年の歴史を刻んでいる。一つのゆるやかな会が創立当初の情熱を持ち続けることは、いかに崇高な目的を持ったとしても難しい。今、この種の組織では事業主の理解が不可欠ではあるが、それ以上に、会員個人個人の意気が今後の会の方向や未来を決定する。若き会員諸氏の奮起を期し、仙台刷親会の歩みとする。

（川村 記）

山形印刷研修会

設立 昭・三〇・二・十九
 初代代表者 駒林 久雄
 現代表者 西村 正弘
 会員数 三三名

我が山形印刷研修会誕生の目的は、昭和二九年当時、デフレの波深刻の度を加え、我々印刷業界を窮地に陥れ、混乱を招き、道義、協調性を失い、受注競争により利益を失いました。この現状から脱しようとして四十才未満の経営者の子弟有志三十余名が結束し、会員相互の研鑽、親睦を図り、印刷および印刷関連業の向上発展を目的として誕生致しました。

会員の資格は、個人企業にあつてはその後継者であること、法人にあつてはその役員であることが条件であり、いわゆる二世会そのものであります。発会当初の活動は、年数回の例会、毎年二泊三日の旅（会員に限らずその従業員、家族など希望者はOK）、外には二十数チームの職場対抗の野球大会を毎年開催するなど、活発な活動を続けておりました。

対工業組合サイドに関しましては、研修会が直接行動に出ることは避け、他工業組合との関係には意見を具申し、親組合に執行して戴き、研修会はこれに協力して業界の発展に寄与する方針をとっております。

また、山形中小企業青年連絡協議会にも研修会は会員登録し、年数回の各種大会、レクレーション大会にも必ず数名出席して、他業種との親睦を図っております。

東北地区の活動としましては、毎年一回、東北六県で当番制により東北青年印刷人連絡協議会を開

催し、東北の発展のため努力しています。

昨年平成十三年は、山形にて東青連山形大会を開催し、他県の会員の御協力のもと、七十数名の出席者によりまして、セミナー、懇親会、ゴルフなど大成功のもと終了しました。この東青連大会も四三回目となりました。

会計年度は九月に始まり、翌年八月までとなっております。役員は七名、会長、副会長（二名）、会計、理事（三名）をもって構成し、任期は二年、会計年度にあわせて改選しています。会費は月額五千円、例会毎に三千円の会費を頂戴し、他に毎月旅行の積立をしております。

そして、年度始めに理事会を開き、一年間のスケジュールを決めて、それに基づき活動を行っております。

最後になりますが、我が山形印刷研修会は業界の発展のため、これからもコミュニケーションを図り語り合い、勉強し合い、一步一步前進、努力する所存であります。

（西村 正弘）

福島印刷彩友会

設立 昭・三十
 初代会長 今泉 壮市
 現グループ長 井上 寛
 会員数 五十名

終戦後十年余、印刷業界も戦後の混乱期を終え、経済の急速な成長にささえられて大きく発展しましたが、そこには大きなヒズミも生じ、激しい過当競争にあけくれるのがあたりまえの昭和三十年に、初代会長の今泉壮市、小浜義弘両氏が中心に福島市内のセールスマンが一致団結し正しい業界のあり方を目指して結成されたのが、福島印刷彩友会です。

参加対象は、印刷業に携わる一線のセールスマンが当り、現在のように関連業界にまで門戸を開放したのは、昭和四二、三年頃と記憶いたします。当初は、年一回の総会時に、日頃セールス活動の中に生じた互いの反目などが爆発して相当のものだったと、昔話がなされる程に過当競争の度合が異なっていたようです。このような状態なので、何かと機会をとらえては、互いに心の融けあう方法と、集会の機会をつくったようです。

会の三本柱に、急速に発達した技術革新の勉強会、研修会、親睦による互いの心のかよいあいという趣旨のもと、会長を中心に先進地の見学会、総会時の研修会に付加価値の勉強会、講演会等発足当時には、意欲的に事業に取り組んでいたようです。その後、会の趣旨が徐々に全会員に理解され、現在はゴルフ大会、ソフトボール大会、ボーリング大会とその幅を拡げて、現在は親睦を中心に活動し、融和の上に大きな力を出してきております。

緑友会との正式な交流は昭和四十年、神奈川大会から始まりました。その後、昭和五十年四月に全国緑友会第十八回総会を引受け緑友との交流を更に一段と深くいたし、現在に至っております。

発足当時の会員は、ほとんど県工業組合の役員に就任し、メンバーもほとんどの人が変わり、四五年の移り変わりを感じさせます。事業年度は二月一日より翌一月三十一日とし、会の運営費は年会費一社一二、〇〇〇円の他、工業組合よりの補助金を当て、研修会毎に最小限の実費を徴収してその運営に当てています。事業計画は総会時にその概要を決定し、毎月の理事会でその細目をきめる方法をとっています。現在福島市内関連業を含め二八社、約五十名のメンバーで楽しく運営しております。

緑友とのつながりと共に東北には、東北青年印刷人連絡協議会という東北六県の各県にあるクラブが一堂に会する横のつながりがあり、平成十二年秋には東青連四二回大会を主管する予定になっています。緑友と全国的に情報交換、親睦を図ると共にごく身近な東北の仲間と顔を合わせることもできるのも、会の存在と共に会の設立趣旨を大きく前進させるものと思えます。

以上、会の設立当時の背景と共に発展過程、さらに会の運営の概略を略記いたしました。

(井上 寛)

郡山凸凹倶楽部

設立 昭・二九・十
 初代会長 安藤 真男
 現グループ長 坂本 敬亮
 会員数 八名

第一回印刷文化典が東京晴海で開催され、福島県印刷工業組合主催のバス一台で参加、機材展、王子製紙、大日本インキ、大日本印刷等を見学した参加組合員は、日進月歩の目覚ましさに驚いて帰って来た。

その後、郡山印刷業界二世会が集って、印刷の勉強会を重ねて「郡山凸凹印刷クラブ」を結成して会員相互の親睦と先進地見学の研修旅行会がスタートした。

一、名称 郡山凸凹印刷クラブ

凸版（活版）と凹版（平版・関連業者）

二、初代会長 不二印刷（株）安藤真男（故人、平成十年五月）

三、会員数 二〇名

四、幹事・会計 毎年交替

五、旅行積金 月額一、〇〇〇円（現在は、月額一万円）

六、毎月一回、研修例会を開催

七、昭和三十年第一回 会津東山温泉一泊

平成十一年第四五回 道後温泉、しまなみ海道、安芸の宮島、広島

終戦後の印刷業界は、紙、材料不足等によってお客様に満足して頂けなかった。当時は活版印刷が主で、写植が導入されてからオフセット印刷が主流になって、技術的な面と人材養成に頭を痛めていた頃であった。

郡山地区の印刷業界は、職人から開業した方が多く、三ちゃん企業（父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん）であって、毎月の休みも一日と十五日の二日だけで体で仕事を覚えたものである。

そんな環境で、二世達が集い、うつぶん晴らしの場でもあって知恵を出し合って、また汗を流しながら毎日毎日残業が続いたものです。

昭和三九年（第十回 研修会） 東海道新幹線が開通した年に、兵庫県印刷会館を訪問し、神戸の印刷会社を見学して感じたことは、関西は進んでいるなあの一言でした。

平成の時代になってから、郡山凸凹クラブは、四十歳以下若デコ、四十歳以上中デコ、六十歳以上大デコの三つに分割して、それぞれに活動が続いている。

・若デコは 三世の人が中心 研修と親睦 ・中デコは 組合活動が中心 ドルツパ見学を企画
 ・大デコは 凸凹講中として、全国の神社、仏閣を参拝

世代交代の流れと共に、印刷の技術革命が進む中で、私達の生き残りを考える時、わが凸凹クラブ活動が中心となって支えとなることを願っている。

（坂本正敏）

新潟県印刷新世会

設立 昭和三四・一・一
 初代会長 青木 一夫
 現グループ長 清水 孝祐
 会員数 八名

戦後の経済がほぼ完全に回復し、産業活動が一段と加速を加えようとしていた昭和三四年、青木印刷の青木一夫社長の取り計らいによって新潟印刷新世会が誕生いたしました。

初代会長の青木氏は当時商工会議所の理事であり、性情は明るく非常に社交的な方と聞いておりますので、当時三五才前後の若手印刷人は喜んで新世会に参加したものと思われず。また、その頃は相当な年配であり、終戦時には陸軍大佐ということも手伝ってその指導力、指揮権は絶大なものであったと伝えられております。いざれにしても優れた先輩諸氏が戦後の混乱を生き抜き、血の滲むような思いで今日の経営基盤を築き上げられ、次の時代の印刷界の醸成に力を注がれたことはいまでもありません。その後にはかなりの空白の年月が経過しました。昭和四三年、行動力豊かな本間吉平氏の活動によって、この会が再生されました。本間氏はその二、三年後には県工組の専務理事に就任されたため、一時期ではありましたが会の会長を兼ねるところとなり、会員は県工組の行事によく参加するようになりました。その頃よ



り県工組の下部組織としての色彩を濃くしていきました。そうしたなかで、緑友会新潟総会を迎えたのであります。

今、会としては、難しい時代を生き抜くための勉強会を中心とし、活動を続けております。会費は前期一万円・後期一万円の年間二万円となっております。具体的には年三、四回の研修会、年一回の先進工場見学会、年二回のゴルフコンペ、新年会、納涼会、忘年会などで知識を深め、情報交換をし、懇親を深めております。それにより、各企業に少しでも自社の方向性等を見つけて頂きたいと思っております。

会の目的は県工組のそれとよく似ています。しかし大きな相違点は県工組は現実主義であり、我々は決して理想を捨て去ることは無いという点です。いつの時代でも青年には新しい発想が求められています。同業者だけでは無く、他の業種のグループや関連業の方々との接触を通じて、刺激を受け、新たな発想を生んでいく事が、会員一人一人の自我を喚起し、それぞれの方向性を確立していくことと思っております。

(清水孝祐)

茨城印刷緑友会

設立 昭和三五・六・一
 初代会長 墳本 喜久蔵
 現グループ長 江幡 修
 会員数 三二名

茨城印刷緑友会の創立当時については、全国印刷緑友会の二十周年記念誌『道程』の中に詳しく書かれていますので、そこから抜粋させていただきますが、一部時代の違いにより表記を変えさせていただきます。

昭和三四年七月十六日、信州戸隠において、全国幹事会がありました。現日本印刷新聞社社長の栗原さんよりは非この会に出席して、全国の緑友会に仲間入りをせよとすすめられて、オブザーバーとして小倉 泰氏（第三代幹事長・故人）が出席いたしました。

この年は、丁度茨城印刷工業組合が第一回印刷文化典を七月に開催し、二世及び中堅層が活発な活動をしておりましたので、とんとん拍子にまとまりをみせ「茨城青年印刷人緑友会」の結成を見、墳本喜久蔵氏（元大洋印刷（株）・故人）を初代幹事長にえらび、会員三十名をもって発足しました。

本会の目的は、『本会は印刷人の力を結集し、茨城県印刷工業組合と密接な連絡を保ち、印刷経済、文化に関する実践的研究活動をなし、会員相互の緊密なる連携、親睦を促進し、相互の人格向上と業界の発展を図るものとする』であり、その目的を達成するために、

- 一、会員の個人的修練および相互の親睦をはかる行動
- 一、印刷技術および経営改善発達に関する研究実施

- 一、情報の交換
- 一、各地グループ間の交流
- 一、機関紙の発行

一、その他本会の目的を達成するために必要な事項を事業として行うこととしています。

全国への大きな参加は三回ありました。

昭和五一年（一九七六年）九月十八、十九日の二日間「第十九回全国印刷緑友会茨城大会」を（緑、調和、魁）のテーマで主管し、十九日早朝の大洗海岸での地引き綱は大変好評でした。

昭和六十年（一九八五年）五月二五日「第二八回全国印刷緑友会茨城総会」を主管、翌日のオプショナルツアーにつくば科学万博見学がありました。

平成四年（一九九二年）九月二六日「第三五回全国印刷緑友会茨城大会」を「自慢はぼくらのハートです」のテーマで主管しました。

又、第十八代全国会長として城戸憲次君を輩出した事も特筆されると思います。

現在、当会の会費は年間六万円、入会金二万円、毎年会長（グループ長）の元、楽しく為になる例会を行っています。又、地元県組合（茨印工）、茨印工組水戸支部とも協力関係にあり、緑友会長は茨印工の理事として活躍しております。

平成十一年七月十日に四十周年記念式典を催し一層の団結を強くし、全国印刷緑友会の発展のためにも努力を惜しまぬつもりです。

（江幡 修）

印刷同友会

設立 昭・十五・二・十七
 初代会長 市村 道徳
 現グループ 福田真太郎
 会員数 名

世界情勢が混沌としている昭和十五年、二六歳の市村道徳氏を中心とした同じ志を持つ神田の印刷業者の二世達六名によって産声を上げた。これが現在の印刷同友会の前身である。当初の活動は、講座の開講、見学会、親睦会を毎月開催し、また機関誌「印刷人」を毎月発行する等の精力的なものであったが、第二次世界大戦そして敗戦と混乱の中、昭和二一、二二年は休会を余儀なくされる二カ年であった。

インフレ下の世相を反映して「労働組合と経営者の問題と、同友会の今後とるべき方針」等が話し合われ、輝かしい見通しと志を抱いた同志が再結集し、「復興経済労働問題講座」が開設された。やがて、昭和三三年全国各地から集まった意欲に燃える若い印刷人百余名によって、「全国青年印刷人緑友会」が発足し、その初代幹事長に印刷同友会発足の育ての親市村道徳氏を選出された。これが現在の「全国印刷緑友会」の始まりである。

しかし社会変化の中で、昭和四十年代に入ると会員数の増加に伴って、会員間の目的意識が多様化し、スリーピング会員も増え、会員が何を考えて何を求めているのか、同友会はどのような会でありたいのか等の疑問が次第に深まり、同友会解散の声が出るようになった。昭和四六年秋、ついに幹事会で創立時の精神的結合体として会を存続することが極めて困難との結論に至ったが、会員の中の多

くは、同友会のあり方に希望と期待を寄せていたため、再建準備委員会が設立された。

昭和四八年末石油危機の勃発に端を発し物価高、高賃金を招き、企業を取り巻く環境の激変により、企業経営にも省力化、合理化が叫ばれるようになった。同友会においても労働力問題が定義され、若年層を雇用確保するための諸問題、例えば、「週休二日制の問題、労働時間の短縮」等が議論され、混乱の時代に生き残る経営者セミナー「業績向上と経費節減」等が好評を博した。

昭和五九年 印刷業を愛し、同友会を愛し、ひたすら印刷業界の発展に情熱を傾け貢献された、創立者市村道徳氏が他界され、同友会の一時代が去った。

やがて高度経済成長、バブルの崩壊、そしてニューメディア時代へと度重なる激動の中でも同友会の活動は海に注ぐ川の如くただ静かに、その流れを止めることもなく現在も継続している。二一世紀を迎えて更なるIT革命の波による試練に立たされている今こそ、印刷人としてまた高度情報化社会の担い手として同友会本来の精神を思い起こして、より一層勉学に励み緑友会の更なる飛躍の為にも、その一員として印刷業界の変革のスピードに遅れることなく力強く前進していきたいと考えている。

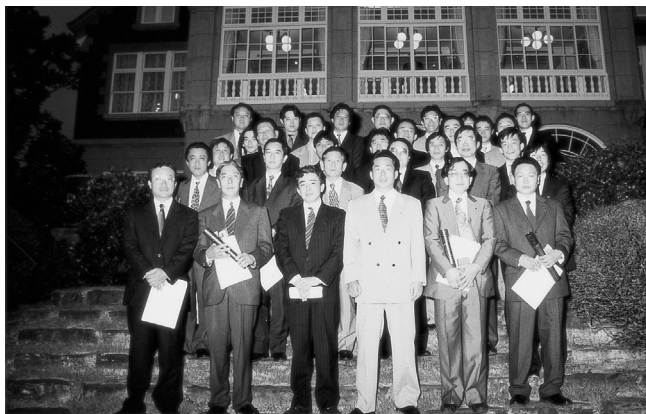
(福田真太郎)

千代田印刷人新世会

設立 昭和四三・十二・二四
 初代幹事長 八十島 敏行
 現幹事長 戸根木 孝
 会員数 四二名

千代田印刷人新世会の設立経緯は、昭和四三年四月にさかのぼります。東京都印刷工業組合の青年会議に千代田支部の任命を受け支部議員として八十島敏行・下谷隆之・橋本次雄・堀雅博・山岸真純・山本悦郎の六名が出席。その会議において、六名は青年同志の団結と会社発展及び印刷業界の発展のため勉強の必要を強く感じ、それには千代田全体の青年同志の団結と、話し合いの場が必要であるということになり、目的として「会員相互の研鑽、親睦をはかり、印刷および印刷関連業の向上発展に寄与する」を掲げ、発足いたしました。

当初はできるだけ多くの人たちに幹事長・幹事の機会を与える意味で、幹事長一年制 幹事は十名選出して、一年毎に半数が交代する形式をとっていましたが、緑友会等対外的な面と事業を充実して行うために、第八期より幹事長二年制に、その後現役員は全て幹事と変更され、現在に至っております。設立の志と懸け離れないように、会の名称も決して二世だけの会では無く、また支部の下部組織でも無



くあくまでも任意団体として自分たちの手で運営してゆくべくその名を新世会とし、各期でテーマを設け事業も研修会一本で行ったと聞きます。先代や先輩に対する意地があったのでしょうか、決して飲み食いの道楽会になるまいとした頑張り、江戸っ子らしい、見栄っ張りな青年の志として現在の新世会会員幹事に強く伝わっています。

緑友会とのかかわりは、昭和四八年に定期総会でホストを行うことから始まり、昭和五二年の在京六グループの一員として二十周年記念大会、そして昭和六二年の三十周年記念大会と主管いたしました。一昨年の夏の第四十回記念大会は東京ベイエリアにおいて新世会の芝崎孝君が大会幹事長を勤め在京九グループとともに、その人柄と並みはずれた忍耐力で友情の力を結集して大成功に導いたことは記憶に新しいと思います。

現在の新世会は三十才台を中心に印刷業を情報加工業として意識し様々な角度から問題定義を持ち上げ、任意団体として運営しているフットワークの軽さと利点を活かし、時には支部や他の団体と協力・協賛し、大胆に企業見学や技術研修等をこなしています。

会費は年間三万円、特に千代田区に所属する条件もないので、同区以外の方の参加も増えています。また、昨年の総会で創立三十周年を迎え現在記念誌の編集を進めております。

最後に新世会の先輩たちが組合等の役員で活躍されていることは千代田支部ならびに緑友会のご支援の賜物と思っております。

(戸根木 孝)

文京緑友会

設立 昭和三三
初代会長 大熊 暁三
現グループ長 丸山 史人
会員数 四三名

昭和三三年文京緑友会が設立されてから、平成十年の七月に四十周年を迎えました。私たち現役が入会したのが、だいたい三十周年前後です。でも十年以上会に携わっていることになりました。私たちが入会した当初は、バブルの全盛期でどの業界も含めてかなり景気の良いころだったと思います。また、会も四十年くらい経ちますと二代目から三代目と代替わりも多くなってきました。またこの何年間で利根川政明氏が全国緑友会の会長を二年間勤められましたし、会自体も年齢がかなり若返ったような気がします。また、ここ数年間で急速に発達してきましたパソコンが、印刷業界にかなりの影響を与えたことが、一番以前と変わったことではないでしょうか。そのために印刷技術もかなり進歩して参りましたし、それに対応すべく設備投資も、今の時代の流れではないかと思えます。

全国との関わりですが、時代の反映もあったため結構な人数で参加させて頂いたものです。夜行寝台で目的地に入ったりのりもしましたし、前泊して地方の方たちと交流したりして過ごしたこともありま



したが、景気下降気味になりますとどうしても交通費やそのほかの日程の都合上（参加費は会負担）会での参加が大変少なくなってきたりしてしまうことは誠に残念なことです。何年か全国に出席すれば、緑友の基本となる友情が芽生えると思うのですが・・・。

現在の主な事業としては、定年制を引いたために諸先輩との交流を図るための事業や勉強会・ゴルフコンペ等や地場産業として区内の幼稚園・児童館への用紙の無料配布などを実施しております。また、文京緑友会という組織のもとお互いを切磋琢磨し、自己を磨き、友情を育てることを目的としております。毎年、問題点となることはいつの時代も一緒で、後継者の問題が必ず浮上してきます。文京支部や諸先輩のお力をお借りしておりますが、なかなか入会されないのが現状です。役員や会費についてですが、会員は全国に登録されている人数と変更がなく現役幹事が二二名で毎月一回、幹事会を開催し、情報交換、打ち合わせを行事として運営しております。前回の記念誌に書かれた鈴木嘉男幹事長が今年まで文京支部の支部長をやっていたことが、とても不思議に思えます。当時の文章を読み直してみても、我々が会を引っ張っていかうとの思いが感じられます。「決して私たちがそうではないのか」と言う事ではありませんが、時代の流れなのでしょう。デジタル化が進む中でパソコンを利用した犯罪も多くなってきましたし、昔のようなコミュニケーションがメールによって相手の顔を見ずに情報として伝達できるようになったことも一理あるような気がします。二一世紀に向かって進歩している中、うまく融合していけたら良いと思います。

（丸山史人）

東京写真製版若葉会

設立 昭和二九・三・十三
 初代会長 福山 正雄
 現会長 山田 正利
 会員数 三四社

東京写真製版若葉会が発足したのは、昭和二九年三月十三日の設立総会でした。経済面では朝鮮動乱ブームの退潮期に当たり、産業界では全般的な不況で資金難時代だったそうです。このような時代を背景とし、東京写真製版工業協同組合の若手の方々の中から、当時活動していた大阪二世会を見習って、若い者同士で勉強の場を作ろう、と動きが出てきました。大阪には七生会が写真製版業界の基盤を作り、その子弟が、大阪二世会として講習会等を催していました。彼等の活躍を耳にするにつけ、私共も自己の勉強と共に、従業員の教育にも力を入れようと話し合い、福山正雄氏が初代幹事長となりました。設立趣意書の作成その他の活動は発起人である市村道徳氏、小堀正三氏、中山知実氏、笹田 実氏、高山俊一氏により推進されました。

設立当時の主な活動としては六月から九月まで、毎週開催されていた「夏期講習会」があります。会員、従業員がともに勉強するための会で、多い時には百五十名余りの人が集う熱心な勉強会だった



そうです。

会の活動は四つぐらいの時期に分けられます。まずは発足して十年の「技術革新」の時代。次が「経営の時代」で十年程続き、その後は色々なことが総合的に起こる多様化時代。そして今の時代は、ここ五、六年でのデジタル化による業界の変革に伴い、他二世会との交流、勉強会を開催するなど「融合・変革の時代」だと思っています。

会の目的は、設立当時、「後継者たるものの責任の自覚と、新しく伸びゆくものの自由の駆使とに依り、次の時代の経営を担当するに足りる精神と技量とを養うため」とされ、現在もその精神は大きく変わりえないとあります。会則第三条には、「本会は会員の互助的精神によつて共に写真製版技術と一般教養の向上に努め、あわせて印刷文化の振興に資することを目的とする」とも記載されています。

また、会則には目的を達成するために 一、写真製版及び関連技術に関する講習、講義 二、経営管理並びに一般教養に関する講演 三、見学会及び研究会 四、関連団体との親交 五、その他と定められています。

設立当時、非常に閉鎖的だった製版業界の中であって、会員同士の交流が自由に行え親交を深める場を提供できたこと、このことが若葉会の大きな目的のひとつだったと思います。

現在の会の運営は、会長を頂点として十数名からなる幹事が毎月定例の幹事会を開催しています。会員数は三四社で、凸版、シール業、オフセット製版、DTP、文字、材料業者など多種多様に富み、時代の成長・変化とともに会の発展もあつたともいえます。年会費は二万円で、定年制は特に設けてはいませんが、慣習的に五十歳を過ぎた頃からOBの仲間入りを致します。

(山田正利)

東京プロセス工業協同組合青年部青樹会

設立 昭和四五・十一・二六
 初代会長 海野 恒雄
 現グループ長 大西 英資
 会員数 十七名

昭和四五年十一月に東京プロセス工業協同組合の二世会を結成した。海野初代会長によると当時「激動の七〇年代へ突入し日本の産業そのものが高度の成長を遂げつつある時代で、当然写真製版業界も情報産業として陽のあたる場所を歩んでいたわけであるが反面、賃金は高騰を続け、若年労働者は第三次産業へ移り労働力の不足に加え、企業の核分裂が盛んになり、その結果として過当競争がいつそう激しくなり、何かあわただしき雰囲気は漂っていた。この様な業界環境の中にあつて、写真製版業界にも二世の人たちが経営の表面に顔を出すようになったが、如何せん既成の組合組織に出るにはまだ年齢的にも経験的にも無理であり、そうかといって二世同志交遊は皆無に等しく、情報の入手源にも乏しいとあつて何か不安を感じさせている状態であつた。この様なことでは、業界自体が先ゆきいろいろな面で断層ができてはならぬという考えが先にたち、同世代の者が同等の立場で意見をかかわし、切磋琢磨する場をつくらなければということでの設立の準備をした」

この様にして出来た青樹会は、その後会則の「本会は会員の互助的精神によつて、共に写真製版技術と一般教養の向上に努め、あわせて印刷文化の振興に資することを目的とする」という精神に学び、見学会・研究会及び関連技術に関する講習会等々を毎年四月より三月まで事業計画を立てて行つてい。又、毎年九月に行う「青樹会野球大会」では、会員のみではなく親組合員にも参加を呼びかけ、

青樹会の存在をアピールし親睦を深めている。

東京では同じ製版の若手の会として、東京写真製版若葉会があり、又日本写真製版工業組合連合会と、全日本DTP工業会が統合され「日本グラフィックコミュニケーションズ工業組合連合会」となる。この様な環境の中で、近年青樹会は、若葉会、DTPの若手の皆さんとの交流を深めている。具体的には三団体合同勉強会を今後は増やし更に関係を密にしていきたいと思つている。

最後に改めて言うまでもないが、近年のデジタル技術の飛躍的進歩により印刷業界は驚くべき変化を遂げつつある。この様な環境のなか、青樹会は会員数減少、活動の停滞等の問題を会員の互助の友情と行動の精神により乗り切り、未来へつなげていきたいと考えている。

(佐久間 修)

東京都印刷工業組合港支部 若竹会

設立 昭和三六・四
 初代会長 藤原 行信
 現グループ長 吉田 一茂
 会員数 十九名

若竹会は、西暦二〇〇〇年に四十周年を迎えます。すなわち昭和三六年設立ということになります。昭和三六年から順を追って、若竹会の歴史を振り返りたいと思います。昭和三六年印刷業界も戦後の混乱からようやく立ち直り、技術的にも欧米の最新機器が導入されはじめたが、今後の印刷業界ではこうした新しい機械設備および技術に対応できる印刷経営を次代に継ぐ若者に学んでもらうとともに、同業二世の気軽な話し合いの場を設けようとの目的で、共栄印刷（株）の白井氏、（株）敬文社の井上氏（故人）らのご尽力で発足しました。

昭和三六年

「二世会」として、支部とは独立した形で発足。初代会長、篠原行信氏、会員約二十名。大日本インキ板橋工場、大昭和製紙吉原工場等の見学会を行う。

昭和三七年

「二世会」を「若竹会」と改称。二代会長 平塚功次氏、三代会長 岡田祐時氏。カラー製版・オフセット印刷についての研修会、親睦会を経て運営も次第に軌道にのる。

昭和四一年

六代会長 猿渡輝雄氏。東京オリンピック後の景気悪化により、金融対策を強化。

昭和四六年八月

若竹会創立十周年記念行事が、東京農林年金会館において盛大に開催される。

昭和四七年三月

九代会長 大貫俊雄氏。次代の経営者としての心得についての研究会、構造改善、週休二日制、公害問題、年末金融等の諸問題についての勉強会が行われる。また本部青年会に代表が参加。現在の青年協議会にまで続く。

平成三年二月

若竹会三十周年記念式典 記念講演 講師 山本コータロー氏

平成十三年二月

若竹会四十周年記念式典（第二五回「これからの印刷を考える」）

というような経緯（一部を抜粋）で現在に至っています。現在の会員数は十九名。又、緑友会だけでなく、東青協、全青協などの行事にも積極的に参加し活動を行っています。主な事業としては、区内のその他の団体、製版や製本などの青年会と交流を目的としたバンブーネットワークや技術講習会、又納涼会や忘年会などの懇親会やボーリング大会などがあります。冒頭にもふれましたが、来年、四十周年を迎えるにあたり何かイベント事を行うことになり、二月二日に四十周年式典を行うことになりました。今は全員それに向けて奮闘中であります。

（若林利平）

神奈川正和会

設立 昭和三三・三三
 初代会長 大川俊郎(故人)
 現グループ長 尾崎 由朗
 会員数 二四名

神奈川正和会の発足は、昭和三三年三月、神奈川県印刷工業組合の創立間もない時であった。江森八十吉氏(故人)ら、その創立に関わった私たちの先輩が、県下印刷業界の行く末を考え、後継者の育成も同時に進めなければならぬとの使命感から「若き力を結集し互いに切磋琢磨して友情を深め、研鑽を積み、業界発展のため良き経営者とならん」との崇高な理念のもと、わが神奈川正和会が創設された。

ちなみに名称は、当時の大正生まれと、昭和生まれの青年印刷人が力を合わせて業界の繁栄と向上を目指そうということで、大正の「正」と昭和の「和」を取って、「神奈川正和会」が産声を上げた。

こうして誕生した神奈川正和会は、同年九月に設立された全国組織の全国印刷緑友会の創設十三グループの一員として、その設立に深く関わり、広く全国各地の同世代の仲間と交流を持つようになった。そして、この全国緑友会に於いても、第二代会長に大川俊郎先輩(故人)が、第八代会長に大川英郎先輩(故人)が就任するという積極的な活動を展開してきた。



創立時には、神奈川正和会会員が、すでに神奈川県印刷工業組合の役員であった方も多く、当時の神奈川正和会は、現在よりも規律正しく、厳格な会であったようだ。しかし、厳しさの中にも、ほのぼのとした同志的結合の精神が芽生え、友情の輪が広がり、今なお、この良き伝統は受け継がれている。では、次に諸先輩方が築いてこられたこの伝統ある神奈川正和会の現在の姿を映してみたい。

会員数は二四名、役員として会長一名、副会長一名、運営幹事一名、会計幹事一名が置かれ、任期は二カ年である。会費は年間五万円、定年は五十歳。月に一度の例会を開催し、業界のみならず様々な視野から印刷をとらえ、自己研鑽を積んでいる。またレクレエーション例会や新年会、全国緑友会の総会・大会・セミナーへの参加などにより、会員同志そして全国の緑友の仲間と飲んで語って、懇親の輪や見聞を広め、何事にも代え難い友情の輪を広げている。

今日の日々進化する技術と、めまぐるしく変化し、厳しさを増していく業界を取り巻く環境の中で、我々の年代も実業の場で多忙を極め、この混沌とした時代の中に飲み込まれてしまうのではないかと不安を感じる時さえある。しかし、この様な時こそ、やはり若き青年印刷人が、「和して同ぜず」の精神を持ち、伝統と向上心あふれる神奈川正和会に参画し、時代を担う若きリーダーとして、地域・業界・企業の発展のために、歩を進めていくことが必要ではないだろうか。より多くの方々と神奈川正和会の、さらには全国印刷緑友会のすばらしき五十周年を迎えられるよう邁進してゆきたい。

(尾崎由朗)

やまなし印刷若人会

設立 昭和五〇
初代幹事長 野中 成廣
現グループ長 小林 隆広
会員数 二六名

時は西暦一九七五年、昭和に直せば五十年。花のお江戸のお隣の、かの武田信玄ゆかりの甲斐の国になにやら不穏な動きがございました。かわら版屋の組合が「おい、若い。テメーラ若けー衆で寄り合いでも作って学問でもしてみねーかい？」と言われて結成されたのが今や全国にその名を轟かす（？）「やまなし印刷若人会」なのであります。

血気盛んな十五名の若人達は日々精進を重ねては羽目を外す毎日を送っていたのでした。そんなある夜、「そろそろオイラ達も何かデツカイ事をやらかそーゼイ！」「そうだなーちったー庶民のために何かやってやるかい？で、ついでにオイラ達の生業の宣伝も出来りゃあ一石二鳥のこんこんちきよ！」と言ったかどうかはさだかではありませんが、あの伝説（まだまだ続いています）の事業「チャリティプリンティングフェア」が昭和五九年に始まったのでした。



た。誰もが初めての経験で戸惑う中、又しても大成功（？）をおさめ、地方の宿泊事情の関係で偶然生まれた、全国のグループ割りを無視した雑魚寝、「やまなし方式」は大変評判になったと後の文献にも残されております。

さて、その後暫くは約一名がほとんど個人的に緑友会の常任として参加しておりましたが、そのパイプのお陰か否か、年号も平成に変わって平成八年には大会を主管したのであります。翌年には在京主管の四十回記念大会がにぎにぎしくお台場で開催されると言うことで「なんじゃい、俺らは前菜かい!？」と思いつつも「前菜があつて初めてメインが生きてくるんじゃい!」との思いで企画を練つたそうです。まあ、その挙句が撮影会とあつては、「若人会も落ちたものよ・・・。」と言つたところでしょうか・・・。

さあ、総会、大会と来たら次に残るのはセミナーです。もともと「学問」を追求するために作られた会（？）なので声さえ掛けられれば何時でも・・・といった体制なのですが。元来我等甲斐の国の人間は控えめなので決して自らは手を挙げませんので・・・。

現在の若人会は、幹事会を主体に四つの委員会それぞれ事業を模索しているところでありますが、対外的にもセミナーを開催したり、中小企業青年中央会に参加して補助金をぶんどって来たりと様々な活動が続いています。そしてこれからも我等かわら版屋二世の会「やまなし印刷若人会」は走り続けます。先輩方が作ってくれた歴史の重みに押しつぶされないうより更なるバージョンアップと共に・・・。あ、書き忘れた!我等の電腦掲示板「Ying NET」に「しょうがねえ、参加してやるか!」という奇特な方は井上まで連絡を!

(小林 隆広)

長野青年印刷人緑友会

設立 昭和三三・七・十五
 初代会長 田中 忠
 現グループ長 羽田 好男
 会員数 三八名

長野県印刷業界のリーダーとして、社会の発展と文化の推進の役割を担ってきた長野市内の経営者二世が、昭和三三年初春の頃より設備の近代化と経営の合理化、技術の向上など時代に添った経営を推進するために若い印刷人の会を作ろうではないかとの話が持ち上がり、同年五月二六日に有志が集まった。翌六月二五日、六名の準備委員により長野青年印刷人会（仮称）の準備委員会が発足した。設立趣意書ならびに規約の草案にかり会員の勧誘など着々と準備を進め、七月十五日創立総会を開催、長野青年印刷人緑友会が誕生した。この会に集まった若い経営者は三二名であった。総会では規約、事業計画などを決め、役員が選出され幹事七名、監事二名が会の運営に当たることになったが、会の名称が決まらずその後の幹事会で様々な名称候補から八月例会で審議され、緑友会と決定した。

長野青年印刷人緑友会は、平成九年創立四十周年を迎えた。過去において全国総会は、昭和三五年、五七年、平成九年の三回、全国大会は昭和三九年、四八年、六一年の三回、それぞれ主管している。また現在OBの飯田範夫氏を、第十三代全国会長（昭和五四年四月～昭和五六年四月）として送り出している。印刷組合関係では、長野支部の役員九割、県印刷工業組合への選出役員八割は、緑友会出身者が占められ業界での中心的役割を果たしている。緑友会の名称は、長野が先で全国の方が後であるということは、よく知られている通りである。

当会は、平成十年十二月現在会員数は三八名であり、内二名が女性会員である。役員は幹事長はじめ十名で、任期は二年である。会費は一人年七万二千元で、月六千元を例会時に徴収している。罰金制度があり、六回以上例会を欠席すると六千元、無断欠席一回につき千円の罰金が徴収される。会員は四五歳で定年を迎え、四月の総会時に卒業式が行われている。

会則の第一条（目的）として、「若い印刷人の力を結集して、印刷業界の経営合理化及び技術向上の原動力となり、会員相互の修練と親睦を図るものとする。」とあり、その目的を達成するため、毎月例会を開催し講習会、研究会、懇親会などを行っている。

平成九年度には、特別事業として「電子メディア研究会」を発足させ、本格的なマルチメディア時代の到来に対し、今後の進むべき方向を模索している各企業の現状を一日も早く打開し、長野県の印刷産業の高度化を図るため、各支援機関からの援助を頂きながら、一年間研究を行った。その研究成果が

「わたしたちのまちながの」のCD-ROMであり、小学校社会科の補助教材として、関連機関に配付し好評を博した。

（羽田好男）

名古屋而立会

設立 昭和三三・四
 初代会長 小栗 稔也
 現グループ長 田中 尚幸
 会員数 七四名

名古屋而立会は、昭和三二年に発足した而立会と名古屋二世会が、翌年（昭和三三年）合併してできた会である。“而立会”の語原は、論語の“子曰、吾十有五而志学。三十而立。…”からであり、この語原どおり、三十代を中心とした印刷及び関連業界の若手の会である。

目的及び事業として、“印刷界を担うべき任務を意識し、人格知識の向上を期し印刷文化、印刷産業発展に寄与し、併せて会員相互の研鑽親睦を図ることを目的とする。（会則第二章第三条）”ことが、四十数年たった今でも、ずっと受け継がれている。名古屋而立会は定年制をもっており、現在では、満四五歳をもってOB会員に移行することとなっている。設立当初二三名だった会員も現在では、現会員七四名OB会員九一名（平成十一年度）という大きな会に成長した。会費は月額六千円で年初に一年分を一括して納入することとなっている。

毎月例会を十八日に決め、例会、委員会、幹事会という三つの会で運営され、現在、初代会長の小栗



稔也氏から数え二九代目の田中尚幸会長を中心に三名の副会長と六委員会の委員長、会計、緑友担当で、幹事会を構成し、六委員会が例会を各二ヶ月ずつ担当することで活動している。例会は、勉強会を中心に、懇親会、家族会等を行い、会員相互の情報交換や、親睦を図ることを目的としている。

また、名古屋而立会創立四十周年を期にホームページ (<http://www.jinyu.or.jp/>) を開設し、会の歴史の紹介や、会員同士のBBSの運用などに利用している。将来は例会案内、出欠確認、幹事会報告、委員会報告など様々な利用法を模索中である。他団体との交流として、ぎふ印刷翠陽クラブと年一回の合同例会を始め、不定期ではあるが、みどり会（製本組合青年部）等、各団体の若手グループとの交流も行っている。

このような活動を通して会員相互の研鑽親睦を図り、若者の特権である“枠にとらわれない発想”をモットーに、会の、より一層の発展を志している。

（鬼頭則夫）

ぎふ印刷翠陽クラブ

設立 昭和三四・五・十三
初代会長 小野木 豊三
現グループ長 舟橋 伸治
会員数 五九名

昭和三三年頃、東京印刷同友会、神戸印刷若人会、名古屋而立会等の印刷人二世会の活動に刺激され、四橋正一氏（当時岐阜県印刷工業組合理事長）及び、小野木豊三氏、舟橋正氏、下条善七氏等を中心として、岐阜にも印刷二世の研修の場を作ろうという機運が盛り上がり、「二世会」と称して活動していましたが、昭和三四年五月十三日総員十七名の有志により正式に発足しました。会の名称は、毎月第二水曜日に例会を持つという意味から「水曜クラブ」ではどうかと発案があったが、金華山の若葉の如く若々しく、太陽の如く熱い情熱を持つという意味をこめて、「岐阜印刷翠陽クラブ」と命名された。同時に規約制定され、ここに今日までの四十年余の第一歩が印されました。

昭和三八年の五月には、全国青年印刷人緑友会第六回総会が岐阜開催を実現。規模、参加人数に於いて当時としてはすばらしい大会となり、岐阜に翠陽クラブありとの印象を強く与えることとなりました。当時の会員二十余名の真摯な情熱は、十年後の第十五回岐阜大会成功の大きな原動力となり、



見事に受け継がれることとなりました。

昭和四七年十月、第十五回大会が、若山晃一氏会長のもとに三七名の会員がホストになり、全国二三グループ二三〇名の参加を得て、大会史上空前のものとなり、この成功は全国印刷緑友会の組織再編成に大いに寄与する事となりました。その後第二二回総会、第二七回大会、そして第三四回セミナーとホストを努めさせていただきました。

現在会員は、五九名という大所帯になりました。近代社会に沿うべき知性と教養を身に付け、印刷及び印刷関連人の力を結集し、会員相互の親睦を促進し、併せて印刷及び印刷関連業の発展を図ることを目的とし、毎月活動しています。現在、会の運営は規約に沿って選出された会長一名、副会長二名、会計一名、理事十一名、相談役一名、幹事二名の役員で構成され、クラブ運営の中核をつかさどっています。会員は、研修、親睦、総務・会計、広報、渉外の五委員会に所属して各委員会活動を月一回以上行っています。

研修委員会は、外部講師を招いての経営研修会、グループディスカッション等を年に五〜六回企画運営します。親睦委員会は、会員相互の親睦を図るために行動し、広報委員会は毎月発行される機関紙「マンズリーレポート（昭和四六年一月より発行）の作成発行を行い、会員及びOBに配布する。そして渉外委員会は、平成六年度より新委員会として発足し、対外的に活動し外部発信PRを主にしています。そして、平成七年より隣県の名古屋而立会と年一回の合同例会と親睦ゴルフを開催させていただきます。

（舟橋伸治）

金沢青年印刷人クラブ

設立 昭和四二・五
 初代会長 中川 進一
 現グループ長 宇野 治郎
 会員数 五六名

加賀百万石の豊穡な歴史と文化を持ち、四季を通じて美味しい料理。風光明媚な兼六園。日本有数の温泉地を近隣に持つ金沢に拠点を置く金沢青年印刷人クラブ。その個性豊かなメンバーは、全国緑友会の行事を通じてもお馴染みかもしれません。

生い立ち・・・昭和四二年五月に金沢青年印刷人クラブ準備委員会が、会員二二名で発足した事に端を発し、昭和四四年に金沢青年印刷人クラブとして、その産声をあげた。時はアポロ十一号が月面着陸に成功し、沖繩が本土に復帰された頃。戦後の高度成長期もその絶頂のころであった。

その後の歩みを主要行事で辿ってみると・・・。

主要行事・・・全国印刷緑友会総会（昭和五九年五月）

全国印刷緑友会大会（平成元年八月）

創立二五周年記念大会（平成六年四月）

全国印刷緑友会金沢セミナー（平成八年二月）



創立三十周年記念式典（平成十一年六月）等々である。

平成三年には当クラブより、第十九代緑友会会長に白井秀幸氏を輩出した事も特筆に値する。当クラブ独自の研修会、交流会等の行事は年間を通じて行われるが、全国印刷緑友会の各事業には積極的に参加し、クラブの活性化と世代交代を円滑に図ると同時に、シニアクラブ設立の準備にも着手し、今後厚い人材層の交流が多岐に展開されていく事が期待される。

（宇野治郎）

京都青年印刷人月曜会

設立 昭和四六・四
 初代会長 松崎 肇
 現グループ長 爲國 光俊
 会員数 十名

京都青年印刷人月曜会は、西暦二〇〇一年に創立三十年を迎えます。「印刷経営、技術の向上を計り併せて会員相互の発展及び京都府印刷工業組合に協力し印刷業界に寄与すること」を目的として結成され、創立当時、毎月一回月曜日に例会を持ったことから月曜会と命名されました。現在の会員は、京都府印刷工業組合ならびに印刷関連企業の経営者、もしくは研修者である正会員と、当会の目的に賛同する賛助会員で構成されており、五十歳が定年と取り決められています。

月曜会の今日の発展は、親睦を通じて得られた会員間のネットワークがベースとなっています。我々は月曜会入会時において事業がすばらしいものであるとの確信をし、みずから月曜会の事業活動を実践する為に入会をしたとは限りません。業界情報を得たいとか、個人的にメリットがあるとか、とりあえず誘われてとかが大半を占めていたと思います。しかし月曜会の活動を通して「共に研鑽しあう人間関係」へと変身をし、その結果、月曜会自体も共に研鑽しあう人間の集合体となることに喜び



を感じるようになったのではないかと考えられます。会員は事業活動を通して素晴らしい社会人へと変革するのです。即ち、親睦を基本としたネットワークを通して人の繋がりの中から良質な社会人へと成長することができます。

会の運営は、会長を含めた八名の幹事によって一年ごとの単年度事業体制で運営され、これによってメリハリのある楽しい事業計画が組まれます。毎年四月に総会を開き、事業計画に基づき、印刷や経営に関する研修を月一回開催していますが、主な行事として、旅行や家族懇親例会、研鑽を目的とした講習会や研修会、他団体青年部との交流会等を企画し、月五千円の会費で運営されています。

三十周年を迎えるにあたり、新入会員の増強と内部充実を図りながら、情熱と実行力を持って二一世紀への具体案を現在計画中です。皆様のご支援とご指導をいただきながら一歩一歩確実に歩みつつある月曜会の現状報告をもって、当会の紹介とさせていただきます。

(爲國光俊)

大阪青年印刷人クラブ

設立 昭和三七・四・二
 初代会長 中田 秀一
 現グループ長 森川 耕司
 会員数 五三名

昭和三十年代の高度成長を背景に、印刷業界でも”近代化”が急がれ、経済発展のテンポに遅れまいとする一種の切迫感が青年組織に強まっていた。全国各地で青年印刷人グループが組織され、同時に全国印刷緑友会が名実ともに組織を全国化する動きを見せていた。大阪でも一部にこれに呼応する動きや組織づくりの胎動があったが、時機熟さず、あるいは事前工作の不調などから、結果として静観の形になっていた。

しかし、新しい気運は促進され、三六年十一月二五日に支部二世有志九人が会合し、既成二世会の連合体ではなく、個人の自由意思による結合が望ましいとの意見が一致した。十二月十二日には、七支部十二人が会合、白熱した討論の末にグループ設立に着手することを決定した。

翌三七年一月十一日準備会を開き趣意書及び会則案を決め、会員勧誘に踏み切る。同四月二日、大阪市内堂島の清交社で設立総会が開かれ、会長、副会長を選任、加入メンバーは三五人だった。二年



後には、関連業界を含め六十人に達した。全国印刷緑友会に加入したのは、二代目岩岡会長の当時昭和三九年のことである。

誕生当時の経緯にも見られるように、青年の成長にとって自主性、自立性は絶対の条件であるという合意に基づき、いかなる組織にも拘束されない自立した集団であることを組織原則とし、いつの時期も批判や誤解につきままとわれはしたが、その立場を貫いてきた。もちろんそれは、他団体との協調と友好を損う排他的、独善的立場ではない。その証拠に、岩岡大阪府印刷工業組合元理事長、中村浩一元副理事長（三代目会長）、奥村博亮現副理事長を始め、全国印刷緑友会の第二代会長に作道亮雄氏を送り出している。これは我々の誇りでもある。

会運営は現在十五人の幹事の合議により、月一回の例会制をとっている。新年会、トップ印刷人セミナー、家族会など恒例行事のほか、研修会、見学会、体力測定などを企画する。行事参加の直接的な反対給付を求めるよりも、繰返し活動に参加する中で自己研鑽に努め、人を知り己を知る集団体験に価値があるという組織を育んでいる。

平成四年に「創立三十周年記念式典」を開催したほか、平成六年には「第三七回全国印刷緑友会大阪大会」を、平成九年には神戸印刷若人会との運営で「第三十回全国印刷緑友会神戸復興支援セミナー」を開催した。

総会は四月、年会費六万円、予算規模は約三六〇万円。会員資格に年齢制限はなく、“心の若さ”を尊重。ただし、役員の年齢は選出時において満四五歳までとしている。

(森川耕司)

神戸印刷若人会

設立 昭和三一・六・二七
 初代会長 武 重治
 現グループ長 岡崎 光男
 会員数 三五名

私は昭和三八年生まれですが、その七年前折しも朝鮮動乱後の不況下で、真剣に事業の合理化が進められる中、若い印刷人の間で「文化産業といわれる印刷業界がこれでよいのか」という素朴な疑問と反省に立脚し、業界の発展を期する為には先ず互いに手をつなぎ親睦を図り研究会や勉強会を通じ視野を広め、業界の為に一つのポデイを作ったらと丸山茂、岡田利秋、岸本寅雄、武重治の四氏が発起人となり、創立総会を開き二八名の参加を以て神戸印刷若人会が発足しました。

全国青年印刷人緑友会が、昭和三十三年に誕生し、全国のグループと一堂に会し意見の交換をする様になってから若人会の活動は一段とめざましくなり、「審議中に紆余曲折はあっても一度決議された後は、いかなる障害があるうとも一致団結し成就にあたった」と聞いて居ります。

当時は例会と懇親会を毎月開催し、徐々に対社会的な各種の活動が行われる様になりました。先ず清掃活動ですが、旅行先の観光地で散乱しているゴミを見て、それが印刷物や缶類ばかりで、我々は



裏を返せば毎日ゴミにつながる物を製造しているのだと一端の責任を感じ「街と公園を美しく」の運動が始まり、各方面に美化運動を提唱しました。春秋の清掃活動に対し県知事から「善意の人団体賞」及び「のじぎく賞」「くすのき賞」を受賞しました。次に植樹活動ですが、前述の運動の一つとして戦災で荒廃した桜の名所会下山公園に延五五〇本、県立こども病院に五〇本の桜を植樹し、現在会下山公園は再び市民の「憩い」の場となり、「日本さくら会」からも表彰を受けました。又昭和六一年から十年事業として「子供達の夢が、笑顔が広がれば」と願って、市内の幼稚園に「実のなる木」を計五百本贈り、県知事より優良団体として表彰を受けました。他には「じゃがいも販売事業」で神戸のちの電話に寄付を贈ったり、印刷展を開催し、業界のPRに務め多大な成果を収めました。

近年では、未曾有の被害をもたらした阪神淡路大震災で殆どの会員が被災し、一時は全壊した会社等はどうかと心配しましたが、全国から多大なる義援金と激励の言葉に勇気づけられ復興の一途に踏み出せました。そして翌年危ぶまれました四十周年記念式典を開催できました事も皆様のお陰と感謝の気持ちで一杯です。全国印刷緑友会の皆様には衷心より厚く御礼申し上げます。失った掛け替えないものも多々ありますが、代りに得た貴重な経験と教訓を今後活かしてゆく所存です。

現在は毎月定例会を持ち、講師を招く勉強会、親睦会、家族例会等を通じ、自己研鑽と業界の発展、社会貢献に努めております。

(岡崎光男)

徳島一二会

設 立 平成六・七・十二
 初代会長 乾 孝康
 現グループ長 乾 孝康
 会員数 十三名

平成六年七月十二日、徳島県全域の印刷関連業種十二社の二世経営人が、親睦を中心に研修を副の目的として、徳島一二会を創設しました。創設当時、名称については十二名のメンバーが集まり、七月十二日に創設し、「歩みは遅くても良いが、一二（イチ・ニ）一二（イチ・ニ）」と確実に前進しよう」ということで、徳島一二会と決まりました。

発足してからは、毎月十二日に例会と年一回研修旅行と決め、広島の製紙会社や名古屋デザイン博覧会、東京の展示会等熱心に活動しましたが、段々とマンネリ化の傾向をたどり、例会が二カ月に一回、終りには季節毎に一回となりました。

ある時、J.Cの先輩である神奈川正和会の西岡義榮さんから電話を頂き、「緑友会という印刷関係の若手の会が有るが、入会してはどうか」とのお誘いがありました。それではと、早速例会を開催し、会員の意見を聴きますと、何人かが色々な人から、お誘いがあったとの事でした。しかも、個人では入会が出来ないので、残念ながら未だ入会に至っていない



し、もし機会があれば、是非入会したいとの事でした。その事を西岡さんに電話しますと、今度の例会に当時の利根川政明緑友会会長とともに参加するとの返事を頂きました。

例会当日、徳島で一番の料亭「青柳」で、緑友会の基本説明を利根川会長自ら、又、入会説明を西岡常任幹事から説明して頂き、早速入会の申し込みをさせて頂きました。其から、第三六回福岡セミナーのオブザーバー参加、そして、第三七回大阪大会が最初の会員正式参加となり、現在に至っております。

以来、紆余曲折は有りましたが、曲がりなりにも徳島一二会が、今日まで存在するのは利根川会長・西岡幹事との素晴らしい出会いと、去年の例会に参加して頂きました松浦会長・福田常任幹事をはじめとし、色々な緑友会の会員の友情が有ったお陰だと思えます。

今年、第四二回総会を徳島の地で開催されることが決まり、現在十三名の会員は徳島での「お持てなし」を如何にするか、日夜努力と議論を重ねております。色々な会員・先輩へのお礼の心の何分の一でもお伝えすることが出来れば幸せと思っております。

(乾 孝康)

愛媛印刷人青年会

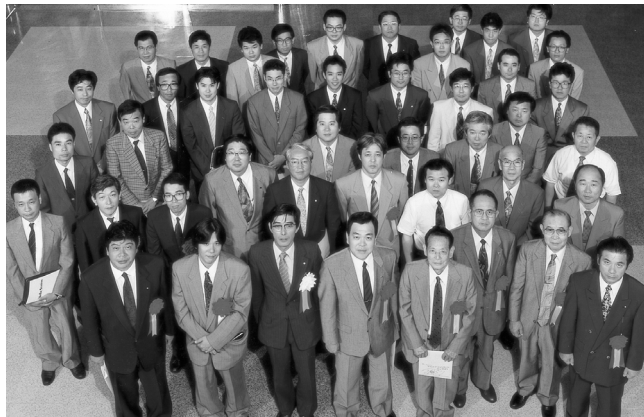
設立 昭和四八・八・十九
 初代会長 原 晃一
 現グループ長 八東 多賀志
 会員数 四十名

昭和四八年八月、青年印刷人グループが四国で初めて愛媛に誕生した。県下の若手印刷人を結集し、業界の地位向上と印刷文化の興隆に寄与することを目的として結成された。五名の発起人が準備を進め、十八名の会員を得て愛媛印刷人青年会が発足し、初代会長として原晃一氏が就任し、原会長を第十六回長野大会にオブザーバーとして派遣し、全国の仲間たちと初めて接触した。

翌年の総会に、全国印刷緑友会若山幹事長を来賓としてお招きし、緑友会に関するお話やご意見を伺った。そして緑友会への加盟が正式に承認され、東京総会に三名の代表を参加させ、全国の仲間との交流をもった。

会運営は、技術および経営に関する研究会の開催、講演会、工場見学の実施、情報の交流、会員相互の親睦と交流をもって自己研鑽に努めるといった。

以後、県内事業としては、昭和五八年九月には十周年行事として、松山の目抜き通り大街道におい



て「ふれてごらん印刷の未来」をテーマにフェアを開催した。平成五年七月には二十周年行事として、今治のテクスポート今治において「プリントアートメッセージン いまばり」というテーマで、多様化する情報文化の担い手としての印刷を身近に親しんでもらった。平成五年十月には「一九九三愛媛印刷文化典」が松山で開催された。当会も、県印刷工業組合から協力要請があり、メンバー一丸となり専ら裏方として活躍した次第である。又、平成二年五月には『第三三回全国印刷緑友会愛媛総会』が開催され、全国の仲間たちと道後温泉に浸かって語り合い、湯情（ゆうじょう）をより熱くしたことは記憶に新しいところである。

新たな試みとして平成十三年十月、道後温泉に広島青年印刷研究会、徳島一二会の両会を加え、三県合同例会を開催した。オブザーバーとして矢谷緑友会長もお見えになり、各会の活動状況など活発な意見交換や会員の親交を深めるなど有益な例会となった。

さらに厳しい経済環境の中で、対外的交流にも積極的に目を向け、異業種で組織されている県中小企業団体青年部協議会にも加盟し、多くの友と情報交換できる機会をもった。本会からも役員を送り出し活発に運営されている。

現在は、関連業界も含め会員数四十名で構成されている。本会の会費は、年額三万六千円。役員は会長一名、副会長一名、会計一名、会計監査一名、幹事若干名とし、会議は、一、定時総会、二、幹事会、三、定例会（視察研修会、セミナー、ボウリング、ゴルフ、忘年会などの親睦を中心に行っている）。

厳しい社会環境、業界の低迷により定例会の参加者が減少しているのが気掛かりである。様々な諸問題に対して、互いに協力、団結して対外的な交流にも積極的に目を向け、情報ネットワーク作りを通じ、幅広い活動を遂行することが課題ではないかと思っている。

（八東多賀志）

広島青年印刷研究会

設立 昭和四九・三・二二
 初代会長 国光 俊彦
 現グループ長 福田 信彦
 会員数 二八名

一九七四（昭和四九）年、第一次オイルショックの直後で混迷を続ける中、印刷業界が一生を託すに足る業界であって欲しい、それには我々自身が勉強し努力する以外にはないという自覚と願いが実を結び、広島青年印刷研究会を結成するに至りました。印刷工業組合の中には、青嵐会を作るのかといった意見もあり、色眼鏡で見られることも多々ありましたが、チャーターメンバー二五名の向学心と業界の地位向上に対する結束は強く、三月二日会則・名称の決定と共に国光俊彦初代会長の就任となりました。

なんとか歩み始めた頃、全国印刷緑友会十一代会長の筒井氏の強いすすめで茨城大会（昭和五一年）にオブザーバー参加し、全国の思いを同じくする人々の出会いに強い感銘と勇気を与えられ、昭和五二年作道会長の時に正式加入、何も分からぬままに同年度のセミナーを受けたのを皮切りに、五八年大会・平成二年総会とお受けしてきました。緑友の皆様の暖かい応



援と友情に、改めて感謝申し上げます。

青年印刷人として印刷一般に関する諸問題を調査研究し、併せて相互親睦を深め業界の地位向上を図ることを目的として、年二回の総会・家族会二回・懇親二回・勉強会六回を基本に活動しています。入会金として五万円、年会費として五万円を負担し、五十歳の定年を定めています。が年会費の半額で会友として参加できます。

二五年を経た今、チャーターメンバーの結束の強さと熱い思いは、現会員にとって嬉しくも羨ましくもあります。が、一九九九（平成十一）年八月二一日の緑友広島大会を契機に一段の飛躍をしたいと思っています。

（福田信彦）

北九州Y Pクラブ

設立 昭和三七
初代会長 金重 健
現グループ長 岡崎 真吾
会員数 十九名

北九州Y Pクラブが設立されたのは、北九州五市が合併する前年昭和三七年でした。北九州市は、門司市、小倉市、戸畑市、八幡市、若松市が合併し、昭和三八年二月に百万都市となった。印刷組合も旧市ごとであり、若手印刷人で旧五市をひとつのグループとした会をつくろうとしたようです。会の名前は北九州Y P（ヤング・プリンターズ）クラブとし、会員十三名でスタートしたようです。

対外的には、昭和三七年五月に福岡市で行われた第四回西日本青年印刷人懇話会が最初で、翌年の全国印刷緑友会岐阜総会から緑友会の一員になったようです。会としては、西日本青年印刷人大会、全国印刷緑友会西日本地区大会、九州山口印刷人会のホストを一回ずつ勤めさせていただいています。

現在、会則によると、会の目的を青年印刷人の力を結集し、会員相互の研鑽親睦を図り、印刷および印刷関連産業の向上発展に寄与することとしています。会員数は十九名で、内訳は印刷業十名、印刷関連業九名です。毎月例会を開催し、主に勉強会を行い、見学会や隣の福岡印刷若葉会や佐賀印刷



若楠会との合同例会や九州山口青年印刷人大会などにも、積極的にしております。

北九州市には、福岡県印刷工業組合の下部組織の北九州市印刷組合がありますが、現在特に直接連携した活動は、行っていません。全国印刷人青年協議会に議員をひとり出しているくらいです。地域への活動も、IT化の進む中、印刷業の存在意義や仕事内容について広報する必要があるという声はありますが、今からと云うところはです。

二年前に大幅に会の規約等を改正し、会の連絡はすべてメーリングリストで行う、印刷業が主体となつて、運営企画を行う、会費も勉強会主体のため月額五千円にする、決定は例会に計つてからにする、役員は、一年交代とし絶えず新しい考え方を入れる、などです。

例会の内容は、インターネットの研究会（HPの高度な技術を使った製作例、最近の動き）、デジタル化の動向（MACやアドビの動向、CTP、デジタルカメラ、PDFなどのワークフロー）、紙やインキの勉強会（会員からの質問をメーリングリストで集めて、会員の紙やインキ会社の方に例会で答えてもらう）など、変革時期にある印刷業の中での、勝ち残りを賭けて、自社の経営に少しでも役に立つような内容にしていこうとして、頑張っています。

（江島和男）

福岡印刷若葉会

設立 昭和四十・十二・十九
初代会長 大隈 瑞茂
現グループ長 川島 誠
会員数 四三名

福岡印刷若葉会は、全国緑友会に正式加盟していた二世会「福岡印刷昭和会」と、もう一つの二世会「同友会」の二つのグループが合体することにより誕生した。

初代会長に大隈瑞茂氏（福岡印刷）が就任し、「若さと実行力」を強力に打ち出して会の運営にあたった。若葉会設立二年目の昭和四二年五月に「緑友会第十回定時幹事総会」、五年目の昭和四六年五月には、それまで緑友会と切り離して運営されていた西日本青年印刷人大会が緑友会傘下の事業となつて最初の「西日本地区大会」、十年目の昭和五十年十月には「第十八回全国印刷緑友会福岡大会」を引き受け、そして十三年目の昭和五三年六月には再度、緑友会から離れた「第三回西日本青年印刷人の集い」を主管し、若葉会なりの成果をあげた。この西日本地区大会の精神は現在も「九州・山口青年印刷人の会」に受け継がれ緑友会のイベントがこの地区で開催されない年には各県の持ち回りで大会を開催している。平成十一年六月に第十六回大会を福岡印刷若葉会が主管し、十二グループ一三〇名が参加し盛大に行われた。そ



の後の緑友会事業では、昭和六十年に第十六代会長として古賀健一氏（祥文社印刷）を送り出し、平成五年に「第十六回全国印刷緑友会福岡セミナー」を主管している。

会則第二条には、「本会は、会員相互の親睦をはかり、共に研修することによって人格の陶冶にため相たずさえて印刷産業界の発展と社会的地位の向上に寄与することを目的とする」とある。この根本理念が会の運営に貫かれ、また、若葉会歴代会長は印刷工業組合の理事長・理事として組合運営にもあたっているため連携もスムーズに行われている。平成十二年には組合創立五十周年を迎え、記念イベントとして「博多どんたく港まつり」に参加した。また組合主催の新社員合宿研修会の協力も続けている。

ファミリレクレレーション・ゴルフコンペ・新年夫人同伴パーティなどの継続事業や関連団体と一緒にになった印刷業界大運動会（二年に一度、十回開催）なども主催してきた。平成七年に三十周年記念事業を行い現在に至っているが、会員特に印刷会社の後継者が会員の半数以下になり、若い世代へのバトタッチが課題となつてきている。これから二一世紀を迎えるにあたり、印刷というジャンルだけから情報・デザインなど多様な展開をもつた若いグループとしての体制づくりに着手する必要があると思われる。

現在の運営方法は、幹事会により事業内容を決定し、月一回の事業を開催。年会費は四八、〇〇〇円、入会金一万円。緑友会・九州山口印刷人の会の事業もこの中にふくまれており、研修・懇親・情報交換を主な活動としている。

（川島 誠）

佐賀県印刷人若楠会

設立 昭和三八
初代グループ長 原 晴美
現グループ長 西津 俊典
会員数 四六名

昭和三十八年某月、佐賀県小城郡小城町役場入り口。福博印刷の専務である原晴美は、入札のために来庁。

入札が終わり帰ろうとする原の前に、腰に少し黄ばんだ手ぬぐいをぶら下げ、擦り減った下駄を履いたテニスで鍛えた鋼のような体をした色黒ながら精悍な顔立ちの若者が、カラカラと大きな音を響かせながら一直線に大股で近づいてくる。原は一瞬たじろいだ。「いったい何の用だろう」しかし、小柄ながら気丈な原は、気を取り直すととっさに身構えた。

そんな原に気を留める様子もなく「ちょっと話がある、顔を貸してくれ」と、その若者が言う。

その若者の名は、音成一郎。ばんからで名をはせた音成印刷の若旦那である。音成の工場は小城町役場のすぐ隣だ、原が役場へ入るのを見ていたのであろう。町役場の外に出た音成は「いつまでも競争ばかりしていても始まらない、飲み会をしよう」と、小城弁で言った。迷うことなく原は答えた。「よし、じゃあ何人かに声をかけよう」と。

そして集まったのが、森永（佐賀紙器印刷）・西津（日の出印刷）・副島（副島印刷）・武富（誠文堂印



刷）・宮地（宮地印刷）それと、音成（音成印刷）・原（福博印刷）であった。これが、我が若楠会の始まりである。

飲み会で始まった若楠会であるが、会結成後まもなく付き合いの広い原の尽力もあり福岡県の久留米、そして同じく福岡県の大牟田のグループと持ち回りで「隣県合同研修会」を開催、親睦のみならず、研修にも力を入れるようになった。また、若楠会結成後まもなく、大阪以西のグループの会合がある事を知り入会した。その会は一年に一回の大会があり、その名を「西日本印刷人大会」といった。九州山口印刷人大会の前身である。

若楠会は伊藤会長（鹿島印刷）の時初めて西日本印刷人大会を「印刷屋からの脱皮」というテーマで主管したが、しかし、その西日本地区大会も次第に下火となり、いつしか消滅してしまう。若楠会も同様で西日本大会主管の後、いつしかスリーピングメンバーが増え、総会に四・五人の出席という、会消滅直前の状態に陥ったが、中江（佐賀紙器印刷）の尽力により、再び宮地が会長に返り咲き、会勢の建て直しをばかり関連企業の入会も含め五十名を超える会員数となり見違えるような活気を取り戻すことになる。ちょうどそのころ、全国印刷緑友会会長の中村守利氏と緑友会の常任幹事で福岡県印刷若葉会の古賀健一氏が佐賀を訪れられ「緑友会という全国的な組織がある、西日本地区の会がなくなった今、経営者としての視野を広げるためにぜひ入会を・・・」という熱心なお勧めに若楠会は緑友会入会を決定する。昭和五十六年秋の事である。

若楠会は創立以来、佐賀県印刷工業組合と連繋の事業を推進し、特に、印刷週間の事業である印刷組合のソフトボール大会は運営を全て若楠会がおこなっている。又、新年御礼会や組合主催のセミナーなどは殆ど若楠会と共催の形をとっており、印刷関連業者の皆さんも会員として在籍しているにもかかわらず、佐賀県印刷工業組合青年部として全印工連にも中央会にも認知されている。

（松浦正欣）

長青会（長崎青年印刷人会）

設立 昭和五五・八・二三
 初代会長 山口 善生
 現グループ長 菅 秀信
 会員数 十四名

私共、長青会（長崎青年印刷人会）は、二世会という会を引継いだ集まりです。この二世会は、昭和三十七年が創成期で、初期の緑友会の活動にも、参加して活発に行動していましたが、後継者その他の問題で十年後位から休眠状態に入り、青年会独自としての活動を行ってはいませんでした。それから十有余年の月日がたち、当時の長崎県印刷工業組合の専務理事である阿津坂氏の呼びかけにより、昭和五五年八月、二世会こと長青会が十五名の参加者を得て印刷組合の準青年部として新たに発足致しました。

初代会長に山口善生氏を選出し、印刷組合からの応援を得ながら、例会、研修会等を社会福祉団体、地域青年会との共同事業、異業種との交流等、業界外へも目を向けた活動を行ってきました。その中で九州地区の緑友会大会へオブザーバーとして数年参加した後、全国組織加盟への気運が高まり、昭和六一年にあらためて緑友会の会員として受け入れていただくことになりました。

平成四年には、九州山口大会を長崎で開催、平成六年には、緑友会総会を開催できるまで発展してきました。後継者も順調に育ち、会としての独自の活動も行えるようになり、世代交代も終わり第二世代中心の運営が始まりましたが、一三名の会員が十四名まで減少し、そこで会の運営を安定させるために月会費を二千五百円から五千円にしました。

新たな会員の募集についても様々な試みを行ってきましたが、なかなか入会に結びついて行きません。現在では、第二世代も高齢化が進み、三十、四十代の会員が多数を占め、二十代の会員は数名という状態ですので、若い会員の参加を望んでいます。

しかし、会の高齢化と共に緑友会との関わりが薄れて行ったことも否めません。そこで、第二世代の我々にも緑友会の活動や他県の青年会を知る機会を持つことの大切さに考えが至り、「長青会二十年を機に、何か行いたい」と全会員に提案しましたところ、『緑友会全国大会』の開催地として立候補したいという意見が出され、会の求心力、結束力を高めることにつながっていくのではと賛成の声が上がりました。

少数会員であることと、地理的な状況を考えて佐世保若汐会との合同開催という初の試みでの開催地立候補を行うつもりです。

久しぶりの大きな事業計画に、全会員一丸となって情熱を注ぎたいと考えております。

（菅 秀信）

佐世保印刷若汐会

設立 昭和三九・四
 初代会長 松尾 隆一郎
 現グループ長 西村 哲哉
 会員数 十名

昭和三八年夏、初代幹事長松尾隆一郎氏を中心に、若き印刷人のグループを作る動きが出て、現在の若汐会の前身である佐世保青年印刷研究会が、十名の理事を中心として、昭和三九年四月に発足した。そのときの趣意書には、次のように書かれていた。

- 一、本会の目的は青年の英知を結集して、当印刷界の啓蒙と親睦をはかり、業界発展と向上に寄与する事を目的とする。
- 一、本会は佐世保印刷事業協同組合の運営の一環として活動する。
- 一、本会の目的を達成する為、各会員は左の事項を遷守し、且つ研鑽に努めなければならない。
- 一、印刷人としての誇りと責任
- 二、印刷に関する知識
- 三、販売成果促進の為のセールス技術
- 四、各会員相互の親睦

このような趣向のもとに、若いグループの新しい行動は開始された。例会は月に一度か二カ月に一度の割合で行われており、このペースは今でも全く変わっていない。

例会の内容については、年度始めに総会を開き、前年度の会務報告、新年度の活動その他を各会員

の意見を取り入れながら審議した大要が決められる。題目は講師を招いての講習会、研修会又時にはその時々为社会情勢等についての講演等の計画である。又、親組合とタイアップしてのスポーツ大会、最近では平成八年から十年までがソフトバレエ大会、十一年はボーリング大会を催し、毎回二百人程の参加があり、好評を得ている。

しかしながら現在会員数は十名であり、会員のほとんどが十名前後の小規模印刷所の代表者か二代目であり、実際のところ常時活動できるのは六、七名。なかなか思うようにいかない状況である。

事業年度は十月一日より九月三十日までとし、例会の他に総会・勉強会・納涼会・忘年会・新年会を行う。現在の会費は年額一人三万六千円で、この不景気の中、値上げは全く考えていない。又、定年は五五才。後任を出せば五十才でも定年を認める。

全国緑友会の大会、総会、セミナー等に参加する事は大いに有意義なことだ。全国各地の若い仲間達と友達になれ、いろいろな知識や情報が得られる。

現在の厳しい社会情勢において、我々若い仲間が、緑友の基本理念に添ってお互い助け合い励ましあって業界発展の為、努力しなければならぬと思う。日本本土最西端の当会であるが、今後ともお見捨てなきようお引き立てのほどをお願い申し上げます。

(西村哲哉)

熊本県印刷緑友会

設立 昭和三一・十二
初代会(幹事)長 白石 豊
現グループ長 池田 和隆
会員数 五十名

熊本県印刷緑友会は、昭和三二年十二月、松永芳郎、木村次一、白石豊三氏が発起人となり、十二名で発足した。設立の目的は、会員相互の親睦をはかること、印刷技術、経営の研究を行うこと、印刷産業と共存共栄、印刷産業の社会的地位の向上に貢献することである。

会名をはじめは明星会としたが、昭和三三年七月、熊本プリンティング・クラブと改名。現在の会名になったのは、熊本プリンティングの発展的解散後、会員殆どが若返って、昭和四九年に再発足したときである。

昭和三三年、全国青年印刷人緑友会の発足と同時に参加。昭和三四年十一月七日、広島における第一回西日本青年印刷人懇談会(後に緑友会西日本地区大会となった)に参加した。緑友会西日本大会のスターティング・メンバーである。

翌三五年五月、阿蘇内牧において開催された第二回西日本青年印刷人大会のホストをつとめた。昭和三七〜三八年頃は、福岡、久留米、鹿児島緑友会のグループと親善野球を行った。また、そのほかにも久留米プリンティングクラブ、福岡昭和会、佐賀若楠会と隣県合同研修会が年一回行われた。平成に入ってから、各県持ち回りで開催される九州・山口青年印刷人大会のホストも一度務めている。

全国印刷緑友会では、昭和三七年、四四年、平成七年の三回、熊本で全国大会が開催された。また昭

和四二年五月福岡で開催された全国緑友会総会では、当会の白石豊幹事長が全国緑友会幹事長に選ばれ、二年間その任にあたった。

熊本県印刷工業組合との関係は、会の設立当初より会員数名が理事として選任されている。現在も理事長、副理事長、専務理事などの役職に当会の出身者が就任されている。組合からは、毎年一定の予算を組んでいたが、活動を補助していただいている。また、当会からも、組合の行事等で積極的に協力させていただいている。

現在、会員五十名で、毎年四月に総会を開いている。主な行事は、会員相互の親睦と勉強会で、年に五回ほど講師の方を招いての勉強会に充てている。内容は多岐にわたり、印刷関連の技術的なことから経営管理、コンピュータ、他業界の話など多彩である。九月の印刷月間には毎年熊本を中心街のアーケードで印刷展を開催している。親睦では、夏の家族会や忘年会、新年会、お花見会などを実施している。

時代の変わり目でも変化も非常に激しい時代だが、会員間相互のコミュニケーションを大切にしながら活発な会にしていきたいと考えている。また、全国印刷緑友会の一員として、積極的に交流をすすめていきたいと願っている。

(池田和隆)

大分印刷若梅会

設立 昭和五三
初代会長 高山 泰四郎
現グループ長 田北 俊文
会員数 十二名

全国印刷緑友会が、四十周年を迎えられますこと、心からお慶び申し上げます。大分印刷若梅会は、昭和五三年に発足して、今年で二三年目を迎えますが、元々は昭和五一年頃、大分県印刷工業組合大分支部青年部として発足し、その間、紆余曲折があり、組合とは切り離れた形で独立した会となり、現在に至っております。

会の目的は、青年印刷人として印刷業界発展の原動力であるという自覚に基づき、一致団結のもと、研修に努め、時代を担う創造力、実行力豊かな人間性を兼ね備えた経営者を目指し、業界の社会的向上を目指すとなっております。発足と同時に、印刷週間行事と印刷業界PRとして自分達で便箋を作成して、街頭で無料配布（以後、十年間継続）を行ったり、市内業界八十社を対象に実態調査を行うなど、積極的に活動に取り組み、全国印刷緑友会にも加盟し、初めての対外行事として、沖縄大会へも参加させていただきました。

昭和五六年には、「第七回西日本青年印刷人の集い」をホストとして開催したのをきっかけに、会独自に、「大分青年印刷人の集い」（十回まで連続開催）を開催して、県下の青年印刷人に呼びかけ多くの賛同をいただいたことは、大変意義深い事でした。緑友会関係では、平成五年に「第三六回全国印刷緑友会定期総会」を主管させていただきました、全国から多くの緑友の仲間が来県されたことは、当会に

とって、大いに刺激となり、基盤作りとなりました。

大分県印刷工業組合との関係は、事業としては特別にありませんが、会員の大部分が組合員であるし、県印工祖の第十代（高山泰四郎氏）と十一代（平岩禎一郎氏）の理事長が、会出身者ということもあり、友好的な関係が保たれています。

さて、現在の当会の活動状況ですが、一時に比べて会員数が減少していますが、発足当時の目的を忘れることなく、様々な活動に取り組んでいるところです。主な活動としては、例会、工場視察、セミナー開催や参加、親睦会、他団体との交流等が挙げられます。例会は発足当初から現在に至るまで月二回（七日・二一日）開催し、出席率も高く、毎回テーマを決めて活発な意見交換が行われています。また他団体との交流では、名刺組合やグラフィックサービスの青年会との交流や地元のグラフィックデザイナーや広告代理店との交流会も始めましたし、本年九月には、韓国のテクノマート関係者との交流も予定しております。これからの会のあり方としては、デジタル化、低価格競争、他産業界からの参入といった問題が山積している印刷業界の中で、当会が果たさなければならぬ役割は、従前にも増して大きくなっています。今後は、今まで以上に緑友会との連携を強くして積極的に情報交換を図って参りますので、よろしくお願い申し上げます。

（田北俊文）

別府印刷組合青年部

設 立 昭和四八・十・一
初代会長 森澤 透
現グループ長 宇都宮 昭二
会員数 七名

我ら別府印刷組合青年部は、地域のためのイベント参加などをしてきましたが、現在は年齢も四十代、五十代となり、専ら研修会を開催して勉強をしています。しかし、会長の森澤の急死により、会員数も6名となり、運営的にも困難になったため、平成十三年十月をもって、解散致しました。今後、若い世代の人達によって、新たな動きがうまれることを願っています。

(宇都宮昭二)

鹿児島県印刷工業組合青年部黎明さつま

設立 昭和五七・四
初代会長 中村 博大
現グループ長 岩重 昌勝
会員数 二二名



鹿児島市を一面の焦土と化した先の大戦から十年が経過した昭和三十年十二月、復興を旗印に無秩序状態に陥り混乱を極めていた印刷業界において組織化の気運が高まり、鹿児島県印刷調整組合が設立された。そして、一層の組織化には業界の次代を担う若手経営者の育成が急務と、時の専務理事である中谷良信氏らの呼びかけによって翌三一年四月、市内の菊屋ホテルにおいて鹿児島二世会が発足した。十二名の出発であったという。この年は経済白書にその執筆責任者後藤誉之助が「もはや戦後ではない」と書き込んだように、日本産業界が脱・戦後を世界中に宣言した年であった。昭和三三年八月調整組合は鹿児島県印刷工業組合に組織変更され、二世会も同じくして鹿児島県印刷青年会と改名。当時各地で発足し活動し始めていた若手グループとも積極的に交わり、西日本大会にも全員が参加。そしてその積極性を如実にあらわすように、昭和三七年第五回西日本大会を鹿児島市内の吹上荘で開催した。翌日は大型バスを何台も連ね桜島へ渡り、観光や分科会を開催し大盛況であったという。ただこの鹿児島県印刷青年会は

青年印刷人の組織ながら鹿児島印刷工業組合の役員に同時に名を連ねる会員も数名居り、一般という青年会とは趣を若干異にしていた。そのような事情等もあってか他地域の青年グループとの交流も昭和四二、三年頃を境に疎遠となっていた。そして活動も会員相互の親睦が中心となり、八日会と改名して印刷工業組合の支部組織として現在もお月例会を開催し活動している。

時は流れ印刷業界も様変わりし、オイルショックは業界を大混乱に陥れ、印刷工業組合の組織自体にも大きく影響を及ぼした。その中で変革する業界を見据え、より強固な組織形成をするためには自前の青年部を創らねばという気運が高まり、昭和五七年二宮桂一郎氏等の呼びかけにより鹿児島県印刷緑友会が発足し、正式に全国印刷緑友会のメンバーとなった。平成元年には第七回九州・山口青年印刷人鹿児島大会を鹿児島市内城山観光ホテルで開催するも会員数は平成三年末で五名となってしまう。この現状を憂いた時の印刷工業組合理事長浜島重徳氏の呼びかけで、平成四年、鹿児島市内NCビルに多くの若者が招集され現在に至っている。平成六年には黎明さつまと改名し、親会から年二十万円の助成金が支給され、年会費二四、〇〇〇円、毎月第三土曜日に例会が行われている。メンバーも印刷業に限定せず関連業の若手にも入会を呼びかけ、研鑽に努めている。その成果とも言ふべきか、平成九年九月に、第十五回九州・山口青年印刷人鹿児島大会を主管し九州内外より一四〇名が、又翌年十年には第四十一回全国印刷緑友会鹿児島大会を霧島みやまコンセールで主管し三〇〇名を超える若人が参集した。平成十四年には創立二十周年を迎える。最後にこの度、歴史を振り返るに際し、多くの先輩諸兄や関係各位のご協力を頂きました事、心より感謝申し上げます。

(岩重昌勝)

沖縄県印刷若潮会

設立 昭和五〇・四・一
 初代会長 大城 新正
 現会長 外間 政朝
 会員数 三三名

若潮会は昭和五十年春に設立され今年で二三年目になります。昨年行なった当会設立二十周年記念事業及び第十四回九州・山口沖縄大会に全国津々浦々の緑友の皆様が御参加賜り大変有り難うございました。心より御礼申し上げます。当会が二十余年無事発展しながら存続できたのも日ごろ緑友の皆様が厚い友情とご指導の賜だと思っております。当会の先輩の皆様にも日ごろご指導、ご鞭撻をいただき有り難うございます。すでに設立当時のメンバーはOBになり引退し、各社とも二代目もしくは準幹部が所属する会へと転換を図っております。また資材関連会社の皆様にも多数参加していただいております。先日全国印刷緑友会二十周年記念誌の大城先輩の文章を拝見させていただき、沖縄が二十年前でだいぶ変わったことを実感しました。二十年前は復帰事業ということで全国の注目をあび、これから本土の一員として肩を並べなければいけない時代背景の中で会を運営していくのは大変ではなかったのかと思われまます。時代背景は大幅に変わり現在は観光や日本の南の玄関また芸能界でも安室奈美恵をはじめ多数のミュージシャンを出し、今は新たな魅力一杯の沖縄ということで注目をあびております。

皆さんご存知のように我々沖縄の印刷業界も、印刷機械の高速大型化、前工程のデジタル化で印刷技術は急速に進歩を遂げ短納期・低価格・高品質に対応出来るようになりました。しかしながら、二十年前と何も変わっていないように思われる部分もあります。業界内でのダンピング競争による仁義なき闘いを相変わらず繰り返しているような気がします。これでは印刷業界の地位は向上しません。来る二一世紀には、お互いを助け合い、協調し合う印刷業界になればと思います。

現在の若潮会の活動も先輩方から受け継いだ会員相互の親睦と研鑽をモットーに月一回の理事会、定例会を中心に運営しております。定例会の中では、教育委員会を中心に勉強会を実施し年一回の宿泊勉強会へとつなげています。その他年一回の事業としてビーチパーティー、餅つき大会があり会員家族も参加し積極的に交流を深めております。チャリティーボウリングも皆さまの支援のおかげで、十九回目を数えることができ多くの車いすや授産施設へと寄贈できたことをありがたく思っております。現在会員は三二名、会費は現役六万円、OBの皆さまには二万四千円いただいております。今後とも会員一丸となり会の行事また印刷業界の発展に寄与出来るように邁進しますので御指導、ご鞭撻宜しく願います。

最後に会の名称が二十年の間に変わったことをご報告します。

(外間政朝)

東北青年印刷人連絡協議会

西日本地区大会九州・山口青年印刷人大会

東北青年印刷人連絡協議会（略称…東青連）

昭和三四年四月、東北青年印刷人連絡協議会創立総会が秋田市の秋田クラブで開かれた。緑友設立の半年後のことである。緑友は創立に向け、各地のグループに声をかけをしており。東北各県のグループをまとめる役は、仙台刷親会の皆川忠治郎氏が担っていた。

創立メンバーは、青森土曜会、弘前PSクラブ、三八地方刷親会、秋田市印刷懇話会、盛岡刷親会、山形印刷研修会、福島彩友会、郡山凸凹クラブ、仙台刷親会の九グループ、会長に推された皆川氏は「東北は白河以北一山百文と軽視されてきて、東北の後進性が論じられ、いつも先進地の後塵を排してきた。これからは東北は一つであるとの合言葉でお互いに刺激し合い向上していこうと努力して行かなければならない」と挨拶し、以後四十有余年その精神で今日に至っている。

会は毎年グループの長が持ち廻り制の一年交替で、秋田、青森、岩手、宮城、福島、山形の順に従って開催されており、時代の要求と業界の対応、各グループの活動状況報告と今かかえている悩みなど毎年素直な意見交換の場となっている。平成十年八月の岩手大会では東北各県から十二グループ、緑友からの参加を含め一一〇名の参加者、議事終了後に記念講演、終了後の懇親会とここ数年同じようなスケジュールではあるが、盛大に開催された。

東青連が東北の「情」を根っこに理も利も越えて「報」じあい団結と連携を深める会であることが

（緑友も同じであるが）、また各グループの層が事業主・二世・営業部員・関連業と巾広く、ホスト県挙げての歓迎と相まってこの会を引き継がせる大きなパワーとなっている。

ところで、この稿を起こすに当たり、昔の記録を若干引っぱり出し写真などを見て懐かしい想いに浸っている。S五四年の実行委員長だった弘前YPクラブの木村さんや青森の田谷さん、秋田の大場さん・・・数え上げればきりが無い。どうして東京の逸見さんが参加しているのですか？と若い人に毎年聞かれたことも懐かしく、つくづくお世話になったな、有難い会だなと感謝。

コピーもFAXも無く、道路事情も今とは比べるべくもない時代に生れ、連綿と続いてきた東北青年印刷人連絡協議会、この会は情報化と言われる今日でも、互いに顔を合わせ、想うところを語り合う東北青年印刷人の栄養源として永く続いていくことに決まっている。（H五年第三五回東青連実行委員長 川村記）

（追記…全国印刷緑友会の仲間が、毎年東青連に出席してくれた。誌上を借りて御礼申し上げる次第である。）

西日本地区大会九州・山口青年印刷人大会開催一覽

- 第一回 福岡印刷若葉会 昭和五八・六・四 ホテルステーションプラザ
- 第二回 佐世保印刷若汐会 昭和五九・七・二一 九十九島観光ホテル
- 第三回 福岡印刷若葉会 昭和六十・十・十二 タカクラホテル福岡
- 第四回 熊本県印刷緑友会 昭和六一・六・七 交通センターホテル
- 第五回 宮崎印刷はまゆう会 昭和六二・七・十一 ホテルプラザ宮崎
- 第六回 佐賀県印刷人若楠会 昭和六三・十・一 嬉野温泉・和多屋別荘
- 第七回 鹿児島県印刷緑友会（現県工組青年部）平成一・九・十六 城山観光ホテル
- 第八回 下関青年印刷人緑友会 平成二・七・十四 春帆楼
- 第九回 福岡印刷若葉会 平成三・八・二三 セントラルホテルフクオカ
- 第十回 長崎青年印刷人会 平成四・六・二十 長崎東映ホテル

- 第十一回 北九州YPクラブ 平成五・八・二二 ホテルニュータガワ
- 第十二回 熊本県印刷緑友会 平成六・七・九 アークホテル熊本
- 第十三回 大分印刷若梅会 平成七・十一・二一 大分市コンパルホテル
- 第十四回 沖縄県印刷若潮会 平成八・七・五 パシフィックホテル沖縄
- 第十五回 黎明さつま（鹿児島県工組青年部）平成九・九・十三 鹿児島市民文化ホール
- 第十六回 福岡印刷若葉会 平成十一・六・五 アクロス福岡

年表

「緑友の動き」

【昭和五二年（一九七七）】

- 4・23 第二十回定期総会、名古屋名鉄グランドホテルで開催。
幹事グループ名古屋而立会、二一グループ・五二名。
記念講演「名古屋の今昔」講師 前名古屋市長 杉戸清氏
- 4・28 第二回緑友二十年史編さん委員会、築地「治作」で開催。十八名出席
- 5・21～22 第二回西日本青年印刷人の集いを佐賀県嬉野温泉で開催。
- 6・25 グループ長常任幹事合同会議、東京築地「治作」で開催。
- 十九グループ・二二名出席、講演「ドルッパ報告と今後の印刷業」塚田益男氏ほか、二十周年大会の準備状況と依頼事項について
「緑友だより」第四十号発行。
- 7 第一回常任幹事会、東京で開催。
- 8・27 二十周年を迎えるに当って、五社共同紙上座談会、東京で開催。参加者、市村・白石・安達・筒井・作道・中村・飯田・末若。
- 9・9 二十周年記念大会OB前夜祭、東京神田「花屋」で開催。二六名出席。
- 10・7 全国印刷緑友会創立二十周年記念大会、東京帝国ホテル富士の間で開催。
- 10・8 テーマは「高度化社会における印刷未来像をさぐる」。二五グループ・三二五二名オブザーバ・ゲスト参加四団体十八名 計三七〇名出席。記念講演「情報社会における未来思考」糸川英夫氏。
- 11 分科会テーマ「魅力ある印刷産業のために」
- 11・19 グループ長常任幹事合同会議、大阪第一ホテルで開く。
- 十六グループ・二六名出席。
- 11 「金沢青年印刷人クラブ」入会 会員二六名

【昭和五三年（一九七八）】

- 2・4～5 第十回緑友会広島セミナー、広島ニューヒロデンホテルで開催。
- 二十グループ 九三名出席。
- 第一講「これからの経営環境と経営体質創り」東海大学助教授 鈴木 博氏
- 第二講「心の経営実践の道」積水化成工業（株） 専務 川本 貢氏
- 第三講「経営管理と広商野球」広島商業高校野球部長 畠山 圭司氏
- 3 「緑友だより」第四一号発行。
- 3・4 第二回常任幹事会、東京で開催。
- 4・16 第二一回定期総会、横浜国際会議場で開催。懇親会は華正楼本店、二十グループ・四十名 オブザーバ三一名 計七一名出席。記念講演は、金原亭馬生師匠「芸道あれこれ」。
- 6 「緑友だより」第四二号発行。
- 6・3～4 第三回西日本青年印刷人の集いを開催。
- 8・5 グループ長・常任幹事合同会議、新東京ホテルで開催。十九グループ・二六名出席。
- 9 全国緑友会写真入名簿作成配布
- 10・5～7 第二一回全国印刷緑友会沖縄大会、沖縄パシフィックホテル、ムーンビーチホテルで開催。テーマ「碧い空、海、協調と創造を求めて」二六グループ 二八三名出席。
- 10 記念講演「琉球と歴史と文化」講師 新屋敷幸繁氏（沖縄大学学長）
- 17 常任幹事会、大阪「若竹」で開催。出席者 十三名

【昭和五四年（一九七九）】

- 1 緑友会・大会旗・総会旗の製作
- 2 「緑友だより」第四三号発行。
- 2・23 第十一回京都セミナー、京都東山「楠荘」で開催。十八グループ・一〇八名オブザーバー参加一グループ七名 計百一五名出席。
- 第一講「戦後民主主義を問い直す」京大教授 会田雄次氏
- 第二講「エネルギー問題と日本経済の未来」作家 堺屋太一氏
- 第三講「日本人の生死観」大徳寺 立花大亀師
- 4・14 第二三回定期総会、岐阜長良川ホテルで開催。二六グループ・五一名オブザーバー参加 四八名 計九九名出席。
- 記念講演「日本経済における一般消費税」印刷業界への影響について 中小企業診断士 宮崎哲也氏
- 6・2 〃3 第四回西日本青年印刷人の集いを開催。
- 7・7 常任幹事会・新東京ホテルで開催。グループ長・常任幹事会の全国持ち回り制について等。
- 8 「緑友だより」第四四号発行
- 8・4 グループ長、常任幹事会、日本工業倶楽部で開催。 一..三〇〃十七..〇〇
- 議事「北九州大会について、神戸セミナーに備えて、緑友二十年史の件」など。
- 9・22 〃23 第二二回全国印刷緑友会北九州大会、ホテルニュー田川で開催。
- テーマ「緑友いま語らいの時」二八グループ・二四六名
- ゲストオブザーバー七名 計二五三名出席。記念講演「夢あつての人生」

【昭和五五年（一九八〇）】

- 2・23 〃24 第十三回神戸セミナー、神戸三宮ニューポートホテルで開催。
- 二四グループ・一五八名出席。
- 第一講「八十年代経営の哲学」
- 第二講「一九八〇年の世界と日本」第三講「仕事と人間性」
- 3・29 常任幹事会、日本工業倶楽部で開催。
- 3 「緑友だより」第四五号発行
- 5・10 第二三回定期総会、池袋東武バンケットホールで開催。二三グループ一七名出席。記念講演「成る経済と成らぬ政治」明治大学教授 岡野加穂留氏
- 5・17 第五回西日本青年印刷人の集い、宮崎観光ホテルで開催。
- 6・28 グループ長・常任幹事合同会議、ホテル仙台プラザで開催。
- 8・8 〃10 第二三回全国印刷緑友会仙台大会、ホテル仙台プラザで開催。
- 二五グループ・二六五名出席。テーマ「変革の時代を生きぬく我々は今…」
- 記念講演「現代の家庭や社会に思うこと」講師 佐々木わく里先生
- 9 「緑友だより」第四六号発行
- 10・17 常任幹事会、笹川記念会館で開催。
- 11・21 セミナー準備会、笹川記念会館で開催。

【昭和五六年（一九八一）】

- 2・4 常任幹事会、笹川記念会館で開催。
- 2・14 第14回セミナー、笹川記念会館で開催。二三グループ・一八九名出席。
- 第一講「81の景気動向と企業対策」
- 第二講「私はこうして少数精鋭軍団をつくった」
- 第三講「話す仕事・書く仕事」
- 2・23 常任幹事会、銀座レオクラブで開催。
- 3 「緑友だより」第四七号発行
- 5・16 第二四回定期総会、久留米グランドホテルで開催。二五グループ・九六名出席。
- 記念講演「自衛隊の幹部教育について」
- 6・13 常任幹事会、日本工業倶楽部で開催。
- 7・26 グループ長・常任幹事合同会議、神戸ポートピアホテルで開催。
- 二二グループ・三一名出席。
- 9・4～5 第二四回全国印刷緑友会新潟大会、オークラホテル新潟で開催。
- 二六グループ・二四〇名出席。
- 記念講演「若人に期待するもの」講師 稲葉修氏（元法務大臣）
- 分科会「経営の心」「経営の技術」
- 10・17 常任幹事会、日本工業倶楽部で開催。出席者十四名。
- 11・28 常任幹事会、名古屋ホテルキャッスルプラザで開催。出席者十八名。

【昭和五七年（一九八二）】

- 2・6 第十五回名古屋セミナー、名古屋ホテルキャッスルプラザで開催。
- 二四グループ・一七三名出席。
- 第一講「職人集団の活性化」
- 第二講「深層心理の解明とその活用」
- 2・7 常任幹事会、名古屋ホテルキャッスルプラザで開催。出席者十九名。
- 3・13 常任幹事会、大阪コクサイホテルで開催。出席者十二名。
- 5・15 第二五回定期総会、ホテル長野国際会館で開催。
- 二六グループ・一〇一名出席。バズセッション「緑友会の今後を語る」
- 6・26 常任幹事会、日本工業倶楽部で開催。
- 9・4～5 第二五回全国印刷緑友会札幌大会、京王プラザホテル札幌で開催。
- 三十グループ二四七名出席。
- 記念講演「印刷産業とエレクトロニクスについて」講師 一見敏男氏
- 記念ゴルフ大会・参加者三五名、札幌市内見学・参加者二九名
- 9・5 グループ長・常任幹事合同会議、京王プラザホテル札幌で開催。
- 10・30 常任幹事会、名鉄グランドホテルで開催。出席者十四名。

【昭和五八年（一九八三）】

- 2・5 第十六回大阪セミナー、大阪グランドホテルで開催。
二三グループ・一六三名出席。
- 第一講 経営の心「国際経済摩擦と日本の立場」
第二講 経営の技術「八十年代に於ける若手リーダーの考え方」
第三講 経営の心「新時代に生きぬく経営者の条件」
- 2・6 常任幹事会、大阪グランドホテルで開催。出席者十六名。
3・19 常任幹事会、日本工業倶楽部にて開催。出席者十三名。
5・21 第二六回定期総会、下関マリンホテルで開催。
三三グループ・一三五名出席。
- バズセクション「グループ活性化へ今、何を・・・！」
5・22 グループ長・常任幹事合同会議、下関マリンホテルで開催。出席者三四名。
7・16 常任幹事会、名古屋舞鶴館で開催。出席者十五名。
7・25 「緑友だより」第五二号発行
- 9・23 第二六回全国印刷緑友会広島大会、広島全日空ホテルで開催。
三四グループ・二八二名出席。
- 記念講演「酒と人生」講師「酒」編集長 佐々木久子先生。
パネルディスカッションテーマ「文化の時代を創造する」
- 9・24 グループ長、常任幹事合同会議、広島全日空ホテルで開催。出席者三六名。
11・19 常任幹事会、新東京ホテルで開催。出席者十七名。

- 12・10 「緑友だより」第五三号発行

【昭和五九年（一九八四）】

- 2・4 第十七回東京セミナー、日本工業倶楽部で開催。三三グループ・二五二名出席。
- 第一講「企業成長と経営者能力」講師 慶応義塾大学教授 清水 龍氏
第二講「二世紀型経営・未来へのノウハウ」講師(株) 龍角散社長 藤井康男氏
- 3・31 常任幹事会、八重洲富士屋ホテルで開催。
3・31 「緑友だより」第五四号発行
- 5・12 第二七回定期総会、金沢シテイホテルで開催。
二九グループ・一二二名出席。
- 5・13 基調講演「未来に向ってのぼさう印刷」講師 村松礼二氏
7・22 グループ長・常任幹事合同会議、金沢シテイホテルで開催。出席者三二名。
7・22 常任幹事会、九十九島観光ホテルで開催。出席者十一名。
8・10 「緑友だより」第五五号発行
- 9・29 第二七回全国印刷緑友会岐阜大会、岐阜グランドホテルで開催。
三三グループ・二七七名出席。
- 大会テーマ「示そう緑友の英知 つかもう新たな時代の流れ」
記念講演「今、なぜ坪内経営が注目され、ブームを呼んでいるのか」
9・30 グループ長・常任幹事合同会議、岐阜グランドホテルで開催。
出席者三五名。
- 11・10 常任幹事会、大阪国際ホテルで開催。出席者十四名。

12・10 「緑友だより」第五六号発行

【昭和六十年（一九八五）】

- 2・1 常任幹事会、大阪国際ホテルにて開催。出席者十八名。
 2・2 第十八回大阪セミナー、大阪国際ホテルで開催。
 二七グループ・一八〇名出席。
 第一講「大阪の歴史的特質とこれからの大阪」講師 木津川計氏（上方芸能編集長）
 第二講「勝負に勝つための条件と鶴岡式統率法」講師 鶴岡一人氏（NHK野球解説者）
 第三講「関西商法に学ぶもの」講師 佐藤一段氏（大阪新聞社編集局長）
 3・7 台湾印刷組合訪問
 常任幹事ならびに在京六グループ有志十三名にて訪問。
 3・23 常任幹事会、ペンギン館（名古屋市）で開催。出席者十六名。
 3・31 「緑友だより」第五七号発行
 5・25 第二八回定期総会、水戸プラザホテルで開催。
 三四グループ・一九八名出席。
 基調講演「親父学級、おやし学入門」講師 矢口武正先生
 5・25 グループ長・常任幹事合同会議、水戸プラザホテルで開催。参加者三六名。
 7・27 第一回常任幹事会、神戸ポートピアホテルで開催。
 参加者十七名、オプザーバ六名
 9・21 第二八回全国印刷緑友会神戸大会、神戸国際交流会館で開催。
 参加者二八九名。

- 9・21 テーマ「ゆとり」講師 藤本義一氏（作家）
 グループ長・常任幹事合同会議、神戸国際会議場で開催。参加者四二名。
 9・22 第一回グループ長・常任幹事情報交換会議、神戸ポートピアホテルで開催。
 参加者三一名。
 11・16 第二回常任幹事会、日本工業クラブで開催。参加者十六名。

【昭和六二年（一九八六）】

- 2・8 第十九回全国印刷緑友会名古屋セミナー
 第二豊田ビル（名古屋市）、名古屋都ホテルで開催。
 二四グループ・一九四名出席。
 第一講「ニューメディアと印刷の未来」ドキュメンタリー作家 田原総一朗氏
 第二講「ヨガと心の健康、体の健康」ブラーフマンヨガセンター 北山佐和子氏
 第三講「人間と動物の知恵くらべ」鳥羽水族館、館長 中村幸昭氏
 第三回常任幹事会、東京・銀座レオクラブで開催。参加者十五名。
 5・17 第二九回定期総会（神奈川）、横浜国際会議場 ザ・ホテルヨコハマで開催。
 二九グループ・一八九名出席。全員参加による
 ディスカッション「グループの活性化について」
 5・18 第一回グループ長・常任幹事合同会議、ザ・ホテルヨコハマで開催。
 参加者三八名。
 6・8 第一回常任幹事会、熊本市交通センターホテルで開催。参加者二一名。
 9・13 第二九回全国印刷緑友会長野大会、美ヶ原温泉ホテルで開催。

- 9・14 参加者二九三名。パネルディスカッション テーマ「ハイテク時代我が社の戦略」
 第二回グループ長・常任幹事合同会議
 美ヶ原温泉ホテル「蓮華の間」で開催。参加者四二名。
 11・15 第二回常任幹事会、沖縄ハーバービューホテルで開催。参加者二二名。

【昭和六二年（一九八七）】

- 2・7 第二十回全国印刷緑友会京都セミナー、京都国際ホテルで開催。
 参加者一六〇名。
 第一講「能にみる靈験の世界」金剛永謹氏
 第二講「京都の歴史における西陣の変遷」川島春雄氏
 第三回常任幹事会、京都国際ホテルで開催。参加者二五名。
 2・8 第四回常任幹事会、福井県芦原温泉「ホテル嵯峨」で開催。参加者十七名。
 3・14 第三十回全国印刷緑友会福井総会、芦原温泉 グランディア芳泉で開催。
 5・16 三三グループ・一五一名出席。
 5・17 第一回グループ長・常任幹事会合同会議。
 第一回常任幹事会、東京銀座ロイヤルで開催。参加者三四名。
 6・20 第三十回全国印刷緑友会三十周年記念東京大会。
 8・1 赤坂プリンスホテル「クリスタルパレス」で開催。
 三九グループ・八八〇名出席。
 テーマ「二一世紀情報産業のビジョンを求めて：今、上げよう 緑友のこころ」

- 9・6 記念講演 テーマ「世界の中の日本」NHK放送局特別主幹 磯村尚徳氏
 第二回グループ長・常任幹事合同会議、有馬グランドホテルで開催。
 参加者二六名。
 11・6 第二回常任幹事会、都ホテル大阪で開催。参加者十九名。

【昭和六三年（一九八八）】

- 2・6 第二回全国印刷緑友会セミナー、都ホテル大阪で開催。
 三四グループ・一九八名出席。
 第一講「顧客第一主義に貫くMK商法と経営昇学」
 講師MK株式会社社長 青木定雄氏
 第二講「新しい時代、新しいメディア、新しい表現」
 講師（株）ジャパンライフデザインシステム
 代表取締役社長 谷口正和氏
 3・25 第三回常任幹事会、石和温泉（山梨）で開催。参加者十六名。
 5・14 第三回全国印刷緑友会山梨総会。
 石和温泉・石和グランドホテルで開催。三四グループ・一八四名出席。
 5・15 第一回グループ長・常任幹事合同会議、石和グランドホテルで開催。
 8・19 第二回グループ長・常任幹事合同会議、ホテルアーサー札幌で開催。
 参加者四三名。
 10・1 第三回全国印刷緑友会佐賀大会、嬉野温泉和多屋別荘で開催。
 三六グループ・三四八名出席。

- セミナーテーマ「我社はこうやって創造的印刷産業をめざしている。」
 10・2 第一回常任幹事会、佐賀県嬉野温泉で開催。
 11・12 第二回常任幹事会、道後温泉かわきち別荘で開催。

【平成元年（一九八九）】

- 2・17 臨時常任幹事会、名古屋都ホテルで開催。
 2・18 第二回全国印刷緑友会セミナー。
 名古屋国際センターで開催。三十グループ・二〇四名出席。
 第一講テーマ「戦略経営・分社経営・全社員経営」
 講師 滋賀ダイハツ販売（株）代表取締役 後藤昌洋氏
 第二講テーマ「何がホンダを急成長させたか」
 講師 本田技研工業 常務相談役 杉浦英男氏
 第三回常任幹事会、青森グランドホテルで開催。
 第三二回全国印刷緑友会青森総会。
 5・13 十和田湖・十和田観光ホテルで開催。三三グループ・一七六名出席。
 5・14 第一回グループ長・常任幹事合同会議、十和田観光ホテルで開催。
 7・9 第一回常任幹事会、大洗シーサイドホテルで開催。
 8・26 第三二回全国印刷緑友会金沢大会。
 金沢市文化ホール、金沢東急ホテルで開催。
 三七グループ・三五〇名出席。
 記念講演「製紙・印刷業界の展望」

- 講師 王子製紙 代表取締役社長 千葉一男氏
 事例発表「情報産業をめざして 一〇〇億円への挑戦」
 佐賀県印刷人若楠会 宮地敏昭氏
 8・27 第二回グループ長・常任幹事合同会議、金沢東急ホテルで開催。
 11・25 第二回常任幹事会、ホテル グランドパレスで開催。

【平成二年（一九九〇）】

- 2・17 第三三回全国印刷緑友会セミナー、
 ホテル グランドパレスで開催。三三グループ・二七六名出席。
 第一講「企業における女性社員の活性化と経営者のあり方」
 講師 鐘紡（株）常務取締役 古島町子氏
 第二講「魅力ある会社・魅力ある産業への転換」
 講師 印刷関連企業生産技術コンサルタント 村松礼二氏
 3・17 第三回グループ長・常任幹事合同会議、別府竹の井ホテルで開催。
 5・12 第三三回全国印刷緑友会愛媛総会、道後温泉「宝荘ホテル」で開催。
 三三グループ・一八三名出席。
 5・13 第一回グループ長・常任幹事合同会議、道後温泉「宝荘ホテル」で開催。
 7・15 第一回常任幹事会、山口県下関市 春帆楼で開催。
 9・12 第三三回全国印刷緑友会名古屋大会、
 ホテル ナゴヤキャッスルで開催。三八グループ・四〇四名出席。
 記念講演「世界一の商品作りに命をかける」

- 講師 フジケン(株) 会長 横内祐一郎氏。
 寸劇「ある印刷会社の風景」劇団きまぐれ。
 講話「ハガキ道に生きる」講師 坂田成美氏
 9・2 第二回グループ長・常任幹事合同会議、ホテル ナゴヤキャッスルで開催。
 11・17 第二回常任幹事会、兵庫県 私学会館で開催。

【平成三年(一九九二)】

- 2・9 第二四回全国印刷緑友会神戸セミナー、ホテル シェレナで開催。
 三三グループ・二二二名出席。
 第一講「モラル・サーベイ主旨説明」
 講師(株) 神戸経営 代表取締役 水口可保氏
 第二講「世界の動き」
 講師(株) リバティ情報研究所 代表取締役所長 守野正美氏
 第三回常任幹事会、水戸プラザホテルで開催。
 5・25 第三四回全国印刷緑友会札幌総会、
 札幌市「ジャスマック・プラザ」で開催。三三グループ・一四〇名出席。
 5 第一回グループ長会議、札幌市「ジャスマック・プラザ」で開催。
 7・12 第一回常任幹事会、東京「千代田マシナリー」で開催。
 9 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第七六号発行
 10・18 第三四回全国印刷緑友会沖縄大会、沖縄グランドキャッスルで開催。
 三八グループ・三四三名出席。

- 11・10 記念講演テーマ「海をあるく」講師 写真家 中村征夫氏
 10・19 第二回グループ長会議、沖縄グランドキャッスルで開催。
 11・10 第二回常任幹事会、大分ホテルくれべで開催。

【平成四年(一九九三)】

- 2 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第七七号発行
 2・8 第二五回岐阜セミナー、岐阜グランドホテルで開催。
 三一グループ・二一七名出席。
 講演会 テーマ「今、信玄に学ぶもの」講師 作家 津本陽氏
 3・14 第三回常任幹事会、広島で開催。
 5 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第七八号発行

【平成五年(一九九四)】

- 5・15 第三六回全国印刷緑友会大分総会、大分東洋ホテルで開催。
 主管 青森印刷若梅会 三四グループ・一五六名出席。
 5・16 第一回グループ長会議、大分東洋ホテルで開催。
 7・3 第一回常任幹事会、新潟月岡温泉「ホテルニューあけぼの」で開催。
 7 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八二号発行
 8・6 第三六回全国印刷緑友会あおり大会、青森グランドホテルで開催。
 主管 青森県印刷青年経営会議 三七グループ、二七六名出席、同伴者二二名。
 記念講演「愛せば故郷」伊奈かつぺい氏、ねぶた見物。

- 8・7 第二回グループ長会議 青森グランドホテルで開催。
- 11・13 第三回常任幹事会・グループ長会議、南熱海マリンホールで開催。

【平成六年（一九九二）】

- 1 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八三号発行
- 2・19 第二七回福岡セミナー、博多都ホテルで開催。
 主管、福岡印刷若葉会、三三ハグループ、オブザーバーグループ・計三〇九名出席
 セミナー第一講「森 重隆のマーケティング概論」
 講師 森 重隆氏
 セミナー第二講「ハイテクノロジー・コミュニケーションズ」
 講師 稲垣長利氏
- 3・26 第四回常任幹事会、東京「ホテルB&G」で開催。
- 5 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八四号発行
- 7 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八五号発行

【平成七年（一九九四）】

- 1 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八六号発行
- 2・18 第二八回全国緑友会名古屋セミナー、
 名古屋「愛知芸術文化センター」で開催。三三グループ・二六一名出席
- 第一部「会社は誰のもの」講師 木野瀬吉孝氏

- 2・19 第二部「印刷の無くなった日」講師 岡田吉生氏
 グループ長・常任幹事合同会議、名古屋国際ホテルで開催。
- 3・11 第三回常任幹事会、東京ガーデンパレスで開催。
- 5・13 第三八回全国印刷緑友会 長崎総会、ホテルグリーンコースト長崎で開催。
 主管 長崎青年印刷人会、三四グループ・一三四名出席。
- 5 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八七号発行
- 7・8 第一回常任幹事会、小森コーポレーションにて開催。
- 8・4 第三八回全国印刷緑友会 熊本大会、阿蘇プリンスホテルで開催。
 主管 熊本県印刷緑友会、三七グループ、三三七名出席。
 記念講演 プロゴルファー 坂田信弘 氏
- 8・5 第二回グループ長会議、阿蘇プリンスホテルで開催。
- 9 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八八号発行
- 11・11 第二回常任幹事会、天童ホテルにて開催。

【平成八年（一九九五）】

- 2・17 第三八回全国印刷緑友会 金沢セミナー、金沢市民芸術ホールで開催。
 三六グループ、二四三名出席。
- 2 第一部 講演「日米出版・印刷事情」チャールズ・シロー・イノウエ氏
 第二部 「クイズ緑友ゼミナール」
- 3・10 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第八九号発行
 第三回常任幹事会、サンメンバーズホテル東京新宿で開催。

- 5・25 第三九回全国印刷緑友会定期総会、山形県の天童ホテルで開催。
 主管 山形印刷研修会、三二グループ・一二三名出席。
- 5・25 第一回グループ長常任幹事会議、天童ホテルで開催。
 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九十号発行
- 6・29 第一回常任幹事会、神戸外国クラブで開催。
- 9・14 第二回常任幹事会、ホテル日航東京で開催。
- 10・19 第三九回全国印刷緑友会 山梨大会、山梨常盤ホテルで開催。
 主管 やまなし印刷若人会、三三グループ、二七五名出席。
 インターネットによるテレビ会議。
- 10・20 第二回グループ会議、山梨常盤ホテルで開催。
- 11 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九一号発行
- 12 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九二号発行
- 2・8 第三九回全国印刷緑友会 神戸復興支援セミナー、
 神戸市産業振興センターで開催。
 主催 大阪青年印刷人クラブ・神戸印刷若人会、三三グループ、二五三名出席。
 第一部「震災復興とマルチメディアの活用」KIMEC構想の展開」
 神戸市震災復興本部総括局復興計画推進部 マルチメディア推進室長 木村義秀氏
 神戸大学大学院教授 田中克己氏
- 第二部「印刷とインターネットがもつと仲良くなるために」
 アドビシステムズ(株) 田中和宏氏

- 【平成九年（一九九六）】
- 3 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九三号発行
 - 3・22 第三回常任幹事会、青森浅見温泉 椿館で開催。
 - 5・24 第四十回全国印刷緑友会長野総会、ホテル国際21で開催。
 主管 長野青年印刷人緑友会、三二グループ、一六二名出席。
 - 5・25 第一回グループ長・常任幹事会議、長野 ホテル国際21で開催。
 - 7・12 第一回常任幹事会、東京 千代田印刷会館で開催。
 機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九四号発行
 - 8・2 全国印刷緑友会四十周年東京大会ホテル日航東京で開催。
 主管 在京九グループ(印刷同友会、千代田印刷人新世会、文京緑友会、東京写真製版若葉会、
 東プロ協組青年部青樹会、東印工組支部若竹会、刷友青山会、東印工
 組山之手支部山青会、神奈川正和会)
 - 三五グループ、四九五名、オブザーバー三名、報道七名、
 関連団体二二名、来賓六名、合計五三三名出席。
 記念講演「この構造変化をいかに乗り切るか！」塚田益男氏
 - 8・2 第二回グループ長・常任幹事会議、東京 ホテル日航東京で開催。
 - 10・4 第三回常任幹事会、仙台印刷団地会館で開催。
- 【平成十年（一九九七）】
- 1・31 第三二回全国印刷緑友会仙台セミナー、秋保温泉「ホテル佐勘」で開催。
 主管 仙台刷親会、三二グループ、二〇二名出席。

	2	3	5	5	5
	・	・	・	・	・
	1	21			
第四回常任幹事会、秋保温泉「ホテル佐勘」で開催。					
第五回常任幹事会、千代田印刷会館で開催。					
機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九五号発行					
機関紙「FRIENDS OF GREEN」第九六号発行					
第四一回全国印刷緑友会あおもり総会。					
古牧温泉洪沢公園 古牧第三グランドホテルで開催。					
主管 青森県印刷青年経営者会議、三四グループ、一五二名					
オブザーバー六名、報道三名、合計一六一名出席。					
ルームディスプレイション（部屋毎しゃべりあい）					
コンセプト「語り合おう：緑の友は青い森から」					

あ と が き

四十周年記念誌担当幹事

小倉克夫

「道程Ⅱ―全国印刷緑友会四十周年記念会誌Ⅰ」をここに発行する。同時に「道程Ⅰ全国印刷緑友会二十周年誌Ⅰ」がデジタル化され全国印刷緑友会ホームページ上に二十年ぶりに復活、「道程Ⅱ」も今後はデジタルデータで残るであろう。この二十年間の資料を集め、まとめ、そして本を作るという作業をデジタルシステムの中でしてきた事で、修正加筆が可能であり今回間に合わなかった資料や原稿を必要に応じて追加出来る事が解った。「道程Ⅱ」は今後も成長する本であり、そうして頂きたい。その為、本文についてはここで述べないでおく。本書のタイトル「道程Ⅱ」は二十周年誌のあとかきの説明をお読み頂きたい。スタートからここまで色々な方々にお世話になった。編集を引き受けたものの資料の集め方、まとめ方などがまったくわからず困り果てていた時、印刷同友会の小森善信常任幹事と榎本則義前常任幹事より「道程二十周年記念誌Ⅰ」を作った先輩達に当時の話を聞かせて頂いてはどうか、との話があり、平成十年一月十九日（月曜日）、東京新富町の印刷会館において「全国印刷緑友会四十年誌編集準備にあたり参考意見を伺う集い」を聞いて頂いた。出席者は、安達秀雄氏、栗原浩氏、白橋達夫氏、中村守利氏、福田満州雄氏、小林直氏、榎本則義氏、の諸先輩に松浦会長、小森善信常任、そして私の現役メンバーであった。この席でたくさんの方の貴重なご意見とアイデアをいただいた。二十周年誌も編集スタートから完成まで二年かかったことなど想像以上にご苦労なされた様子、

そして体裁や題字などへのこだわりなど印刷を生業とする者ならではの意見も伺えた。何よりも大きな勇気をいただいた。かくして資料集めからのスタートとなった。全国印刷緑友会歴代会長に資料をお願いするにあたっては、その会長の所属する会の常任に連絡役をお願いした。作道亮雄会長に対し松口正氏（大阪青年印刷人クラブ）、飯田範夫会長に対し竹内隆文氏（長野青年印刷人緑友会）、中村守利会長に対し小林善信氏（印刷同友会）、竹田光宏会長に対して棚橋泰仁氏（名古屋面立会）、古賀健一会長に対して松尾善和氏（福岡印刷若葉会）、竹内一博会長に対して伊藤文二氏（札幌青年印刷人の会）、城戸憲次会長に対し私、白井秀幸会長代理の長田照久氏に対し依田訓彦氏（山梨印刷若人会）、利根川政明会長に対し白井慶吾氏（文京緑友会）、長尾良宣会長と松浦正欣会長はご本人にお願いした。日本印刷新聞社様には何度かおじゃまをして二十年分の記事の中から緑友会関係の記事のコピーをさせて頂いた。いそがしい業務の中、部屋を一つ貸して頂き、コピー機も貸し切り状態であった。又、ぎふ印刷翠陽クラブの高橋一郎常任幹事より送っていただいたマンスリーレポート発行三百号記念誌「飛翔」からの情報にも大変助けられた。そして何よりも執筆頂いた歴代会長、「緑友の仲間」を執筆してくれた全国各グループの方々、東北青年印刷人連絡協議会について書いていただいた仙台刷親会の川村信太郎氏、お世話になりました。最後に、この「道程Ⅱ」上梓にあたって最後までご尽力頂いた松浦印刷（株）ならびに（株）ファインの皆様を加え、先輩諸氏、会員の皆様のご協力に、そしてなにより松浦編集委員長の忍耐と尽力に感謝し御礼申し上げます。

道程Ⅱ 全国印刷緑友会40年誌

2003年6月 印刷
2003年7月10日発行
編者 記念誌編纂委員会
委員長 松浦正欣
印刷 松浦印刷株式会社
製本 園田製本所
デジタル処理 株式会社 ファイン
発行 全国印刷緑友会
